兵庫県文化財調査報告第19冊

魚住古窯跡群

（本文編）

1983.3

兵庫県教育委員会

はじめに

兵庫県内には、現在埋蔵文化財の包蔵地として確認されている遺跡は、約15,000の多くを数えることができ、かくれた未発見の遺跡も含めるとなおその数が増えることが想像できます。

又、兵庫県内の遺跡のうちでも、須恵器の窯跡は、他府県に比べて数多く遺されております。

この報告書は、一般国道250号線（明姫幹線）建設に伴い明石市魚住町中尾において、昭和54年度に多量の土器とともに発見された須恵器窯跡の発掘調査の記録をとりまとめたものです。

本書が、中世須恵器生産の時代背景等の解明にいささかでもお役に立てればと思う次第です。

最後になりましたが、発掘調査はもちろん報告書作成にあたって、何かと御協力をいただいた方々に対し厚く御礼を申しあげます。

昭和58年3月

兵庫県教育長　森脇　隆

例　　言

1. 本書は、兵庫県明姫幹線建設事務所から事業委託を受け、兵庫県教育委員会が調査主体となり実施した明石市魚住町中尾字向ヶ原、字中原、国道250号線バイパス明姫幹線道予定地内に所在した、古窯跡6基の発掘調査報告書〔本文編〕である。
2. 発掘調査は昭和54年4月16日から10月25日まで行ない、昭和55年4月1日から昭和58年3月31日までを遺物整理・報告書刊行に費した。

   遺物整理は、昭和56年8月31日までを王子分館で行ない、引き続き魚住分館で報告書刊行までを行なった。
3. 発掘調査及び遺物整理は兵庫県教育委員会　大村敬通、水口富夫が担当者となり実施した。

   発掘調査時の遺構実測は、二葉滋、黒田慶一、吉川啓子、遺物の接合・復元は主として、吉川、和田早芳子、森岡みゆき、山田法子、清水洋子、遺物実測は、吉川、和田、森岡、清水があたった。

   遺構の製図は、和田、遺物の製図は、吉川、和田、森岡、清水が行なった。
4. 発掘作業にあたっては、㈱松本組の協力を得、遺物水洗・ネーミングには、大手前女子大学考古学研究会の諸氏の協力を得た。
5. 本書の編集は大村、水口が行なった。執筆分担は以下の通りである。

   第1章、第2章……大村敬通

   第1章　調査日誌……吉川啓子

   第3章……水口富夫

   特別研究　Ⅰ……三辻利一

   特別研究　Ⅱ……中島正志、牧野智志恵、渋谷秀敏、夏原信義
6. 本書に使用した航空写真は、日本産業航空によるものである。遺構写真の撮影は、大村が行ない、遺物写真の撮影は、森昭氏にお願いした。
7. 本書で使用した水準高は、明姫幹線道の工事用ＢＭであり、方位は、磁北を示す。
8. 本書を作成するにあたり、調査中、整理期間中多くの方々に指導及び助言をいただいた。記して感謝の意を表わすものである。

   赤松啓介・伊藤晃・今里幾次・上原真人・植山茂・大矢義明・木村捷三郎・黒田義隆・

篠原芳秀・清水芳裕・鈴木重治・千田稔・高井悌三郎・丹治康明・手塚直樹・寺島孝一・樋崎彰一・橋本久和・藤井直正・藤沢一夫・森内秀造・吉岡康暢・山下俊郎・渡辺九一郎、明石市教育委員会、紀伊風土記の丘資料館

また、海あがりの片口鉢は以下の方々から借用した。

明石市教育委員会、井上繁広、多木建具店、㈱西海醤油、岩本三郎

目　　次

はじめに
例　　言
第1章　調査に至る経過……1
　　調査日誌……5
第2章　遺跡の位置と環境
　(1) 地理的環境……15
　(2) 歴史的環境……15
　(3) 魚住古窯跡の分布……18
　(4) 窯跡の名称……18
　(5) 窯跡の数と支群……19
　(6) 海あがりの魚住焼……20
　(7) 東播における古窯跡群……22
　(8) 魚住焼の消費地遺跡……24
　(9) 小　　結……25
第3章　遺構と遺物
　第1節　遺　　構
　　(1) 29　号　窯……29
　　(2) 38　号　窯……30
　　(3) 33　号　窯……31
　　(4) 32　号　窯……32
　　(5) 22　号　窯……33
　　(6) 30　号　窯……35
　　(7) 小　　結……35
　第2節　遺　　物
　　(1) 小　　皿……39
　　(2) 埦……39
　　(3) 鉢……41
　　(4) 甕……43
　　(5) 壺……47
　　(6) 瓦……47
　　(7) 小　　結……54
特別研究
　I　魚住古窯跡群出土須恵器の胎土分析　三辻利一……66
　II　魚住古窯跡群の考古地磁気による年代測定
　　中島正志、牧野智志恵、渋谷秀敏、夏原信義……78
遺物観察表……85

挿図目次

第 1 図　調査前遠景（昭和54年4月）……1
第 2 図　魚住町中尾若宮出土遺物……2
第 3 図　調査後遠景（昭和58年2月）……3
第 4 図　魚住古窯跡群と周辺の遺跡……17
第 5 図　遺物実測図（海あがり）……22
第 6 図　和歌山県大蔵経塚出土甕……25
第 7 図　水田盛土断面……29
第 8 図　ボーリング調査風景……29
第 9 図　小皿・碗鉢・形態図……40
第 10 図　鉢D類形態図……43
第 11 図　甕形態図(1)……45
第 12 図　甕形態図(2)……46
第 13 図　甕形態図(3)……47
第 14 図　甕形態図(4)……48
第 15 図　甕胴部外面押印文様、綾杉文拓影……49
第 16 図　軒平瓦拓影……51
第 17 図　平瓦拓影……53
第 18 図　平瓦拓影……54

表目次

第 1 表　魚住古窯跡群一覧表……21
第 2 表　窯体別遺構一覧表……37
第 3 表　遺構別出土土器一覧表……58
第 4 表　窯別小皿・碗法量表……59
第 5 表　形態別鉢法量表……60
第 6 表　38・29・22号、出土遺物器種別割合……63
第 7 表　30号出土遺物器種別割合……64
第 8 表　38・29、22・30号、出土遺物器種別割合……64

第 1 章　調査に至る経過

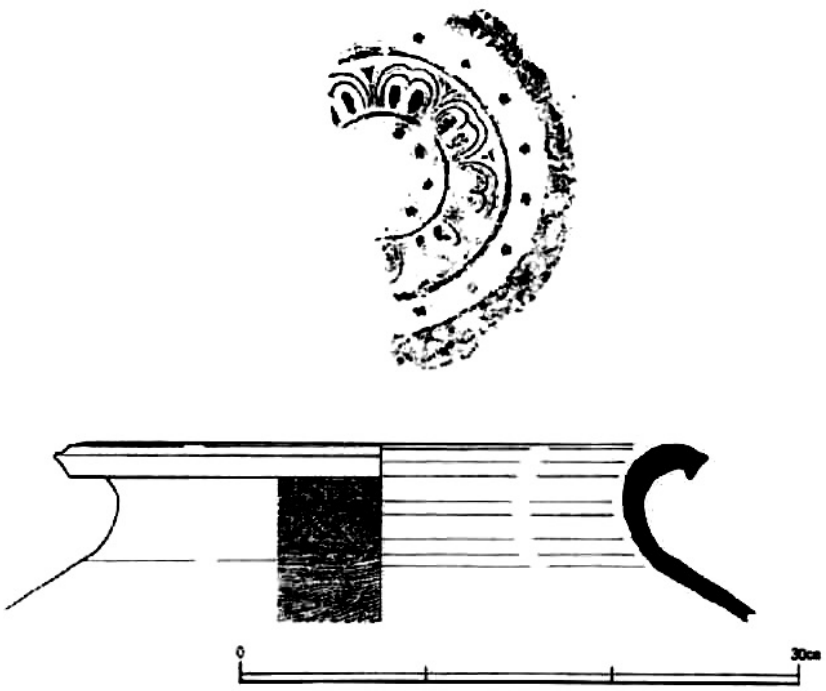
昭和53年 6 月、明石市都市計画部の企画によって、明石市魚住町中尾地区に土地区画整理事業の計画が検討され始まるとともに、都市計画部から市教育委員会社会教育課に対して、同計画地区内に埋蔵文化財の有無について問い合わせがあった。当地区内には、地元の人達の間で古墳があると言い伝えがあるところから、市教育委員会社会教育課の埋蔵文化財担当専門職員である山下俊郎氏が、現地確認踏査を実施したところ、該当する古墳は存在しないことが判明した。しかし皿池谷の踏査によって、谷の水田面に須恵器が多量に散布していることが確認され、須恵器の窯跡の可能性があるため、皿池谷全域及びその周辺部の詳しい分布調査を実施する必要が生じた。この踏査結果にもとづいて、再度都市計画部と協議を実施した結果、土地区画整理事業予定地の中央部は明姫幹線道路の建設予定地で、昭和55年度工事が実施されることも判明した。このため埋蔵文化財の取り扱いは、稲の取り入れ後に、明石市都市計画部、同市教育委員会及び県土木部加古川土木事務所、県教育委員会の四者にて協議することで一致した。

第 1 図　調査前遠景（昭和54年 4 月）

昭和54年１月23日、四者による埋蔵文化財の取り扱いについての協議において、前回の現地踏査では須恵器の窯跡であるかどうか明らかにされていないところから、改めて早急に明姫幹線道路建設予定地を含む土地区画整理予定地区全域の詳細な分布調査を市教育委員会が都市計画部の委託を受けて実施することを決定した。

土地区画整理事業予定地の周辺部では、地元の人達、また一部の研究者の間で古くから須恵器の窯跡が存在することが、知られているところであるため、当然予定地内にも窯跡の存在が考えられるので、明石市教育委員会が主体となり、県教育委員会および神戸古代史研究会の協力によって、昭和54年３月17日から同３月25日までの間、分布調査を実施した。その結果、明姫幹線道路建設予定地内において、須恵器の窯跡が三基存在することが判明するとともに、土地区画整理事業予定地内においても、同様の窯跡及び瓦、須恵器が散布することが明確にされた。（第１図）

この遺跡詳細分布調査の結果を受けて再度、四者にて埋蔵文化財の取り扱いについて協議をしたところ、明姫幹線建設予定地については、県教育委員会が加古川土木事務所と協

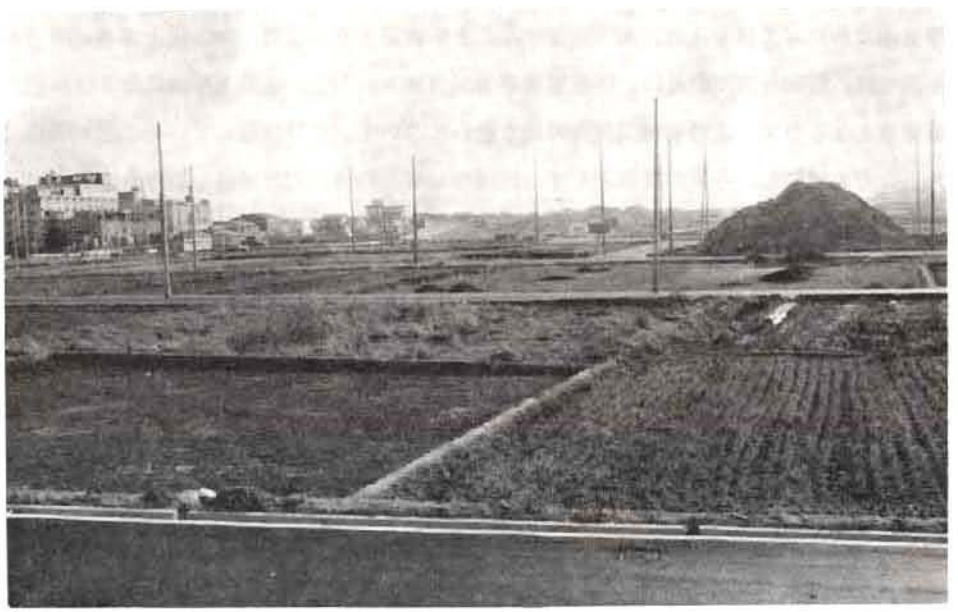


第２図　魚住町中尾若宮出土遺物

議の上、調査を実施することが決定した。なお、土地区画整理事業予定地内については、明石市教育委員会が窯跡の有無、窯跡の数等を把握するため稲の取り入れ後に調査を実施することも決定した。（第２図）

県教育委員会と加古川土木事務所の協議の結果、明姫幹線道路予定地内の発掘調査は昭和54年４月当初から分布調査によって明らかにされた三基の窯跡及び須恵器散布地を対象に開始することになった。

発掘調査は、窯跡の存在が確認されている皿池谷の東西斜面に先がけ、西丘陵地全面にわたって道路建設予定地内の確認調査を実施した。その結果、皿池谷を除いた地域においては、遺物の散布は認められるが、窯跡及び遺構の存在が認められなかったため、この地域の工事は差し支えないとの回答を出し、皿池谷に存在する窯跡の全面調査を昭和54年５月７日から開始した。当初三基の窯跡と考えられていたが、路線幅の全面発掘調査実施の結果、皿池谷西斜面に四基及び東斜面に二基の合計六基の須恵器窯跡を検出するに致ったため、当初に調査終了を予定していた６月末から大きくずれ込み、10月末まで延長することを余儀なくされ、10月25日をもって明姫幹線建設予定地内の窯跡調査を全て終了した。なお、県教育委員会の調査方法及び調査結果に基づいて、明石市教育委員会が窯跡の確認



第３図　調　査　後　遠　景（昭和58年２月）

調査を実施することとなり、今後の調査の成り行きが注目されるところである。しかし、明石市教育委員会によって実施される確認調査及び全面発掘調査により、当魚住古窯跡の中尾川支群のほぼ全域が土地区画整理事業計画地内にあることが明らかにされたため、遺跡の取り扱いによって築窯地形が変貌する可能性があった。

その後、昭和57年皿池を中心とする地区の区画整理事業が完成した結果、中尾川支群を形成していた皿池谷の古窯跡群の地形は大きく変化し、当地区一帯が魚住古窯跡群の中尾川支群の中心部にあたることは、今となっては判別出来ないくらい地形全体が変化している（第3図）ことは、播磨における窯業生産地の解明にとって悲しむべきことである。

遺構の取り扱い

昭和54年10月1日、現地の調査も終了に近づいたので、県文化財保護審議委員会埋蔵部会を開催し調査報告をするとともに、遺構の取り扱いについて審議した結果、六基の窯跡の内、五基については近世の水田面形成時に大々的に破壊されているため、記録保存もやむを得ないという答申を受ける。なお、第38号窯跡については、須恵器窯としては全国的に類例をみない直焔式の煙管状窯で、小皿、埦を中心に焼成された窯跡であるため、この窯跡は、路線の法面に位置することを考え合わせて、加古川土木事務所と協議の結果、窯跡全面にわたって砂を入れ、地下保存することが決定した。また、加古川土木事務所との協議では、第38号窯の位置は、区画整理事業が実施されると、道路と平面になり区画整理事業地となるので、区画整理実施後の取り扱いについて、充分注意していくことが必要であることも確認し、今後の問題として、区画整理事業組合と充分連絡を取り合うことにした。

調　査　日　誌

昭和54年 4.16　現地に事務所（プレハブ）を設置。

4.17～20　傾斜面潤用水路内の土器採集。

4.23　調査前全景写真。

測量開始。

4.24～25　測量。

4.26～27　皿池谷西斜面上に20m間隔で坪掘りをするため、杭打ち。

5. 1～ 7　西斜面上の坪掘り（18カ所）。

（各坪とも耕作土直下が地山、黄灰色シルトで、遺構はなかった。）

5. 8　雨のため作業中止。

5. 9　西側斜面の盛土畦畔を垂直に削り、窯の確認を開始する。

魚住町中尾字若宮で出土した瓦と土器を見学し、現地へ案内していただく。

5.10～14　用水路にヒューム管埋設。

2m間隔にボーリング調査を開始する。

西斜面盛土畦畔削る。

5.15　盛土畦畔を削る途中赤色酸化層を確認し精査した結果、窯であることが判明した。32号窯とする。

5.16～17　32号窯の盛土畦畔断面を清掃し写真撮影後、土層断面図作成。

ボーリング調査にて22・30・29・33号窯の灰原の一部を確認。

5.18　32号窯盛土畦畔を掘り下げる。

ボーリング調査を続行して灰層の確認を急ぐ。

今里幾次氏来訪。（今里氏―若宮出土の軒丸瓦は平安後期ではないか。）

5.20　中世土器研究会・木村捷三郎、鈴木重治、中川信作、橋本久和、川越俊一氏、その他7氏来訪。

5.21　32号窯南側の盛土畦畔を削り、灰層を確認したので33号窯とした。

ボーリング調査を続行し、22・30号窯の灰原の範囲を1m間隔におさえる。

5.22～25　盛土畦畔を削る。
ボーリング調査。
32号窯を検出し、33号窯の調査にとりかかる。

5.25　是川長、藤井直正氏来訪。

5.28　西側丘陵中腹の水田面を精査中、30・34号窯体の一部を確認した。
（34号窯は後に窯壁のブロックであることが判明した。）

5.29　西側丘陵盛土畦畔の断面、写真撮影。

5.30　32・33号窯の窯体、写真撮影。
横断土層断面図作成。
「魚住古窯ニュース」1発行。

5.31　33号窯、窯体上面写真撮影。
35号窯包含層にて軒平瓦（566）出土。

6．1　22号窯、窯体の全容がほぼわかる。
藤沢一夫氏来訪。（藤沢氏―若宮出土瓦は平安前期ではないか。渡辺九一郎氏から明石三本松瓦窯の瓦を借りる。同笵瓦が四天王寺にあり。）

6．4　30号窯の窯体上面、写真撮影。

6．5　32号窯、窯体内掘り下げ。

6．6　32号窯、ブラン検出。
写真撮影。
川西宏幸、植山茂、喜谷美宣氏来訪。
（三条西殿出土の片口鉢は、赤根川タイプと判明。）

6．7　雨のため作業中止。

6．8　22号窯の盛土畦畔を削る途中、窯体横の灰原を検出。
明石市文化財保護審議委員全員、高井悌三郎、中田興吉、五十川伸矢氏来訪。（五十川氏―若宮出土瓦は平安後期ではないか。）

6.11　雨のため作業中止。

6.12・13　32号窯～33号窯の間、盛土畦畔横断土層断面図作成。

6.12　今里幾次氏来訪。

6.14～20　西側丘陵最上段の盛土畦畔削る。

6.15　吉田南遺跡調査団来訪。

「魚住古窯ニュース」2発行。

6.20　22号窯付近から初めて塊が出土する。

6.21　雨のため作業中止。

6.22～25　32号窯、床面検出。

写真撮影。

6.24　中世土器研究会にて藤原宮内中世遺構で、赤根川タイプの片口鉢確認。

6.25　林明石窯業、井原氏来訪。

6.26　32号窯実測。

6.27～29　雨のため作業中止。

6.29　清水芳裕氏来訪。

「魚住古窯ニュース」3発行。

7．1　田辺昭三氏来訪。

7．2　32号窯～33号窯間の盛土畦畔が雨でくずれたため土のう積み。

7．3　雨のため作業中止。

7．4　22号窯～32号窯間の粘土採集跡掘り下げ。

22号窯～30号窯の盛土畦畔の横断土層断面図作成。

7．5　33号窯、灰原上面まで掘り下げる。

喜谷美宣氏来訪。

7．6　22号窯～30号窯盛土畦畔まで掘り下げ中、22号窯の北壁を検出。

7．9　32号窯実測。

32号窯、33号窯、灰原写真撮影。

7.10・11　32号窯、レベル記入。（雨のため作業中止。）

7.12　33号窯、窯体の一部、前庭部を北側で検出。

7.13　33号窯体焚口掘り下げ、33号窯の灰原を水田下に確認。（ボーリング）

八賀晋氏来訪。

7.16　30号窯、窯体付近掘り下げ。

33号窯、窯体内掘り下げ。（焚口直上、三巴文瓦出土）

荻野繁春氏来訪。（荻野氏―33号窯の段差は熱効率を良くするためではないか。）

7.17　32号窯の灰層を再確認するため、ボーリング調査。

7.18～19　33号窯、窯体内、縦断図、横断面図作成後、畦とりはずし。

7.19　30号窯灰層の一部確認。（30号窯盛土で鬼瓦出土）

7.20　33号窯実測。

22号窯、窯体の一部（焚口？）を検出。

7.23　22号窯、全景写真撮影。

33号窯実測。

篠原芳秀氏来訪。

7.24　33号窯平面図実測。

22号窯～30号窯間、盛土畦畔横断土層断面図作成。

7.25　22号窯、焚口部（？）写真撮影。

7.26　22号窯、窯体内掘り下げ開始。

横断面図完成。

30号窯、窯体平面プラン確認。

7.27　32号窯、窯体直上の土器取りあげ。

藤井直正氏来訪。

7.30　30号窯の盛土畦畔横断、縦断土層断面図作成。西側丘陵、遺景写真撮影。

7.31～8.8　22号窯～30号窯の間、掘り下げ。

7.31　陶芸家　竹内巌氏来訪。（竹内氏―鉢はロクロ・ヘビキ成形ではないか。）

8．5　中尾端雲寺で説明会。

8．6　千田稔、山中一郎氏来訪。（千田氏―魚住泊は江井ヶ島港で、魚住港は汐待ち港として存在したのではないか。）

8．7　木村捷三郎、鈴木重治、百瀬正恒、中村浩氏来訪。（木村氏―若宮出土瓦は平安後期ではないか。東寺、四天王寺に出土例あり。平安京東市で赤根川支群の片口鉢出土との情報が入る。軒平瓦（594）は平等院に出土例あり。平安後期。）

8．8　竹内敏氏引率の陶芸教室の生徒来訪。

8．9　33号窯、平面図作成。

29号窯、流土掘削開始。

山崎信二氏来訪。（山崎氏―興福寺に播磨系瓦の出土例あり。）

8.10　22号窯、窯体内掘り進む。

今里幾次氏来訪。

8.12　「魚住古窯ニュース」6の取材。（水産試験場、林崎、東二見、西二見港取材。）

8.20～22　22号窯、掘り下げ。

29号窯付近、盛土掘り下げる。

8.21　間壁忠彦氏来訪。（海あがりの備前鉢は15世紀のもの。）

8.22　上原真人氏来訪。（軒丸瓦、軒平瓦はともに12世紀末に近い。若宮出土瓦は古い型式を模造したもので、平安末か？）

8.23　22号窯、窯体内掘り下げ終了。

29号窯の窯体一部検出。

8.24　29号窯、窯体上面検出。

22号窯～34号窯、遠景写真、22号窯全景写真撮影。

「魚住古窯ニュース」4発行。

8.27　29号窯、窯体内掘り下げ。

加古川史学会来訪。

8.28～29　西傾斜面、平板測量。

29号窯、盛土縦断土層断面図作成。

ユンボにて、水田面耕土掘り下げ。

8.28　木村捷三郎氏来訪。

8.30　29号窯、写真撮影。

割り付け、杭打ち。

波毛康宏氏来訪。

8.31～9.3　29号窯、窯体内掘り下げ。

30号窯、灰原掘り下げ開始。

8.31　明石市都市計画課課長来訪。

「魚住古窯ニュース」5発行。

9．3　福本遺跡調査団、森郁夫、立木修、山本忠尚氏来訪。（森氏―若宮出土瓦は12世紀後半(終末)、13世紀には入らない。東海市加木屋町社山古窯より古い。三本松瓦窯の軒平瓦は平安後期より古い。）

9．4　雨のため、午前中にて作業中止。

9．5　22号窯～30号窯間灰原（？）掘り下げ。

22号窯、窯体実測。

29号窯、窯体内掘り下げ、縦断面実測。

9．6　22号窯、窯体内土器実測。

29号窯、窯体内横断土層断面図作成。

38号窯の窯体の一部と灰原確認。

「魚住古窯ニュース」6発行。

9．7～8　29号窯、灰原掘り下げ。

38号窯、灰原掘り下げ。（38号窯の窯体下へ灰原がもぐり込む。小皿、碗をともなう灰原を38号窯と決定。）

9.10　38号窯の窯体のほとんど全容がわかり、直焔式の平窯であることが判明。

9.11　38号窯、灰原横断、縦断土層断面図作成。

藤沢一夫氏来訪。（藤沢氏―38号窯の類例は大阪府岸部瓦窯跡、陶邑にあり。）

9.12　38・29号窯、清掃。

29号窯、灰原掘り下げ。

森昭氏来訪。

「魚住古窯ニュース」7発行。

9.13　29・38号窯、全景写真撮影。

赤松啓介、吉岡康暢氏来訪。

9.14　29号窯、実測。

荻野繁春、森田稔、吉田恵二、巽淳一郎、安田龍太郎、浅岡俊夫、葛野豊氏、明石瓦組合副理事　宇野氏来訪。

9.15　29号窯、実測。

松藤和人、竹内厳氏来訪。

9.17　航空写真撮影。

「魚住古窯ニュース」8発行。

9.18　38号窯、割り付け。

29号窯、窯体内土器実測。

30号窯、灰原（A・B区）掘り下げ。

9.19～21　30号窯、灰原掘り下げ。

灰原を掘り下げ途中、30号窯の窯体の一部を検出。

9.19　B区灰原から軒平瓦（568）出土。

明石市市会議員　川崎九左衛門氏来訪。

9.22　30号窯、灰原を掘り進めるが土器大量に出土する。

岩本圭輔、西村康氏来訪。

9.23～27　30号窯、灰原掘り下げ。

中世土器研究会メンバー来訪。

9.24　30号窯、灰層から軒丸瓦（554）出土。

9.26　藤沢一夫氏来訪。（藤沢氏—9.24出土の瓦は尊勝寺、平安宮内裏回廊で出土。）

9.28　雨のため作業中止。

藤井直正氏来訪。

9.29　22号窯、灰原掘り下げ。

9.30　田辺昭三氏来訪。

台風通過のため、灰原全面水びたしになる。

10. 1　38号窯、実測作業。

県文化財審議委員、視察。

10. 2　排水作業。

38号窯、実測作業。

10. 3　30号窯灰原、横断・縦断土層断面図作成。

22号窯、黒灰色土から下駄出土。

浪貝毅氏来訪。

10. 4　22号窯、灰原掘り下げ。

30号窯、窯体内横断土層断面図作成。

10．5　30号窯、断面取りはずし後、全景写真。

10．6　29・38号窯、全景写真。（カラー写真）

木村捷三郎、百瀬正恒氏来訪。

10．8　22号窯、灰原の縦断・横断土層断面図作成。

縦断トレンチ掘り下げ開始。

10．9　33号窯、前庭部掘り下げ。

30号窯、窯体平面図作成。

縦断トレンチ掘り下げ完了。

福岡澄男氏来訪。

10.10　33号窯、前庭部灰原掘り下げ終了。

22号窯、前庭部灰原掘り下げ終了。

30号窯、平面図終了。

真野修氏来訪。（真野氏一甕の頸部叩き目は神出古窯跡出土遺物にもあり。）

10.11　22号窯、前庭部掘り下げ。

地磁気測定。（福井大　中島正志氏）

「魚住古窯ニュース」9.10発行。

10.12　33号窯、前庭部土層断面図作成。

畦藻分析を行なう。（神戸大　熊野茂氏）

植山茂、佐々木英夫、南博史氏来訪。

（植山氏一軒丸瓦（551）は尊勝寺、平安宮内裏回廊と同笵瓦と認定。）

10.13　29・30号窯、窯体床面断ち割り。

遺物1,200箱、王子分館へ搬出。

藤沢一夫、鍛治氏来訪。

10.15　33号窯、窯体断ち割り。

30号窯、灰原掘り下げ。

10.16　30号窯、灰原縦断畦をはずす。

楢崎彰一、荻野繁春、藤沢一夫氏来訪。

10.17　30号窯、灰原縦断土層断面図作成。

30号窯、床面下灰層を確認する。

10.18～19　雨のため作業中止。

10.18　上原真人、中村友博氏来訪。（上原氏—軒丸瓦（551）は尊勝寺、平安宮内裏回廊出土瓦と同笵。）

10.20　現場の排水作業。

29・30・33号窯、窯体断ち割り図作成。

10.21　地元住民180名を対象に現地説明会。

10.22　30号窯、灰原横断・縦断土層図作成、写真撮影。

10.23　22号窯、窯体断ち割り。

38号窯、前庭部灰原掘り下げ。

10.24　22号窯、前庭部灰原断面掘り下げ。

東側斜面、平板測量。

10.25　29号窯、南灰原、30号窯、床下灰層掘り下げ。

38号窯、窯体内の石を取り上げ、砂をつめて埋めもどす。

10.26　遺物を王子分館に搬出、現地引上げ。

三辻利一氏に胎土分析資料を渡す。

整 理 日 誌

昭和55年 4. 1～ 9.30　土器洗い、ネーミング。（コンテナ約2,000箱）

10. 1～10.19　埦・小皿の接合、復元。

10.20～昭和56年 1.14
30号窯、鉢の接合、復元。

1.16～昭和57年 4. 7
30号窯、甕の接合、復元。

3.16～ 3.25
30号窯、鉢・甕・瓦類写真撮影。

4. 8～ 8.31　22号窯、甕の接合、復元。

30号窯、鉢の実測。

9. 1～12. 2　22号窯、鉢の接合、復元。

22号窯、鉢・甕、30号窯、甕の実測。

11.30～12. 2
22・29・30号窯、鉢・甕・小皿・埦写真撮影。

12. 3～12.28　土器の重量計測。

昭和58年 1.15～　トレース、レイアウト、表作成、原稿執筆。

1.12～ 1.18　特殊遺物、赤根川支群の遺物写真撮影。

第 2 章　遺跡の位置と環境

(1) 地 理 的 環 境

明石川と加古川に挟まれた平坦な丘陵地は、東西20㎞、南北15㎞にわたり、西から東へ向って緩やかに高まり、神戸市西区神出町の雌岡山、雄岡山へとつながる地域一帯が印南野台地と呼ばれている。

この印南野台地は、雌岡山を中心とする高位段丘から播磨灘にいたる中位段丘で、第四期洪積層から形成された播磨層群である[1]。魚住古窯跡群はこの印南野台地の東部に位置し、中位段丘が侵蝕によって形成された侵蝕谷の赤根川および中尾川の河口部、標高10m前後の傾斜面裾部の西八木層に築かれた古窯跡群である。

(2) 歴 史 的 環 境

印南野台地は、直良信夫氏によって日本最古の人類と考えられる明石原人骨が発見された台地であり、この地域周辺部において人間が生活をした事を知る各時代の遺跡、および遺物が存在することが古くからよく知られている。

それらの遺跡を各時代ごとに見ると、先に述べたように直良信夫氏によって明石原人が明石市大久保町西八木の海岸で発見されたことは、歴史上あまりにも有名な事実である。旧石器時代のナイフ形石器が出土した遺跡として知られている大久保町大窪の喰ヶ池[2]、野々池[3]、大久保町西脇鳥ヶ谷[4]、大久保町谷八木水白[5]、松ノ内[6]等の遺跡があり、野々池遺跡においては有舌尖頭器[7]が知られ、明石市内における唯一の出土品である。

縄文時代の遺跡では、草創期と考えられる円形掻器、扁形削器、長脚石鏃、楔形石器を出土する金ヶ崎遺跡[8]や、井島Ⅰ形のナイフ形石器、石核、剝片、井島Ⅲ形の石鏃、縄文早期の鍬形石鏃が採集された長坂寺寺山遺跡[9]があげられる。なお大久保町大窪字高丘の丘陵中にある新築池から、縄文時代と考えられる石鏃が多数採集されている[10]。しかしこの遺跡は、住宅・都市整備公団による団地造成によって消滅した。縄文土器が出土する遺跡[11][12]は藤江字出の上（青竜神社境内）がある。出の上遺跡は、藤江川の河口部に突き出た印南野台地の南端部に位置し、縄文中期前半の船之元式、中期後半の里木Ⅱ式、後期の元住吉山Ⅰ式にあたる石鏃、楔形石器、磨石等が縄文土器とともに伴出している。

一方弥生時代の遺跡では、明石川右岸の丘陵において木葉状文のある壺形土器を出土する播磨吉田遺跡が著名である。魚住古窯跡群の周辺においては、顕著な遺跡は発見されて

いないが、藤江山王神社東丘陵地[44]や、藤江の新池[45]から石鏃が多数発見されているにもかかわらず、両遺跡とも土器は1片も伴うことなく石鏃のみであるので、遺跡の性格等は明らかでない。

古墳時代になると明石川流域では、古墳時代中期の大型古墳である王塚古墳を中心に、後期の古墳群が急激に増加し、これは本遺跡の周辺部においても同様である。藤江川の上流約1.2㎞の左岸、西斜面の頂上部に古くから地元の人達によって中尾千壺古墳と呼ばれていた古墳の存在が、昭和44年11月に山陽新幹線の工事により明らかになったため、明石市教育委員会によって新たに発掘調査が実施された結果、直径16～18mの円墳で、円筒埴輪、器材埴輪、須恵器の出土から木棺直葬を主体とする6世紀前半頃に築造された古墳であることが明らかにされた[46]。この中尾千壺古墳の対岸丘陵の甲池中においても埴輪片、須恵器片の散布が認められるところから、同池にも同時期にあたる古墳が存在したとも考えられる。さらに甲池の北にある新池中にも、横穴式石室を主体とする円墳および木棺直葬を主体としたと思われる円墳が4基わずかに存在していたが、明石市地方卸売市場の建設に先だち調査された。しかし横穴式石室である円墳は設計変更によって、明石市指定文化財として市場内に保存され活用されている。今日では、藤江川流域において保存存在している唯一の古墳である。

藤江川流域同様に谷八木川流域においても埴輪をもつ後期古墳は、谷八木川左岸の丘陵西斜面の突端部、大久保町宮ノ先住吉神社内の宮ノ先古墳[47]、谷八木川右岸の南北に延びた丘陵の南端部に下ヶ谷古墳が存在していたが、神社建設ならびに大久保小学校建設によって破壊され、今日では認めることが出来ない。

古墳時代の生産遺跡として、魚住町鴨谷池に長脚二段透しを中心とする須恵器窯が4基確認されているが[48]、この地も丘陵の開墾によって破壊が進み、窯本体の存在は認めにくいが、灰原等の存在は認めることができる。また大久保町高丘においては、7世紀を中心とする古窯跡が20基存在していたが、住宅団地土取り工事[49]、道路建設[50]によって消滅したものを除き、住宅団地の公園内の5基が県指定文化財として保存されている。このうち特に高丘古窯跡から出土した鴟尾は、四天王寺から出土している鴟尾との結びつきについて、地方窯の解明にあたり重要な資料である[51]。

さらに、魚住古窯跡を解明していくについて、上記の鴨谷池古窯跡及び高丘古窯跡は、歴史上重要な意義を示す生産遺跡である。

瓦窯跡では大久保町林崎に三本松瓦窯跡[52]があり、平安時代後期を中心に鎌倉時代に生産

1．明石原人出土地
2．喰ヶ池遺跡
3．野々池遺跡
4．西脇遺跡
5．金ヶ崎遺跡
6．長坂寺寺山遺跡
7．師江、出の上遺跡
8．新築池遺跡
9．別所遺跡
10．中尾遺跡（千壺）
11．甲池古墳群
12．宮ノ先古墳
13．下ヶ谷古墳
14．鴨谷池古窯跡群
15．高丘古窯跡群
16．三本松瓦窯跡
17．松陰窯跡
18．長坂寺遺跡
19．魚住泊跡
20．赤根川遺跡
21．皿池遺跡
22．山ノ下遺跡

0　2km

第4図　魚住古窯跡群と周辺の遺跡

され京都へ運ばれ使用されていることが判明している。なお江戸時代から明治にいたる窯跡として大久保町松陰新田には、登り窯が存在する。

奈良時代に入ると、魚住町長坂寺に長坂寺跡[28]と呼ばれる寺院跡の存在が知られていたが、現在では駅家跡として長坂寺遺跡[29]と言われている。

一方奈良時代に僧行基が西国、四国への交通の要衝として築いたといわれる播磨、摂津の5泊の1つである「魚住泊」は、長らく廃港として放置されていたが、僧重源によって修復された「魚住泊」が、現代の江井ヶ島港[30]あるいは中尾川河口部[31]に比定されていることは、魚住焼の流通経路を解明していくにあたり、非常に重要であることは言うまでもない。大久保町江井ヶ島の赤根川遺跡では、弥生式土器、土師器、須恵器の内でも蛸壺が多量に出土し、須恵器は明らかに魚住古窯跡群赤根川支群の第16号窯にあたる遺物であり、赤根川遺跡中に混入していたものと思われる[32]。

大久保町西島の皿池の周辺において、平安時代から鎌倉時代にいたる須恵器が多量に散布しているところから、この皿池遺跡は魚住古窯跡の中尾川支群の窯業生産にかかわる人達の生活跡である可能性が充分考えられるが、今日では、水田耕作地及び池の開墾によって開発されているため、遺跡の把握が出来ずまことに残念なことである。大久保町大久保字山ノ下に土場、羽釜を中心とした遺物の包含地が認められ、この地域に中世社会の生活を偲ばせる遺跡が存在しているものと思われる[33]。

(3) 魚住古窯跡の分布

中世須恵器窯跡の分布する範囲は明石市大久保町江井ヶ島字東島から明石市魚住町西岡にいたる東西約2㎞、南北約1㎞の地域で、中世荘園の魚住荘[34]に比定されている範囲である。

窯跡の分布は、大久保町江井ヶ島の赤根川流域および明石市魚住町中尾の中尾川流域の丘陵斜面に集中している。窯跡が分布する範囲は、播磨灘の海岸線から北へ約1.2㎞までの丘陵末端部であり、標高は海抜15m以内が予想される。現在までのところ、窯跡の分布が認められるのは、赤根川および中尾川の河口部から約1㎞以内である。

(4) 窯 跡 の 名 称

魚住古窯跡は、我々が発掘調査を実施するまで、地元の人達および一部の研究者によっ

て、戦前から赤根川河口部と中尾川河口部の周辺部において、須恵器窯跡の存在が明らかにされていたが、古窯跡群としての名称はなかった。[29]

現在までに海岸部の侵蝕等による自然的要因と、住宅地の造成による人為的要因のため、窯跡の存在は調査・確認されることなく消滅していったが、日本各地における中世須恵器の研究が、楢崎彰一氏によって活発に進むとともに、播磨地域における魚住地区の窯跡についても、研究者の間で調査データを必要とする声がたかまってきた。

昭和53年頃になると、赤根川、中尾川流域において窯跡の数が増加したため、窯業生産地としての名称が考えられ始めた。古窯跡の分布する範囲が、中世魚住荘（住吉神社領）域[30]にあたることから、魚住古窯跡群の名称をつけるとともに、赤根川流域に所在する窯跡を赤根川支群、また中尾川流域に所在する窯跡を中尾川支群と正式に命名した。[31]

(5) 窯跡の数と支群

中尾川支群において窯跡として確認、発見した数は31基、また赤根川支群における窯跡は16基である。[32] しかし、窯跡として確実に確認されている以外に、須恵器の散布地がかなり数多く認められることから、各々支群において現在確認されている以上の窯跡が存在していたことは明らかである。また今後、人為的な地形の変化等に伴ない発見される窯跡の数が増加するものと思われる。

なお分布調査の結果、現在までのところ、窯跡は39基発見されているが、窯跡として確実に断定出来る基礎基準としたのは、(1)窯体及び灰原の確認　(2)窯壁片を含む須恵器の包含層および須恵器の散布地　(3)焼土、焼け割れ、焼けひずみ、なま焼けなど、焼成時の不良品を含む須恵器の包含層または散布地の３種類である。

中尾川支群

中位段丘が侵蝕によって出来た侵蝕谷である中尾川は、大久保丘陵の南端から播磨灘に流入し、北東から南西に向って出来た河幅の狭くて浅い小河川である。この河川の河口部、西段丘において南北に延びた小支谷が形成され、この東西斜面を中心に、築かれた窯跡群が中尾川支群である。この支群の窯跡は、支谷の奥部に構築され、順次、支谷の入口部あるいは河口部へと移りゆく窯跡群である。

この中尾川支群の窯跡は、中位段丘の西八木層の粘土層中に築窯され、魚住古窯跡群の中では、赤根川支群より先に操業された窯跡である。その操業開始は、神出古窯跡群の生産のピークが過ぎ、末期近くになった12世紀後期末頃にあたり、13世紀中頃にはすでに河

口部に移り、末期を迎えていたと思われる。この中尾川支群が河口部に移動した時期である13世紀中頃に、赤根川支群へ一部が移り、操業を開始したと考えられる。

赤根川支群

中尾川支群と同じように、中位段丘の侵蝕によって出来た侵蝕谷である赤根川は、大久保町大窪字高丘丘陵の支谷を源とし、東から西に向って出来た川幅の狭い河川である。

この古窯跡群は、赤根川の西段丘に出来た小支谷を中心とした窯跡群である。中尾川支群の形成とは異なり、この窯跡群は海岸部の最も近い段丘の末端部に形成された小支谷の入口部に築窯され、谷奥部へと順次移動したものと思われる。

中尾川支群において生産が終末を迎え、完全に生産を終了した13世紀後半から14世紀に入ると、赤根川支群の生産地は一つの限られた小支谷を中心に操業され、他の支谷に築窯されることはなかったと思われる。

その操業期間は、13世紀中頃から始まり14世紀末から15世紀前半頃まで続く。赤根川支群の最も生産が盛んであったと考えられる操業時期は、14世紀後半頃にあたると思われる。[8]

中尾川支群および赤根川支群の窯跡は、近世から現在まで、水田耕作の開墾および明石瓦生産のための粘土採集として、耕地が開削されて来たため、窯跡の極く一部、または灰原の一部が僅かに残存している現況であるが、今後窯跡の増加する可能性が充分考えられる。しかし近年の住宅建設および区画整理事業に伴い、状況が変化している今日、早急に窯業生産地としての状況把握とともに、中世須恵器研究、追求および解明のため文化財保護行政の指導が必要であろう。

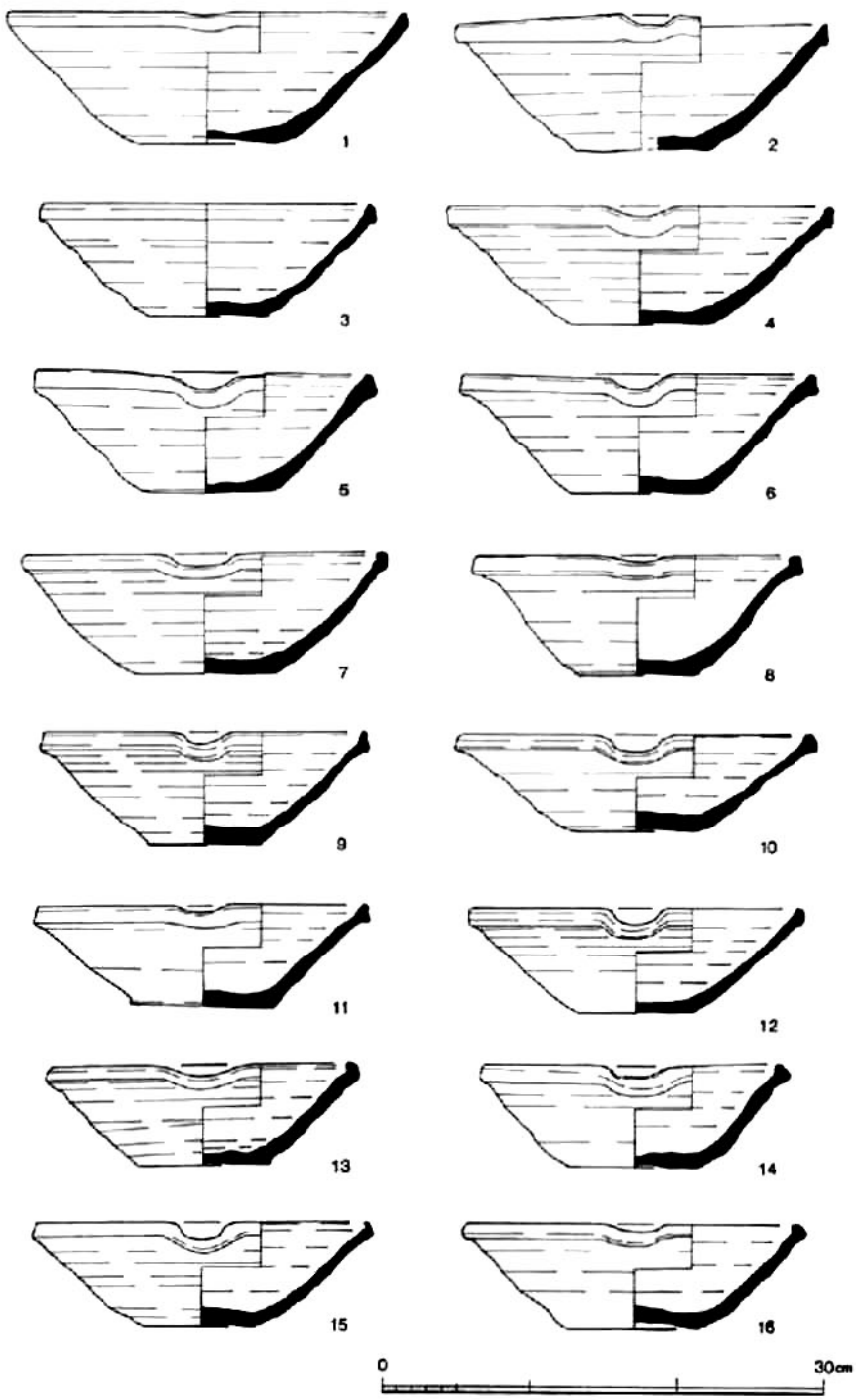
(6) 海あがりの魚住焼

海あがりの遺物は、戦前から戦後にかけて、江井ヶ島、林崎、魚住、二見等の各漁港の漁師の人達によって、鉢壺、鉢、スリ鉢（備前焼）などがさかんに引き上げられ、漁港周辺の人達の置き物として個人の家に飾られていた。近年江井ヶ島を中心に、播磨灘の「鹿ノ瀬」に鉢壺とともに須恵器の片口鉢が多量に引き上げられてくることが、新聞紙上で紹介[記事]されるようになり、文化遺産としての重要性も考えられる様になってきた。

その後、魚住古窯跡群の一部が道路工事および土地区画整理事業などにともない、文化財の発掘調査が開始されたことから、海あがりの片口鉢が考察される様になり、文化財としての価値が見直され、研究論文に紹介されるに至った。[9]そこで今回、魚住古窯跡群調査

窯番号	所在地	窯体	灰層	包含層	窯壁片	須恵器	瓦	備考
1	明石市大久保町西島字出張			○	○	○		赤根川支群
2	〃		○	○	○	○		〃
3	〃 〃江井ケ島字南ノ前		○		○	○		〃
4	〃 字中スジ			○	○	○		〃
5	〃 字南ノ前				○	○		〃
6	〃 字陸ノ後		○	○	○	○		〃
7	〃 字谷ノ堂			○	○	○		〃
8	〃 〃 西島字中スジ		○	○	○	○		〃
9	〃 字薮ノ下				○	○		〃
10	〃 字南ノ前			○	○	○		〃
11	〃 〃			○	○	○		〃
12	〃 〃		○	○	○	○		〃
13	〃 〃			○	○	○		〃
14	〃 〃		○		○	○		〃
15	〃 〃		○		○	○		〃
16	〃 字下カジヤ				○	○		〃
17	〃 魚住町中尾字向ィ原		○	○	○	○		中尾川支群(区画整理予定地内)
18	〃			○	○	○		〃
19	〃			○	○	○		〃
20	〃 字中原		○		○	○	○	〃 (〃)
21	〃 〃	○		○	○	○	○	〃 (〃)
22	〃 〃	○	○	○	○	○	○	〃 (昭54. 兵庫県教育委員会調査)
23	〃 字北ケ市		○		○	○		〃
24	〃 字社山	○			○	○		〃 (中尾住吉神社境内)
25	〃 〃	○	○	○	○	○		〃 (〃)
26	〃 〃		○		○	○		〃 (〃)
27	〃 〃				○	○	○	〃 (〃)
28	〃 字中原		○		○	○		〃 (区画整理予定地内)
29	〃 字向ィ原		○	○	○	○	○	〃 (昭54. 兵庫県教育委員会調査)
30	〃 字中原	○	○		○	○		〃 (〃)
31	〃 字北ケ市			○	○	○		〃 (区画整理予定地内)
32	〃 字中原	○	○		○	○	○	〃 (昭54. 兵庫県教育委員会調査)
33	〃 〃	○	○		○	○	○	〃 (〃)
34								
35	〃 〃			○	○	○	○	中尾川支群 (区画整理予定地内)
36	〃 字長谷				○	○	○	〃 79. 5. 18 新発見
37								
38	〃 字向ィ原	○	○	○	○	○	○	中尾川支群 (昭54. 兵庫県教育委員会調査)
39	〃 〃	○	○	○	○	○	○	〃

第1表 魚住古窯跡群一覧表



第5図　遺物実測図（海あがり）

報告書に、海あがり片口鉢として報告するものである。今日まで江井ヶ島沖から魚住沖にかけて引き上げられた片口鉢は、おびただしい個数にあがると思われる。同様に淡路の一宮町富島沖においても、魚住焼の片口鉢が他の遺物と同じく引き上げられているので、ここにその一部を紹介しておくものである。（第５図）

(1)は、海あがりの片口鉢の中で最古の時期に比定されるもので、また器形として最大のものである。口径27.0cm、器高9.0cm、底径12.0cmのもので、底部から口径部にかけて体部が少し内彎ぎみである。口唇は丸く細めている。内外面とも横ナデによる調整仕上げにより、器壁は薄く底部は糸切り仕上げである。(9)～(10)は、器高及び口径が小さくなり、口縁部は肥厚し、内面部で段をつけたのち直立して端部を丸く納め、器壁の内外面ともロクロ調整が顕著で、回転糸切り底である。

この種の片口鉢は、海あがりの主流を占めるもので、淡路富島沖(5)(6)のものも、この片口鉢にあたり、14世紀後半に赤根川支群の窯によって焼成されたものである。

(8)は全体的に小さく、口縁部外面において体部が大きく外反したのち内側に入りこみ、内面では大きく内側におれ曲る器形であり、魚住古窯跡群の最終末にあたるもので、赤根川支群の窯によって生産されたものである。その生産年代は14世紀末頃から15世紀初期にあたると思われる。

(7)　東播における古窯跡群

魚住古窯跡群を考察するうえで、この古窯跡群に先だつ窯業生産地の追求が重要な位置を占めることは、衆目の一致するところであるので、神出古窯跡群および三木市内に所在する古窯跡群について、若干報告するものである。

神出古窯跡群は、神戸市西区神出町に所在する雌岡山および雄岡山の南斜面を中心に、高位段丘が侵蝕によってできた東西に入りこんだ支谷の斜面に築かれた窯跡である。

行政区画から言うと、神出町東、北、老ノ口、田井に広がり約70基からなり、今後調査が進むに従って窯跡の総数が増加して、100基を越えるものと思われる。

この古窯跡群は、近年各地（特に京都市内）の古代から中世にかけての発掘調査が盛んに実施されるようになってから、東播系窯跡（神出窯跡）として注目されるようになってきた。特に瓦が焼成されることは、消費地である京都の寺院跡から出土する同笵瓦から、院政関係と直結する歴史資料として、一部の研究者によって追求されてきた。この窯跡の存在が広く知られる様になったのは、1971年９月に山口卓也、橋本亮一氏によって『老ノ口窯跡遺跡』として報告されたのが、神出古窯跡群の第一報であった。その後、真野修氏

によって（「雌岡山周辺の古窯址―神出古窯址群」『神戸古代史』1－3）が報告され、神出古窯跡が全国的に広く研究者によって注目される様になったのである。

さらに、上原真人氏によって京都市内出土瓦からみた「播磨系瓦」の研究に伴い、各地の瓦屋の追求がなされ、論文としてまとめられたことが、神出古窯跡群の重要性を決定的とした[60]。また、山口報告から今日まで神出古窯跡の発掘調査が実施されることがなかったがために、窯跡の実態が把握できなかったのであるが、農業基盤整備事業に伴って、神戸市教育委員会が事前の発掘調査を、昭和56年から毎年実施するようになった[59][60]結果、急速に古窯跡の実態も把握され、今後この調査の成果に基づいて、古代後期における窯業生産の解明が進むものと思われる。なお各々の窯跡から、須恵器生産に伴い瓦が多量に生産されていることが解明されつつある。当古窯跡群の操業期間は、11世紀末頃に開始され、少くとも13世紀前半までは存続していたと考えられているが、各地における消費地との結びつきについて追研が待たれる。

三木市内の古窯跡群が報告されたのは、是川長氏が『三木市史』の中で「三木市の古窯と経塚」として紹介されたのが最初である。この古窯跡群は、神出古窯跡群および魚住古窯跡群とは分布傾向が異なり、広範囲の中に分散的に窯が存在している。この古窯跡群によって生産された瓦は、神出、魚住古窯跡群と同様に、京都六勝寺を中心に寺院関係に伴う遺跡から出土していることが、上原真人氏によって明確にされた[61]。今日まで発掘調査による遺物、遺構の確認はなかったが、神戸市と同様に農業基盤整備事業に伴なって、三木市教育委員会によって調査が実施されている現在、三木市における古窯跡群の解明に重要な資料として整理、追求されることが待たれるのである。窯跡から出土する遺物は、糸切り底の小さな高台を持ち体部が内彎する碗を中心に、回転糸切り底の平底である片口鉢や甕及び小皿、瓦等があり、神出古窯跡に先行して操業が開始され、操業期間は11世紀から12世紀末にあたるものと考えられている[62]。

(8) 魚住焼の消費地遺跡

近年日本全国各地において、古代末期から中世の遺跡を道路建設、宅地造成、ビル建設、河川改修およびほ場整備事業に伴う埋蔵文化財を、工事に先だち事前の発掘調査が盛んに実施されて来た結果、中世遺構に伴い中世須恵器の出土が、各遺跡に多量に含まれていることが明らかにされつつある。特に京都市内においては、ビル建設等による都市改造が実施されるようになり、中世遺跡の実態が把握されつつあるなかで、遺跡に伴う各種の遺物の中に、中世須恵器も含まれていることが判明してきた。

これらの状況の中で、兵庫県教育委員会によって昭和54年4月から10月にかけて、西日本における唯一の中世須恵器窯である魚住古窯跡群の一部を、道路建設工事に先だち発掘調査を実施した結果、西日本各地の中世遺跡で魚住焼の製品が出土していることが判明してきた。

それは私達が直接現地で確認したり、あるいは兵庫県教育委員会に持ち込まれる遺物を実見してきた結果であるが、製品の流通範囲は、実に広範囲にわたっている。今までに私達が確認したところでは、西は山口県から瀬戸内海地域一帯および大阪湾周辺、さらに淀川周辺地から京都、滋賀、奈良県橿原市内、和歌山県紀の川流域(第6図)、鎌倉市の中世遺跡までおよび、最近では椙崎彰一氏の確認によると埼玉県内にまで東限が拡がっていることが明らかにされつつある。今後ますます各地の遺跡から、魚住古窯跡群で生産された片口鉢が出土することは明らかであろう。この広範囲において出土する魚住焼の生産年代は、12世紀後半末から13世紀前半の時期のものは極く限られた遺跡からしか発見確認されていないが、赤根川支群における13世紀後半から14世紀後半の製品が圧倒的多数を占めていることが明らかになっている。

(9) 小　結

近年、全国各地の中世遺跡の調査によって、須恵器が発見、報告されるに従い、これらの須恵器の一部は魚住古窯跡において焼成されたことが明らかになって来た。この魚住古

第6図　和歌山県大薮経塚出土壺

窯跡によって焼成された製品が中世須恵器と呼ばれる様になったのは、楢崎彰一氏が『シンポジウム15、16世紀を中心とした出土陶磁』における「出土日本陶磁研究史」の表の中で、須恵器系の焼物と称したのが最初である。

平安時代後期に入ると、中国磁器が当時の社会支配層であった宮廷、寺院、国衙などで使用される一方、日常雑器である中世須恵器は民衆の間にも広く使用されるようになった。農業生産技術が向上することによって種壺、大甕などが利用され需要がたかまり、丹波焼に依存する傾向が強くなり、丹波焼は13世紀後半に生産が大きく展開する。一方、中世須恵器は次第に甕の生産が減少し日常生活に必要な調理器具である捏鉢、擂鉢の増産へと生産体制が移行していったのである。

これらの現象は、商品流通に付随する貨幣、商業資本、市場等の多くの関連した問題と深くかかわっている。さらに地方荘園内の市場成立、商品交換の展開等にも関連し、社会経済史上重要な問題である。今後、魚住古窯跡群を通じて、中世社会に於ける商品流通経済史の解明に一歩でも近づき研究を続けていく必要がある。

註

① 藤田和夫、笠間太郎『六甲山地とその周辺の地質』 1971年。
② 兵庫県教育委員会『特別地域埋蔵文化財分布地図及び地名表』第2分冊 1973年。
③ ①に同じ。
④ ③に同じ。
⑤ ②に同じ。
⑥ ②に同じ。
⑦ 旧石器談話会「兵庫県旧石器時代遺跡分布図および地名表」『旧石器考古学』21 1980年10月。
⑧ 春成秀爾「明石市西脇遺跡の旧石器」『旧石器考古学』21 1980年10月。
⑨ ⑥に同じ。
⑩ 福井英治『明石高丘地区埋蔵文化財調査略報』 兵庫県教育委員会 1968年3月。
⑪ ⑥に同じ。
⑫ 『明石市史』上巻 1960年3月。
⑬ ⑫に同じ。
⑭ 大村敬通、西口和彦採集。

⑮ 中谷雅治「明石市中尾古墳調査概報」兵庫県教育委員会　1971年3月。

⑯ ⑫に同じ。

⑰ ⑫に同じ。

⑱ 伊藤晃、大村敬通「明石高丘地区埋蔵文化財調査略報」　兵庫県教育委員会　1968年3月。

⑲ 浅岡俊夫、大村敬通「高丘古窯址群調査概報」Ⅱ　兵庫県教育委員会　1970年3月。

⑳ 井内功、井内潔「高丘第三窯跡発掘調査報告」明石市教育委員会。

㉑ 島田清「播磨国東部地方に於ける出土古瓦に就いて」「夢殿」第19冊　「綜合古瓦研究」第2分冊　1939年。

㉒ 鎌谷木三次「播磨上代寺院址の研究」　1942年。

㉓ 高橋美久二「古代の山陽道」「小林行雄博士古稀記念論文集」　1982年7月。

㉔ 千田稔「埋もれた港」学生社　1979年5月。

㉕ 千田稔「魚住泊の位置」「魚住古窯ニュース」6　1979年9月。

㉖ 藤井裕介、高島信之「明石市赤根川遺跡の調査」「兵庫県埋蔵文化財調査集報」第3集　1976年3月。

㉗ 井内功氏の御好意により大村敬通が実見。

㉘ 石田善人「荘園史の研究㈠、㈡」「兵庫史学」26号・27号。
竹内理三編「荘園分布図」下巻　吉川弘文館。

㉙ 「魚住村誌」　1957年9月。
赤松啓介「東播の古窯址について」「魚住古窯ニュース」9.10　1979年10月。

㉚ 黒田義隆「明石市史」上巻　1960年3月。
竹内理三編「荘園分布図」下巻　吉川弘文館。

㉛ 大村敬通「魚住古窯跡」「魚住古窯ニュース」2　1979年6月。

㉜ ㉛と同じ

㉝ 魚住古窯跡調査事務所「魚住古窯ニュース」1～11　1979年5月～1982年6月。
大村敬通「播磨の古代窯」「日本やきもの集成」9　平凡社　1981年9月。

㉞ 1975年9月17日の神戸新聞紙上に、江井ヶ島沖から漁師の底引き網によって、蛸壺とともに片口鉢が引き上げられたことが紹介されている。

㉟ 1977年12月22日の毎日新聞により、江井ヶ島沖から水深6mから7mの所で、海底ケーブルの埋設中に、建設省の職員により蛸壺と片口鉢多数が発見され、沈船の積み荷か住吉神社の神事に係わるものかと紹介されている。

㊱ 井上繁広「井上コレクションの海あがり遺物」「摂河泉文化資料」第28号　1981年10月。

㊲ 淡路の北淡町歴史民俗資料館には、地元の漁師によって富島沖から引き上げられた片口鉢が、多数保管展示されている。江井ヶ島沖から出土する遺物についても、地元明石市の資

料として保管展示する必要が急がれる。

㊴ 上原真人「古代末期における瓦生産体制の変革」「古代研究」 13.14 1978年5月。

㊵ 神戸市教育委員会「神出古窯址群、宮ノ奥支群」現地説明会資料 1981年8月。

㊶ 神戸市教育委員会「神出古窯址群、釜ノ口支群」現地説明会資料 1981年12月。

㊷ ①に同じ。

㊸ 三木市教育委員会「三木市宿原5号窯址確認調査概要報告」。

第 3 章　遺構と遺物

第 1 節　遺　　構

今回の調査に入る以前に分布調査によって確認されていた路線内の窯は皿池谷西側斜面1基と東側斜面2基の計3基であった。しかし傾斜面(特に西側)裾の用水路には夥しい量の土器片が散乱し、小一時間も採集すればコンテナ2～3箱にもなるという状況から、この窯がかなり大規模なものであり、窯数も当初考えていた数より多く存在するのではないかということが予想された。

第7図　水田盛土断面

こうした状況をふまえ、調査予定をたてるために早急に窯数の実態を把握する必要が生じたため、試掘棒を用い水田下に残る灰層の残存状況を1m間隔でチェックするとともに、水田畦畔を垂直に切り落し、盛土を除去することによって窯数を把握するという方法を用いた①。

これらの調査の結果、ボーリング調査で灰層は西側斜面2カ所、東側斜面1カ所が確認でき、水田畦畔の盛土除去によって西側斜面で4基の窯が判明した②。以下各窯について記述する。

第8図　ボーリング調査風景

(1) 29　号　　窯（図版5）

本窯は通称皿池谷の東側丘腹に位置している。現在、水田が丘陵の上面と谷部に開発されていて、窯は煙道部と焚口・燃焼部を欠損している。窯は直上に水田が開発されていないため西側丘陵のような盛土は存在せず、約60cmの流土を除去すると窯の上面を検出することができた。窯体の残存長5.15mで、窯体の残存レベルは8.5m～10.0mの範囲にあり、中軸線はN95°Eを測る。

本窯の存在する位置は微地形をし細に観察すると、29号窯の南側で若干の谷状のくぼみが認められ、北側、すなわち29号窯へ向うにつれて丘陵は張りだす。29号窯を境にして丘陵の張り出しは東へ折れ、39号窯へ連続する。したがって29号窯は、丘陵の張り出し部突端に築かれているといえる。

窯体床面の最大幅は1.6m を測り、煙道部方向へ向うにつれて狭くなる。現存する最も狭い床面幅は1.3m である。本窯の床面傾斜角は今回調査した中では最も急傾斜で焼成部下方は16°、上方は20°を測る。

窯体の縦断断ち割りの際、床面下に杭痕が確認できた。確認した杭痕は6本で、窯体の中軸線に沿ってほぼ等間隔に打ち込まれている。杭痕の直径はいずれも4～6cmで、杭間の距離は下方の杭から76cm、79cm、66cm、185cm、78cm である。下方から4本目と5本目の間隔が長いのは断ち割りの際、杭痕を掘り切ってしまった可能性が強く、本来は70～80cmの間隔で杭が打たれたのではないかと推定できる。

側壁は張り壁が1枚存在する。少くとも残存している範囲では、床面を再構築した痕跡はない。床面は青色還元層が約4cmあり、その下には約8cmの厚さで赤色酸化層が存在する。床面の約12cm下で地山である黄灰色シルト層に達する。

床面直上には、完形の平瓦2点、小型片口鉢を含む遺物が残存していた。

さて、本窯が焚口・燃焼部を欠損しているのは上記の通りであるが、中軸線に沿って断面を灰層堆積地点まで観察すると、この29号窯の存在する東側丘陵の張り出しは予想外に大きく（図版4）、下方谷部の水田を開発する際にかなりの範囲で灰層を削平したことがわかる。したがって西側に灰層の存在する範囲は東西2.3m、南北11.0m の扇形で、厚さも13cm程にしかすぎない。一方、窯体の南側には灰がほとんどまじらない黄灰色粘土を主体とする南灰原が存在する。29号窯に伴う遺物のほとんどはこの地点から出土したものである。

(2) 38　号　窯（図版5）

本窯は29号窯の北側約5.5m に位置する。窯の形態は直焔式の平窯(煙管状窯)[注]であり、焚口・燃焼室と焼成室をもっている。今回の調査では、燃焼室の上方は削平されていたものの、それ以下の部分は、良好な状態で検出できた。窯体の残存レベルは、8.9m～9.6m の間にあり、中軸線はN 55° Eになる。焚口は高さ40cmの楕円形を呈し燃焼室と連続する。燃焼室は奥行46cm、高さ40cmを測る。奥壁は焼成室へ向って外側に傾斜し、左右の張り壁

はほぼ垂直に立ち上る。焼成室の床面下は厚さ4cmの青色還元層と、厚さ2cmの赤色酸化層が認められる。焼成室は燃焼室との間を径44×50cmの楕円形に狭くしぼり、大小7個の御影石の角礫で間仕切りを施している。仕切り方法は基本的には3個の大きな石（最大長約15cm）と中型の石（最大長約10cm）で仕切りを行い、2個の小さな石あるいは小皿片で空間を埋めている。石材は熱を受け、いずれもよく焼けている。

焼成室と燃焼室の間をしぼり込んでいるのは間仕切り用の石材を安定させるためであろう。今回検出できた焼成室最上端の内径は63×74cmの楕円形である。間仕切り用の石材の上から熱を受け変形した小皿が出土したことから、土器の焼成は石の上に積み重ねて行ったものと推察できる。

前庭部は焚口を下方に築く必要があるため、地山である黄灰色粘土をカットしてU字形のくぼみを作っている。焼成毎に灰層が堆積し排水が困難になるため、灰層を左右にかき分け、構築当初にはなかった排水溝を中心部に設けている。灰層の堆積は最も厚いところで28cmを測る。

灰原内から出土する遺物は椀と小皿が圧倒的に多い。しかし窯体内埋土あるいは灰層では、片口鉢・甕・瓦の破片が出土した。南接する29号窯出土土器と対比すると29号窯と38号窯は同時期操業と考えられ、29号窯の遺物が入り込んだ可能性もある。いずれにしても、本窯が椀と小皿を主体に焼成する窯であることはまちがいない。

(3) 33　号　窯（図版6）

本窯は22号窯の南約20mに位置する。現耕作面を32号窯と同じくしているが窯体は32号窯より低い位置に焚口を構築しているため、焚口と前庭部の一部が残存している。このことは32号窯でも触れるが、本窯が丘陵の張り出し部に位置しているので焚口の位置が低くなったのではないかと推定できる。

現存する窯体は焚口・燃焼部下方と焼成部の一部である。焼成部の一部は、道路用地境界付近で検出できた。現存する窯体全長は6.3mである。焚口の下端の最大幅は74cmである。焚口から上方にかけて開き気味に側壁を構築しているが、約1.2m上方で側壁をしぼって幅1.0mにしている。おそらくこの側壁の張り出した地点が、焚口と燃焼部を区分する地点であろう。窯体内の灰層の拡がりは、ちょうどこの地点を境にしている（第2次操業時）。焚口内で杭痕を2本確認した。1本は窯体のほぼセンターにあたり、もう1本は北側壁の下端にあった。29号窯と同じような性格をもつものかどうか、今後の検討課題である。

燃焼部から焼成部にかけては明瞭な段差があり、明らかに両者を区分している。本窯においては、断面断ち割りで、焚口灰層あるいは床面が最低2時期にわたって操業されていたことがわかる。この段差は断面観察によって、第1回目の窯構築時にすでに存在していたことが知れる。第1次構築時の段差は比高差約40cm（傾斜角30°）であるが、第2次の窯体構築の際、窯壁の細片をつめて比高差約50cm（傾斜角36°）にしている。床面の焼け具合は、今回調査した6基の中でこの段差上端のほぼ水平になった地点がもっとも堅く焼けている。

側壁の張り壁は、焚口で認められ、第2次構築の補修壁が両面にある。

焼成部の床面幅を測定できる地点はないが比較的残存状態の良い地点から推定すれば幅約1.7m前後になる。焼成部の残存状態は良くなく、水田開発時の削平のためほとんどを損失している。しかし上方は盛土畦畔下にもぐり込んでいて、路線内で床面の一部を検出することができた。焚口方向からこの床面へ向う推定床面傾斜角は12°である。

窯体内の残存する範囲で床面の標高を測定すると7.8m～9.3mである。また窯体の中軸線はN68°Eの方向を示す。

窯体床面直上にはほとんど遺物がなかったが、平瓦の完形品（図版71－613）を1点検出した。焚口灰層からは三巴文軒丸瓦（図版65—561）、小皿（図版19—204）が出土した。

灰原は窯体中軸線から南に約3m、北に約4m、東は1.2mの範囲で確認できた（東限は削平されているため残存長である）。残存する灰層の堆積は、最も厚い場所で30cmを測る。

(4) 32　号　窯（図版7）

本窯は、22号窯の南約10mに位置している。本窯の存在は当初まったく予想しておらず、畦畔の盛土を垂直に削り、盛土断面を観察する際に窯体の一部が断面にかかっていたことから明らかにされたものである。

窯体は2度にわたる破壊を受けている。第1回の破壊は、切り合い関係から判断すると、窯の上方（焼成部～煙道部）を掘削されたもので、7.0×7.0mのくぼ地になっている。このくぼ地は、おそらく良質の粘土を産する当地点付近の土を瓦粘土として採集したためにできたものと考えられる[3]。このくぼ地は後に、暗茶灰色土を入れて埋めその上に耕作土を入れて、現在は水田として利用されている。

第2回目の破壊は水田を造成する時のもので焚口から焼成室の一部が削り取られている。

この地点の窯壁は盛土畦畔中に多く散乱していた。この水田造成は33号窯を削平した時期と同じである。したがって本窯は、これらの破壊のため、焼成部の一部が床面幅1.55m、全長1.00mの範囲で残存しているだけである。

焼成部について観察すると、側壁は、南側が15cmの高さで残存しているのに対し、北側が削り取られている。このため焼成部床面幅は不明である。しかし焼成部のまわりの赤色酸化層を精査した際、径約9cmの炭化した杭痕があり、この杭痕を29号窯と同様の窯体中軸線に打たれた構築時の杭と考えると、床面幅は約1.6mと推定できる。

窯体の中軸線は側壁の方向から判断するとN38°Wで、32号窯や22号窯に比べて南に振れている。床面の傾斜角は約11°で床面の残存標高は9.4m～9.5mである。床面は1枚しか確認できず少くとも残存状況から判断すれば、2時期にわたる操業は認めえない。

先に述べたように、本窯は33号窯と同時期の水田開発時に焚口を損失している。33号窯の焚口が残存し、32号窯の焚口が削平されているのは、32号窯が33号窯より高位に構築されていたからである。また残存する地山の等高線から判断すると32号窯は若干くぼんだ谷地形を利用した窯で、そのため焚口を谷入口方向に向けなければならなかったのではないかと推定される。

床面直上からは甕の破片が出土した。口縁の形状から判断して3個体分(図版20—211・212)である。

灰原は、下段の水田盛土中に灰を含んだ層が若干存在するが、純粋な灰層とは考えにくく遺物も少ない。このため灰層の中心部は削り取られたと考えるべきであろう。窯体南側においても灰層が存在するが、33号窯の灰層との識別は困難であった。

(5) 22　号　窯（図版8）

本窯は32号窯の北約10mに位置する。窯体構築時の丘腹斜面は、すべて水田開発のため損われ階段状を呈する。水田畦畔下の盛土は約1m堆積する。窯体は水田開発のため水平に削平され、煙道部と焚口を欠損している。このため窯体の全長は不明であるが、窯体残存長は5.40m、床面最大幅は1.45mを測る。

焼成部の床面幅は、約1.4mで焼成室を通じてほとんど変化がない。床面には傾斜変換点があり、床面傾斜角は、焚口から続く斜面は12°、傾斜変換点後は9°でゆるやかになる。傾斜変換点は、33号窯と様相が異なり焼成室内にある。

床面は4カ所で断ち割りを行った。その結果、本窯は少くとも3回の大規模な改修を行

い、操業した痕跡がある。横断面A—A′で観察すると第1次の操業は赤色酸化層を残しているのみで、床面は第2次操業の際に削り取られ残存していない。赤色酸化層は6cmの厚さである。第2次操業は、第1次の操業床面を削り取り、14cm程の焼土層、窯壁の細片で積み土を行い、床面を構築している。第1・第2次の操業は、同一窯の修復の一種と考えることができるが、第3次操業面は大規模な修復を加えている。第3次操業の床面は、一部第2次操業床面を削り取りその上に7cmの積み土を行い構築している。第3次操業は側壁の張り壁の様子がよくわかる。南側壁で2度、北側壁で1度の張り壁修理を行っている。

横断B—B′で観察すると、床面の構築は2回、張り壁は南側壁で1回、北側壁で2回行っていて、横断A—A′でみられたような3回にわたる複雑な操業の痕跡はなかった。

焼成室床面には約2cmの厚さで、黄灰色砂層が堆積していた。こうした床面直上の砂の堆積は他窯においても認められたが、本窯における堆積が最も厚い。

第1次操業時の地山の掘り込みが著しく浅いのは、第1次操業時の灰層の堆積が側壁下端付近まで及んでいる断面A—A′を観察すれば明らかである。第3次操業時の際の掘り方は確認できなかった。

側壁は、削平をほとんど受けていない焼成部下方が、もっとも残存状態良好で、床面から最大60cmの高さで残っている。天井高を推定するのは困難であるが、約1m位と推測できる。

焚口から床面傾斜変換点付近までは天井から落下した窯壁が多量に認められた。

焚口は、後世の削平と円形掘り込みによって損失しているが、灰層が床面直上に堆積することから、最終操業時にこの地点が燃焼部の一部として機能していたかも知れない。

遺物は焚口から床面傾斜変換点までの一群（図版21—220～228）と傾斜変換点から煙道方向にかけての一群（図版21—229～図版26—291）とに大別できる。焚口付近のものは20cm程の厚さで堆積する灰層直上で出土したものであり、本窯の製品の中ではもっとも新しい時期に属する。傾斜変換点から煙道方向にかけての一群には土器が密につまっており窯壁と焼土の堆積は少ない。水田耕作土直下であるところから遺物が後に遺棄された可能性もある。

灰層は二つに分類できる。一つは側壁の下へもぐり込む灰層で、第1次・第2次の操業の際の灰層と考えることができる。この側壁の下へもぐり込む灰層には遺物は多くない。しかし最終床面の下へもぐり込むと判断できる灰層（前庭部）には遺物を多く含む。第3次操業の際の灰原は窯の下方に扇状に分布し、東限まで約7mである。

(6) 30　号　窯（図版9）

本窯は、22号窯の北方約13.5mに位置する。本窯も32号窯と同様、水田造成と瓦粘土採集によって窯体の一部を損失している。窯上方の焼成室の床面は、削り取られているが、赤色酸化層が残存しているので窯体の復元はある程度可能である。現存する窯体の全長は10.3m、中軸線はN87°Wを測る。

本窯の位置は、今回調査を実施した窯の中では最北端にあたり、西側の丘陵は30号窯の焚口付近を境にして35号窯へ向って谷部を形成している。旧地形を復元すれば、30号窯は、22号窯から連続する張り出し部の北端にあたる。

本窯の最終床面最大幅は1.40mである。床面はなだらかな傾斜をもって連続し、推定床面傾斜角は11°を測る。床面の断ち割りは6カ所で行った。そのうちもっとも良好な断面をA—A′で示す。床面は2枚存在し、第1次操業時の床面を削り取り第2次操業時の床面を構築している。第1次床面と第2次床面の間には22号窯、33号窯でみられたような窯壁の細片は入れずにそのまま第1次床面直上に第2次床面を構築している。

第2次床面の側壁は南北ともに3～15cmの厚さで張り壁をして窯の修復を行っている。床面の下は赤色酸化層が約10cm認められ、その下は黄灰色シルトである。

横断面において観察すると、灰層は明らかに側壁の下へもぐり込んでいる。縦断面においては、床面下に灰層がもぐり込み、第1次操業時の焚口が現存の焚口より上方にあったものであることがわかる。

最終の窯構築の際、灰層を掘り込み、窯を築いている。この際北側にだけ裏込めとして暗灰色の砂をつめている。今回調査した中でこうした「裏込め」の存在する例はない。

床面直上には完形品の片口鉢4点と三足付土壙が1点出土した。

灰原は窯体の横からひろがりを開始し、南へ4m、北へ4m、東へ11mの範囲で厚さ最大1.2mで堆積する。灰原は大きく分類すると、床面の下へもぐり込む床面下灰層、床面下灰層から続く純灰層1～3、純灰層の上に堆積する灰褐色砂に識別できる。

(7) 小　　結

今回調査を実施した古窯跡6基は、魚住古窯跡群のうち中尾川支群に属するものである。中尾川支群は、中尾川流域に派生するいくつかの小谷によってグループ分けを行うことが可能である。現在までの分布調査・発掘調査結果によれば、今回の調査地点である通称皿

池谷は、中尾川支群の中でもっとも窯数の多い地点である。今後、窯数の増す可能性はあるものの、窯数19基は中尾川支群中約60%を占める。

皿池谷は本文中でもすでに触れたように、旧地形を復元すると、谷内でいくつかの小さな丘陵張り出し地点が存在する。現在はこの丘陵あるいは谷部を水田として利用しているため地形をとらえにくいが、調査結果によれば丘陵の張り出しが顕著であるのは、30号窯と29・38号窯の間である。特に29号窯の存在する丘陵は現丘陵裾より5m程西へ張り出す。この地点と22号窯の地点との谷幅は約22mで、33号窯付近の谷幅が28mであるのに対して極端に狭くなる。窯の焚口はこうした丘陵の張り出し地点に設定するのを基本としているようである。窯の焚口が確実に張り出し地点に存在している例は29・30号窯の2基だけであるが33・22号窯の焚口も張り出し部に設定していると考えられ、32号窯のみ若干くぼんだ地形に存在しているのであろう。

次に窯体横に堆積する灰層について考えてみたい。窯体横に堆積する灰層が床面下にもぐり込む例が3例ある。

灰層が窯体横に厚く堆積するのは、窯体が地上に多く露出しているためである。少くとも、22号窯横断A—A′で観察する限り、この窯の第1次操業時の地山掘り下げは25cmにしかすぎず窯体のほとんどは地上に露出していたと考える方が妥当である。もっとも、こうした灰層が窯体下へもぐり込むのは焚口付近から約4m上方までであり、それ以上の煙道方向についてはこうした事実は認められない。

完全に窯体の下にもぐり込む灰層（例えば22号・30号窯）は窯体を再構築する際に側壁外側に堆積した灰層を窯体掘り方のベースとして再利用しているためである。削平を受けているために本来の灰層の厚さは確認できないが、もっとも良好に残存している22号窯では50cmを測る。

窯体構築時の掘り方の存在が30号窯において確認できた。30号窯の最終ベースの側壁裏には通常認められる赤色酸化層は存在せず、幅24.0cm、深さ50.0cmで砂層の堆積があった。この砂層は掘り方の裏込めに使用されたと考えることができる。この砂層が確認できたのは30号窯のこの地点（長さ1.86m）だけである。

以上の窯の構築方法から考えるとこれらの窯は、意識的に緩傾斜の床面を構築していたのではないかと推定できる。すなわち急傾斜の床面を意識的につくりだそうとすれば、緩斜面地形を利用した当窯跡群では、当然、焚口から燃焼部にかけての地山を深く掘り下げねばならない。ところが積み上あるいは灰層を深掘りして焚口・燃焼部を構築した痕跡は

なく、むしろ、地山の掘り下げは少ない。こうしたことから、当古窯跡群の窯は緩傾斜でも熱効果のある構造をもっていたと推定できる。33号窯の燃焼部と焼成部の段は緩傾斜面を利用して熱効率のよい窯をつくる施設の一部ではないかと考えられる。

床面傾斜度は別表のように、すべて9～20°の範囲にある。ただし焚口の残存状態が良好である33号窯では燃焼部と焼成部の境に傾斜度36°の急傾斜面が存在する。こうした燃焼部と焼成部の急傾斜面が、33号窯だけに特殊につくられたものかどうかは他の窯の焚口が欠損しているため不明である。この構造が焼成室内の温度を上昇させるのに効果的だとすれば、これらの緩傾斜の窯にはもっとも適した構造といえるだろう。

38号窯は「煙管状窯」で直焔式の平窯である。窯で生産される製品のほとんどが小皿・塊の須恵器であり、焼成は他窯と比べ若干甘い。南接する同時期の29号窯と器種によって焼き分けを行っていた可能性がある。類例は神戸市神出古窯跡群[6]、龍野市大陣原古窯跡群[7]、相生市相生古窯跡群[8]、岡山県沖の店遺跡[9]においても確認されている。

最後に窯体内に残存していた土師器についてふれておく。本古窯跡群出土の土師器は、30号窯体内床面直上に三足付土鍋(370)、29号窯体内床面直上に羽釜（109)、22号窯体内に塊・小皿（229・330）がある。これらの器種は窯体内、灰層の出土品の中でも特異であり、形状、器形、焼成がまったく異質で当古窯跡群で生産されたものでないことは明らかである。これらの土師器はいずれも窯体内で焼成を受けた痕跡がなく、他の器種と同時に焼成したものとは考えられない。じゅうぶんな類例調査はしていないので、窯廃絶時に祭祀を行った可能性を指摘することにとどめたい。

	種別	残存長	床面最大幅	床面枚数	床面傾斜角	焚口	燃焼部	焼成部	灰原
38	煙管状窯	0.95	0.74	1	水平	○	○	○	○
29	窖窯	5.15	1.6	1	16～20°	×	×	○	○
33	〃	6.3	1.7	2	12°	○	○	○	○
32	〃	1.0	1.55	1	11°	×	×	○	?
22	〃	5.4	1.45	3	9～12°	×	○	○	○
30	〃	10.3	1.37	2	11°	×	×	○	○

第2表　窯体別遺構一覧表

註

① 「魚住古窯ニュース」3　1979年。

② 当初、22号窯と30号窯の中間に、窯壁あるいは焼土層が堆積していたので、34号窯と考えていたが、調査が進むにつれて、焼土層が盛土によるものであることがわかった。

③ 「煙管状窯」という名称については橋崎彰一氏に御教示を受けた。

④ 皿池谷付近の粘土を瓦粘土として利用していたことは、現在明石瓦の生産を行っている地元への聞き込み調査によっている。

⑤ この時期に、消費地で播磨産の鉢・甕の出土は数多く報告されるが、壺・小皿類の出土例はほとんどない。器種によって搬出先が違っていたと考えるならば、38・29号窯のあり方は、製品の「焼き分け」＝「搬出先の違い」ととらえることができるかも知れない。

⑥ 神戸市教育委員会に御教示を得た。

⑦ 吉田昇・藤定淳介氏に教示を得た。

⑧ 森内秀造氏に教示を得た。

⑨ 岡山県教育委員会　「小坂西・沖の店遺跡」　「山陽自動車道建設に伴う発掘調査」2　岡山県埋蔵文化財調査報告42　1981年。

第 2 節　遺　　物

(1) 小　　皿

小皿は、3種に分類できる。

A類は底部が高台気味に突出し、内彎する体部をもつ。口縁端部は丸く納める。底部は回転糸切りのものが多い。周縁は未調整である。口径8.0cm、器高2.0cmのものが一般的である。

38号窯灰原に多い。

B_1類は、平底の底部と内彎気味の体部をもつ。体部は、外反気味に口縁部へ続くものもある。口縁端部は丸く納める。底部は回転糸切りのものが多く、周縁は未調整である。口径7.7cm、器高1.9cmのものが一般的である。

38号窯灰原、29号窯灰原に多い。

B_2類は、平底の底部と内彎気味の体部をもつ。口縁端部は丸く納める。底部は回転糸切りであり、周縁は未調整である。器高は低い。口径7.5cm、器高1.3cmのものが一般的である。

22号窯灰原、30号窯灰原に多い。

(2) 埦

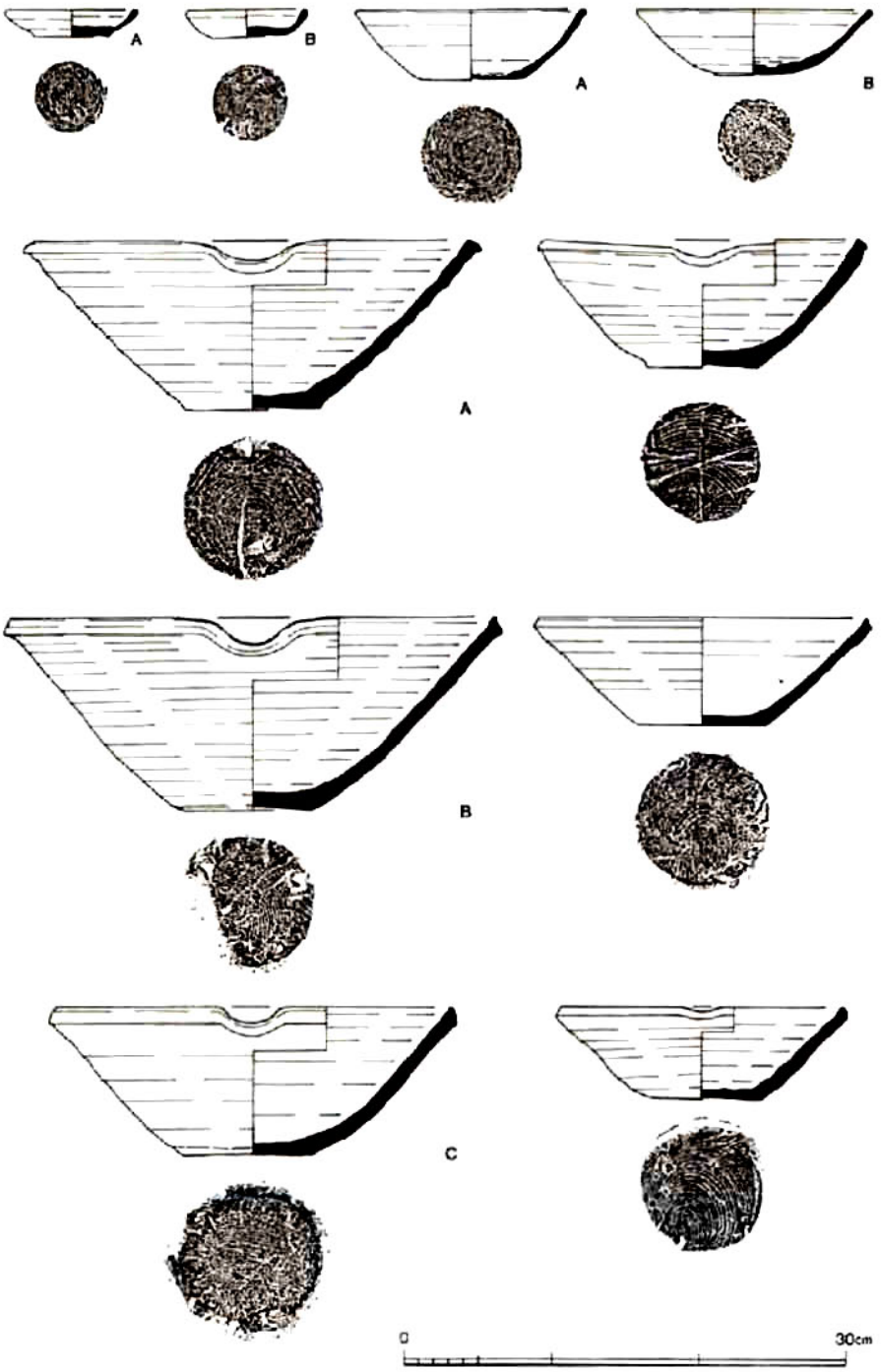
埦は、2種に分類できる。

A類は、深い器高と底部に円盤状の突出部をもつものである。体部は内彎気味に立ち上り、口縁端部は丸く納める。底部は回転糸切りであり、周縁は未調整のままである。口径15.5cm、器高5.1cmのものが一般的である。

38号窯灰原、29号窯灰原出土品に多い。

B類は、体部が内彎気味に立ち上るものの、A類に比べて外開きになり、より直線的である。口縁端部は、丸く納める。底部は回転糸切りで、周縁は未調整であるが平底である。口径15.9cm、器高4.4cmのものが一般的である。

22号窯灰原、30号窯灰原出土品に多い。



第9図　小皿・埦・鉢形態図

(3) 鉢

鉢には、口部の数によって、片口鉢・両口鉢・三口鉢に分類できる。このうち、量的にもっとも多いものは片口鉢で製品のほとんどを占める。確実に両口鉢として接合できたものは4点（115、178、431、492）で、三口鉢は1点（339）のみである。

鉢はその形態手法によって大きく4種に分類することが可能であるが、以下の点では形態・成形手法を同じくしている。

D類を除いて、いずれのタイプにも大型品と小型品がある。

口縁部はタイプによってさまざまであるが、口部は成形後2本の指（親指と人差し指あるいは中指）で外方をつまんで突出させ内面をナデて仕上げている。口部外側に指押えの痕跡を明瞭に残すものも多い。

体部は、すべてヨコナデによって調整されており、内面の仕上げナデは胴部下方に縦位に施すものがほとんどである。内面に仕上げナデを施した後、不定方向の刷毛目によって仕上げている例がごくわずかであるが存在する。

底部は、回転糸切りと静止糸切りがあり、回転糸切りであるものが大多数を占める。底部周縁は、ヘラ削りやナデによって整形している例もあるが、分類別の時に詳しく述べる。底部には、高台をもつものもあるが、すべて糸切り後の貼りつけ高台である。以上が片口鉢に共通する諸特徴で、タイプ別に分類する規準は主に口縁部の変化を基本としている。

A　類

A類は、大きく分ければ2種類ある。

A_1類は、口縁内側をつまみ出さずに端面に続く。体部内側と口縁端面とは、ほぼ直角をなしている。体部内面と口縁端部は、鋭く稜をもつものと丸くゆるやかに続くものがある。口縁端面は、直線的なものと凹面をもつものがある。端面と体部外側は、端部を外側に明瞭に突出させて連続する。端部を突出させるため、体部上方は大きくくぼんで端部と連続する。

A_2類は、口縁端部外側をA_1類ほど突出させない。口縁端面は、上下とも直線的あるいは丸味をもつ。

A類に共通する特徴として、次の点をあげることができる。体部は、底部からいくぶん内彎気味に立ち上るが、口縁部にかけては、ほぼ直線的に続く。体部は、ヨコナデによって成形される際の凹凸が明瞭である。体部内側の仕上げナデは、ていねいに施されるのが

一般的であり、刷毛状の道具を用いている場合もある。底部は、完全な平底ではなく高台気味に突出させる。糸切りは、回転糸切りと静止糸切りとがあり、小型品のほとんどは静止糸切りである。底部周縁は、糸切り後のヘラ削り・ナデ仕上げを施すことはほとんどなく未調整のままである。

A類の器種は、片口鉢がほとんどを占めると考えられる。大型鉢の法量は、口径27.6～33.1cm・器高 9.2～13.6 cmの範囲にあり、口径 30.6cm ・器高 11.4cm が一般的である。（第 5 表）

A類は、29号窯南灰原出土品にもっとも多い。

B　類

B類の特徴は、口縁端面を上下につまみ出すことにある。このため、口縁端面は凹面をもつものが圧倒的に多い。体部内側と口縁端面は鋭角をなす。口縁端面の外側へのつまみ出しはA類ほど著しくなく、むしろ端部を上方へつまみ出すことが特徴的で、外側へのつまみ出しがないものもある。

体部は、底部から内彎気味に立ち上り直線的に口縁部へ続くものと、そのまま内彎気味に続くものとがある。体部は、ヨコナデ成形される際の凹凸面が著しい。体部内側の仕上げナデは、A類ほどではないがていねいに施される。仕上げナデは、内面下方で特にていねいである。底部は、高台気味に突出させる例もあるが、周縁をナデ仕上げあるいはヘラ削りして平底であるものがほとんどを占める。糸切りは回転糸切りと静止糸切りがあるが回転糸切りが圧到的に多い。

B類は、器種が豊富である。貼り付け高台付片口鉢・両口鉢・三口鉢はいずれもこのタイプである。口径・器高も大型化し、口径 34.5cm・器高 13.7cm以上のものは、B類にしか存在しない。法量は、口径28.6～38.1cm・器高9.4 ～ 15.3cmの範囲にあり口径32.8cm・器高12.3cmが一般的である。

30号窯床面下灰層出土品にもっとも多い。

C　類

C類の特徴は、口縁端面が丸くなり上下へのつまみ出しをほとんどしないことにある。体部内側と口縁端面は鋭角をなす。体部内面と口縁端部内側の接点は稜をなすことが多いのに対し、体部外面と端部外側との接点は丸く仕上げる。

体部は、底部から内彎気味に立ち上り、直線的に口縁部へと連続する。底部からの立ち上りは、B類に比べて内彎気味になり、内彎は体部中位まで及ぶ。体部は、ヨコナデ成形

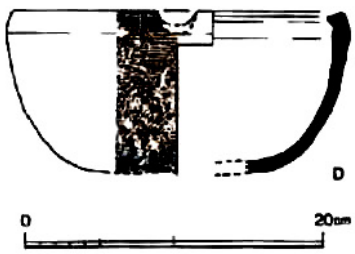
される際の凹凸面があまりなく、仕上げナデも擦跡が明瞭でない。しかし、C類は、底部内面から胴部中位にかけて指押えによるナデが特徴的で、上記の内彎気味の立ち上りや仕上げナデを施さないのはこの手法が原因である。底部は回転糸切りが圧倒的に多く、周縁はヘラ削り・ナデによって、ていねいに平底にしている。

C類の器種は、片口鉢に限定できる。大型鉢の法量は口径25.6～34.3cm・器高8.0～13.0cmの範囲にあり、口径28.8cm・器高10.7cmが一般的である。

22号窯体内、30号窯体内にもっとも多い。

D　類

D類は、内彎して立ち上る体部と水平に近い口縁部をもつのを特徴とし、形態によって3種に分類できる。



第10図　鉢D類形態図

D_1類は、回転糸切りの底部をもち、内彎して立ち上る体部をもつ。口縁端面はやや外傾し、端部は外方に若干つまみ出す。内外面ともヨコナデによってていねいに成形し胎土も良好である(531)。

D_2類は、内彎して立ち上る体部をもち、口縁端面をやや外傾させる点ではD_1類と共通するが、底部は丸底である。内外ともヨコナデによって成形されている（532)。

D_3類は、内彎して立ち上る体部をもち、口縁端面はやや内傾し、端部をやや内側につまみ出す。内面ヨコナデであるが、体部外面に叩きを施す。

(4)　甕

今回調査した窯の中で、38号を除いて他の窯は、量に差はあるものの明らかに甕を焼成している。

魚住古窯跡群で生産された甕は、以下の点で同じ特徴を示す。口縁部から頸部にかけては、内外ともヨコナデ仕上げを施す。ヨコナデの際、頸部の平行条線叩きがじゅうぶんに消されずに残っている場合が多い。胴部の外面は、平行条線の叩きによって成形されるものがほとんどであるが、少量のものについては長方形の格子目叩きが認められる。胴部は長胴形と丸胴形がある。底部はすべて丸底である。

甕の成形技法は、以下の順序で行っていると推定できる。①

(1) 粘土紐を巻き上げて、目的に応じた形をつくる。

(2) 頸部を平行条線叩き板で叩く。

(3) 頸部をヨコナデして、口縁部を整形する。

(4) 胴部を叩いて成形する。

(5) 底部を叩いて丸底にする。

(6) 内面を仕上げる。

(1)の成形の際、底部は口縁部のヨコナデ仕上げに都合が良いため、平底のままであろうと考えられる。

(2)の頸部の平行条線叩きは、口縁部のヨコナデ成形によって一部消されていることや胴部の叩きが上に施されることから、これらの成形段階に先行すると考えられる。特に、頸部から外反して口縁部にいたるカーブに連続する叩きが施されるのは、極めて特殊な叩き具でも存在しないかぎり不可能である。このため、成形(1)の段階では、頸部は直立もしくは内傾していたと考えた方が妥当である。頸部の平行条線叩きは、胴部が格子目叩きの場合でも同様な叩き目が施される。これは、頸部と胴部がまったく別の工程であることを示している。

(3)は、(2)で頸部に叩きを施した後、口縁部をヨコナデ成形する。ヨコナデ成形は、頸部下端の内外まで施すのが通例である。この時点で口縁部の成形はすべて終了していたと考えるべきだろう。

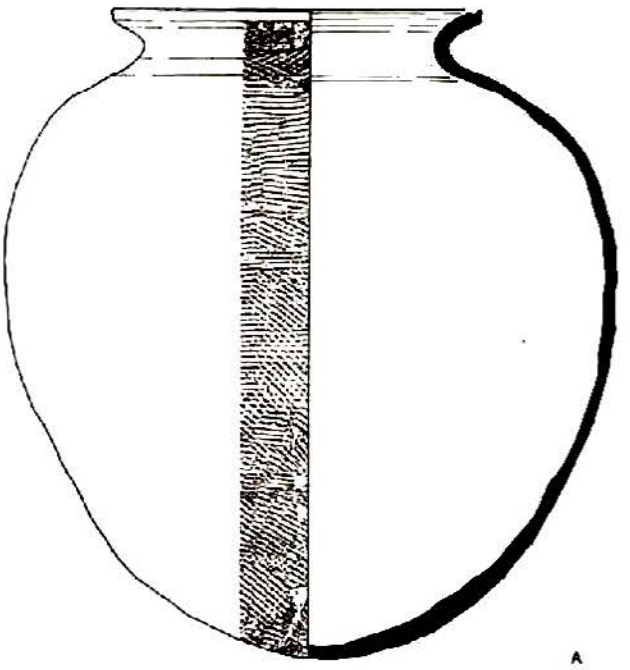
(4)の叩きは、胴部全体に施している。平行条線の叩き目は粗いもの（3～4㎜間隔）と細かいもの（2㎜間隔）とがある。平行条線叩きの他には長方形の格子目叩きがある。これらの叩きは、頸部下端のヨコナデの上に一部重複して施されている。

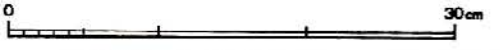
(5)の底部成形は、胴部の叩き締め後底部を叩き出す。底部は丸底である。底部の器壁は、胴部に比べて厚いのが通例である。底部の叩き目は重なり合い、叩き目痕も胴部ほど深くない。

(6)の内面の仕上げは、縦位あるいは斜めのユビナデ仕上げと横位のナデ仕上げ、刷毛目仕上げがある。これらの仕上げのうち、もっとも多いものは横位のナデ仕上げである。ただし、大型甕については胴部下半をユビナデ仕上げ、上半を横位ナデによって調整しており[1]、小型甕については、内面全体を横位ナデで仕上げている。刷毛目仕上げを内面全体に施した例はまれであり、むしろ横位ナデの後部分的につけられることが多い。

A　類(第11・12図)

口縁部は外方に開き気味になり、上端は上方につまみ出す。頸部上半から口縁下端へは丸味をもって連続する場合が多い。頸部のヨコナデは、ていねいではなく平行条線の叩き目が明瞭に残る。胴部の叩き目は、粗い（3～4㎜間隔）。29号南灰原、22号灰原に出土品が多い。A類とよく似た口縁形態をもつもので超大型のもの（363～365）がある。





第11図　壺形態図（1）　下段 底部拓影

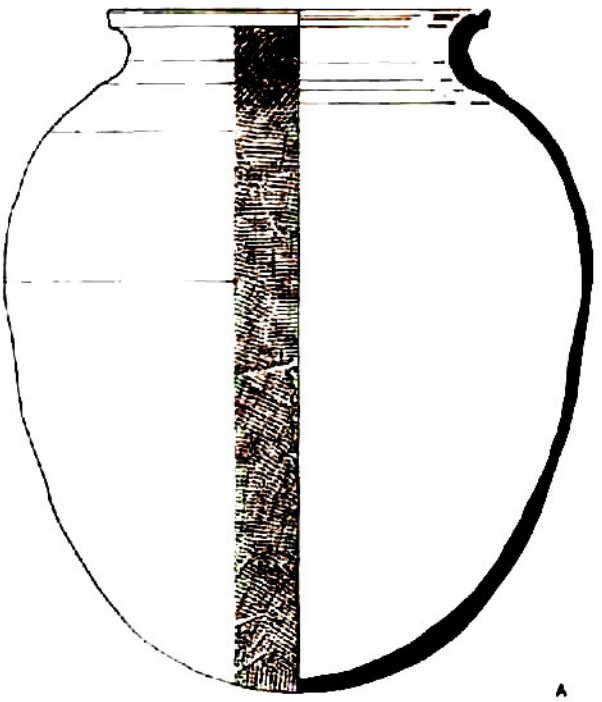
B　類（第13図）

口縁部は、ほぼ垂直に立ち上り平坦面をもつ。端面は上下とも若干つまみ出す。体部は丸胴形のものが多く、球形に近い形態を示す。頸部のヨコナデはていねいにナデられ、平行条線叩きは、ほぼ消されている。胴部の叩き目は粗い（3㎜間隔）。22号窯体内に出土品が多い。

C　類（第14図）

口縁部は外傾気味の面をもち、上端はつまみ出し下端は垂下する。頸部のナデはてい

ねいになされるが、叩き目はうすく残存する。中型甕、大型甕が多い。胴部は、肩部を大きく張りだした丸胴形である。平行条線の叩き目は細かい（2㎜以下）。



第12図　壺形土器図（2）　下段　底部拓影

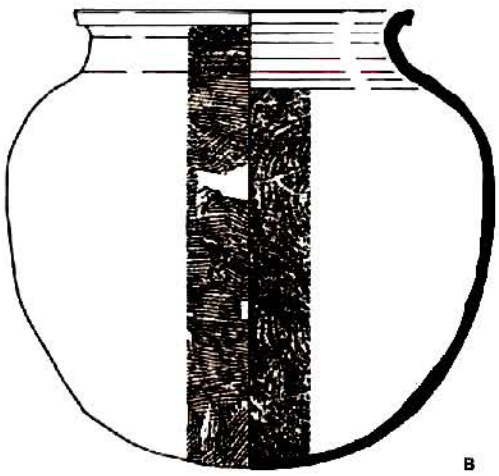
壺胴部には、平行叩き目の上に押印文様を付けているものがある。第15図上段に付される文様は3種ある。第15図第1段左2つの押印文は文様の形状が4ッ葉状になったもので、4個の卵形文が中心を同一にして結合している。第15図第1段右3つの押印文は文様の形状が車輪状になっている。文様は2周の同心円を4本の直線で8分割したものである。第15図第2・3段の押印文は楔状で卵形文を5分割したものである。

押印文様が付されている胴部の平行叩き目は、いずれも叩き目幅2㎜前後である。こうした平行叩き目が施される例はC類に多く、これらの押印文様もC類と共伴するのであろう。

甕胴部には平行叩き目をもつものの他に綾杉叩きが施される例がある。いずれも窯土からの出土であり、共伴遺物は不明である。

(5) 壺

壺の数は、他の器種に比べて非常に少なく計6点を数えるのみである。そのうち器形の全様の知れるものはない。もっとも残りの良い22号竪体床面直上のもの（220）で形態を観察すると、口縁部は内傾して丸味をもつ。細くしぼった頸部から大きく体部、肩部で張り出す。体部には10条のヘラ沈線を横位に施すが、（457）ではナデ仕上げで沈線はない。底部（234）は平底で回転糸切りを施す。



第13図 壺 形 態 図（3） 下段 底部拓影

(6) 瓦

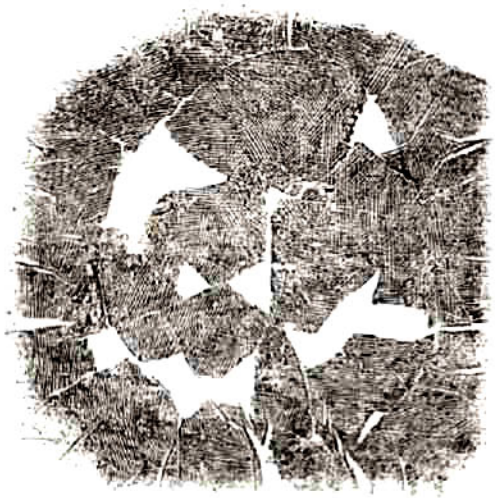
軒 丸 瓦（図版65）

A類 複弁八葉蓮華文軒丸瓦（551～557）

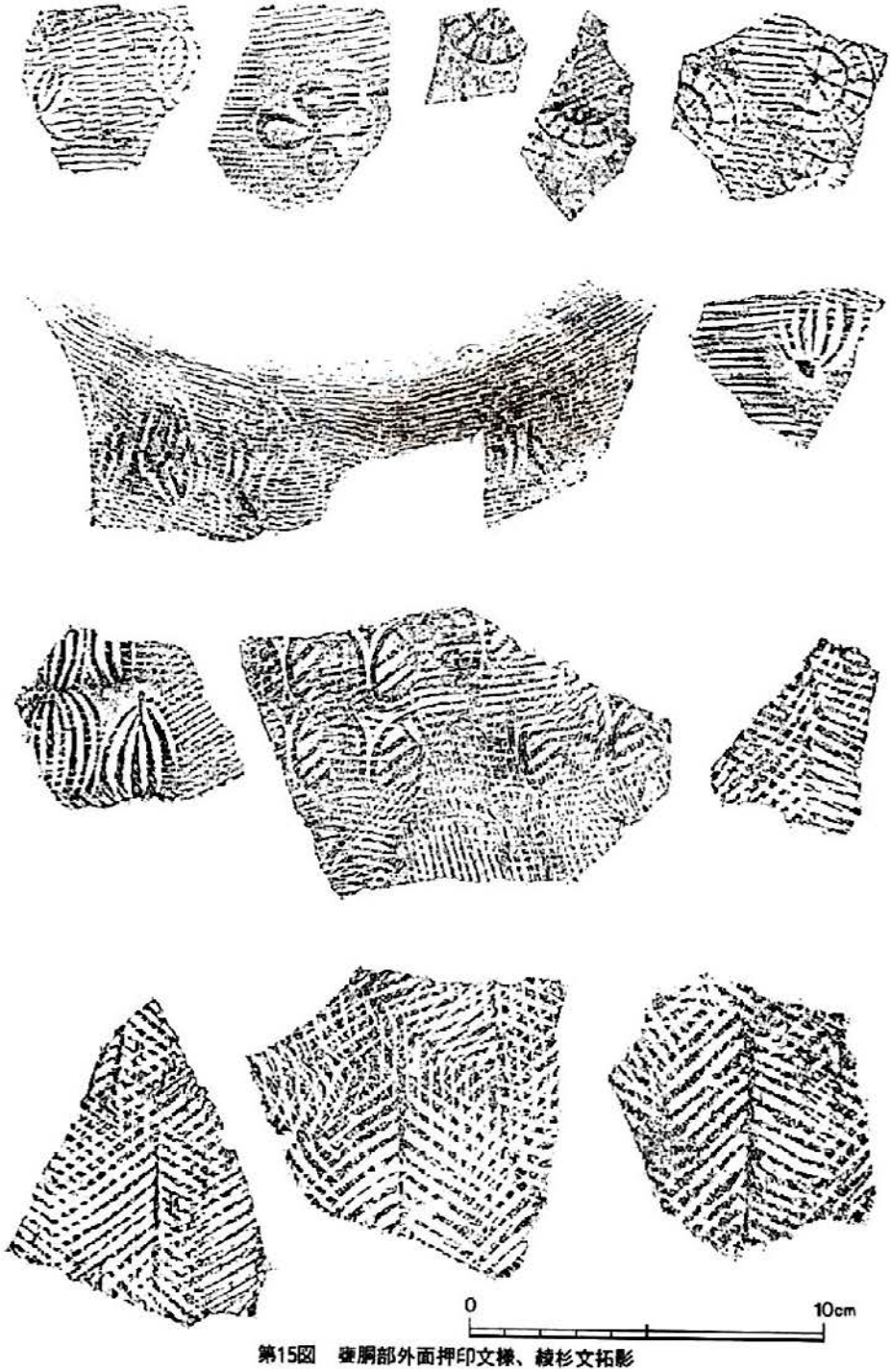
A類は、瓦当径によって2種類に分類できる。A_1類（551～556）は、径15.0cmである。中房内には1＋8の蓮子が配されている。花弁は中央にわずかの稜をもち弁内に形骸化した子葉が配された複弁である。珠文帯には弁端に対応して8個の珠文を配する。瓦当裏面はナデ調整を行っていて丸瓦との接合部に指押えの溝が認められる。

尊勝寺①跡、平安宮内裏回廊④跡で同笵⑤瓦が出土している。

A_2類（557）は推定径12.6cmの小型品であり、文様手法はA_1類と同様で珠文は存在しない。



第14図　壺 形 態 図（4）　　下段　底部拓影



第15図　壺胴部外面押印文様、綾杉文拓影

B類　単弁七葉軒丸瓦（558～560）

B類は径13.0cmを測る。

中房は一段低く作り、1＋(4)の蓮子を配する。中房内の蓮子は残存数以上である可能性もある。いずれも生焼けの状態で裏面はナデ調整を行っており、丸瓦との接合部に指押えの溝をもつ。

C類　巴文軒丸瓦（561、563）

C_1類（561、563）は、小破片であるためあきらかでないが、おそらく右巻きの三巴文であろう。

C_2類（562）は、小破片であるが、おそらく右巻きの三巴文であろう。残存している箇所が円弧を呈していない。推定径19.0cm。裏面はナデ仕上げされている。

軒　平　瓦（図版66、67）

軒平瓦は瓦当面の文様によって7類に分類できる。瓦当と平瓦との接合はすべて「包み込み式」である。[6]

A類　宝相華唐草文軒平瓦（564、565、569、570、571）

上部に形骸化した蕨手を配した宝相華の半截花文を中心飾とした唐草文である。唐草は左右に3反転する。

瓦当面が完形で残るものが2点あるが（565）は、平瓦の端面長より長い瓦当面をもつため瓦当面が平瓦より横に突出している。上弦幅は（564）が23.0cmであるのに対し、(565)は26.5cmと大きい。瓦当と平瓦の接合部は横方向のナデによって仕上げられているが、一部に瓦当上面から平瓦凹面にかけて不定方向のナデ仕上げが施されているものがある。

B類　宝相華唐草文軒平瓦（566～568、573～581）

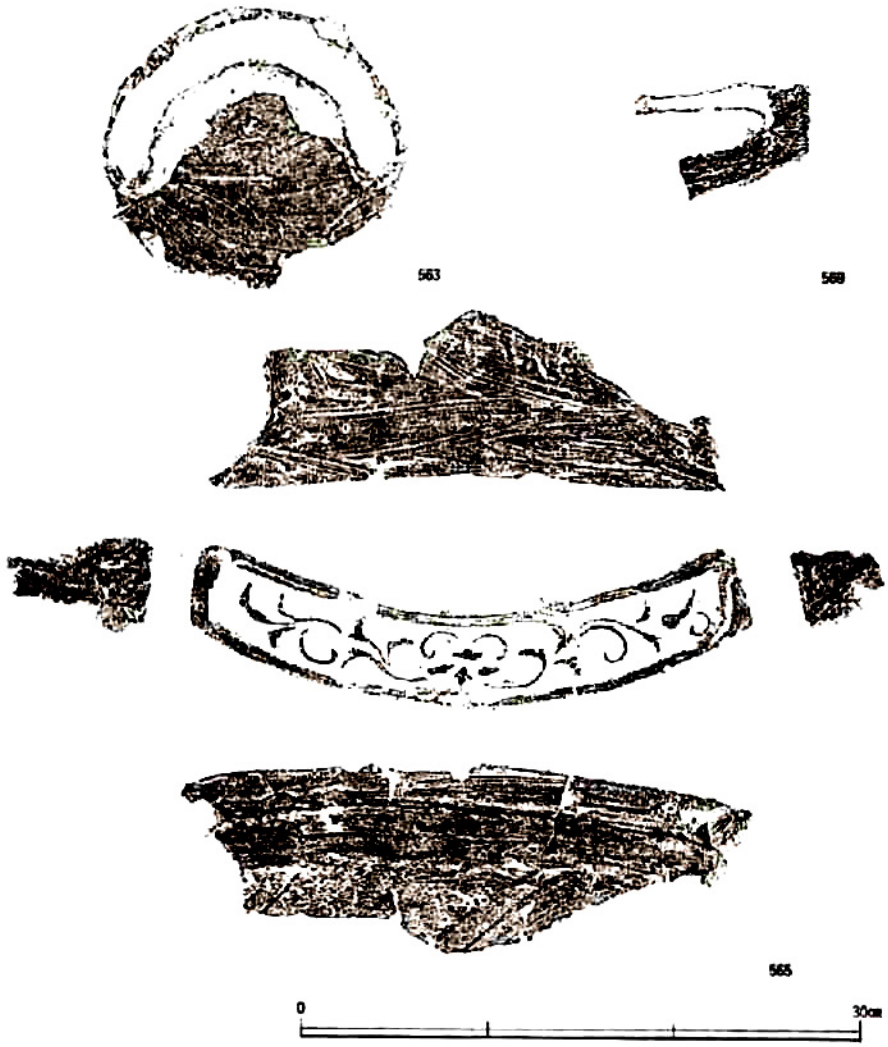
中心飾に半截した宝相華文をおき、その肩部から唐草文が2反転するもの（B_1類）と反転後さらに左右へのびその先に子葉をつけ足すもの（B_2類）の2者がある。

B_1類は、上弦幅18.5cmであるが、B_2類はB_1類より幅広であろうと推定できる。

瓦当周縁、平瓦部との接合面は横ナデ仕上げされている。（566）は、平瓦が瓦当裏面上端よりも下にずれて接合されているため接合部の平瓦凹面が著しくくぼんでいる。

C類　均正唐草文軒平瓦（582～589）

唐草は左右に3反転し、さらに小葉をつけ足している。中心の巻きが下向きのものC_1類（582、583）と、上向きのものC_2類（584）がある。平瓦との接合面が剝離したものは、いずれも指押えによる溝をつくっている。



第16図　軒　平　瓦　拓　影

D類　均正唐草文軒平瓦（590、591）

C類を祖型とするものである。中心飾には珠文をおき、その下から左右に3反転するものである。

E類　宝相華文軒平瓦（592）

文様は、半截した宝相華文を左から上向き、下向きと交互に4個配するものであろう。

平瓦部との接合部には指押えによる溝がある。

F類　宝相華唐草文軒平瓦（593）

力強くもり上った半截花文を中心飾とし、左右に唐草文が配されるものであろう。

G類　連巴文軒平瓦（594）

三巴文を交互に配するものである。

京都市北野廃寺に類例がある。[1]

丸　瓦

A類（600、601、603）

凸面は全面端縁と平行のナデによって仕上げられている。凹面にはすべて布目痕がみられ布目のシワや乱れが多い。凹面には糸切り痕が明瞭に残る。玉縁と丸瓦部の段は回転ナデによって整形される。

B類（602）

凸面に側縁と平行の叩きが一部残る。他の部分は端縁と平行のナデによって仕上げられており、ナデ仕上げがていねいになされればA類となるのであろう。玉縁と丸瓦部の段の整形はA類と同様である。

平　瓦

平瓦は、凹面にはすべて布目の痕跡、糸切り痕があるが凸面の仕上げの分類によって2種類ある。

A類（605～614）

平瓦の中でもっとも多い部類で、大、小の2種類があり凸面は叩き締め後全面ナデによって調整されている。成形の順序は端側縁をヘラ切りした後、叩き締めを行い内外面をナデる。はみだした粘土は折り曲げたり、ナデている。面取りはすべての面について行うとは限らず不規則である。端縁の一方にワラ状圧痕が認められる例が多い。

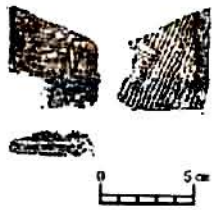
B類（第17図下段、第18図）

凸面を粗い平行条線の叩き板で叩き締めるものである。本類は叩き目の形状から2種類に分類できる。B_1類は粗い（3㎜間隔）叩き目をもつもので、凸面全体に施される。凸面はA類のようにていねいなナデ仕上げをすることはなく、内面のナデは布目の上に側縁と平行に施される。B_2類は細かい（2㎜間隔）叩き目をもつもので、薄手の瓦である。布目痕は明瞭にのこり、面取りもていねいでナデ仕上げは認められない。良好な成形である。

第17図　平　瓦　拓　影

鬼　瓦（595～599）

いずれも珠文帯の部分である。脚部の残る2点（597、599）から判断すると、大、小2種類があるようである。（598）眉、眼球、頬の一部であろうと考えられる。裏面の周囲はいずれもヘラ削りされている。



第18図　平瓦拓影

(7) 小　　結

遺構と出土遺物

当古窯跡群の出土遺物を遺構別に分類してみると次のようになる。すなわち、38号窯体内、38号灰原、29号窯体内、29号西灰原、29号南灰原、33号窯体内、33号灰原、32号窯体内、32号灰原、22号窯体内床面、22号窯体内、22号前庭部、22号灰原、30号窯体内床面直上、30号床面下灰層、30号黄灰色粘土、30号A・C灰層、30号B・C灰層、30号灰褐色砂層の19種である。

個々の遺構とそれに伴なう遺物について考察を加えたいが、遺構の残存状況あるいは出土地点によって資料の少ないもの（29号西灰原、33号窯体内、33号灰原、32号窯体内、32号灰原）については、補足的に説明をする。

38号窯体内出土器種（図版10）は、小皿と片口鉢である。小皿についてみれば、底部が高台気味に張りだすものは少なく、主体は丸底のB類である。片口鉢は、口縁部外側を極端に突出させないA_2類である。

38号窯灰原出土の器種（図版10、11）は、小皿・埦・片口鉢・甕・瓦である。これらのうちもっとも出土量の多いものは小皿である。小皿にはA類・B類があり、両者の比率はほぼ等しい。埦はA類・B類両者があるが、その中間を呈する形のものもあり、量的な把握は困難である。片口鉢はA_2類がほとんどであるが、若干口縁を内側につまみ出したB類に近いタイプ（89）もある。特徴的なものは（94）で、内面に刷毛目を有する。甕は量的に少なく、A類のみである。38号窯は直焔式平窯（煙管状窯）であるため、構造的に甕を焼成したかどうか疑問が残り、38号窯出土の甕がいずれも小破片であり29号窯に同タイプの甕が多いことから29号窯で焼成した甕である可能性が強い。瓦についても甕と同様いずれも小破片で瓦当は認められない。38号窯では遺構には伴わないものの灰層が流れたと判断できる黄色盛土から小皿と埦が完形品に近い形で多数出土している。

29号窯体内出土器種（図版12）は、小皿・大小の片口鉢・両口鉢・甕・瓦である。小皿

は平底のB類である。小型の片口鉢は口縁部が体部に対して直角となるA2類と体部から口縁にかけて丸く納めるものとがある。口縁端面から体部にかけてを丸く納める例は29号窯では他に認められないが、体部が外方に張りだすスタイルから判断してA類に分類すべきだろう。大形の片口鉢はあきらかに口縁内側をつまみ出す特徴がみられるB類である（112、114、115）。（112）はまだA2類に近い口縁形態を残すが、他の2点はいずれもB類である。口径・器高ともに大型化の傾向がみとめられる。（115）は両口鉢であるが、30号窯のものに比べると小型である。甕の量は多くないが、口縁内側に凹部をつくり上方につまみだすA類のみ存在する。甕の叩き目は粗い。瓦は小型の平瓦（605、606）である。

29号窯南灰原出土器種（図版12～18）は、碗・大小の片口鉢・両口鉢・甕・瓦である。碗はA類とB類が存在するが、38号窯灰原ほどのばらつきはなく、A類が主体を占める。小型の片口鉢はすべてA類のもので、A1類とA2類が共伴する。大型の片口鉢は口縁部を観察すると、A1類とA2類がほとんどである。典型的なA類の特徴である外開きの体部をもつものが多いが、内彎気味になる場合もある。口縁部は口縁内側をつまみ出すB類の特徴を示すもの（175、176、179）もある。こうしたものの体部は、体部中央から口縁部にかけて外開きにならず、直線的に口縁へ連続する。両口鉢（178）の口縁部はB類の特徴をもつ。甕は、いずれも口縁内面に凹面をもち、口縁端部を上方につまみだすA類である。胴部外面には粗い叩き目を施し、内面は同心円叩き目をナデにより消している。底部まで器形のうかがえるものは3点しかないが、大きく肩が張りだし胴部は丸胴に近い長胴形である（188、189）。

29号窯の攪乱土からは、鬼瓦の破片が5点（595～599）出土した。29号窯のものと考えた方が妥当であろうが、北隣りの39号窯の遺物が混入したものかも知れない。平瓦は凸面に平行叩きをもつもの（604）が出土した。

22号窯床面直上出土器種（図版21）は、壺・大小の片口鉢・甕である。壺は底部付近まで完全に残る。体部は大きく張りだした肩部からゆるやかな曲線を描いて底部に連続する。体部には10条の沈線が認められる。小型片口鉢はC類（223）とA類（221）が共存する。大型の片口鉢はB類とC類が共伴する。甕は口縁端部外面が垂下せずに頸部と連続するB類と端部外面を垂下させるC類が共伴する。

22号窯体内（図版21～26）からは、壺・碗・土師器の小皿・碗・大小の片口鉢・甕・軒平瓦が出土する。碗は、完全な平底であり、口径に比べて器高が浅くなるのを特徴とする

（B類）。壺は口縁部（233）と底部（234）があるが、窯体内床面のもの（220）に比べて、口縁をいくぶんシャープにつくりだす点で異なっている。小型の片口鉢は、A_1類（238）、B類（240）、C類（242）が存在するがC類が多い。大型の片口鉢はB類とC類があるが、B類の特徴である直線的に外方へ開く体部とつまみあげる口縁端面をもつものは数が少なく、C類の特徴を示すものが多い。甕は小型のもの（口径15.8cm～22.4cm・器高27.7cm～30.4cm）がほとんどを占める。こうしたタイプのものはB類の形状を示すものである。B類のタイプに属しているが、器壁が厚く特異な形状の3点（284～286）がある。ただし、実測できうるもので大型甕が1点出土していて、口縁形状はC類である。この甕（275）の頸部にはヘラ描きの沈線文が施されている。瓦当は軒平瓦B_2類（572）である。窯体内出土の片口鉢とベース直上の遺物とはほとんど同一の器種構成になっている。

22号窯前庭部灰層出土の器種（図版27～32）は、埦・片口鉢・甕・瓦である。埦は、器高に比べて口径が大きく、外開きの体部をもつ（B類）。底部はいずれも平底である。片口鉢は、B類・C類がそれぞれ共伴しているが量は多くない。甕は口縁部の形状にB類・C類があり、それぞれ大型と小型の2種がある。B類についてみると、頸部に残る叩き目の跡はナデ消し後も極めて鮮明に残り、叩き目は粗い。口縁部の形状はB類を示し端部をシャープにつまみあげるものと、肥厚させながら丸くつまみあげるものとの2者がある。C類は頸部の叩き目痕は残るものの、B類ほど顕著ではなく叩き目は非常に細かい。器形の全容が知れるものは数点しかないが、球形に近い丸胴のものと長胴のものとがある。肩部の張り方から推定すれば概ね器高の高い大型のものほど、長胴化する傾向がみられる。瓦は軒丸瓦A類（551）、B類（559）、軒平瓦B_2類（575、577、578、579）と丸瓦（602）、平瓦（607～610）が出土した。

22号窯灰原出土の器種（図版33～39）は、小皿・埦・大小の片口鉢・三口鉢・甕・瓦である。小皿は高台気味に底部を突出させるA類と平底のB類がある。埦は口径の大きい底部平底のB類である。小型片口鉢はA類の特徴を備えている。大型片口鉢はA類・B類とC類の3者が共伴している。A類は口縁部が外側に突出しない、A_2類である。B類は量が少ない。C類は口縁端部を丸く納め、体部が内彎気味に口縁部へ連続するもので出土量は多い。灰層中より三口鉢（339）が出土しているが、口縁部の形状、体部の特徴からB類である。甕はA類、B類が多数を占める。A類にはシャープな口縁端部をもつものと、肥厚して丸く仕上げるものとがある。胴部は丸胴形と長胴形のものがあるが、丸胴形が多い。甕の中で口径の大きいB_2類が3例出土している。そのうち（363、364）は口縁内

側にヘラ描きの沈線文を描いている。瓦は軒丸瓦A類(552)、軒平瓦A類（569、571)、B_2類（574）、E類（592）と丸瓦（600、601）、平瓦（611）がある。

30号窯体内床面出土の器種（図版 40）は、埦・片口鉢・三足付土塊である。埦はB類（368、369）である。片口鉢はB類（373）とC類（371、372、374、375）があるが、内彎する体部と丸味をもった口縁部をもつ、C類が多い。

30号窯床面下灰層（図版40～46）からは、埦・大小の片口鉢・両口鉢・貼り付け高台付片口鉢が出土している。埦（376～380）は口径が大きく、器高の低いB類である。小型片口鉢（381～383）もB類の諸特徴をもつ。大型片口鉢は、A類（424、429)、C類（384、385）の特徴をもつものが数点まじるもののほとんどは口縁部に凹面を持ち、端部上下をつまみ出すB類である。両口鉢・貼り付け高台付片口鉢もそれぞれ1点づつ出土しているが、いずれもB類の特徴をもつ。甕は格子状の叩き目をもつものが2点（435、436）出土している。口縁部のつくりはいずれも端部をつまみあげるA類である。

黄色粘土出土の遺物（図版47～48）は鉢が主体で、床面下灰層と接合する破片が多いことから、両者は同一の遺構すなわち床面下灰層出土ととらえた方がよい。鉢はA類（443)、C類（437）があるが、B類が圧倒的に多い。瓦は軒丸瓦（557）が出土した。

30号窯の灰原は出土位置により2者に分類した。窯体の中軸線より西側のものと東側のもので西側のものをA・C灰層とした。A・C灰層出土遺物は床面下灰層と接合できるものもあり、出土位置も床面下灰層にもっとも近い。

A・C灰層出土遺物（図版48～58）では、壺・大小の片口鉢・両口鉢・貼り付け高台付片口鉢・甕・瓦が出土した。壺（457）は、22号窯体内出土の壺（220）より口縁部がシャープで肩部にかけてよりなだらかである。片口鉢は大小ともB類が圧倒的に多いが、A類に属するもの（461)、C類に属するもの（462）もある。両口鉢（492）・貼り付け高台付片口鉢（494、496、498、500）は鉢類の中でもっとも大きな類いで口径38.1cmを測る。甕はA類が多く、C類の小型品（503、504）もあるが小量である。瓦は軒平瓦F類（593)、平瓦（612、614）が出土した。

東側の灰層をB・D灰層とした。B・D灰層は遺物量が少なく出土遺物（図版59）は、壺・小皿・埦・片口鉢である。壺（525）は口縁部のみであるが、端面を丸く仕上げる点で他の壺と形態を異にする。小皿(524）は器高の低いB類で器高はわずか1.25cmにすぎない。埦(526～530）もいずれも口径が大きく、器高の低いB類である。片口鉢はD類（531～532）とB類（533）がある。D類のものはいずれもていねいなつくりである。口縁端部

を外方につまみだす特徴は共通するが、器高は低いものと高いものとがある。

灰褐色砂層出土の器種（図版59～64）は、片口鉢・甕のみである。片口鉢は口縁部を丸く、体部を内彎させる典型的なC類（536）である。D類（534、535）のものは灰層出土のものに比べて口縁内面側につまみだすところに特徴がある。甕は大小2種あるが小型のものでB類と同様のもの（539）が若干存在するものの甕の多くはC類の大型甕である。胴部の叩きは細かいものがほとんどである。

以上みてきた代表的な遺構による器種を整理して表にすると以下のようになる。

第3表　遺構別出土土器一覧表

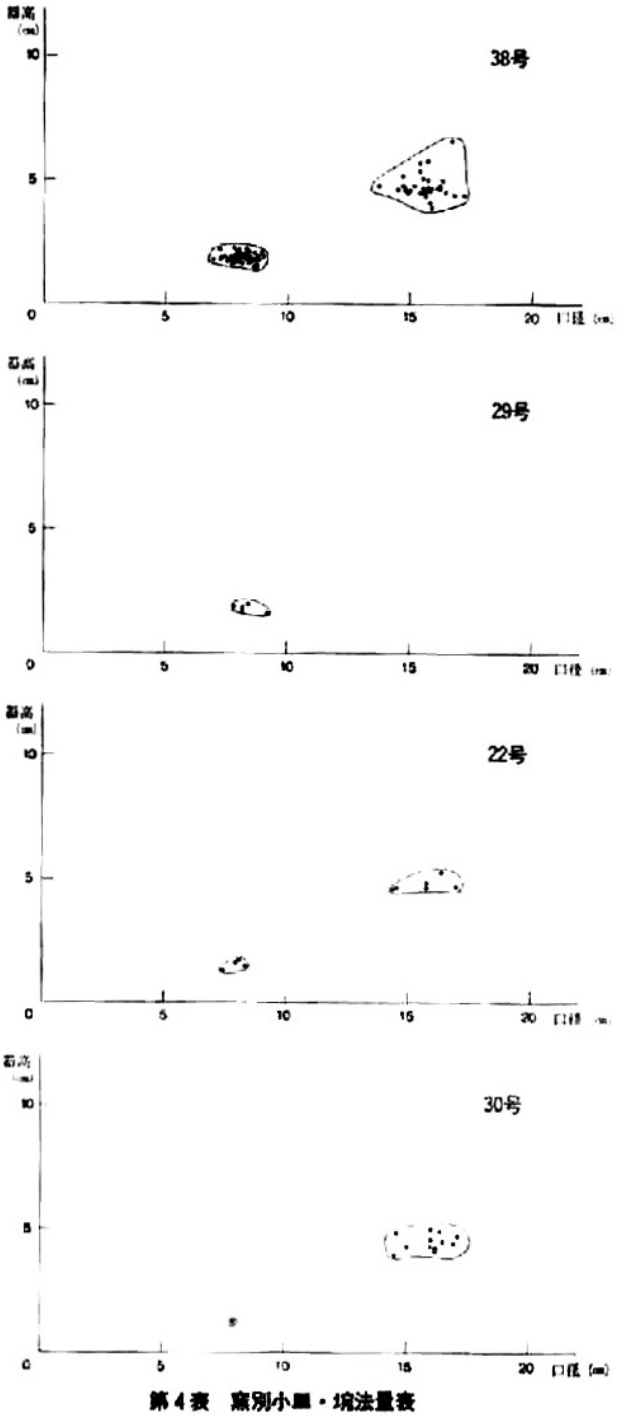
		小皿		埦		鉢				甕			壺	軒丸瓦	軒平瓦
		A	B	A	B	A	B	C	D	A	B	C			
38	竈体内		◎			○									
	灰原	◎	◎	◎	◎	◎	○			○					
29	竈体内	○	○				◎			◎					
	西灰原		◎												
	南灰原			◎	◎	◎	○			◎					
33	竈体内		○			○	○			○					
	灰原											○			
32	竈体内						○				○				
	灰原									○	◎				
22	竈体内床面					○	○	◎		○		○	○		
	竈体内					○	◎	◎			◎	○	○		B2
	前庭部				○		◎			○	◎	○		A・B	B2
	灰原	○	◎		○	○	○	○		◎	◎			A	B2 A・E
30	竈体内床面				○		○	◎							
	床下灰層				○	○	◎	○		○	○				
	黄灰粘土					○	◎	○						A2	
	A・C区灰層					○	◎			◎	◎	○	○		F
	B・D区灰層		○		○		○		○					A	B1
	灰褐色砂							○	○		○	◎			

◎は器種ごとに主体を占めるもの。軒瓦についてはタイプ別に分類

遺物の検討

第3表遺構別出土土器一覧表によって得られた資料をもとに各窯出土遺物について考察を加えよう。

灰原出土遺物と窯体内残存遺物を検討すれば、各器種の時期差について次のことがいえる。もっとも形態変化がとらえやすいのは鉢である。A類とB類の関係は、29号の窯体内と南灰原の遺物を比較し、B類とC類の関係は22号窯体内床面と前庭部、あるいは30号窯体内床面と床面下灰層の遺物を比較すればあきらかである。したがって鉢はA類→B類→C類の変容がたどれ、しかもこの3種は連続し、ある時期は併行して焼成されていたことがわかる。甕についても同じことをくりかえせば、A類→B類→C類の変容がたどれる。



第4表　窯別小皿・埦法量表

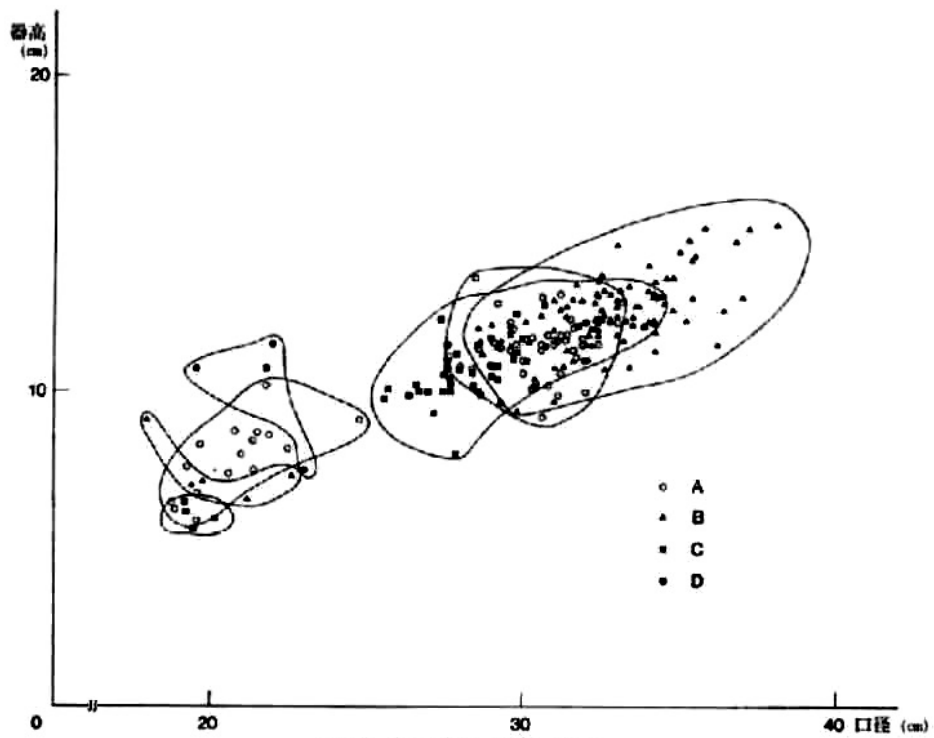
ただし、鉢の分類（A、B、C）と甕の分類（A、B、C）は記号ごとに必ずしも対応して同時併存を指しいるわけではない。埦・小皿についても、A類一B類の変化がたどれる。

このことから遺構別に時期をたどれば、29号窯・38号窯→22号窯（前庭部）・30号窯（床下灰層）→22号窯（窯体内）・30号窯（窯体内）のようになる。

以上の知見をもとに、各器種の消長をもう一度整理してみよう。

小皿と埦は第4表で窯別に法量表を作成した。法量表でみる限り、埦と小皿の形態は窯ごとによく似た傾向を示す。すなわち、38号窯でバラツキのみられた口径・器高は29号窯・22号窯・30号窯となるにつれて一定化する傾向がある。いい換えれば、38号窯で混在したA類・B類が22号・30号窯となるにつれB類（口径は大きくなり、器高は浅くなる）へと移行するということである。22号窯・30号窯では、B類が主体を占めるが22号窯・30号窯で確認した小皿・埦は小量であり、小皿・埦は、ともにこの時期を境にして生産を中止したのではないかと推定できる。

鉢は器形分類別の法量表を第5表に示す。A類の大型鉢の法量平均は口径30.6cm・器高11.4cmであり、小型鉢の平均は口径20.9cm・器高7.9cmである。B類の大型鉢は口径32.8cm・



第5表 形態別鉢法量表

器高12.3cm、小型鉢は口径20.2cm・器高7.4cmである。C類の大型鉢は口径28.8cm・器高10.7cm、小型鉢は口径19.6cm・器高6.1cmである。鉢の口縁部の変化は、A類（内傾、外方へのつまみだし）→B類（内傾、上下へのつまみだし）→C類（丸味をもち、つまみだしはほとんどなし）というぐあいにたどることができる。体部内面のナデはA類にもっとも顕著にみとめられ、B類では体部下方のみにナデ仕上げを施すことが多くなる。C類では内面を指押さえして整形する。したがって体部内外の凹凸面はA・B類では体部全体に著しく、C類での体部の凹凸は体部上方に限られる。一方、底部はA類では周縁が未調整であるものが多いのに対し、B類・C類では周縁をナデ仕上げあるいはヘラ削りを施すことが多い。特にC類の底部周縁は未調整であることはない。底部の静止糸切りはA類にもっとも多く、B類・C類ではほとんどみられない。器形別にみれば、B類にのみ両口鉢・片口鉢が存在し、貼り付け高台付片口鉢もすべてB類だけである。

法量表によって大型鉢では、B類がもっとも大型であり、C類が小型であることがわかる。大型鉢の口径・器高は、B類→A類→C類の順で小さくなり、B類を境として鉢が小型化していく傾向がある。このことは、海あがりの鉢（第5図）の法量をみてもあきらかであり、B類を生産した時期以降に大型鉢を生産した痕跡はない。B類の鉢は、神戸市神出古窯跡群・柏子池古窯跡で同種のものが確認されており小野市浄土寺創建瓦（建久6年）が共伴している。[6]

甕は器高・口径の両者が測定できる資料が少ないので法量表にはしなかった。A類・B類・C類とも大型甕、小型甕の焼成を行っている。しかし、B類を除いて甕は大型品に主体をおいて生産されたと考えられ、C類はそのほとんどが大型品である。

口縁部の変化は、A類→B類→C類へと端部下端を垂下させる傾向がつかめる。頸部の平行叩き目は、A類がもっとも残りが良く、C類はていねいにヨコナデ仕上げするものが多い。体部の平行叩きはA類が粗く、B類・C類は細かい。格子目叩きはA類・B類に多く、C類には存在しない。底部はいずれのタイプも丸底である。

瓦は遺構に伴うもので瓦当面の残るものについて考察してみたい。軒丸瓦A類は、22号窯前庭部（551）と灰原（552、553）で3点出土した。30号窯では、B区の灰原最下層から出土した（554）。軒丸瓦B類は、22号窯前庭部（559）、30号窯灰原（558）で出土した。これらの軒丸瓦A類・B類に伴う軒平瓦は、同地点出土の軒平瓦から判断して軒平瓦A類（569、571）、B類（573、575、577、578、579）、C類（583）、E類（592）が考えられる。これらは、半截した宝相華文を中心飾とする、宝相華唐草文軒平瓦が多く、E類は宝

相輪文軒平瓦で、C類は均正唐草文である[9]。ただし、B_2類は22号窯体内でも出土しているので、次の時期まで生産されていた可能性がある。さて、軒丸瓦C類は三巴文軒丸瓦であるが33号窯焚口灰層で出土している（563）。同時期の遺構から出土した軒平瓦はないが、30号窯の灰原東端から出土した軒平瓦D類付近に33号窯と同様の甕が多く認られたことからこれを、三巴文軒丸瓦に伴う軒平瓦であると考えたい。

以上のように、各器種の消長を観察して表にまとめたものを、別添の折り込み図版に示す。

窯別生産器種の割合について

発掘調査によって出土した遺物は以下の方法によって個体数を計測した。計測した遺物は遺構に伴うものであり、盛土等から出土したものは除去した。また計測は遺物の大多数を占める小皿・埦・鉢・甕に限り行ない、壺その他の遺物は微量であるため扱っていない。

A、個体計測法（第6・7・8表左）

小皿・埦・鉢については、底部が半分以上あるものを1個として計測し、瓦については隅数を数え数値を4で割った。こうして得られた個体数を円グラフ化したものを資料「A」とする。

B、重量計測法（第6・7・8表右）

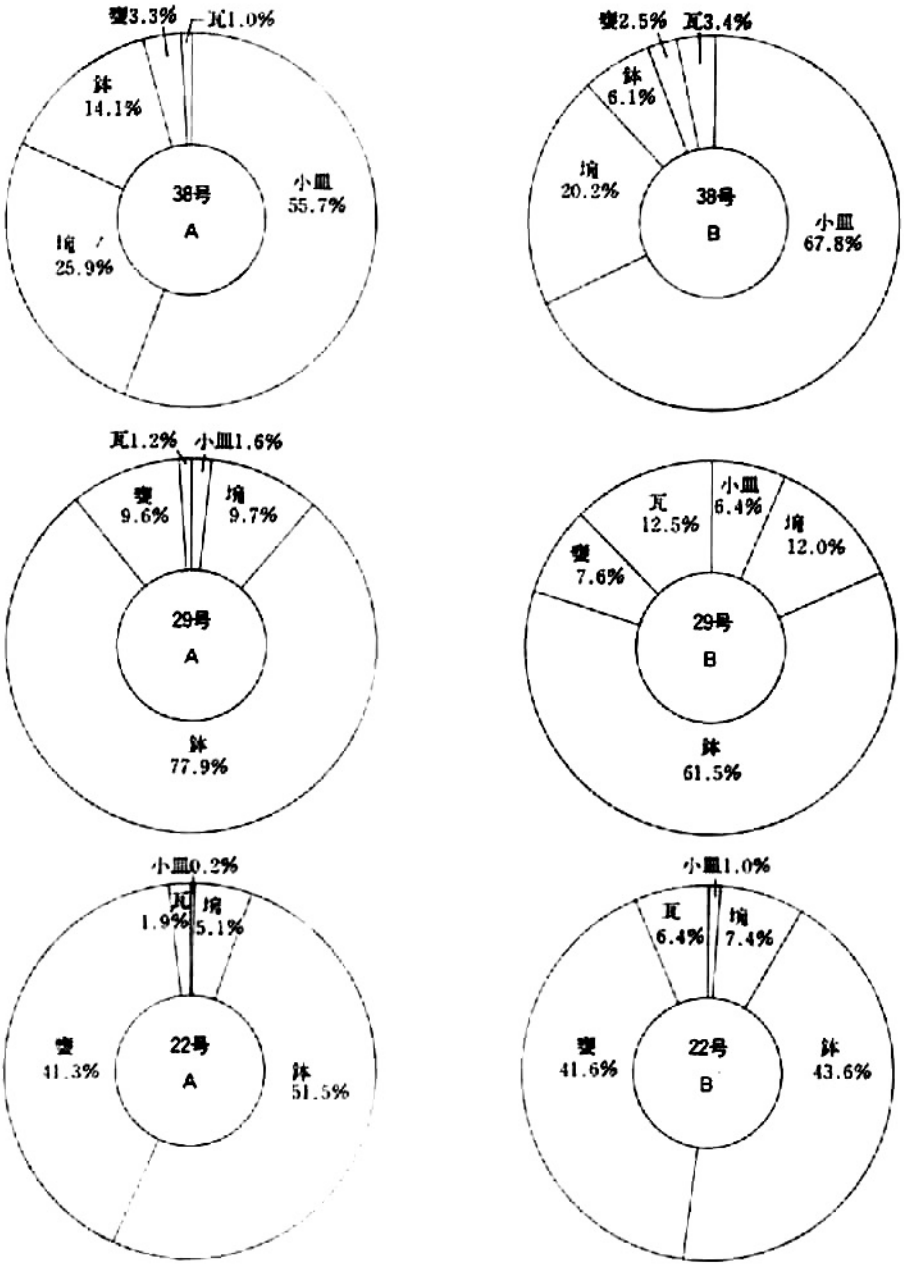
遺構に伴う各器種の総重量を計測し、総重量を完形品の平均重量で割って個体数を算出したものである。この資料は円グラフ「B」とする。

38号窯は、第3章第1節に述べたように「煙管状窯」である。焼成室の床面は径44×50cmの楕円形であるので、大型品である甕・鉢の焼成には適さない。円グラフで示すとおり（第6表上段）、製品の80～90%は小皿と埦で占められる。鉢は生産量の10%前後で、焼成を行ったかも知れないが、甕・瓦は微量であるため29号窯からの混入品である可能性が強い。

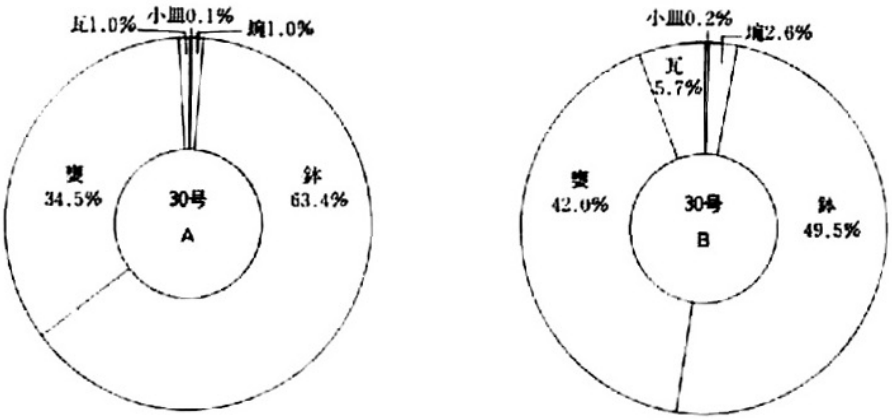
29号窯は鉢が主体を占める（第6表中段）。製品全体の60～70%は鉢である。甕の生産量は7～10%と少なく、甕の生産はまだ本格的になされていないことがわかる。瓦・小皿は計測法によって数値が異なっているが，全体量からすれば多くない。

22号窯では、鉢と甕で全生産量の80～90%を占め、両者の量はほぼ等しい（第6表下段）。29号窯に比べて甕の量が増大することが本窯の大きな特徴といえる。小皿・埦・瓦はいずれも29号窯に比べて減少する。

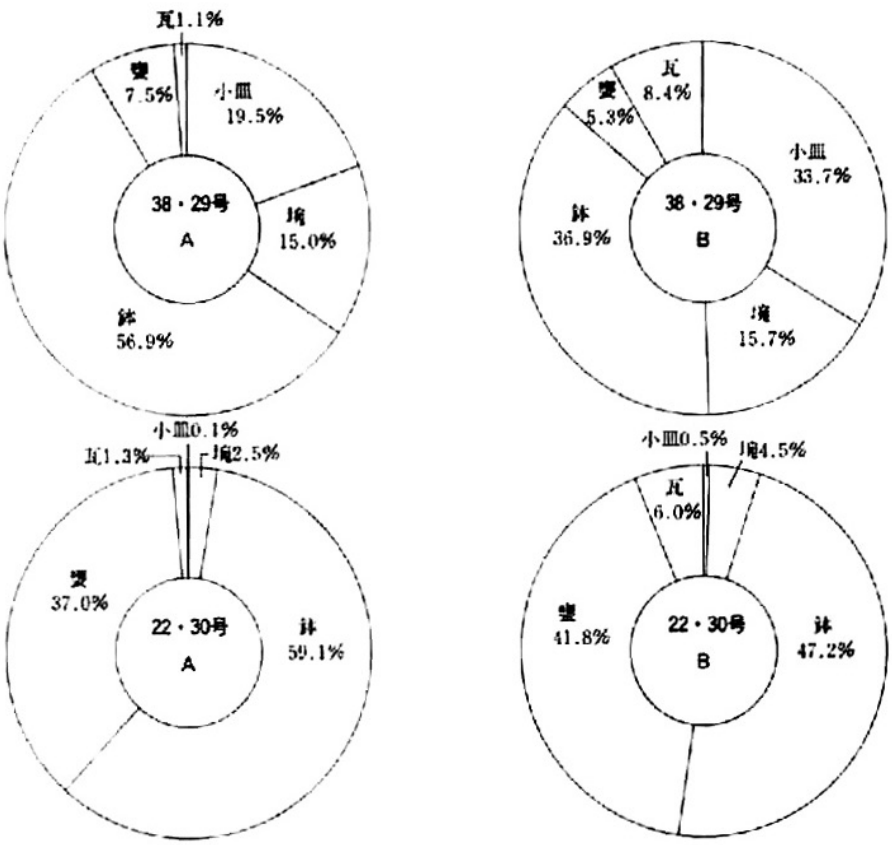
30号窯は22号窯とほぼ同様の傾向を示す（第７表）。特に鉢と甕は全生産量の90％を超えるようになる。小皿・埦・瓦は著しく減少し、製品の主体が完全に鉢・甕に移行したことがわかる。



第６表　38・29・22号出土遺物器種別割合　A：個体計測表　B：重量計測表



第7表　30号出土遺物器種別割合　A：個体計測表　B：重量計測表



第8表　38・29、22・30号出土遺物器種別割合　A：個体計測表　B：重量計測表

さて、各窯ごとに生産量の割合についてみてきたが、これだけではじゅうぶんではない。遺物の分類では調査窯が3時期に分類できることは先に述べたが、本グラフは遺構の性格上2時期にしか分類できなかった[10]。この2時期（38・29号窯、22・30号窯）について上記の円グラフを合体させてみると第8表のようになる。両者は鉢についていえば、38・29号窯はA類であり、22・30号窯はB・C類の時期をあらわすことになる。

2つのクラブを比べてみると、第1に小皿と埦の生産量が減少していることがわかる。おそらく、小皿・埦の生産量は序々に減少し38・29号窯をへて、22・30号窯に至り、小皿・埦をほとんど生産しなくなる段階になるのであろう。12世紀中頃まで隆盛した播磨の埦生産は、この時期に終焉を迎えるものと推察できる。第2に小皿・埦の減少によって鉢・甕類の生産量が増大することがあげられる。鉢はすでに38・29号窯でも生産を行っているが、甕の生産は22・30号窯の時期になって飛躍的に増大する。

甕の生産はこの時期に限られるようで、赤根川支群での表採品ではほとんど例がない。瓦の生産量も減少する傾向にある。前節で述べたように22・30号窯の新しい段階に入ると、瓦当面文様はくずれ量も減少する。

以上のように器種ごとの生産量の推移をみてみると、22号、30号窯の開始時期に生産の画期をみとめることができる。

註

① 甕の成形技法については、横山浩一「須恵器の叩き目」『史淵』117　1980年を参考にした。

② 甕内面の叩位ユビナデは、器高がおおむね30cmを越えるものに施されるようである。

③ 奈良国立文化財研究所『平城宮跡発掘調査報告書』Ⅰ　1961年。

④ 平安博物館編『平安京古瓦図録』　1977年。

⑤ 「同范」の認定は上原真人、植山茂氏にお願いした。

⑥ 六勝寺研究会『六勝寺跡』　1976年。
上原真人「古代末期における瓦生産体制の変革」『古代研究』13・14　1978年。

⑦ 京都市埋蔵文化財研究所　大矢義明氏に御教示を得た。

⑧ 真野修「魚住古窯跡群考」(1)　『歴史と神戸』93　1979年。

⑨ ⑥によれば上原真人氏は軒平瓦C類を三巴文、軒丸瓦とセットをなすと考えておられるが、当古窯跡群ではそうしたセット関係をとらえるにいたらなかった。

⑩ 遺構別に編年を行なう場合、遺構ごとにこうした円グラフを作成することが効果的である。しかし当古窯跡群では、遺構別の計測を行なったものの、遺構の残存状況等によって計測値が変動し資料としてじゅうぶんでないので窯別の資料によるグラフを採用した。

特別研究　I

魚住窯跡群出土須恵器の胎土分析

奈良教育大学　三　辻　利　一

土器の産地を推定する最も客観的な方法は胎土分析による方法である。胎土分析によって土器の産地を求めるには、前以って窯跡出土須恵器を多数分析し、生産地の土器の化学特性を知っておかなければならない。その上で古墳や遺跡出土の須恵器を分析し、その結果を窯跡（生産地）に結びつけることである。そのため全国の窯跡出土須恵器を分析し、どの元素でどの窯が識別できるかを前以って知っておかなければならない。このような背景をもって兵庫県下の窯跡出土須恵器の分析が進められているのである。本報告では魚住窯跡群出土須恵器を分析し、その結果を同じ兵庫県下の加古川窯跡群、相生窯跡群、神出窯跡群の須恵器の分析結果と比較し、相互識別がどの因子によってできるかを検討したので報告する。

分析方法はエネルギー分散型螢光X線分析法である。窯跡で採集した資料は表面を研磨して付着汚物を除去し、タングステンカーバイド製乳鉢の中で100～200メッシュ程度に粉砕した。粉末試料は直径2cmの塩化ビニール製リングに入れ、約15トンの圧力を加えてコイン状にプレスした。こうして得られた試料にX線を照射し、その螢光X線強度を測定した。定量分析には岩石標準試料ＪＧ－１を使用した。データは次式によって規格化された値を用いて表示された。

$$\overline{X}=\frac{\text{試料中のXの全カウント数}}{\text{岩石標準試料中のXの全カウント数}}$$

XはSi(ケイ素)、K(カリウム)、Ca(カルシウム)、Fe(鉄)、Rb(ルビジウム)、Sr（ストロンチウム）である。

表１には、魚住窯跡群、神出窯跡群、加古川窯跡群出土須恵器の分析結果をまとめてある。分析された試料数は多いので、ここでは各窯について各元素の平均値を示してある。表１の分析データに基づいて窯跡群間の相互識別ができるかどうかを図上で調べてみよう。図１には窯についてRb-Sr分布図を示してある。Rb-Sr分布図を描くのは、全国の窯跡出土須恵器の分析結果から、この分布図が各地の須恵器の特性をよく表わすことが分かったからである。たとえば、図１の中央には全国の窯跡出土須恵器のRb、Srの平均値をとって新座標軸を引いてある。そうすると、西日本産の多くの須恵器は新座標軸の左上、すなわ

ち、第Ⅱ象限を中心とした領域に分布し、東日本の多くの須恵器は第Ⅳ象限を中心とした領域に分布する。兵庫県下の窯跡出土須恵器も西日本型であることは明らかである。図1を全体として眺めると、窯跡群ごとにまとまって分布し、かつ、加古川窯跡群、相生窯跡群、魚住・神出窯跡群の3グループに分れることがわかる。すなわち、Rb量もSr量も多いのが加古川窯跡群である。相生窯跡群の中には加古川窯跡群に似た特性をもつ窯もあるが、Rb量が多くSr量が少ないのが相生グループの特性であることがわかる。また、魚住・神出窯跡群の窯はRb量も、Sr量も少ないという特性をもつことがわかる。このように3グループはRb-Sr分布図上で相互識別される可能性があることがわかった。この可能性をさらに明確にするため、全分析点を実際に図上にプロットした結果を次に示す。図2は魚住窯跡群出土須恵器の全分析点のRb-Sr分布図である。また、図3には加古川窯跡群出土須恵器の全分析点をプロットしてある。両図において、各窯跡群の全分析点の90%以上を含むようにして魚住窯跡群領域、加古川窯跡群領域を囲ってある。若干、重なるところがあるものの、両グループはほぼ完全に相互識別されることが明らかとなった。次に、魚住窯跡群と神出窯跡群の須恵器の分離の可能性を確かめたのが図4である。神出窯跡群の須恵器の全分析点のRb-Sr分布図を示してある。大部分の分析点は魚住領域と神出領域の重複する領域に分布し、やはり、Rb-Sr分布図では魚住グループと神出グループの相互識別は困難であることを示した。次に、図5には各窯跡群の窯についてK-Ca分布図を示してある。この図でも、加古川グループ、魚住グループ、相生グループの3グループに大分けできることがわかる。すなわち、加古川グループはK量もCa量も多く、相生グループはK量が多くCa量は少ない。また、魚住グループはK量もCa量も少ない。これに対し神出グループはCa量がさらに少なく、魚住グループと神出グループとの識別はRb-Sr分布図よりも可能性がありそうである。そこで全分析点をプロットしてみた。図6には魚住窯跡群出土須恵器のK-Ca分布図を示す。また、図7には神出窯跡群の須恵器のK-Ca分布図を示す。そして90%以上の分析点を包含するようにして魚住領域、神出領域を決めてある。図7より神出窯跡群の須恵器の大部分は魚住領域をはずれ、神出領域に分布していることがわかる。したがって、魚住グループと神出グループの相互識別にはK-Ca分布図の方がRb-Sr分布図より有効であることがわかる。他の因子についてもみてみよう。図8には、Si量を比較してある。魚住グループ、加古川グループ、相生グループの間には殆んど差がないが、神出グループにはSi量がやや多いことがわかる。図9にはFe量を比較してある。Fe量の多い魚住グループ、神出グループと、Fe量の少ない加古川グループ、相生グループに2分

されることがわかる。

以上の結果、魚住窯跡群出土の須恵器はRb-Sr分布図により加古川窯跡群、および相生窯跡群出土の須恵器より識別され、また、K－Ca分布図によっては神出窯跡群出土の須恵器から識別されることがわかった。これらの分析データに基づいて、今後、魚住窯跡群で生産された須恵器がどこへ搬出されているか追跡が可能となる。なお、魚住窯跡群内の窯間の相互識別は胎土分析では困難である。

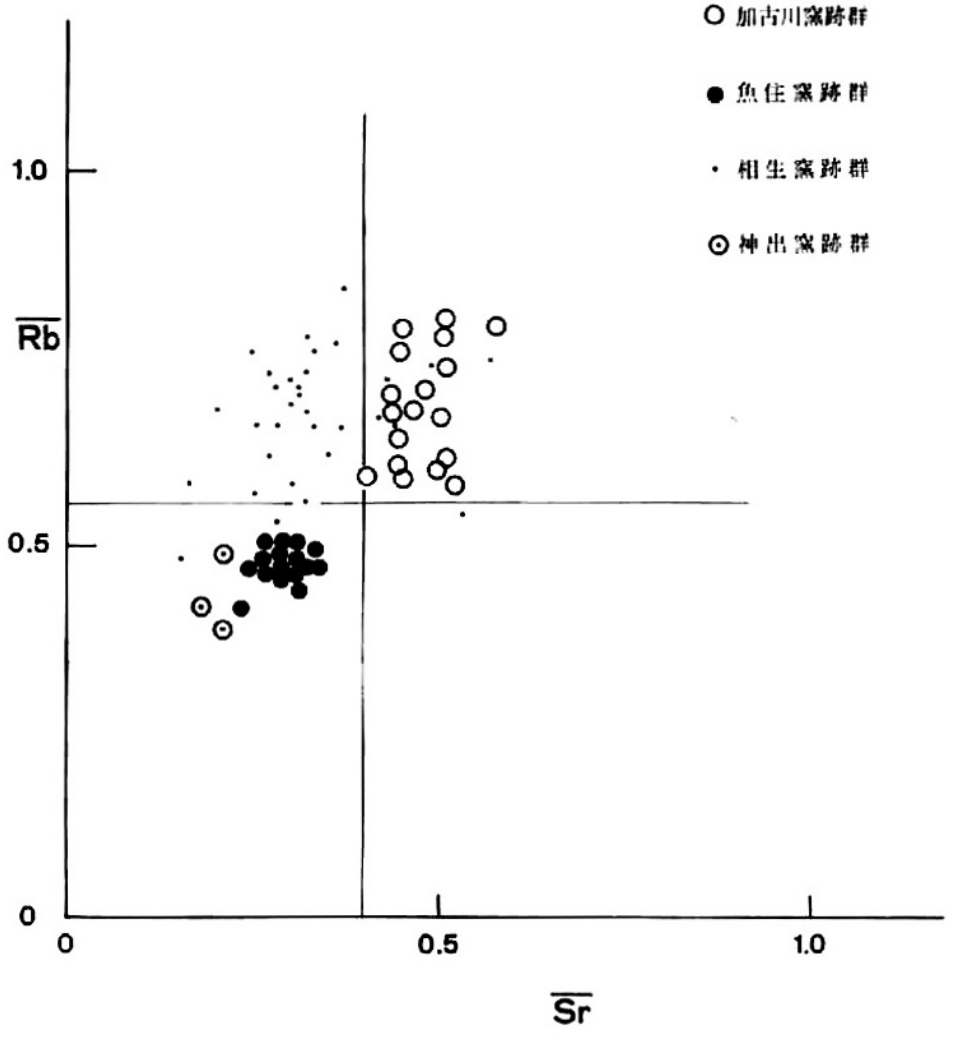


図1　兵庫県下の窯跡群出土須恵器のRb-Sr分布図

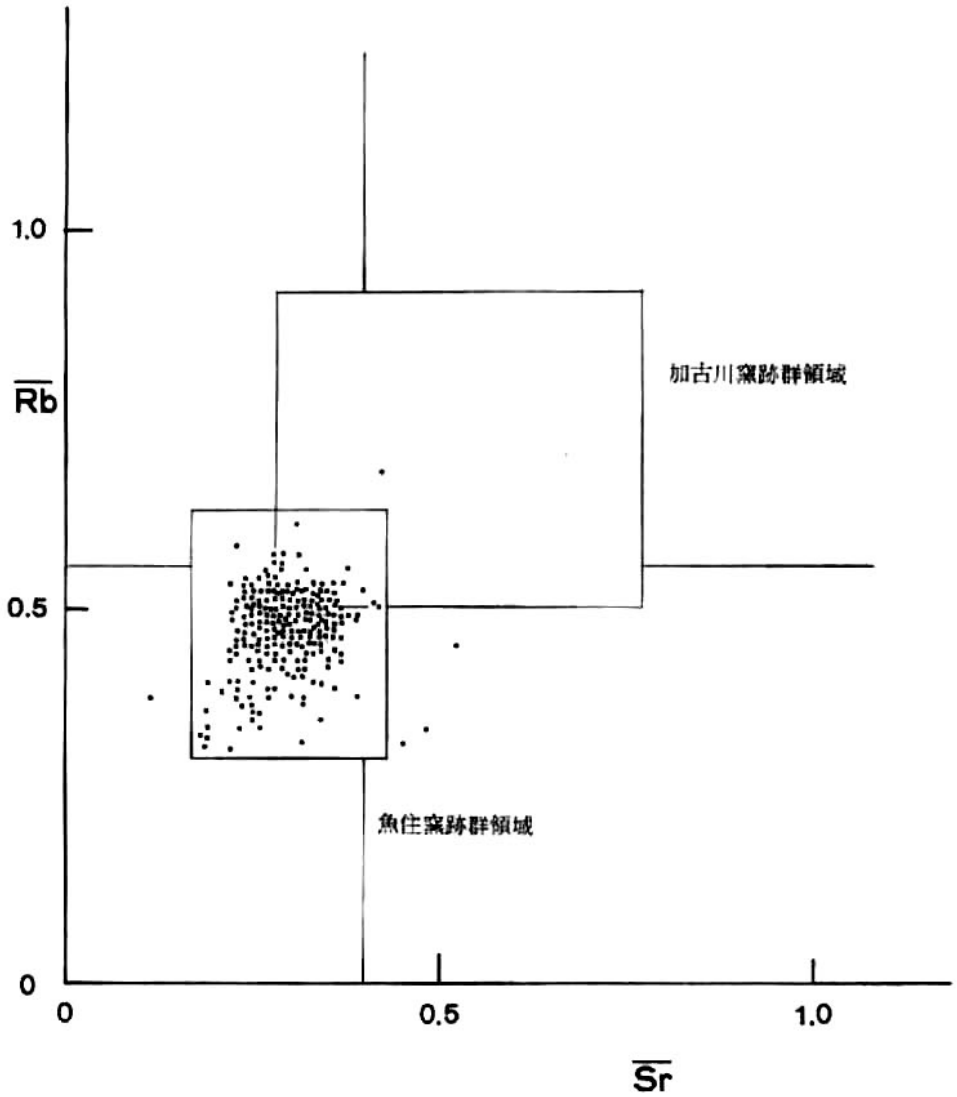


図2　魚住窯跡群出土須恵器のRb-Sr分布図

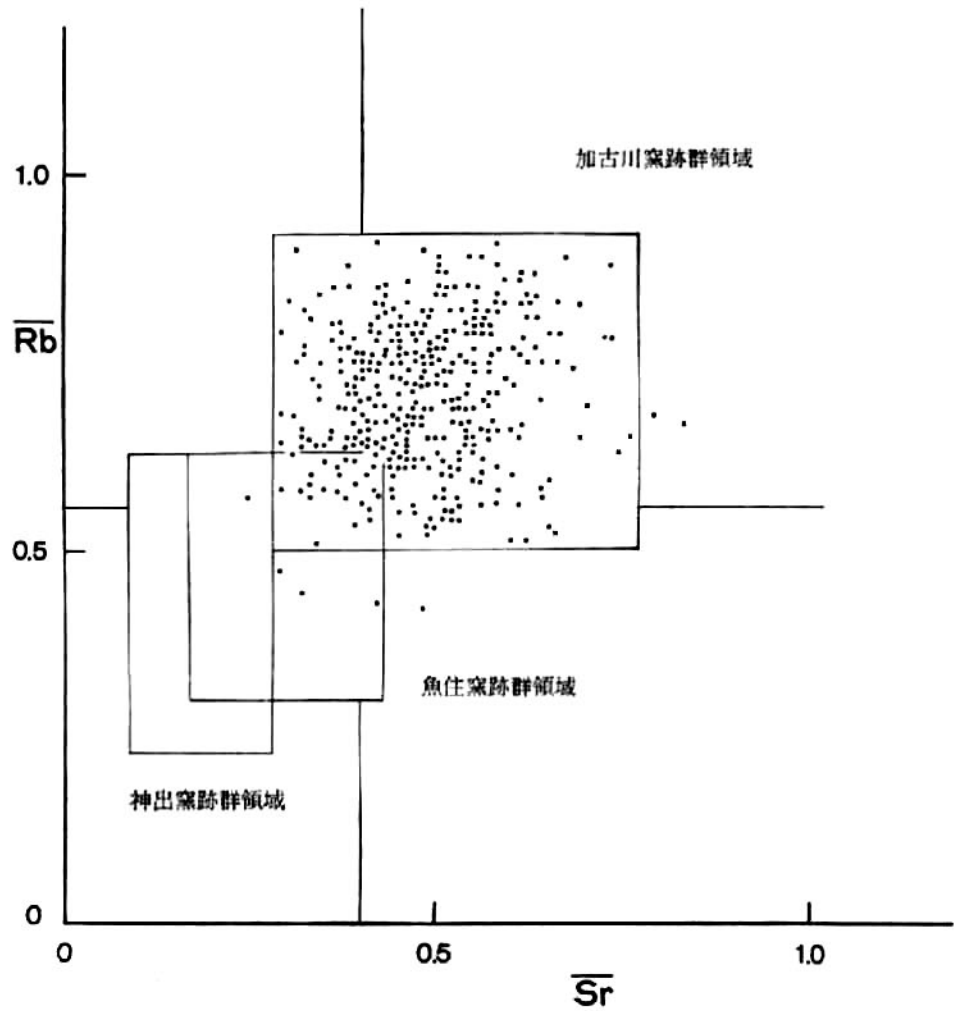


図3　加古川窯跡群出土須恵器のRb-Sr分布図

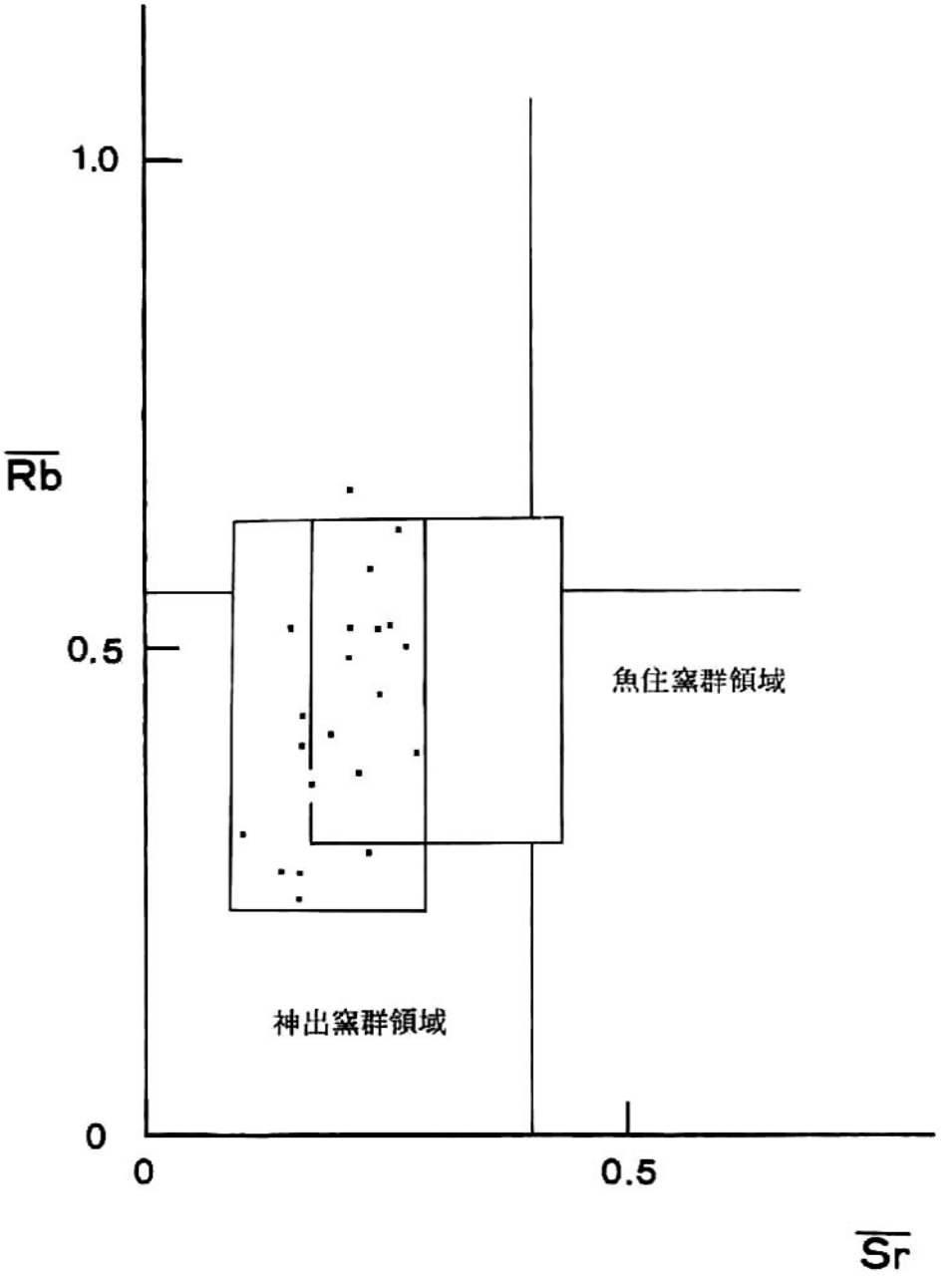


図4　神出窯跡群出土須恵器のRb-Sr分布図

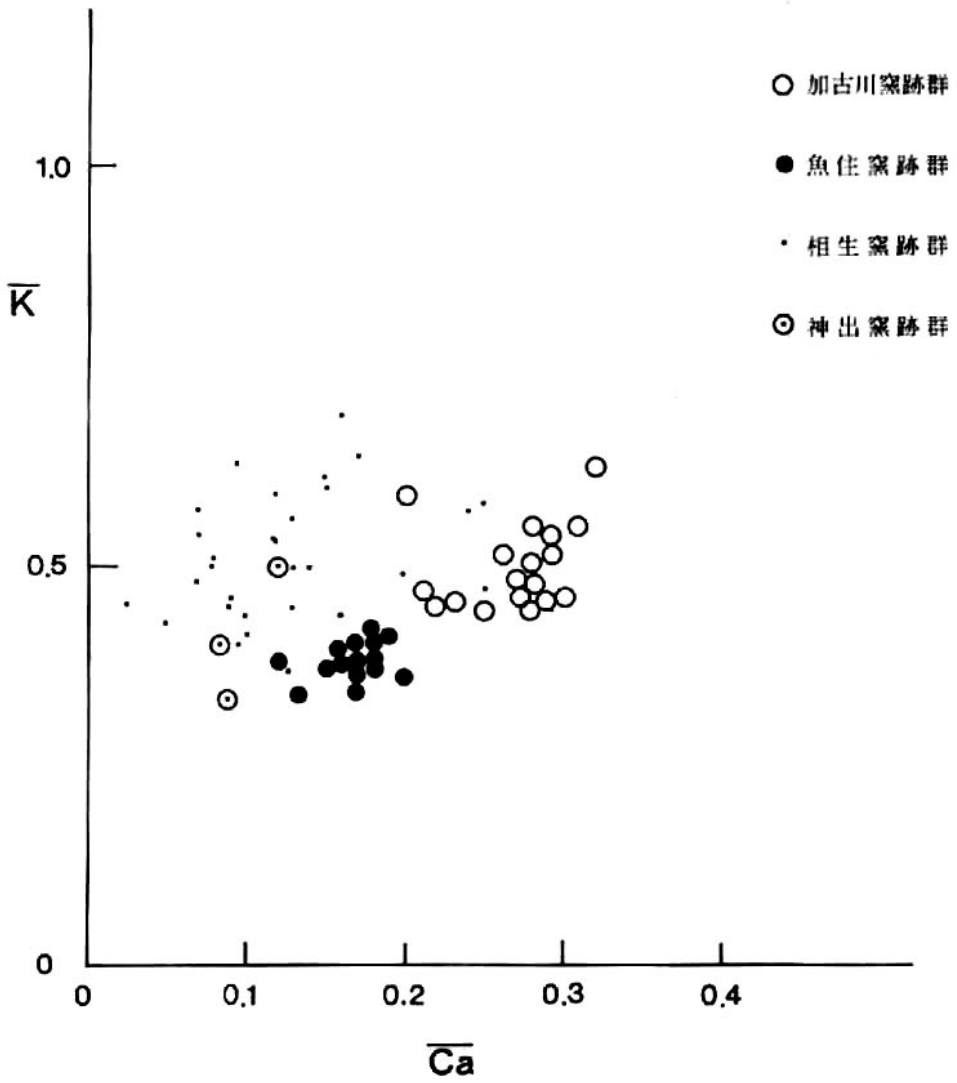


図5　兵庫県下の窯跡群出土須恵器のK-Ca分布図

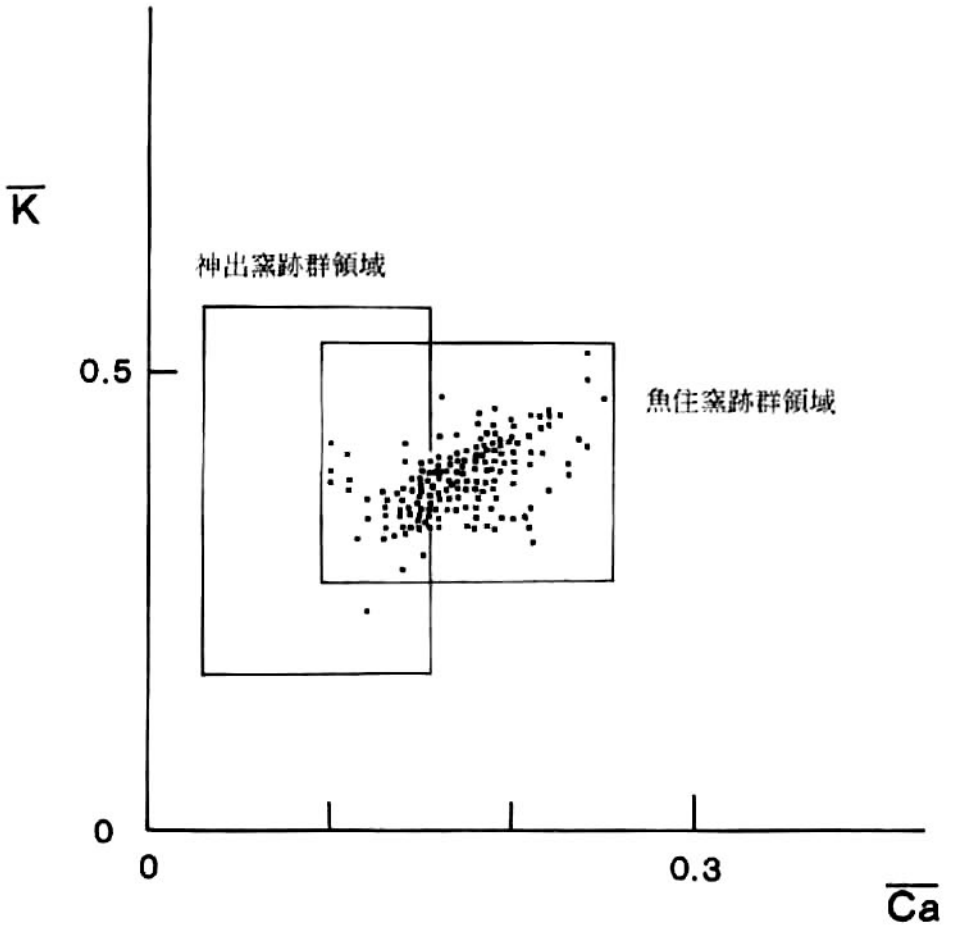


図6　魚住窯跡群出土須恵器のK-Ca分布図

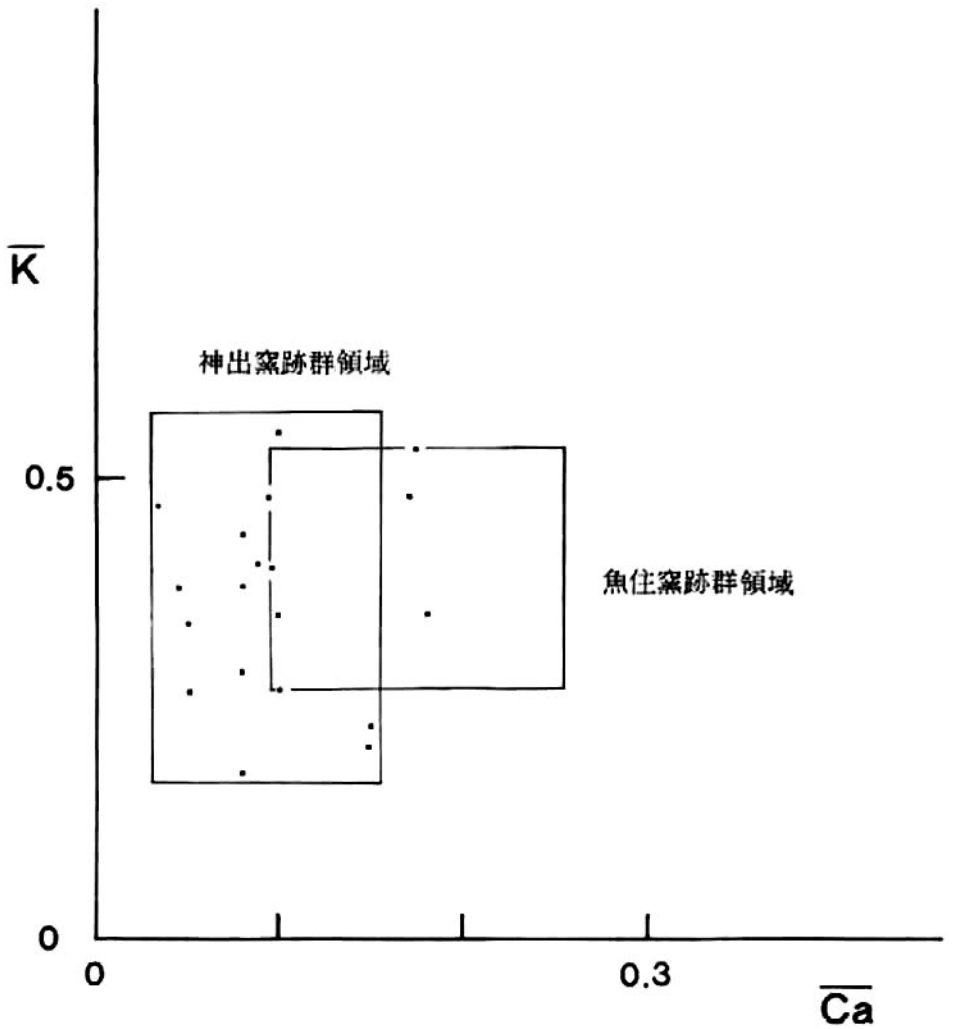


図7　神出窯跡群出土須恵器のK-Ca分布図

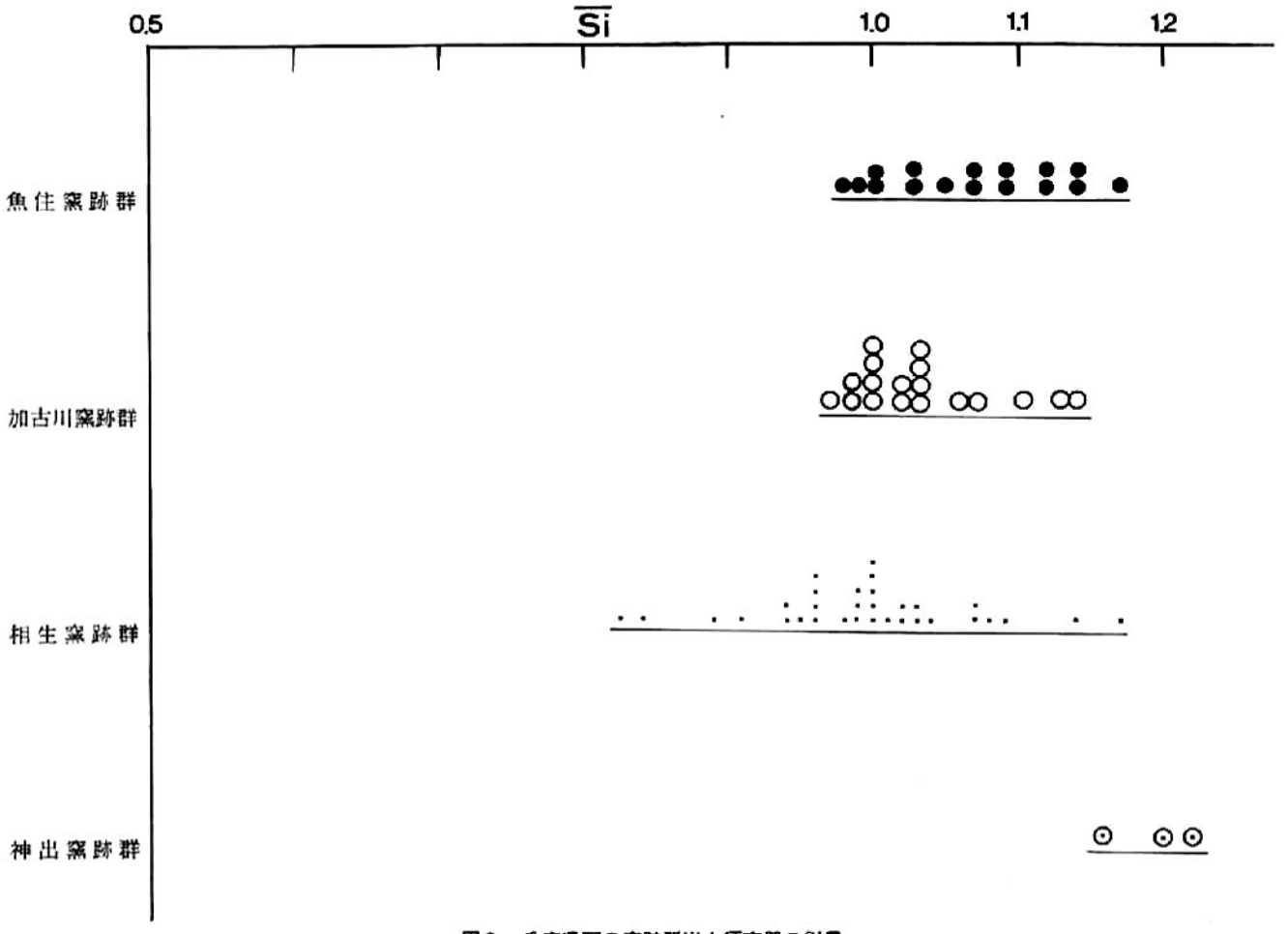


図8　兵庫県下の窯跡群出土須恵器のSi量

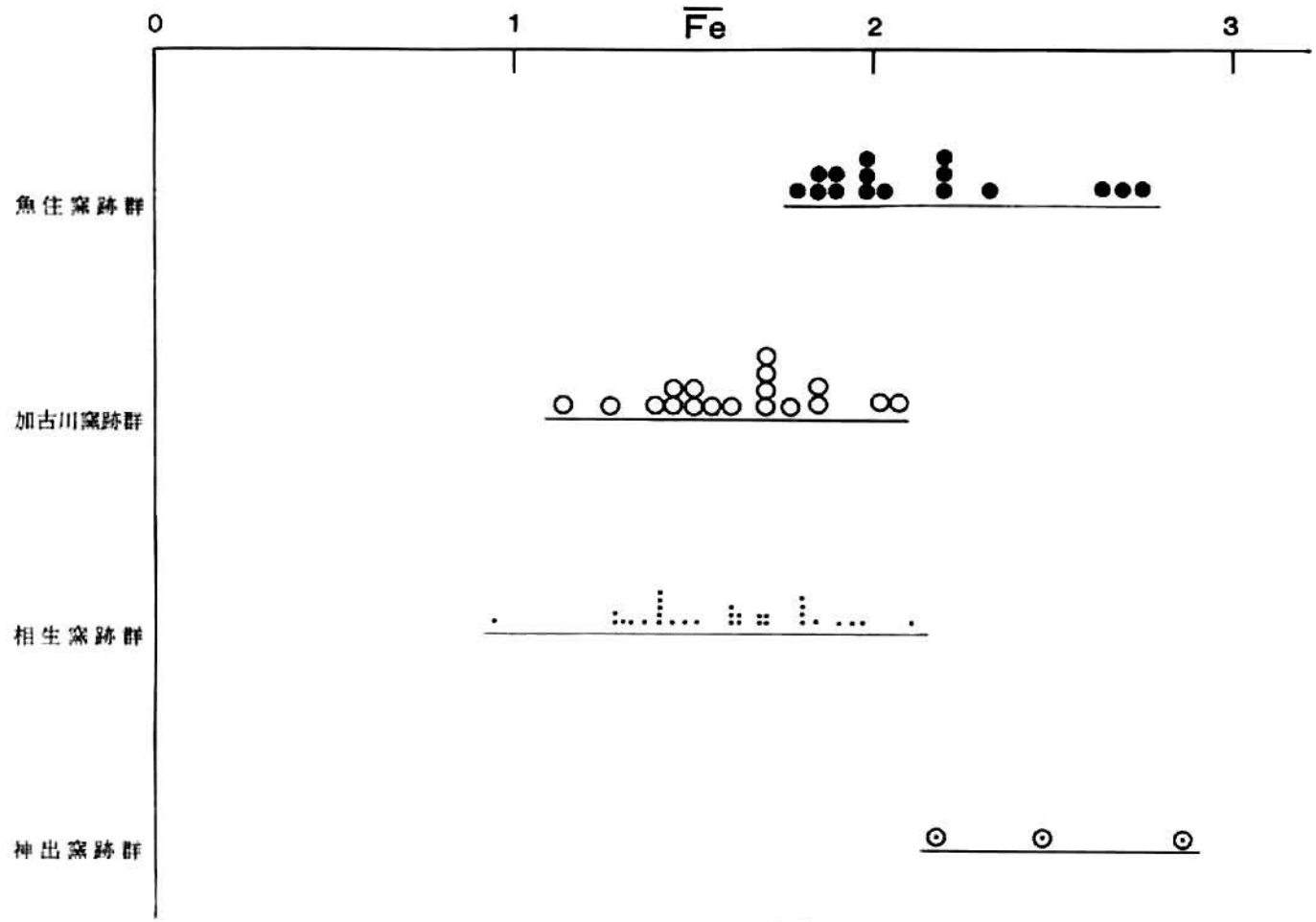


図9　兵庫県下の窯跡群出土須恵器のFe量

	窯跡名	試料数	Fe	Rb	Sr	Si	K	Ca
魚住窯跡群	魚住 5 号	16	1.81	0.466	0.321	1.14	0.376	0.169
	6 号	10	1.98	0.477	0.309	1.07	0.371	0.170
	10 号	12	1.79	0.473	0.293	1.17	0.396	0.172
	11 号	10	2.00	0.476	0.290	1.09	0.396	0.176
	12 号	10	2.02	0.473	0.309	1.07	0.398	0.180
	13 号	17	1.84	0.487	0.337	1.09	0.410	0.194
	14 号	7	1.83	0.502	0.307	1.12	0.380	0.168
	15 号	7	1.90	0.459	0.291	1.14	0.408	0.182
	17 号	13	2.69	0.443	0.309	0.986	0.359	0.199
	19 号	24	2.74	0.466	0.327	0.982	0.368	0.178
	20 号	19	2.19	0.457	0.284	1.12	0.367	0.174
	29 号	14	2.32	0.490	0.298	1.00	0.392	0.159
	30 号	16	1.97	0.466	0.287	1.03	0.375	0.163
	32 号	18	2.64	0.411	0.231	1.05	0.340	0.132
	33 号	13	2.20	0.474	0.250	1.01	0.383	0.123
	37 号	21	2.22	0.489	0.287	1.03	0.395	0.170
加古川窯跡群	金城池	36	1.14	0.790	0.586	1.03	0.454	0.228
	白沢 3 号	43	1.71	0.665	0.427	1.10	0.452	0.223
	札馬 5 号	21	1.73	0.660	0.443	1.02	0.476	0.284
	札馬 2 号	5	1.49	0.705	0.477	1.02	0.514	0.263
	白沢 2 号	10	1.48	0.711	0.429	0.997	0.518	0.289
	札馬西ノ谷4号	30	1.41	0.800	0.512	1.13	0.547	0.284
	投松 2 号	35	1.44	0.743	0.493	1.03	0.484	0.276
	投松 3 号	15	1.53	0.672	0.495	1.00	0.526	0.294
	投松 5 号	34	1.44	0.791	0.446	1.03	0.625	0.319
	投松 7 号	18	1.71	0.778	0.506	1.07	0.551	0.308
	蕪谷 3 号	14	1.84	0.683	0.461	1.06	0.498	0.284
	札馬 41 号	20	1.27	0.764	0.448	1.14	0.587	0.202
	札馬 44号—1	13	2.07	0.593	0.452	1.00	0.444	0.253
	札馬 44号—2	13	1.88	0.592	0.397	0.994	0.461	0.207
	札馬 45 号	12	1.59	0.578	0.521	0.966	0.457	0.295
	札馬 47 号	14	1.76	0.603	0.502	1.01	0.462	0.292
	札馬 49 号	6	2.05	0.586	0.445	1.04	0.460	0.289
	札馬 50 号	21	1.71	0.599	0.502	0.987	0.471	0.276
神出窯跡群	神出 釜ノ口窯	7	2.46	0.394	0.214	1.22	0.330	0.091
	神出 堂ノ前窯	7	2.87	0.491	0.208	1.16	0.498	0.122
	神出 池ノ下窯	7	2.18	0.418	0.183	1.20	0.395	0.086

表1　兵庫県下の窯跡群出土須恵器の螢光X線分析データ

特別研究　Ⅱ

魚住古窯跡群の考古地磁気による年代推定

福井大学教育学部　中島　正志・牧野智志恵
大阪大学基礎工学部　渋谷　秀敏・夏原　信義

魚住古窯跡群の22号窯、29号窯、30号窯、32号窯、33号窯、38号窯の計６基の窯床面から、考古地磁気年代推定用の試料を、昭和54年10月11日に採取した。その熱残留磁化の測定結果について報告する。

1)　考古地磁気年代推定の原理

古地磁気学は、岩石や焼土などの残留磁化を過去の地磁気の化石として利用し、地球磁場の変動の様子を知り、地磁気に関連した諸現象を解明しようとするものである。特に、地球の歴史からみて非常に若い時代の遺跡や遺物の残留磁化を利用する場合に、考古地磁気学と呼んでいる。

土や粘土を焼くと、それに含まれる磁鉄鉱や赤鉄鉱などの強磁性鉱物が、冷却途中で、その時代の地球磁場方向に磁化する。これは熱残留磁化と呼ばれ、再び加熱されたり、化学変化や落雷等を受けたりしない限り、何億年もその磁化を頑強に保持し続けると考えられている。つまり、過去の地磁気の記録者として、その信頼性が保証されているわけである。

地球磁場の大部分は、地球の中心に小さな棒磁石を置いた時にできる磁場に近似できると考えられている。地表で観測できる地球磁場は、方向と大きさを持つベクトル量であり、一般には、地球磁場方向の真北からのずれの角度を表わす偏角(declination,D)、水平面からの角度である伏角(inclination,I)、および地磁気の大きさを示す全磁力(total intensity,F)のいわゆる地磁気３要素によって規定される。

地球磁場は、観測する地点によって、偏角、伏角、全磁力が異なるだけでなく、同じ地点においても絶えず変動していることが知られている。その変動の周期は１秒くらいの短いものから数十年以上の長いものまである。地球内部に変動の原因があると考えられる数十年から数百年程度の周期の変動を地磁気永年変化と呼んでいる。わが国において、17世紀以後の偏角の永年変化は、直接的な地磁気観測から求められているが、伏角と強度については、本格的な地磁気観測が始まる明治時代までデータがなく、わずか100年足らずの

永年変化しか得られていない。そこで、さらに古い時代については、時代のよくわかっている遺跡の焼土などの熱残留磁化を測定し、地磁気変動の様子を復元するという間接的な方法にたよらざるを得ない。既にWatanabe (1959)、Yukutake 他(1964)、Hirooka(1971)、Shibuya (1980)ら、何人かの研究者によって人類遺跡の焼土や火山岩などの熱残留磁化の測定が実施され、過去2000年間の偏角と伏角の地磁気変動の様子がほぼ明らかにされ、永年変化曲線がいくつか報告されている。現在のところ、Shibuya (1980)が1979年までに発表された西南日本における考古地磁気測定結果のすべてをまとめて描いた永年変化曲線が、Hirooka (1971)の結果と大きな差はないけれど、測定データが最も豊富であり、信頼度が高いと考えられる。

地磁気永年変化の標準曲線が正しいものとするならば、逆に、年代の確かでない遺跡の焼土の残留磁化を測定し、永年変化曲線と比較することで、その年代の推定を行なうことが可能である。これが考古地磁気による年代推定である。この方法は、^{14}C法やフィッション・トラック法のように、それだけで独立して年代が決定できる絶対年代決定法ではない。偏角と伏角の値から年代が独立に一つだけ決定されるということはないのである。普通、(D, I)の組み合せで永年変化曲線から二つか三つの年代が出てくる。そのいずれを取るかは、考古学的推定に頼るしかない。

2) 試料の採取と測定

地磁気の偏角と伏角を求めるためには、試料が残留磁化を獲得した時の位置(地理的緯度、経度)、および方位(試料の一つの基準面の走向、傾斜)が判っていなければならない。

位置については、2万5千分の1程度の縮尺の地形図から、その遺跡の緯度、経度を読みとればよい。方位は、焼土を遺構から切り離す前に適当な大きさにして、石膏で固め、その表面にアルミの板をあてて平面を出し、磁気コンパス(クリノメーターを考古地磁気用に改造したもの)を使って測定している。磁気コンパスでの方位は、磁北に対するものであるから、真北からの方位に直すためには、採集地点の偏角分を補正する必要がある。国土地理院の偏角補正の実験式を使ってもよいが、トランシットによる太陽方位の観測から試料採取地点の現在の偏角を実測することが望ましい。

実験室に持ち帰った試料は、ダイヤモンドカッターを用いて、冷却水をかけながら1辺3.5 cmの立方体に切断する。切断面が崩れないように、一面ごとに石膏で補強し、しっかりした試料をつくる。

試料の残留磁化の測定には、無定位磁力計が用いられる。無定位磁力計は、極めて微弱な磁化を測定するのに適した磁力計であるが、その構造が簡単で、ほとんどの研究室においは自作されている。

測定にはいろいろな要因での誤差がつきものであるため、一つの露跡から10～15個程度の試料を採取している。これらの試料の個々の測定で求めた偏角(Di)、伏角(Ii)から平均値(Dm,Im)を求めるのだが、このとき用いる統計学的方法はFisherによって確立されたものである。

まず、n組の(D, Ii)より

$$\begin{cases} N=\sum_i \cos Ii \cdot \cos Di & \text{(北向きの成分)} \\ E=\sum_i \cos Ii \cdot \sin Di & \text{(東向きの成分)} \\ Z=\sum_i \sin Ii & \text{(鉛直の成分)} \end{cases}$$

を求め、これより合ベクトルの長さR、およびDm、Imは

$$\begin{cases} R=(Z^2+N^2+E^2)^{\frac{1}{2}} \\ Dm=\tan^{-1}\dfrac{E}{N} \\ Im=\sin^{-1}\dfrac{Z}{R} \end{cases}$$

で与えられる。

この時、信頼度係数kは、

$k=\dfrac{n-1}{n-R}$ (大きい程、方向の集中はよい) となる。

誤差角α_{95}は、危険率5％として

$$\alpha_{95}=\cos^{-1}\left[1-\frac{n-R}{R}\left\{\left(\frac{1}{0.05}\right)^{\frac{1}{n-1}}-1\right\}\right]$$

で与えられる(小さい程、方向の集中はよい)。

これによりDm、Imのそれぞれの誤差の幅として、

$\Delta D=\alpha_{95}/\cos Im$ (偏角誤差)

$\Delta I=\alpha_{95}$ (伏角誤差)

が求められる。

以上で一つの露体より一組の過去のある時点での地磁気の方向が求められたことになる。

3) 測 定 結 果

魚住22号、29号、30号、32号、33号、38号の6基の窯跡の床面から計83個の考古地磁気測定のための試料を採取した。できるだけ床面全体から試料を採取することとし、1つの窯跡から10～15程度の個数を採取した。魚住30号は、上部と下部に分割されていたため、それぞれから11個と12個の試料を採取した。38号窯は、窯体が小さな上、天床が在り、試料採取のための作業が難しかったため、試料は5個しか得られなかった。

魚住古窯跡群での現在の地磁気偏角は、太陽方位の観測から求めた。結果は、4.8°Wであった。

熱残留磁化の測定は、福井大学の無定位磁力計で行なった。残留磁化強度は、10^{-3}から10^{-4}cgsemu/gr程度であり、窯跡の焼土からの試料の中では、標準的なものであり、高温で焼成されたことは間違いなく、考古地磁気に適した試料であった。

測定結果は第1図と第1表にまとめた。第1図は、それぞれの試料の磁化方向（偏角、伏角）をシュミット・ネット上に投影したものである。円の中心と測定点を結ぶ直線の真北（円の中心とNを結ぶ方向）からの角度が偏角であり、この直線上で円周から測定点までの角度が伏角を表わしている(円周上で0度、円の中心で90度)。第1図と第1表の偏角はすべて、上述の現在の地磁気偏角（4.8°W）で補正した値である。

個々の窯についての偏角と伏角の平均値（第1表）についての信頼度係数は、すべて100以上であり、今回の測定結果は、よくまとまった信頼度の高いものといえる。

考古学からの推定年代は、6基とも12世紀後半から末ということであった。そこで今回の熱残留磁化測定結果を、Shibuya (1980)による永年変化曲線（第2図）の10世紀から15世紀の部分と比較してみた。その結果、22号、30号下部、32号の各窯は、いずれも多少伏角が深すぎるものの、12世紀末から13世紀前半、29号窯は12世紀中頃、33号窯は12世紀後半から13世紀初頭と考えられる。30号窯の上部については、下部と伏角は一致するが、偏角が大きく異なっている。強いて年代をあげるとすれば7世紀ということになる。これは単一の古窯とすれば全く矛盾する結果であり、ここではむしろ、削平された際などに動いた可能性を考えるべきであろう。また、38号窯は試料数が少なく、他のデータと比べてバラツキも大きいので、年代を推定することができなかた。以上の結果を、第2表のAGEの欄にまとめた。誤差については、誤差角とこの時代の永年変化分から判断して、±25年程度であると思われる。

引 用 文 献

Hirooka, K. (1971) Mem. Fac. Sci. Kyoto Univ., Geol. and Mineral., 38, 167-207.

Shibuya, H. (1980) "Geomagnetic secular variation in Southwest Japan for the past 2,000 years by means of archaeomagnetism", 大阪大学基礎工学部修士論文, 54 pp.

Watanabe, N. (1959) J. Fac. Sci. Univ. Tokyo, Sect. V, 2, 1-188.

Yukutake, T., K. Nakamura and K. Horai (1964) J. Geomag. Geoelectr., 16, 183-193.

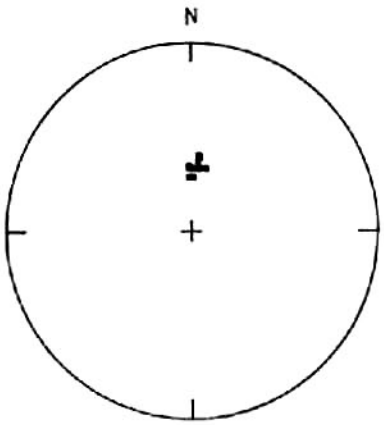
Site	n	Dm(°E)	Im(°)	ΔD(°)	ΔI(°) $=\alpha_{95}$	k	AGE(A.D.)
No. 22	11	4.5	61.7	4.7	2.2	415.5	1220
No. 29	12	-2.1	56.4	6.0	3.3	170.2	1150
No. 30 L	12	4.1	62.5	7.1	3.3	177.1	1220
No. 30 U	11	-8.7	62.7	5.9	2.7	287.1	?
No. 32	12	5.1	64.1	7.0	3.1	203.4	1220
No. 33	20	2.9	59.1	5.9	3.1	115.2	1200
No. 38	5	-1.1	49.2	10.7	7.0	120.1	?

第1表　熱残留磁化測定結果と推定年代

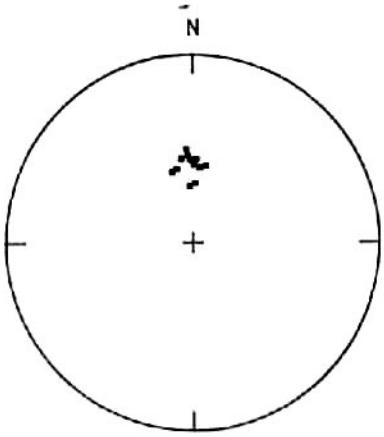
n：試料数　Dm：平均偏角　Im：平均伏角

ΔD：偏角誤差　ΔI：伏角誤差　k：信頼度係数

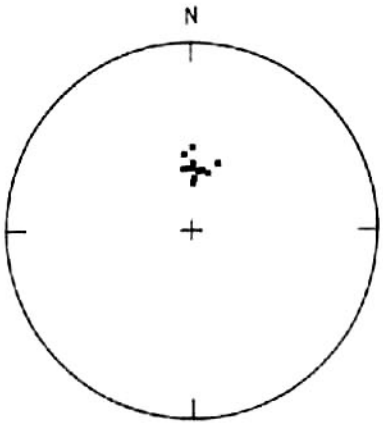
AGE：考古地磁気推定年代（A.D.）



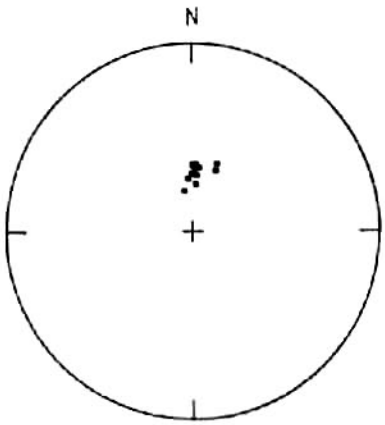
No.22



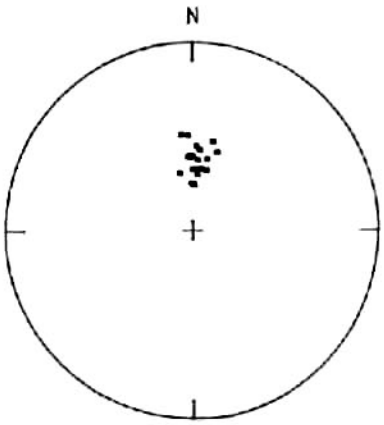
No.29



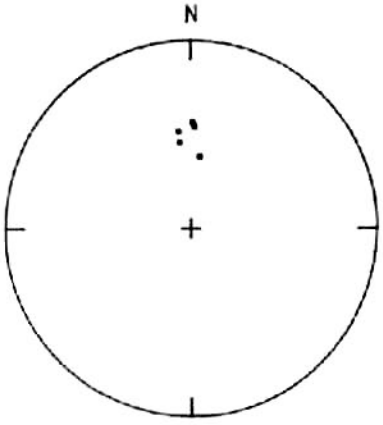
No.30-L



No.32

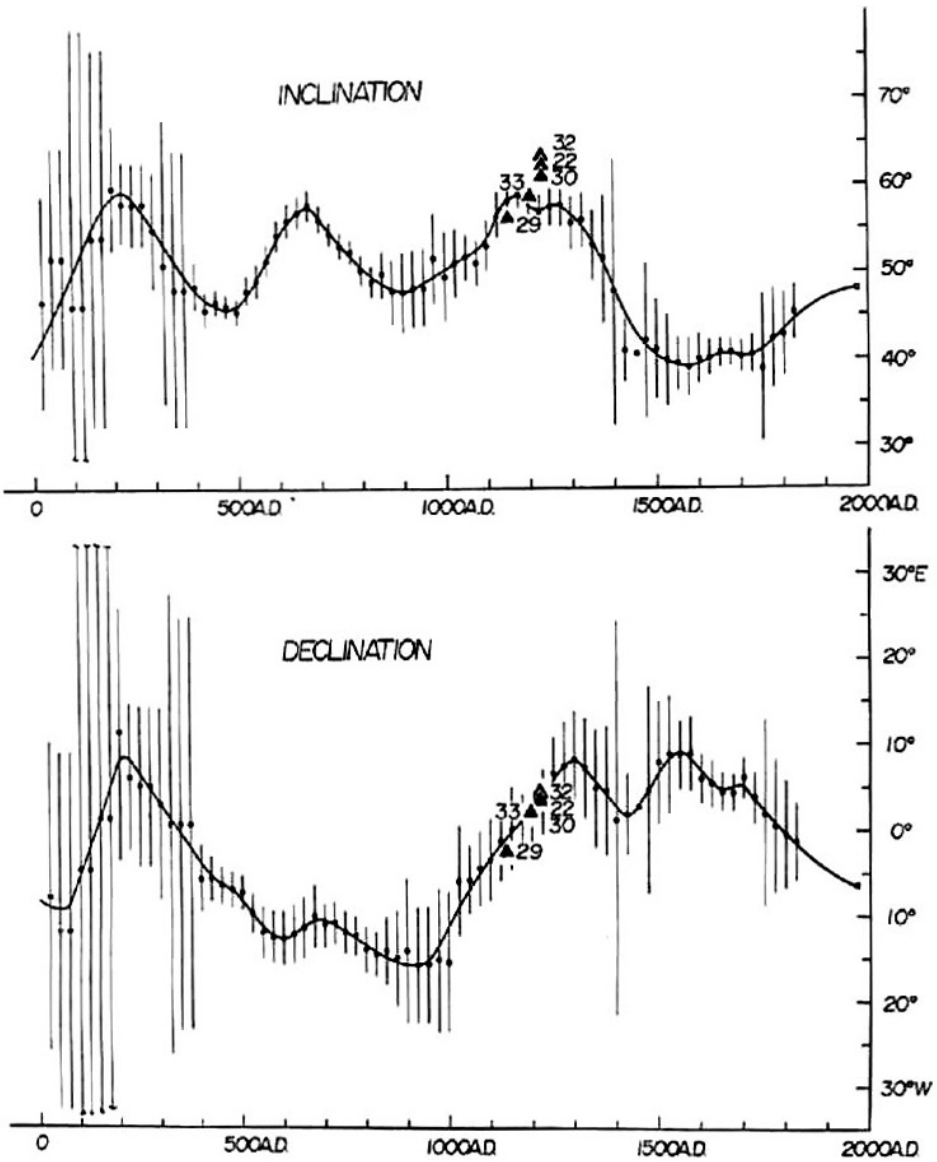


No.33



No.38

第1図　シュミット・ネットに投影した残留磁化方向（数字は窯の番号）



第2図　Shibuyaによる永年変化曲線と測定結果

遺物観察表

凡　例

1．口径、胴径の計算値に関しては、推定復元によって計測したものを(　)で記入し、残存部½以上のものは計測値 ㎝ をそのまま記入した。

　器高に関しては、(　)としたものはいずれも残存器高 ㎝ を示す。

2．小皿・塊・鉢・甕は、出土地層を末尾に記し、瓦・特殊遺物については、出土地点と出土土層を記入した。

3．出土地点は以下の略号で示す。

窯体内……〔窯〕

窯体内床面……〔窯床〕

灰原……〔灰〕

黄色盛土……〔黄盛〕

南灰原……〔南灰〕

西灰原……〔西灰〕

焚口灰層……〔焚灰〕

前庭部……〔前〕

床面下灰層……〔床灰〕

黄灰粘土……〔黄灰〕

灰褐色砂……〔灰褐〕

図版番号	口径	器高	底径	形態の特徴	成形技法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
10－1	7.8	1.7	4.9	・体部は内彎気味に立ち上り、口縁部でやや外反する。 ・端部は薄く尖り気味である。 ・底部、平底。	・内外面、ヨコナデ。 ・底部、回転糸切り。	砂粒を含む。	普通質	青灰色	〔窯〕
10－2	(7.5)	1.7	4.8	・体部は内彎気味に立ち上り、口縁部でやや外反する。 ・厚い底部を持ち、端部は丸く仕上げる。 ・底部、平底。	〃	〃	〃	〃	〔〃〕
10－3	7.4	1.9	4.7	・体部は内彎気味に立ち上り、口縁部でやや外反する。 ・端部は丸く納める。 ・底部、平底。	〃	〃	〃	〃	5の上に重ね焼。端部に自然釉がかかる。〔〃〕
10－4	7.7	1.9	4.3	・体部は内彎気味に立ち上る。 ・厚い底部を持ち、端部は丸く納める。 ・底部、平底。	〃	〃	〃	〃	外面一部に緑黒色の自然釉がかかる。〔〃〕
10－5	7.7	1.9	4.5	・体部は内彎気味に立ち上る。 ・端部は丸く納める。 ・底部、平底。	〃	〃	〃	〃	〔〃〕
10－6	7.6	1.85	4.7	・体部は内彎気味に立ち上り、口縁部でやや外反する。 ・端部は丸く納める。 ・底部、平底。	・内外面、ヨコナデ。 ・底部、回転糸切り。 ・ワラの圧痕あり。	〃	〃	〃	体部外面に自然釉がかかる。〔〃〕
10－7	(7.2)	1.75	5.4	〃	・内外面、ヨコナデ。 ・底部、回転糸切り。	〃	〃	〃	〔〃〕
10－8	8.0	1.7	4.6	・体部は直線的に口縁部にのびる。 ・端部は薄く、尖り気味である。 ・底部、平底。	・内外面、ヨコナデ。 ・底部、回転糸切り。 ・ワラの圧痕あり。	〃	〃	灰色	〔〃〕
10－9	6.9	1.8	4.6	・体部は内彎気味に立ち上る。 ・端部は丸く納める。 ・底部、平底。	・内外面、ヨコナデ。 ・底部、回転糸切り。	〃	〃	内、青灰色 外、暗灰色	外面一部に緑黒色の自然釉がかかる。〔〃〕

図版番号	口径	器高	底径	形態の特徴	成形技法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
10－11	(8.4)	1.65	(5.4)	・体部は内彎気味に立ち上る。 ・端部は尖り気味である。 ・底部　平底。	・内外面　ヨコナデ。 ・底部　回転糸切り。	砂粒を含む。	普通	灰白色	[灰]
10－12	8.0	1.9	4.9	・体部は内彎気味に立ち上り　口縁部でやや外反する。 ・端部は丸く納める。 ・底部　平底。	〃	〃	〃	青灰色	[〃]
10－13	7.7	1.8	4.4	〃	〃	〃	〃	〃	[〃]
10－14	(8.4)	2.1	4.9	・体部は内彎気味に立ち上る。 ・端部は丸く納める。 ・底部は高台気味に立ち上る。	〃	〃	〃	暗灰色	[〃]
10－15	(8.0)	1.95	4.7	・体部は内彎気味に立ち上る。 ・端部は丸く納める。 ・底部　平底。	〃	〃	〃	青灰色	[〃]
10－16	(8.0)	2.0	4.6	〃	〃	〃	〃	〃	体部外面に自然釉がかかる。 [〃]
10－17	8.4 8.8 8.8	－ － 1.6	－ － 4.4	・体部は内彎気味に立ち上る。 ・端部は丸く納める。 ・底部は高台気味に立ち上る。	〃	〃	〃	淡灰色	3枚重ね焼。 [〃]
10－18	8.1	1.95	4.7	・体部は内彎気味に立ち上り　口縁部でやや外反する。 ・端部は丸く納める。 ・底部　平底。	・内外面　ヨコナデ。 ・底部　回転糸切り。 ・ワラの圧痕あり。	〃	〃	青灰色	体部内面に自然釉がかかる。 [〃]
10－19	(8.7)	1.95	4.8	〃	・内外面　ヨコナデ。 ・底部　回転糸切り。	〃	〃	〃	[〃]

図版番号	口径	器高	底径	形態の特徴	成形技法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
10−20	(9.0)	1.9	5.4	・体部は内彎気味に立ち上る。 ・端部は丸く納める。 ・底部、平底。	・内外面、ヨコナデ。 ・底部 回転糸切り。	砂粒を含む。	良質	灰白色	(灰)
10−21	(8.2)	1.9	4.2	・体部は内彎気味に立ち上り、口縁部でやや外反する。 ・端部は丸く納める。 ・底部、平底。	〃	〃	須恵質	内、暗灰色 外、青灰色	(〃)
10−22	7.6 8.3 8.3	− − 1.9	− − 5.2	・体部は上2枚が内彎気味に立ち上り下1枚は口縁部でやや外反する。 ・端部は丸く納める。 ・底部、平底。	〃	〃	〃	内、灰白色 外、青灰色	3枚重ね焼。 (〃)
10−23	8.3	2.2	4.8	・体部は内彎気味に立ち上り、口縁部でやや外反する。 ・端部は丸く納める。 ・底部、平底。	〃	〃	〃	黒灰色	(〃)
10−24	7.9	1.95	4.35	・体部は内彎気味に立ち上る。 ・端部は丸く納める。 ・底部 平底。	〃	〃	〃	青灰色	(〃)
10−25	(8.1)	1.95	4.7	・体部は内彎気味に立ち上り、口縁部でやや外反する。 ・端部は丸く納める。 ・底部 平底。	〃	〃	〃	灰褐色	外面に黒色の自然釉がかかる。 (〃)
10−26	(7.9) 8.5 (8.8)	− 1.7 −	− 4.7 −	・体部は上2枚が内彎しながら口縁部でやや外反する。下1枚は内彎気味に立ち上る。 ・端部は丸く納める。 ・上1枚の底部は高台気味にせり上がる。	〃	〃	〃	灰白色	3枚重ね焼。 (〃)
10−27	(7.8)	1.95	4.2	・体部は内彎気味に立ち上る。 ・端部は丸く納める。 ・底部、平底。	〃	〃	〃	暗灰色	(〃)
10−28	7.85	1.85	5.05	〃	〃	〃	〃	青灰色	(〃)

図版番号	口径	器高	底径	形態の特徴	成形技法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
10－29	8.1	2.0	5.0	・体部は内彎気味に立ち上り、口縁部でやや外反する。 ・端部は丸く納める。 ・底部は一部高台気味に立ち上る。	・内外面、ヨコナデ。 ・底部、回転糸切り。	砂粒を含む。	須恵質	青灰色	口縁部に自然釉がかかる。〔灰〕
10－30	(7.8)	1.7	4.4	・体部は内彎気味に立ち上る。 ・端部は丸く納める。 ・底部は高台気味に立ち上る。	〃	〃	〃	〃	〔〃〕
10－31	7.9	2.1	4.8	・体部は内彎気味に立ち上る。 ・端部は丸く納める。 ・底部、平底。	〃	〃	〃	黒灰色	〔〃〕
10－32	8.7	1.6	4.5	・体部は内彎気味に立ち上り、口縁部でやや外反する。 ・端部は丸く納める。 ・底面、平底。	〃	〃	〃	青灰色	〔〃〕
10－33	(8.9)	2.15	5.2	・体部は内彎気味に立ち上る。 ・端部は薄く尖り気味である。 ・底部、平底。	〃	〃	〃	暗灰色	〔〃〕
10－34	8.2	1.95	3.9	・体部は内彎気味に立ち上り、口縁部でやや外反する。 ・端部は丸く納める。 ・底部は高台気味に立ち上る。	〃	〃	〃	青灰色	〔〃〕
10－35	8.0	1.95	4.6	・体部は内彎気味に立ち上る。 ・端部は丸く納める。 ・底部、平底。	〃	〃	〃	灰色 体部外面一部、灰白色	〔〃〕
10－36	(8.6)	1.5	3.9	・体部は内彎気味に立ち上り、口縁部で外反する。 ・端部は薄く尖り気味である。 ・底部、平底。	〃	〃	生焼け	黄灰色	〔〃〕
10－37	(8.0)	1.85	4.5	・体部は内彎気味に立ち上り、口縁部でやや外反する。 ・端部は丸く納める。 ・底部、平底。	〃	〃	須恵質	黒灰色	〔〃〕

図版番号	口径	器高	底径	形態の特徴	成形技法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
10－38	8.0	2.1	4.75	・体部は内彎気味に立ち上り、口縁部はやや外反する。 ・端部は丸く納める。 ・底部は高台気味に立ち上る。	・内外面、ヨコナデ。 ・底部、回転糸切り。	砂粒を含む。	須恵質	灰白色	(灰)
10－39	7.7	1.65	4.8	・体部は内彎気味に立ち上り、口縁部は外反する。 ・端部は薄く尖り気味である。 ・底部、平底。	〃	〃	〃	〃	(〃)
10－40	7.7	1.65	4.3	・体部は内彎気味に立ち上り、口縁部はやや外反する。 ・端部は丸く納める。 ・底部、平底。	〃	〃	〃	青灰色	(〃)
10－41	8.3	2.0	4.4	・体部は内彎気味に立ち上り、口縁部はやや外反する。 ・端部は丸く納める。 ・底部は高台気味に立ち上る	〃	〃	〃	灰色	(〃)
10－42	7.9	2.05	3.45	〃	〃	〃	〃	青灰色	(〃)
10－43	(7.9)	2.1	4.5	・体部は内彎気味に立ち上る。 ・端部は丸く納める。 ・底部は高台気味に立ち上る。	〃	〃	〃	内、灰色 外、黒灰色	体部外面に銀黒色の自然釉がかかる。(〃)
10－44	7.3	1.9	4.4	・体部は内彎気味に立ち上り、口縁部でやや外反する。 ・端部は丸く納める。 ・底部は高台気味に立ち上る。	〃	〃	〃	青灰色	(〃)
10－45	7.8	2.35	3.9	〃	〃	〃	〃	灰白色	(〃)
10－46	(8.0)	2.15	4.8	〃	〃	〃	〃	青灰色	(〃)

図版番号	口径	器高	底径	形態の特徴	成形技法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
10－47	(8.2)	1.95	4.8	・体部は内彎気味に立ち上り、口縁部でやや外反する。 ・端部は丸く納める。 ・底部は高台気味に立ち上る。	・内外面、ヨコナデ。 ・底部、回転糸切り。	砂粒を含む。	須恵質	灰白色	〔灰〕
10－48	8.65	2.05	5.0	〃	〃	〃	〃	〃	〔〃〕
10－49	8.35	1.8	4.25	・体部は内彎気味に立ち上る。 ・端部は薄く尖り気味である。 ・底部、平底。	〃	〃	〃	暗灰色	〔〃〕
10－50	8.4	1.8	5.0	・体部は内彎気味に立ち上る。 ・端部は丸く納める。 ・底部は高台気味に立ち上る。	〃	〃	〃	青灰色	〔〃〕
10－51	(7.9)	1.9	5.0	〃	〃	〃	〃	内、暗灰色 外　黒灰色	体部外面一部に黒色の自然釉がかかる。 〔〃〕
10－52	(8.4)	1.8	4.8	・体部は内彎気味に立ち上り、口縁部はやや外反する。 ・端部は丸く納める。 ・底部は高台気味に立ち上る。	〃	〃	〃	青灰色	〔〃〕
10－53	(8.0)	1.95	4.6	・体部は内彎気味に立ち上る。 ・端部は丸く納める。 ・底部は高台気味に立ち上る。	〃	〃	〃	暗灰色	〔〃〕
10－54	(8.2)	1.9	4.7	・体部は内彎気味に立ち上り、口縁部でやや外反する。 ・端部は丸く納める。 ・底部は高台気味に立ち上る。	〃	〃	〃	青灰色	端部に自然釉がかかる。 〔〃〕
10－55	(8.5)	1.8	4.6	〃	〃	〃	〃	灰白色	〔〃〕

図版番号	口径	器高	底径	形態の特徴	成形技法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
10－56	(8.0)	1.95	4.5	・体部は内彎気味に立ち上り、口縁部はやや外反する。 ・端部は丸く納める。 ・底部は高台気味に立ち上る。	・内外面、ヨコナデ。 ・底部　回転糸切り。	砂粒を含む。	普通	暗灰色	口縁部に自然釉がかかる。〔秋〕
10－57	8.2 8.6	－ 4.8	－ 1.75	・体部は内彎気味に立ち上る。 ・端部は丸く納める。 ・底部は高台気味に立ち上る。	〃	〃	〃	灰白色	2枚重ね焼。〔〃〕
10－58	8.7	1.8	5.1	〃	〃	〃	〃	青灰色	〔〃〕
11－97	(6.5)	1.7	5.4	・体部は内彎気味に立ち上る。 ・端部は丸く納める。 ・底部、平底。	〃	〃	〃	〃	〔黄緑〕
11－98	(8.4)	1.95	4.2	〃	〃	〃	〃	〃	〔〃〕
12-107	8.2	1.8	4.3	・体部は内彎気味に立ち上り、口縁部はやや外反する。 ・端部は丸く納める。 ・底部、平底。	〃	〃	〃	暗灰色	〔黒〕
12-108	(8.2)	1.7	5.4	・体部は内彎気味に立ち上る。 ・端部は丸く納める。 ・底部、平底。	〃	〃	〃	灰色	〔〃〕
12-119	8.4	2.0	4.5	〃	〃	〃	〃	灰白色	〔酒灰〕
12-120	(7.8)	1.9	4.5	・体部は内彎気味に立ち上り、口縁部はやや外反する。 ・端部は丸く納める。 ・底部、平底。	〃	〃	〃	灰色	〔〃〕

図版番号	口径	器高	底径	形態の特徴	成形技法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
12-121	(9.2)	1.6	(6.1)	・体部は内彎気味に立ち上る。 ・端部は丸く納める。 ・底部、平底。	・内外面、ヨコナデ。 ・底部、回転糸切り。	砂粒を含む。	須恵質	灰色	〔西灰〕
19-204	(8.2)	1.15	5.8	・体部は内彎気味に立ち上り、口縁部は外反する。 ・器高は低く、口縁部は丸く納める。 ・底部、平底。	〃	〃	〃	淡灰色	〔笑灰〕
21-229	8.3	1.5	4.4	・体部は内彎気味に立ち上る。 ・端部は平坦面を持つ。 ・底部、平底。	・内外面、ヨコナデ。 ・底部、未調整。	〃	土師器	橙灰色	〔窯〕
33-324	(7.8)	1.65	(6.0)	・体部は内彎気味に立ち上る。 ・端部は丸く肥厚する。 ・底部は高台気味に立ち上る。	・内外面、ヨコナデ。 ・平底、回転糸切り。	〃	須恵質	茶灰色	〔灰〕
33-325	(8.1)	1.75	(5.6)	・体部は内彎気味に立ち上り、口縁部でやや外反する。 ・端部は丸く納める。 ・底部、平底。	〃	〃	〃	暗灰色	〔〃〕
33-326	(7.4)	1.3	(6.0)	・体部は内彎気味に立ち上る。 ・端部は丸く納める。 ・底部、平底。 ・器高は低い。	〃	〃	生焼け	褐灰色	〔〃〕
33-327	(8.0)	1.7	(6.3)	・体部は内彎気味に立ち上る。 ・端部は丸く納める。 ・底部、平底。	〃	〃	須恵質	灰色	〔〃〕
59-524	(7.8)	1.25	5.6	・体部は内彎気味に立ち上る。 ・端部は丸く納める。 ・底部、平底。 ・器高は低い。	〃	〃	瓦質	内外、灰白色口縁部、黒色	〔〃〕
80-814	7.6	1.9	4.6	・体部は内彎気味に立ち上り、口縁部はやや外反する。 ・端部は丸く納める。 ・底部、平底。	〃	〃	須恵質	灰色	〔表採〕

図版番号	口径	器高	底径	形態の特徴	成形技法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
80-815	(8.9)	1.8	4.5	・体部は内彎気味に立ち上り，口縁部はやや外反する。 ・端部は丸く納める。 ・底部，平底。	・内外面，ヨコナデ。 ・底部，回転糸切り。	砂粒を含む。	須恵質	灰色	(表採)
72-626	6.8	1.7	—	・体部は内彎気味に立ち上る。	・内外面とも手づくね。	砂粒を含み，良。	〃	黒灰色	(〃)

塊

図版番号	口径	器高	底径	形態の特徴	成形技法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
10-59	14.8	4.7	6.1	・体部は内彎気味に立ち上る。 ・端部は丸く納める。 ・底部は円盤状に突出する。	・内外面，ヨコナデ。 ・底部，回転糸切り。	砂粒を含む。	須恵質	灰色	(灰)
10-60	(13.7)	4.8	4.7	・体部は内彎気味に立ち上る。 ・端部は丸く納める。 ・底部，平底。	〃	〃	〃	〃	(〃)
10-61	15.15	4.8	6.2	・体部は内彎気味に立ち上り，口縁部でやや外反する。 ・端部は丸く肥厚する。 ・底部は円盤状に突出する。	〃	〃	〃	灰白色	(〃)
10-62	14.7	4.8	6.2	・体部は内彎気味に立ち上る。 ・端部は丸く納める。 ・底部は円盤状に突出する。	〃	〃	生焼け	黄灰色	(〃)
10-63	(15.5)	4.7	6.9	・体部は内彎気味に立ち上り，口縁部でやや外反する。 ・端部は丸く肥厚する。 ・底部，平底。	〃	〃	須恵質	青灰色	(〃)
10-64	(15.5)	5.1	7.0	・体部は内彎気味に立ち上り，口縁部でやや外反する。 ・端部は丸く納める。 ・底部は円盤状に突出する。	〃	〃	生焼け	黄灰色	(〃)

図版番号	口径	器高	底径	形態の特徴	成形技法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
10－65	15.4	5.4	6.2	・体部は内彎気味に立ち上り、口縁部でやや外反する。 ・端部は丸く納める。 ・底部は円盤状に突出する。	・内外面、ヨコナデ。 ・底部、回転糸切り。	砂粒を含む。	生焼け	黄灰色	〔灰〕
10－66	15.7	5.8	6.1	〃	〃	〃	須恵質	暗灰色	〔〃〕
10－67	14.5	4.65	5.9	・体部は内彎気味に立ち上る。 ・端部は丸く納める。 ・底部は円盤状に突出する。	〃	〃	〃	灰白色	〔〃〕
10－68	(16.2)	4.7	6.7	〃	・内外面、ヨコナデ。 ・底部、回転糸切り。 ・粘土紐巻き上げの痕跡あり。	〃	〃	青灰色	〔〃〕
10－69	(14.8)	4.65	(5.1)	・体部は内彎気味に立ち上り、口縁部でやや外反する。 ・端部は丸く納める。 ・底部は円盤状に突出する。	・内外面、ヨコナデ。 ・底部、回転糸切り。	〃	〃	〃	〔〃〕
10－70	16.2	4.55	7.6	〃	・内外面、ヨコナデ。 ・底部、回転糸切り。 ・粘土紐巻き上げの痕跡あり。	〃	〃	〃	〔〃〕
10－71	(15.6)	4.5	6.9	〃	〃	〃	〃	青灰白色	〔〃〕
10－72	16.7	6.6	6.3	・体部は内彎気味に立ち上り、口縁部でやや外反する。 ・端部は丸く納める。 ・底部は円盤状に突出する。 ・器高は高い。	・内外面、ヨコナデ。 ・底部　回転糸切り。	〃	〃	暗灰色	〔〃〕
10－73	(15.4)	4.5	6.8	・体部は内彎気味に立ち上り、口縁部でやや外反する。 ・端部は丸く納める。 ・底部は円盤状の突出はあるが、平底。	〃	〃	〃	灰白色	〔〃〕

図版番号	口径	器高	底径	形態の特徴	成形技法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
10－74	(15.0)	4.6	6.6	・体部は内彎気味に立ち上り、口縁部でやや外反する。 ・端部は丸く納める。 ・底部は円盤状に突出する。	・内外面、ヨコナデ。 ・底部、回転糸切り。	砂粒を含む。	生焼け	黄灰色	〔灰〕
10－75	16.3	4.35	4.5	・体部は内彎気味に立ち上り、口縁部でやや外反する。 ・端部は丸く納める。 ・底部、平底。	〃	〃	須恵質	黒灰色	〔〃〕
10－76	14.9	4.5	6.0	・体部は内彎気味に立ち上り、口縁部でやや外反する。 ・端部は丸く肥厚する。 ・底部は円盤状に突出する。	〃	〃	〃	青灰色	〔〃〕
10－77	16.3	5.0	6.5	〃	・内外面、ヨコナデ。 ・底部、成形不明。	〃	生焼け	黒灰色	〔〃〕
10－78	(15.8)	4.6	6.0	・体部は内彎気味に立ち上り、口縁部でやや外反する。 ・端部は丸く納める。 ・底部は円盤状に突出する。	・内外面、ヨコナデ。 ・底部、回転糸切り。	〃	須恵質	青灰色	〔〃〕
11－79	(15.7)	5.0	5.9	・体部は内彎気味に立ち上り、口縁部でやや外反する。 ・端部は丸く肥厚する。 ・底部は円盤状に突出する。	〃	〃	〃	〃	〔〃〕
11－80	16.1	4.7	5.9	・体部は内彎気味に立ち上り、口縁部でやや外反する。 ・端部は丸く納める。 ・底部は円盤状に突出する。	・内外面、ヨコナデ。 ・底部、回転糸切り。 ・粘土紐巻き上げの痕跡あり。	〃	〃	〃	〔〃〕
11－81	(15.6)	4.55	6.3	〃	・内外面、ヨコナデ。 ・底部、回転糸切り。	〃	〃	〃	〔〃〕
11－82	16.8	4.4	6.3	・体部は内彎気味に立ち上り、口縁部でやや外反する。 ・端部は丸く肥厚する。 ・底部、平底。	〃	〃	〃	〃	〔〃〕

図版番号	口径	器高	底径	形態の特徴	成形技法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
11－83	(16.4)	4.5	6.0	・体部は内彎気味に立ち上る。 ・端部は丸く納める。 ・底部は円盤状に突出する。	・内外面，ヨコナデ。 ・底部，回転糸切り。	砂粒を含む。	普通	青灰色	〔灰〕
11－84	(15.6)	4.4	(6.2)	・体部は内彎気味に立ち上り，口縁部でやや外反する。 ・端部は丸く納める。 ・底部は円盤状に突出する。	〃	〃	〃	〃	〔〃〕
11-85	(15.8)	4.6	6.4	・体部は内彎気味に立ち上り，口縁部で外反する。 ・端部は丸く肥厚する。 ・底部は円盤状に突出する。	〃	〃	〃	〃	〔〃〕
11－86	(17.2)	4.4	6.7	・体部は内彎気味に立ち上り，口縁部でやや外反する。 ・端部は丸く納める。 ・底部は円盤状に突出する。	・内外面，ヨコナデ。 ・底部，回転糸切り。 ・粘土紐巻き上げの痕跡あり。	〃	〃	〃	〔〃〕
11－99	15.8	4.1	6.0	・体部は内彎気味に立ち上り，口縁部でやや外反する。 ・端部は丸く納める。 ・底部は高台気味に立ち上る。	・内外面，ヨコナデ。 ・底部，回転糸切り。	〃	〃	〃	〔黄盛〕
11-100	15.6	5.4	5.6	・体部は内彎気味に立ち上り，口縁部でやや外反する。 ・端部は丸く納める。 ・底部は円盤状に突出する。	〃	〃	〃	灰色	〔〃〕
11-101	14.5	4.7	5.2	・体部は内彎気味に立ち上る。 ・端部は丸く納める。 ・底部は円盤状に突出する。	〃	〃	〃	〃	〔〃〕
11-102	(14.7)	5.2	5.2	・体部は内彎気味に立ち上り，口縁部でやや外反する。 ・端部は丸く納める。 ・底部は円盤状に突出する。	〃	〃	〃	青灰色	〔〃〕
11-103	15.5	4.5	6.4	・体部は内彎気味に立ち上り，口縁部でやや外反する。 ・端部は丸く肥厚する。 ・底部，平底。	〃	〃	〃	〃	〔〃〕

図版番号	口径	器高	底径	形態の特徴	成形技法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
11-104	(15.4)	5.7	6.3	・体部は内彎気味に立ち上る。 ・端部は丸く納める。 ・底部は円盤状に突出する。 ・器高は高い。	・内外面、ヨコナデ。 ・底部、回転糸切り。	砂粒を含む。	須恵質	青灰色	〔黄盛〕
11-105	(15.7)	4.65	6.8	・体部は内彎気味に立ち上り、口縁部でやや外反する。 ・端部は丸く納める。 ・底部は円盤状に突出する。	〃	〃	〃	〃	〔〃〕
11-106	(15.9)	3.9	6.5	・体部は内彎気味に立ち上る。 ・端部は丸く納める。 ・底部は円盤状に突出する。	〃	〃	生焼け	黄白色	〔〃〕
12-122	(15.0)	4.8	(5.7)	・体部は内彎気味に立ち上り、口縁部でやや外反する。 ・端部は丸く納める。 ・底部、平底。	・内外面、ヨコナデ。 ・底部、静止糸切り。 ・粘土紐巻き上げ痕跡あり。	砂粒を含み、良。	須恵質	青灰色	〔南灰〕
12-123	(15.6)	5.0	5.0	・体部は内彎気味に立ち上り、口縁部でやや外反する。 ・端部は丸く肥厚する。 ・底部、平底。	・内外面、ヨコナデ。 ・底部、回転糸切り。	砂粒を含む。	瓦質	灰白色 口縁部、黒灰色	〔〃〕
12-124	(16.2)	3.8	(5.6)	・体部は内彎気味に立ち上り、口縁部で外反する。 ・端部は丸く納める。 ・底部、平底。	・内外面、ヨコナデ。 ・底部、不明。	〃	須恵質	灰色	〔〃〕
12-125	14.8	4.6	5.4	・体部は内彎気味に立ち上る。 ・端部は丸く納める。 ・底部、平底。	・内外面、ヨコナデ。 ・底部、静止糸切り。 ・内面、仕上げナデを施す。	〃	〃	暗灰色	〔〃〕
12-126	(15.6)	5.1	(6.15)	・体部は内彎気味に立ち上り、口縁部でやや外反する。 ・端部は丸く納める。 ・底部、平底。	・内外面、ヨコナデ。 ・底部、回転糸切り。	〃	生焼け	灰白色 口縁部、黒灰色	〔〃〕
12-127	15.8	5.0	5.4	・体部は内彎気味に立ち上り、口縁部でやや外反する。 ・端部は丸く肥厚する。 ・底部、平底。	・内外面、ヨコナデ。 ・底部、回転糸切り。 ・内面、仕上げナデを施す。	砂粒を含み、良。	須恵質	青灰色	〔〃〕

図版番号	口径	器高	底径	形態の特徴	成形技法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
12-128	(14.9)	5.3	5.5	・体部は内彎気味に立ち上り、口縁部でやや外反する。 ・端部は丸く納める。 ・底部、平底。	・内外面、ヨコナデ。 ・底部、静止糸切り。	砂粒を含む。	普通質	灰白色	[南灰]
12-129	16.0	5.25	5.5	・体部は内彎気味に立ち上り、口縁部でやや外反する。 ・端部は丸く肥厚する。 ・底部、平底。	・内外面、ヨコナデ。 ・底部、回転糸切り。 ・内面、仕上げナデを施す。	〃	〃	青灰色	(〃)
12-130	(16.0)	5.1	5.5	・体部は内彎気味に立ち上り、口縁部でやや外反する。 ・端部は丸く納める。 ・底部、平底。	〃	〃	〃	黒色	(〃)
12-131	(15.8)	5.1	(5.5)	・体部は内彎気味に立ち上り、口縁部でやや外反する。 ・端部は丸く納める。 ・底部、不明。	・内外面、ヨコナデ。 ・底部、不明。	〃	〃	青灰色	(〃)
12-132	(15.9)	5.4	5.9	・体部は内彎気味に立ち上り、口縁部でやや外反する。 ・端部は丸く肥厚する。 ・底部、平底。	・内外面、ヨコナデ。 ・底部、回転糸切り。	〃	瓦質	灰白色 口縁部、黒灰色	(〃)
12-133	16.0	5.4	6.0	〃	〃	〃	普通質	暗灰色	(〃)
13-134	15.5	5.1	5.6	〃	・内外面、ヨコナデ。 ・底部、静止糸切り。 ・内面、仕上げナデを施す。	〃	〃	灰色	(〃)
13-135	(15.4)	5.1	5.2	〃	〃	〃	〃	〃	(〃)
13-136	14.8	4.4	5.6	・体部は内彎気味に立ち上り、口縁部でやや外反する。 ・端部は丸く納める。 ・底部、平底。	・内外面、ヨコナデ。 ・底部、静止糸切り。	〃	〃	青灰色	(〃)

図版番号	口径	器高	底径	形態の特徴	成形技法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
13-137	15.6	5.5	5.2	・体部は内彎気味に立ち上り、口縁部でやや外反する。 ・端部は丸く肥厚する。 ・底部、平底。	・内外面、ヨコナデ。 ・底部、回転糸切り。	砂粒を含む。	瓦質	灰白色 口縁部、黒灰色	[南灰]
13-138	(15.9)	4.9	(5.6)	・体部は内彎気味に立ち上り、口縁部でやや外反する。 ・端部は丸く納める。 ・底部、平底。	・内外面、ヨコナデ。 ・底部、静止糸切り。	〃	須恵質	灰色 口縁部、濃黒色	[〃]
21-230	12.2	2.9	7.3	・体部はゆるく外反する。 ・端部は丸く、内側に向っておれる。	・内外面、ヨコナデ。 ・底部、未調整。	〃	土師器	黄灰色	[窯]
21-231	16.4	5.3	5.1	・体部は内彎気味に立ち上り、口縁部でやや外反する。 ・端部は丸く納める。 ・底部、平底。	・内外面、ヨコナデ。 ・底部、回転糸切り。 ・内面、仕上げナデを施す。	〃	瓦質	灰色 口縁部、黒灰色	[〃]
21-232	14.4	4.6	5.75	・体部は内彎気味に立ち上り、口縁部でやや外反する。 ・端部は丸く肥厚する。 ・底部、平底。	・内外面、ヨコナデ。 ・底部、回転糸切り。	〃	〃	灰白色 口縁部、黒灰色	[〃]
27-292	(14.6)	4.7	5.1	・体部は内彎気味に立ち上り、口縁部でやや外反する。 ・端部は丸く納める。 ・底部、平底。	〃	〃	須恵質	暗灰色	[前]
27-293	(15.7)	4.65	5.4	・体部は内彎気味に立ち上り、口縁部でやや外反する。 ・端部は丸く肥厚する。 ・底部、平底。	〃	〃	〃	〃	[〃]
27-294	(15.8)	4.9	5.4	・体部は内彎気味に立ち上る。 ・端部は丸く納める。 ・底部、平底。	〃	〃	〃	〃	[〃]
33-328	(15.2)	4.8	5.1	・体部は内彎気味に立ち上り、口縁部でやや外反する。 ・端部は丸く納める。 ・底部、平底。	〃	〃	〃	〃	[灰]

図版番号	口径	器高	底径	形態の特徴	成形技法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
40-368	14.5	3.9	7.1	・体部は内彎気味に立ち上り、口縁部でやや外反する。 ・端部は丸く納める。 ・底部、平底。	・内外面、ヨコナデ。 ・底部、回転糸切り。	砂粒を含む。	生焼け	黄褐色 口縁部、黒灰色	〔窯〕
40-369	14.6	4.85	4.3	・体部は内彎気味に立ち上る。 ・端部は丸く納める。 ・底部、平底。	〃	〃	〃	灰白色	〔窯床〕
40-376	16.4	4.9	5.4	・体部は内彎気味に立ち上る。 ・端部は丸く肥厚する。 ・底部、平底。	〃	〃	瓦質	内、灰白色 外、黒灰色	〔床灰〕
40-377	(17.1)	4.7	(5.2)	・体部は内彎気味に立ち上り、口縁部でやや外反する。 ・端部は丸く肥厚する。 ・底部、平底。	〃	〃	〃	灰色 口縁部、黒色	〔〃〕
40-378	16.2	4.2	4.9	・体部は内彎気味に立ち上る。 ・端部は丸く肥厚する。 ・底部、平底。	〃	〃	〃	灰白色 口縁部、黒色	〔〃〕
40-379	(16.0)	5.1	5.4	〃	〃	〃	〃	内、灰白色 外、黒灰色	〔〃〕
40-380	15.9	4.4	5.4	・体部は内彎気味に立ち上り、口縁部でやや外反する。 ・端部は丸く納める。 ・底部は高台気味に立ち上る。	〃	〃	〃	灰白色 口縁部、黒灰色	〔〃〕
59-526	16.0	4.3	6.7	・体部は内彎気味に立ち上り、口縁部でやや外反する。 ・端部は丸く肥厚する。 ・底部、平底。	〃	〃	須恵質	灰色 口縁部、黒褐色	〔灰〕
59-527	(15.0)	4.3	(5.6)	・体部は内彎気味に立ち上る。 ・端部は丸く納める。 ・底部、平底。	〃	〃	〃	青灰色	〔〃〕

図版番号	口径	器高	底径	形態の特徴	成形技法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
59-528	16.0	4.6	5.8	・体部は内彎気味に立ち上り、口縁部でやや外反する。 ・端部は丸く納める。 ・底部、平底。	・内外面、ヨコナデ。 ・底部、回転糸切り。	砂粒を含む。	瓦質	灰白色 口縁部、黒灰色	(灰)
59-529	(16.2)	4.1	(5.2)	・体部は内彎気味に立ち上る。 ・端部は丸く納める。 ・底部、平底。	〃	〃	須恵質	暗灰色	(〃)
59-530	(16.5)	4.5	5.9	・体部は内彎気味に立ち上り、口縁部でやや外反する。 ・端部は丸く納める。 ・底部、平底	〃	〃	瓦質	灰白色 口縁部、黒灰色	(〃)
80-813	(15.4)	3.8	(5.1)	・体部は内彎気味に立ち上る。 ・端部は丸く納める。 ・底部は円盤状に突出する。	〃	〃	須恵質	灰色	(表採)
72-627	14.6	6.2	10.4	・体部は直線的に口縁部に続く。 ・端部は丸く納める。 ・高台は外反気味に貼り出し、端部は丸く納める。	・内外面、ヨコナデ ・底部、糸切り後貼り付け高台。	〃	土師器	暗灰色	(盛)

鉢

鉢(1)

図版番号	口径	器高	底径	形態の特徴	成形技法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
10－10	(31.0)	11.5	10.6	・体部は内彎気味に立ち上り、直線的に口縁部に続く。 ・端部は平坦面を持ち、下方を若干つまみ出す。 ・底部、平底。	・内外面、ヨコナデ。 ・底部、回転糸切り(?)。 ・内面、ていねいな仕上げナデを施す。	砂粒を含み、良。	須恵質	暗灰色	(窯)
11－87	(32.0)	(6.7)	－	・体部は直線的に口縁部に続く。 ・端部は丸味を持ち、上方に若干つまみ出す。	・内外面、ヨコナデ。 ・内面、刷毛仕上げ。	砂粒を含む。	瓦質	内、黒灰色 外、灰白色 口縁部、黒灰色	(灰)
11－88	(28.5)	(7.2)	－	・体部は外反気味に立ち上る。 ・端部は平坦面を持ち、外方に若干つまみ出す。	・内外面、ヨコナデ。 ・内面、仕上げナデを施す。	〃	須恵質	暗灰色	(〃)

図版番号	口径	器高	底径	形態の特徴	成形技法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
11－89	(31.0)	(10.9)	－	・体部は内彎気味に立ち上り，外反しながら口縁部に続く。 ・端部は凹面を持ち，上下につまみ出す。	・内外面，ヨコナデ。 ・内面，ていねいな仕上げナデを施す。	砂粒を含む。	須恵質	暗灰色	(灰)
11－90	(30.3)	(6.8)	－	・体部は外反気味に立ち上る。 ・端部は平坦面を持ち，外方につまみ出す。	〃	〃	〃	灰白色	内面に自然釉がかかる。 (〃)
11－91	(29.6)	11.3	(9.4)	・体部は外反気味に立ち上る。 ・端部は平坦面を持ち，外方に若干つまみ出す。 ・底部，平底。	・内外面，ヨコナデ。 ・底部，不明。 ・内面，ていねいな仕上げナデを施す。	〃	瓦質	灰色	(〃)
11－92	(28.0)	10.8	9.4	・体部は内彎気味に立ち上る。 ・端部は丸味を持ち，外方につまみ出す。 ・底部，平底。	・内外面，ヨコナデ。 ・底部，回転糸切り。 ・底部周縁，ナデ仕上げ。 ・内面，仕上げナデを施す。	〃	須恵質	暗灰色	口縁部に自然釉がかかる。 (〃)
11－93	(33.2)	12.4	(12.2)	・体部は内彎気味に立ち上り，直線的に口縁部に続く。 ・端部は平坦面を持ち，上下に若干つまみ出す。 ・底部は高台気味に立ち上る。	・内外面，ヨコナデ。 ・底部，回転糸切り。 ・内面，ていねいな仕上げナデを施す。	〃	〃	内，黒灰色 外，灰色	(〃)
11－94	(19.6)	12.0	10.4	・体部は内彎気味に立ち上り，直線的に口縁部に続く。 ・端部は平坦面を持ち，上下につまみ出す。 ・底部は高台気味に立ち上る。	・内外面，ヨコナデ。 ・底部，静止糸切り。 ・底部周縁，一部ヘラ削り。 ・内面，刷毛仕上げ。	〃	〃	灰色	(〃)
12-110	20.6	7.4	6.9	・体部は内彎気味に立ち上る。 ・端部は平坦面を持つ。 ・底部，平底。	・内外面，ヨコナデ。 ・底部，回転糸切り。	〃	〃	内，灰白色 外，黒灰色	小型鉢 全体に自然釉がかかる。 [窯床]
12-111	19.4	7.0	7.6	・体部は外反気味に立ち上る。 ・端部は平坦面を持ち，端部以外は丸みを持つ。 ・底部は高台気味に立ち上る。	〃	砂粒を含み，良。	〃	暗灰色	小型鉢 (〃)
12-112	(33.1)	(9.1)	－	・体部は直線的に口縁部に続く。 ・端部は凹面を持ち，若干上下につまみ出す。	・内外面，ヨコナデ。 ・内面，ていねいな仕上げナデを施す。	砂粒を含む。	〃	〃	(〃)

図版番号	口径	器高	底径	形態の特徴	成形技法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
12-113	－	(13.0)	11.2	・体部は内彎気味に立ち上り，直線的に口縁部に続く。 ・底部，貼り付け高台。	・内外面，ヨコナデ。 ・底部，不明。高台部，ナデ仕上げ。 ・内面，仕上げナデを施す。	砂粒を含む。	須恵質	灰色	(窯)
12-114	(34.8)	(6.9)	－	・体部は直線的に口縁部に続く。 ・端部は凹面を持ち，上下につまみ出す。	・内外面，ヨコナデ。 ・内面，ていねいな仕上げナデを施す。	〃	〃	暗灰色	(窯床)
12-115	32.4	11.95	9.1	・体部は内彎気味に立ち上り，外反しながら口縁部に続く。 ・端部は凹面を持ち，上下につまみ出す。 ・底部，平底。	・内外面，ヨコナデ。 ・底部，回転糸切り。 ・底部周縁，ヘラ削り。 ・内面，仕上げナデを施す。	〃	〃	青灰色	両口鉢(〃)
13-139	21.35	8.45	6.45	・体部は内彎気味に立ち上る。 ・端部は平坦面を持ち，外方につまみ出す。 ・底部は円盤状に突出する。	・内外面，ヨコナデ。 ・底部，静止糸切り。 ・内面，ていねいな仕上げナデを施す。	〃	〃	暗灰色	小型鉢(南氏)
13-140	21.4	7.5	7.25	・体部は内彎気味に立ち上り，外反しながら口縁部に続く。 ・端部は平坦面を持つ。 ・底部，平底。	〃	〃	〃	灰色	小型鉢(〃)
13-141	21.5	8.7	7.8	・体部は内彎気味に立ち上る。 ・端部は丸みを持ち，外方につまみ出す。 ・底部，平底。	・内外面，ヨコナデ。 ・底部，静止糸切り。 ・底部内面，ていねいな仕上げナデを施す。 ・底部外面に「×」印有り。	〃	〃	暗灰色	小型鉢(〃)
13-142	20.8	8.75	8.2	・体部は内彎気味に立ち上る。 ・端部は平坦面を持ち，外方につまみ出す。 ・底部，平底。	・内外面，ヨコナデ。 ・底部，静止糸切り。 ・底部周縁，ヘラ削り。 ・内面，ていねいな仕上げナデを施す。	〃	〃	〃	小型鉢(〃)
13-143	(21.0)	8.1	7.8	・体部は直線的に口縁部に続く。 ・端部は平坦面を持ち，外方につまみ出す。 ・底部，平底。	・内外面，ヨコナデ。 ・底部，静止糸切り。	〃	瓦質	灰白色口縁部，黒灰色	小型鉢(〃)
13-144	(22.5)	8.2	9.0	・体部は内彎気味に立ち上る。 ・端部は平坦面を持ち，外方につまみ出す。 ・底部，平底。	・内外面，ヨコナデ。 ・底部，不明。 ・内面，ていねいな仕上げナデを施す。	〃	〃	黄灰色口縁部，黒灰色	小型鉢(〃)

図版番号	口径	器高	底径	形態の特徴	成形技法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
13-145	11.9	8.6	8.9	・体部は内彎気味に立ち上る。 ・端部は平坦面を持つ。 ・底部、平底。	・内外面、ヨコナデ。 ・底部、静止糸切り。 ・内面、ていねいな仕上げナデを施す。	砂粒を含む。	須恵質	灰色	小型鉢〔南灰〕
13-146	(30.6)	11.35	9.5	・体部は内彎気味に立ち上り、外反しながら口縁部に続く。 ・端部は平坦面を持ち、外方につまみ出す。 ・底部、平底。	・内外面、ヨコナデ。 ・底部、回転糸切り。 ・内面、仕上げナデを施す。	〃	〃	内、青灰色 外、灰白色	〔〃〕
13-147	30.3	10.1	10.8	・体部は内彎気味に立ち上る。 ・端部は平坦面を持ち、外方につまみ出す。 ・底部、平底。	・内外面、ヨコナデ。 ・底部、静止糸切り。 ・内面、ていねいな仕上げナデを施す。	〃	〃	灰色	〔〃〕
13-148	30.6	13.0	9.7	・体部は内彎気味に立ち上り、外反しながら口縁部に続く。 ・端部は凹面を持ち、外方につまみ出す。 ・底部、平底。	・内外面、ヨコナデ。 ・底部、静止糸切り。 ・底部周縁、ナデ仕上げ。 ・内面、仕上げナデを施す。	〃	瓦質	灰白色 口縁部 黒灰色	〔〃〕
13-149	(30.8)	10.2	9.4	・体部は直線的に口縁部に続く。 ・端部は平坦面を持ち、外方につまみ出す。 ・底部、平底。	・内外面、ヨコナデ。 ・底部、静止糸切り。 ・内面、ていねいな仕上げナデを施す。	〃	須恵質	青灰色	〔〃〕
13-150	32.4	11.5	9.8	・体部は内彎気味に立ち上り、直線的に口縁部に続く。 ・端部は平坦面を持ち、外方につまみ出す。 ・底部、平底。	・内外面、ヨコナデ。 ・底部、回転糸切り。 ・底部周縁、ヨコナデ。 ・底部内面、仕上げナデを施す。	〃	〃	〃	〔〃〕
13-151	31.9	11.7	9.1	・体部は内彎気味に立ち上り、直線的に口縁部に続く。 ・端部は凹面を持ち、外方につまみ出す。 ・底部、平底。	・内外面、ヨコナデ。 ・底部、回転糸切り。 ・底部内面、仕上げナデを施す。	〃	〃	暗灰色	〔〃〕
14-152	29.6	12.2	9.9	・体部は直線的に口縁部に続く。 ・端部は平坦面を持ち、外方につまみ出す。 ・底部、平底。	・内外面、ヨコナデ。 ・底部、不明。 ・内面、仕上げナデを施す。	〃	〃	〃	〔〃〕
13-153	30.0	10.6	10.8	・体部は内彎気味に立ち上り、直線的に口縁部に続く。 ・端部は平坦面を持ち、外方につまみ出す。 ・底部、平底。	・内外面、ヨコナデ。 ・底部、回転糸切り。 ・内面、ていねいな仕上ナデを施す。	〃	〃	〃	〔〃〕

図版番号	口径	器高	底径	形態の特徴	成形技法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
14-154	30.4	10.3	10.9	・体部は直線的に立ち上る。 ・端部は凹面を持ち，外方につまみ出す。 ・底部，平底。	・内外面，ヨコナデ。 ・底部，回転糸切り。 ・底部周縁，ナデ仕上げ。 ・内面，ていねいな仕上げナデを施す。	砂粒を含む。	瓦質	灰白色 口縁部，黒灰色	〔南灰〕
14-155	30.4	10.2	10.0	・体部は直線的に立ち上り，外反しながら口縁部に続く。 ・端部は平坦面を持ち，外方につまみ出す。 ・底部，平底。	・内外面，ヨコナデ。 ・底部，静止糸切り。 ・底部周縁，ナデ仕上げ。 ・内面，ていねいな仕上げナデを施す。	〃	須恵質	暗灰色	〔〃〕
14-156	31.0	11.6	10.8	・体部は内彎気味に立ち上り，外反しながら口縁部に続く。 ・端部は平坦面を持ち，外方につまみ出す。 ・底部，平底。	・内外面，ヨコナデ。 ・底部，回転糸切り。 ・内面，ていねいな仕上げナデを施す。	〃	〃	灰色	〔〃〕
14-157	28.6	11.35	8.5	・体部は内彎気味に立ち上る。 ・端部は外方につまみ出す。 ・底部，平底。	〃	〃	〃	暗灰色	〔〃〕
14-158	31.7	11.1	9.9	・体部は内彎気味に立ち上り，直線的に口縁部に続く。 ・端部は平坦面を持つ。 ・底部，平底。	・内外面，ヨコナデ。 ・底部，静止糸切り。 ・内面，ていねいな仕上げナデを施す。	〃	〃	〃	〔〃〕
14-159	31.0	11.3	10.4	・体部は内彎気味に立ち上り，直線的に口縁部に続く。 ・端部は平坦面を持つ。 ・底部は高台気味に立ち上る。	・内外面，ヨコナデ。 ・底部，静止糸切り。 ・内面，仕上げナデを施す。	〃	〃	〃	〔〃〕
14-160	29.7	11.2	8.0	・体部は内彎気味に立ち上り，外反しながら口縁部に続く。 ・端部は平坦面を持ち，外方につまみ出す。 ・底部，平底。	・内外面，ヨコナデ。 ・底部，回転糸切り。 ・底部内面，仕上げナデを施す。	〃	瓦質	灰白色 口縁部，黒灰色	〔〃〕
14-161	31.2	10.6	10.2	・体部は内彎気味に立ち上り，直線的に口縁部に続く。 ・端部は平坦面を持ち，外方につまみ出す。 ・底部，平底。	・内外面，ヨコナデ。 ・底部，静止糸切り。 ・内面，ていねいな仕上ナデを施す。	〃	須恵質	灰色	〔〃〕
14-162	(30.2)	11.3	9.8	・体部は内彎気味に立ち上り，直線的に口縁部に続く。 ・端部は若干凹面を持ち，外方につまみ出す。 ・底部，平底。	・内外面，ヨコナデ。 ・底部，回転糸切り。 ・内面，ていねいな仕上げナデを施す。	〃	〃	青灰色	〔〃〕

図版番号	口径	器高	底径	形態の特徴	成形技法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
14-163	31.1	9.9	9.8	・体部は内彎気味に立ち上り，直線的に口縁部に続く。 ・端部は平坦面を持ち，端部両面を丸く仕上げる。 ・底部，平底。	・内外面，ヨコナデ。 ・底部，回転糸切り。 ・内面，ていねいな仕上げナデを施す。	砂粒を含む。	須恵質	青灰色	〔刷灰〕
14-164	31.2	13.1	9.7	・体部は内彎気味に立ち上り，外反しながら口縁部に続く。 ・端部は平坦面を持つ。 ・底部，平底。	・内外面，ヨコナデ。 ・底部，不明。 ・内面，ていねいな仕上げナデを施す。	〃	瓦質	灰白色 口縁部，黒灰色	〔〃〕
14-165	31.9	11.5	10.35	・体部は内彎気味に立ち上り，直線的に口縁部に続く。 ・端部は凹面を持ち，上下につまみ出す。 ・底部，平底。	・内外面，ヨコナデ。 ・底部，静止糸切り。 ・内面，ていねいな仕上げナデを施す。	〃	須恵質	灰色	〔〃〕
15-166	(29.5)	(10.6)	－	・体部は内彎気味に立ち上り，外反しながら口縁部に続く。 ・端部は凹面を持ち，若干外方につまみ出す。	・内外面，ヨコナデ。 ・内面，仕上げナデを施す。	〃	〃	暗灰色	〔〃〕
15-167	28.4	(10.6)	－	・体部は内彎気味に立ち上り，外反しながら口縁部に続く。 ・端部は平坦面を持ち，上方につまみ出す。	〃	〃	〃	〃	〔〃〕
15-168	28.4	10.7	9.0	・体部は内彎気味に立ち上り，直線的に口縁部に続く。 ・端部は平坦面を持ち，外方につまみ出す。 ・底部，平底。	・内外面，ヨコナデ。 ・底部，静止糸切り。 ・内面，ていねいな仕上げナデを施す。	〃	〃	灰色	〔〃〕
15-169	28.5	13.6	9.7	・体部は内彎気味に立ち上る。 ・端部は平坦面を持ち，内方につまみ出す。 ・底部，平底。	・内外面，ヨコナデ。 ・底部，ナデ仕上げ。 ・内面，ていねいな仕上げナデを施す。	〃	〃	暗灰色	〔〃〕
15-170	29.3	11.4	9.5	・体部は内彎気味に立ち上る。 ・端部は平坦面を持ち，上下につまみ出す。 ・底部は高台気味に立ち上る。	・内外面，ヨコナデ。 ・底部，回転糸切り。 ・内面，仕上げナデを施す。	〃	〃	青灰色	〔〃〕
15-171	31.1	11.6	10.3	・体部は内彎気味に立ち上り，外反しながら口縁部に続く。 ・端部は凹面をもち，上方につまみ出す。 ・底部は高台気味に立ち上る。	・内外面，ヨコナデ。 ・底部，回転糸切り。 ・内面，ていねいな仕上げナデを施す。	〃	〃	〃	〔〃〕

図版番号	口径	器高	底径	形態の特徴	成形技法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
15-172	29.1	11.55	9.1	・体部は内彎気味に立ち上り、直線的に口縁部に続く。 ・端部は平坦面を持ち、外方に若干つまみ出す。 ・底部、平底。	・内外面、ヨコナデ。 ・底部、静止糸切り。 ・内面、ていねいな仕上げナデを施す。	砂粒を含む。	瓦質	灰色	〔南灰〕
15-173	30.6	11.5	10.4	・体部は内彎気味に立ち上り、外反しながら口縁部に続く。 ・端部は凹面を持つ。 ・底部、平底。	〃	〃	須恵質	〃	〔〃〕
15-174	30.1	11.7	9.4	・体部は内彎気味に立ち上り、直線的に口縁部に続く。 ・端部は平坦面を持ち、若干外方につまみ出す。 ・底部、平底。	・内外面、ヨコナデ。 ・底部、回転糸切り。 ・内面、ていねいな仕上げナデを施す。	〃	〃	青灰色	〔〃〕
15-175	28.7	11.2	9.1	・体部は内彎気味に立ち上り、直線的に口縁部に続く。 ・端部は平坦面を持ち、上下に若干つまみ出す。 ・底部、平底。	・内外面、ヨコナデ。 ・底部、回転糸切り。 ・底部周縁、ナデ仕上げ。 ・内面、仕上げナデを施す。	〃	〃	暗灰色	〔〃〕
15-176	30.8	11.8	10.2	・体部は内彎気味に立ち上り、直線的に口縁部に続く。 ・端部は凹面を持ち、上下に若干つまみ出す。 ・底部、平底。	・内外面、ヨコナデ。 ・底部、静止糸切り。 ・内面、ていねいな仕上げナデを施す。	〃	〃	〃	〔〃〕
15-177	31.2	11.8	10.4	・体部は内彎気味に立ち上り、外反しながら口縁部に続く。 ・端部は凹面を持ち、上方につまみ出す。 ・底部は高台気味に立ち上る。	〃	〃	〃	〃	〔〃〕
15-178	31.7	13.4	11.4	・体部は内彎気味に立ち上り、外反しながら口縁部に続く。 ・端部は丸みを持ち、上方につまみ出す。 ・底部、平底。	〃	〃	〃	青灰色	両口鉢 〔〃〕
15-179	32.3	12.3	10.7	・体部は内彎気味に立ち上り、直線的に口縁部に続く。 ・端部は平坦面を持ち、若干上下につまみ出す。 ・底部、平底。	〃	〃	瓦質	灰白色 口縁部 黒灰色	〔〃〕
15-180	27.6	11.1	9.0	・体部は内彎気味に立ち上り、直線的に口縁部に続く。 ・端部は平坦面を持ち、外方につまみ出す。 ・底部、平底。	・内外面、ヨコナデ。 ・底部、静止糸切り。 ・底部周縁、ヘラ削り。 ・内面、仕上げナデを施す。 ・片口部外面、キズ有り。	〃	須恵質	灰色 口縁部、黒色	内面に自然釉がかかる。 〔〃〕

図版番号	口径	器高	底径	形態の特徴	成形技法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
16-181	29.7	12.6	10.0	・体部は内彎気味に立ち上り、直線的に口縁部に続く。 ・端部は上下につまみ出す。 ・底部、平底。	・内外面、ヨコナデ。 ・底部、静止糸切り。 ・底部周縁、ヘラ削り。 ・内面、ていねいな仕上げナデを施す。 ・片口部内面、ユビナデ。	砂粒を含む。	須恵質	青灰色	(南灰)
16-182	29.8	11.5	9.4	・体部は直線的に口縁部に続く。 ・端部は丸みを持ち、外方につまみ出す。 ・底部、平底。	・内外面、ヨコナデ。 ・底部、回転糸切り。 ・底部周縁、ヘラ削り。 ・内面、仕上げナデを施す。	〃	瓦質	黄灰色 口縁部、黒灰色	(〃)
16-183	31.35	11.65	10.4	・体部は内彎気味に立ち上り、直線的に口縁部に続く。 ・端部は平坦面を持ち、外方につまみ出す。 ・底部、平底。	・内外面、ヨコナデ。 ・底部、静止糸切り。 ・内面、ていねいな仕上げナデを施す。	〃	須恵質	灰色	(〃)
16-184	31.4	11.8	10.4	・体部は内彎気味に立ち上り、外反しながら口縁部に続く。 ・端部は平坦面を持ち、外方につまみ出す。 ・底部、平底。	・内外面、ヨコナデ。 ・底部、静止糸切り。 ・内面、ていねいな仕上げナデを施す。	〃	瓦質	灰白色 口縁部、黒灰色	(〃)
16-185	(33.1)	12.85	9.9	・体部は内彎気味に立ち上り、直線的に口縁部に続く。 ・端部は外方につまみ出す。 ・底部は高台気味に立ち上る。	・内外面、ヨコナデ。 ・底部、静止糸切り。 ・内面、仕上げナデを施す。	〃	生焼け	橙灰色 口縁部、黒灰色	(〃)
16-186	(29.2)	12.8	10.4	・体部は内彎気味に立ち上り、直線的に口縁部に続く。 ・端部は凹面を持ち、上下につまみ出す。	・内外面、ヨコナデ。 ・底部、回転糸切り。 ・内面、ていねいな仕上げナデを施す。	砂粒を含み、良。	須恵質	灰色	(〃)
19-193	(30.4)	(4.1)	—	・体部は直線的に口縁部に続く。 ・端部は平坦な面を持ち、下方に若干つまみ出す。	・内外面、ヨコナデ。 ・内面、仕上げナデを施す。	砂粒を含む。	〃	〃	(灰)
19-194	(31.4)	(6.7)	—	・体部は直線的に口縁部に続く。 ・端部は平坦面を持ち、上方に若干つまみ出す。	・内外面、ヨコナデ。 ・内面、ていねいな仕上げナデを施す。	〃	〃	〃	(〃)
16-195	(30.0)	(5.4)	—	・体部は直線的に口縁部に続く。 ・端部は凹面を持ち、上下につまみ出し丸味を持つ。	・内面、ヨコナデ。	〃	〃	暗灰色	(〃)

図版番号	口径	器高	底径	形態の特徴	成形技法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
16-196	(33.8)	(5.5)	−	・体部は直線的に口縁部に続く。 ・端部は平坦面を持ち、上下に若干つまみ出す。	・内外面、ヨコナデ。	砂粒を含む。	須恵質	灰色	(灰)
19-197	(31.4)	(6.2)	−	・体部は直線的に口縁部に続く。 ・端部は凹面を持ち、上下につまみ出し、丸味を持つ。	・内外面、ヨコナデ。 ・内面、仕上げナデを施す。	〃	〃	〃	(〃)
19-198	(33.0)	(4.6)	−	・体部は直線的に口縁部に続く。 ・端部は平坦面を持ち、上下に拡張する。	・内外面、ヨコナデ。	〃	生焼け	黒灰色	(〃)
19-199	(3.76)	(6.5)	−	・体部は直線的に口縁部に続く。 ・端部は凹面を持ち、上方につまみ出す。	〃	〃	〃	茶灰色	(〃)
20-207	(26.2)	(2.9)	−	・体部は直線的に立ち上る。 ・端部は凹面を持ち、上方につまみ出す。	〃	〃	須恵質	灰色 口縁部、 黒灰色	(窯)
20-208	(28.4)	(5.1)	−	・体部は直線的に立ち上る。 ・端部は凹面を持ち、上下に若干つまみ出す。	・内外面、ヨコナデ。 ・内面、仕上げナデを施す。	〃	生焼け	灰白色 口縁部、 暗灰色	(〃)
20-211	(28.0)	(4.7)	−	〃	・内外面、ヨコナデ。	〃	須恵質	暗灰色	(灰)
20-212	(28.0)	(5.4)	−	・体部は外反気味に口縁部に続く。 ・端部は丸味を持ち、上方につまみ出す。	・内外面、ヨコナデ。	〃	〃	灰白色	(〃)
21-221	19.3	7.6	8.0	・体部は内湾気味に立ち上る。 ・端部は平坦面を持ち、若干つまみ出す。 ・底部、平底。	・内外面、ヨコナデ。 ・底部、回転糸切り。	〃	〃	灰色	小型鉢 口縁部に自然釉がかかる。 (窯床)

図版番号	口径	器高	底径	形態の特徴	成形技法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
21-222	(21.8)	10.2	(6.3)	・体部は内彎気味に立ち上る。 ・端部は平坦面を持つ。 ・底部は高台気味に立ち上る。	・内外面、ヨコナデ。 ・底部、回転糸切り(?)。	砂粒を含む。	須恵質	灰色	小型鉢〔底床〕
21-223	18.8	6.5	7.7	・体部は内彎気味に立ち上る。 ・端部は丸味を持つ。 ・底部、平底。	・内外面、ヨコナデ。 ・底部、回転糸切り。	〃	〃	〃	小型鉢 口縁部に自然釉がかかる。〔〃〕
21-224	27.45	10.0	10.0	・体部は内彎気味に立ち上り、外反しながら口縁部に続く。 ・端部は丸味を持つ。 ・底部、平底。	・内外面、ヨコナデ。 ・底部、回転糸切り。 ・底部周縁、ヘラ削り。 ・内面、仕上げナデを施す。	〃	〃	〃	口縁部に自然釉がかかる。〔〃〕
21-225	(30.0)	(7.5)	—	・体部は直線的に立ち上る。 ・端部は凹面を持ち、上方につまみ出す。	・内外面、ヨコナデ。 ・内面、仕上げナデを施す。	〃	瓦質	灰白色	〔〃〕
21-226	(28.0)	9.8	9.0	・体部は内彎気味に立ち上り、外反しながら口縁部に続く。 ・端部は丸味を持つ。 ・底部、平底。	・内外面、ヨコナデ。 ・底部、回転糸切り。 ・底部周縁、ヘラ削り。 ・内面、仕上げナデを施す。	〃	生焼け	黒色一部、黄灰色	〔底床〕
21-235	(18.0)	9.1	(7.5)	・体部は直線的に立ち上る。 ・端部は平坦面を持つ。 ・底部、平底(?)。	・内外面、ヨコナデ。 ・底部、回転糸切り(?)。	〃	須恵質	暗灰色	小型鉢〔底〕
21-236	(19.6)	5.9	(7.6)	・体部は内彎気味に立ち上り、外反しながら口縁部に続く。 ・端部は凹面を持ち、上方に若干つまみ出す。 ・底部、平底。	・内外面、ヨコナデ。 ・底部、回転糸切り。 ・底部周縁、ナデ仕上げ。	〃	〃	〃	小型鉢〔〃〕
21-237	19.5	6.65	7.7	・体部は直線的に立ち上る。 ・端部は丸味を持つ。 ・底部、平底。	・内外面、ヨコナデ。 ・底部、静止糸切り。	〃	半焼け	内、灰白色 外、黒色	小型鉢〔〃〕
21-238	(19.6)	6.8	(8.8)	・体部は内彎気味に立ち上り、直線的に口縁部に続く。 ・端部は丸味を持ち、上方に若干つまみ出す。 ・底部は高台気味に立ち上る。	・内外面、ヨコナデ。 ・底部、回転糸切り。 ・底部周縁、ナデ仕上げ。	〃	瓦質	黒灰色	小型鉢〔〃〕

図版番号	口径	器高	底径	形態の特徴	成形技法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
21-239	(18.9)	6.25	7.3	・体部は直線的に立ち上る。 ・端部は丸味を持つ。 ・底部、平底。	・内外面、ヨコナデ。 ・底部、回転糸切り。	砂粒を含む。	須恵質	暗灰色	小型鉢〔窯〕
21-240	21.2	6.6	8.15	・体部は内彎気味に立ち上り、直線的に口縁部に続く。 ・端部は凹面を持ち、上方につまみ出す。 ・底部は円盤状に突出する。	・内外面　ヨコナデ。 ・底部、回転糸切り。 ・底部周縁、ナデ仕上げを施す。 ・内面、ていねいな仕上げナデを施す。	〃	瓦質	内、黒灰色 外、灰白色	小型鉢〔〃〕
21-241	19.3	6.2	7.5	・体部は内彎気味に立ち上り、直線的に口縁部に続く。 ・端部は丸味を持つ。 ・底部、平底。	・内外面、ヨコナデ。 ・底部、回転糸切り。 ・底部周縁、ナデ仕上げを施す。	〃	須恵質	灰色	小型鉢〔〃〕
21-242	(19.2)	6.5	(7.1)	・体部は直線的に立ち上る。 ・端部は丸味を持ち、上方に若干つまみ出す。 ・底部、平底。	・内外面、ヨコナデ。 ・底部、回転糸切り。 ・底部周縁、ヘラ削り。	〃	生焼け	黒灰色	小型鉢〔〃〕
22-243	(25.7)	10.1	6.2	・体部は内彎気味に立ち上り、外反しながら口縁部に続く。 ・端部は凹面を持ち、上方につまみ出す。 ・底部、平底。	・内外面、ヨコナデ。 ・底部、回転糸切り(?)。 ・内面、仕上げナデを施す。	〃	瓦質	内、黒灰色 外、灰白色	〔〃〕
22-244	23.8	8.5	9.1	・体部は内彎気味に立ち上る。 ・端部は丸みを持つ。 ・底部、平底。	・内外面、ヨコナデ。 ・底部、不明。 ・底部周縁、ヘラ削り。 ・内面、仕上げナデを施す。	〃	生焼け	茶褐色 口縁部黒色	〔〃〕
22-245	(26.4)	9.9	7.4	・体部は内彎気味に立ち上る。 ・端部は凹面を持ち、若干上方につまみ出す。 ・底部　平底。	・内外面、ヨコナデ。 ・底部　回転糸切り(?)。 ・内面、仕上げナデを施す。	〃	須恵質	〃	〔〃〕
22-246	(27.6)	10.75	(7.4)	・体部は内彎気味に立ち上る。 ・端部は丸味を持つ。 ・底部は高台気味に立ち上る。	・内外面、ヨコナデ。 ・底部、不明。 ・底部周縁、ナデ仕上げ。 ・内面、仕上げナデを施す。	〃	瓦質	灰白色 口縁部暗灰色	〔〃〕
22-247	(27.2)	9.3	(10.0)	・体部は内彎気味に立ち上る。 ・端部は丸味を持つ。 ・底部、平底。	・内外面、ヨコナデ。 ・底部、回転糸切り(?)。 ・底部周縁、ナデ仕上げ。 ・内面、仕上げナデを施す。	〃	生焼け	黒灰色 口縁部黄灰色	〔〃〕

図版番号	口径	器高	底径	形態の特徴	成形技法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
22-248	27.7	10.4	8.5	・体部は内彎気味に立ち上り、外反しながら口縁部に続く。 ・端部は口縁下方を丸く納め、上方につまみ出す。 ・底部、平底。	・内外面、ヨコナデ。 ・底部、回転糸切り。 ・底部周縁、ナデ仕上げ。 ・内面、仕上げナデを施す。	砂粒、小石を含む。	瓦質	灰色	(窯)
22-249	28.6	10.0	9.3	〃	・内外面、ヨコナデ。 ・底部、回転糸切り。	砂粒を含む。	須恵質	〃	(〃)
22-250	(27.5)	10.5	10.0	・体部は内彎気味に立ち上り、外反しながら口縁部に続く。 ・端部は凹面を持ち、上方につまみ出す。 ・底部、平底。	・内外面、ヨコナデ。 ・底部、不明。 ・内面、仕上げナデを施す。	〃	生焼け	茶褐色 口縁部、黒色	(〃)
22-251	29.0	12.1	9.3	・体部は内彎気味に立ち上り、直線的に口縁部に続く。 ・端部は凹面を持ち、上方につまみ出す。 ・底部、平底。	・内外面、ヨコナデ。 ・底部、回転糸切り(?)。 ・底部周縁、ナデ仕上げ。 ・内面、仕上げナデを施す。	〃	〃	黄灰色 口縁部、黒色	(〃)
22-252	28.65	9.95	8.5	・体部は内彎気味に立ち上る。 ・端部は丸味を持つ。 ・底部、平底。	・内外面、ヨコナデ。 ・底部、回転糸切り。 ・底部周縁、ナデ仕上げ。 ・内面、仕上げナデを施す。	〃	瓦質	灰白色 口縁部、黒灰色	(〃)
22-253	(30.35)	10.4	9.5	・体部は内彎気味に立ち上り、直線的に口縁部に続く。 ・端部は凹面を持ち、上下につまみ出す。 ・底部、平底。	〃	〃	生焼け	茶褐色 口縁部、黒灰色	(〃)
22-254	28.0	10.7	9.5	・体部は内彎気味に立ち上る。 ・端部は丸味を持つ。 ・底部、平底。	・内外面、ヨコナデ。 ・底部、回転糸切り(?)。 ・底部は円錐状に剥れる。 ・内面、ていねいな仕上げナデを施す。	〃	〃	黒色一部、灰白色	(〃)
22-255	29.2	10.8	10.3	・体部は内彎気味に立ち上り、直線的に口縁部に続く。 ・端部は凹面を持ち、上方につまみ出す。 ・底部、平底。	・内外面、ヨコナデ。 ・底部、回転糸切り。 ・内面、仕上げナデを施す。	〃	須恵質	灰色	(〃)
22-256	(28.4)	10.6	8.4	・体部は内彎気味に立ち上り、直線的に口縁部に続く。 ・端部は凹面を持ち、上下につまみ出す。 ・底部、平底。	〃	〃	生焼け	茶褐色 口縁部、黒灰色	(〃)

図版番号	口径	器高	底径	形態の特徴	成形技法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
23-257	(27.9)	8.0	8.2	・体部は内彎気味に立ち上る。 ・端部は凹面気味で丸味を持つ。 ・底部，平底。	・内外面，ヨコナデ。 ・底部，静止糸切り(？)。 ・内面，仕上げナデを施す。	砂粒を含む。	須恵質	灰色	外面に黒色の自然釉がかかる。 〔富〕
23-258	(28.4)	(10.15)	(11.0)	・体部は内彎気味に立ち上る。 ・端部は丸味を持つ。 ・底部，平底。	・内外面，ヨコナデ。 ・底部，回転糸切り(？)。 ・底部周縁，ナデ仕上げ。 ・内面，仕上げナデを施す。	〃	生焼け	黒灰色 口縁部，黄灰色	〔〃〕
23-259	(29.3)	(9.65)	11.8	〃	〃	〃	〃	〃	〔〃〕
23-260	(27.7)	(10.25)	9.4	〃	・内外面，ヨコナデ。 ・底部，回転糸切り。 ・底部周縁，ヘラ削り。 ・内面，仕上げナデを施す。	〃	〃	黒灰色	〔〃〕
23-261	29.0	10.5	10.1	〃	・内外面，ヨコナデ。 ・底部，回転糸切り。 ・内面，仕上げナデを施す。	〃	瓦質	灰白色	〔〃〕
23-262	(26.6)	10.2	9.2	〃	・内外面，ヨコナデ。 ・底部，不明。 ・底部周縁，ヘラ削り。 ・内面，仕上げナデを施す。	〃	生焼け	黒色 一部，灰白色	〔〃〕
23-263	(29.2)	10.4	9.8	〃	・内外面，ヨコナデ。 ・底部，回転糸切り。 ・底部周縁，ナデ仕上げ。 ・内面，仕上げナデを施す。	〃	須恵質	暗灰色	外面に自然釉がかかる。 〔〃〕
23-264	(26.6)	9.8	(9.6)	・体部は内彎気味に立ち上る。 ・端部は平坦面を持つ。 ・底部，平底。	・内外面，ヨコナデ。 ・底部，不明。 ・底部周縁，ナデ仕上げ。 ・内面，仕上げナデを施す。	〃	生焼け	上半，灰色 下半，黒灰色	〔〃〕
23-265	29.0	10.85	8.5	・体部は内彎気味に立ち上り，外反しながら口縁部に続く。 ・端部は丸味を持つ。 ・底部，平底。	・内外面，ヨコナデ。 ・底部，静止糸切り。 ・底部周縁，ヘラ削り。 ・内面，ていねいな仕上げナデを施す。	〃	瓦質	内，黄灰色 外，黒色	〔〃〕

図版番号	口径	器高	底径	形態の特徴	成形技法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
23-266	(25.0)	9.9	(8.4)	・体部は内彎気味に立ち上る。 ・端部は平坦面を持つ。 ・底部、平底(?)。	・内外面、ヨコナデ。 ・底部、不明。 ・底部周縁、ナデ仕上げ。 ・内面、ていねいな仕上げナデを施す。	砂粒を含む。	須恵質	灰色	(窯)
27-295	(29.8)	12.5	10.1	・体部は内彎気味に立ち上る。 ・端部は凹面を持ち、上下に肥厚する。 ・底部、平底。	・内外面、ヨコナデ。 ・底部、回転糸切り(?)。 ・内面、仕上げナデを施す。	〃	瓦質	灰白色 口縁部、黒灰色	(前)
27-296	(27.4)	12.3	(5.4)	・体部は内彎気味に立ち上る。 ・端部は丸味を持つ。 ・底部、平底。	・内外面、ヨコナデ。 ・底部、回転糸切り。 ・底部周縁、ヘラ削り。 ・内面、仕上げナデを施す。	〃	須恵質	灰色	(〃)
27-297	(34.3)	13.0	9.5	・体部は内彎気味に立ち上り、外反しながら口縁部に続く。 ・端部は凹面を持ち、上下につまみ出す。 ・底部、平底。	・内外面、ヨコナデ。 ・底部、回転糸切り。 ・底部周縁、ナデ仕上げ。 ・内面、仕上げナデを施す。	〃	〃	暗灰色	(〃)
27-298	(29.8)	9.4	9.6	〃	〃	〃	〃	灰色	(〃)
33-329	(19.7)	8.3	7.6	・体部は内彎気味に立ち上る。 ・端部は平坦面を持つ。 ・底部は高台気味に立ち上る。	・内外面、ヨコナデ。 ・底部、回転糸切り。	〃	瓦質	内、灰白色 外、黒灰色	(灰)
33-330	27.0	11.5	8.3	・体部は内彎気味に立ち上り、外反しながら口縁部に続く。 ・端部は凹面を持ち、上方につまみ出す。 ・底部は高台気味に立ち上る。	・内外面、ヨコナデ。 ・底部、静止糸切り。	〃	須恵質	灰色 内面一部、黒色	(〃)
33-331	(28.6)	11.5	9.6	・体部は内彎気味に立ち上る。 ・端部は丸味を持つ。 ・底部は円盤状に突出する。	・内外面、ヨコナデ。 ・底部、回転糸切り。 ・内面、仕上げナデを施す。	〃	〃	暗灰色	(〃)
33-332	(29.0)	11.7	(7.5)	・体部は内彎気味に立ち上り、直線的に口縁部に続く。 ・端部は丸味を持ち、上下につまみ出す。 ・底部、平底。	・内外面、ヨコナデ。 ・底部、回転糸切り(?)。 ・内面、ていねいな仕上げナデを施す。	〃	〃	〃	(〃)

図版番号	口径	器高	底径	形態の特徴	成形技法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
33-333	32.0	11.0	(12.0)	・体部は内彎気味に立ち上り，直線的に口縁部に続く。 ・端部は凹面を持ち，上方につまみ出す。 ・底部，平底。	・内外面，ヨコナデ。 ・底部，回転糸切り。 ・底部周縁，ナデ仕上げを施す。 ・内面，仕上げナデを施す。	砂粒を含む。	須恵質	暗灰色	口縁部一部に黒色の自然釉がかかる。 (灰)
33-334	(30.7)	11.45	10.8	・体部は内彎気味に立ち上り，直線的に口縁部に続く。 ・端部は凹面を持ち，上下につまみ出す。 ・底部，平底。	・内外面，ヨコナデ。 ・底部，回転糸切り。 ・内面，仕上げナデを施す。	〃	〃	青灰色	〔〃〕
33-335	33.0	11.4	8.7	・体部は直線的に口縁部に続く。 ・端部は平坦面を持ち，上方につまみ出す。 ・底部，平底。	・内外面，ヨコナデ。 ・底部，回転糸切り。 ・底部周縁，ナデ仕上げ。 ・内面，仕上げナデを施す。	〃	瓦質	内，灰白色 外，黒灰色	〔〃〕
33-336	(31.4)	12.5	10.1	・体部は内彎気味に立ち上り，外反しながら口縁部に続く。 ・端部は垂直気味の平坦面を持ち，上下に拡張する。 ・底部，平底。	〃	〃	〃	〃	〔〃〕
33-337	33.9	12.1	10.5	・体部は内彎気味に立ち上り，直線的に口縁部に続く。 ・端部は丸味を持ち，上方につまみ出す。 ・底部は高台気味に立ち上る。	・内外面，ヨコナデ。 ・底部，回転糸切り。 ・底部周縁，ナデ仕上げ。 ・内面，仕上げナデを施す。	〃	須恵質	暗灰色	〔〃〕
33-338	32.6	13.3	10.1	〃	・内外面，ヨコナデ。 ・底部，回転糸切り。 ・内面，ていねいな仕上げナデを施す。	〃	〃	〃	〔〃〕
33-339	35.8	15.2	10.1	・体部は内彎気味に立ち上る。 ・端部は凹面を持ち，上下につまみ出す。 ・底部，平底。	・内外面，ヨコナデ。 ・底部，回転糸切り(？)。 ・底部周縁，ナデ仕上げ。 ・内面，ていねいな仕上げナデを施す。	〃	〃	〃	三口鉢 外面に自然釉がかかる。 〔〃〕
33-340	(29.8)	12.75	10.1	・体部は内彎気味に立ち上り，直線的に口縁部に続く。 ・端部は丸味を持ち上下につまみ出す。 ・底部，平底。	・内外面，ヨコナデ。 ・底部，回転糸切り。 ・底部周縁，ヘラ削り。 ・内面，ていねいな仕上げナデを施す。	〃	〃	黒灰色	〔〃〕
34-341	32.6	10.7	11.0	・体部は直線的に口縁部に続く。 ・端部は凹面を持ち，上下につまみ出す。 ・底部，平底。	・内外面，ヨコナデ。 ・底部，回転糸切り。 ・底部内面，仕上げナデを施す。	〃	〃	暗灰色	〔〃〕

図版番号	口径	器高	底径	形態の特徴	成形技法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
34-342	31.8	12.1	11.7	・体部は内彎気味に立ち上り、直線的に口縁部に続く。 ・端部は丸味を持つ。 ・底部、平底。	・内外面、ヨコナデ。 ・底部、回転糸切り。 ・底部周縁、ナデ仕上げ。 ・内面、仕上げナデを施す。	砂粒を含む。	須恵質	内、黒色 外、灰白色	[灰]
34-343	(30.6)	9.2	10.2	・体部は直線的に立ち上る。 ・端部は平担面を持ち、上方につまみ出す。 ・底部、平底。	・	・	瓦質	灰白色 口縁部、暗灰色	[・]
34-344	30.3	11.7	10.8	・体部は直線的に立ち上る。 ・端部は平担面を持ち、若干外方につまみ出す。 ・底部、平底。	・内外面、ヨコナデ。 ・底部、静止糸切り(?)。 ・底部周縁、ナデ仕上げ。 ・内面、仕上げナデを施す。	・	須恵質	内、灰白色 外、銀黒色	[・]
34-345	(31.5)	12.3	(9.2)	・体部は直線的に立ち上る。 ・端部は平担面を持ち、上下に若干つまみ出す。 ・底部、平底。	・内外面、ヨコナデ。 ・底部、回転糸切り。 ・内面、仕上げナデを施す。	・	瓦質	内、黄灰色 外、黒色	[・]
34-346	33.0	12.2	10.6	・体部は内彎気味に立ち上り、直線的に口縁部に続く。 ・端部は平担面を持ち、若干外方につまみ出す。 ・底部、平底。	・内外面、ヨコナデ。 ・底部、静止糸切り。 ・底部周縁、ナデ仕上げ。 ・内面、仕上げナデを施す。	・	・	灰白色 口縁部、銀黒色	[・]
31-347	29.6	11.7	8.35	・体部は内彎気味に立ち上り、直線的に口縁部に続く。 ・端部は平担面を持つ。 ・底部、平底。	・内外面、ヨコナデ。 ・底部、静止糸切り。 ・内面、ていねいな仕上げナデを施す。	・	須恵質	灰色	[・]
34-348	(31.6)	11.3	10.7	・体部は内彎気味に立ち上り、直線的に口縁部に続く。 ・端部は丸味を持ち、外方につまみ出す。 ・底部、平底。	・内外面、ヨコナデ。 ・底部、回転糸切り(?)。 ・内面、仕上げナデを施す。	・	生焼け	内、黒色 外、灰白色	[・]
40-371	27.0	10.8	8.8	・体部は内彎気味に立ち上る。 ・端部は丸味を持つ。 ・底部、平底。	・内外面、ヨコナデ。 ・底部、回転糸切り。 ・底部周縁、ヘラ削り。 ・内面、ていねいな仕上げナデを施す。	・	瓦質	灰色 口縁部、黒灰色	[窯床]
40-372	26.7	10.0	8.0	・	・	・	・	・	[・]

図版番号	口径	器高	底径	形態の特徴	成形技法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
40-373	(27.6)	11.5	(6.9)	・体部は内彎気味に立ち上る。 ・端部は凹面を持ち、上下につまみ出す。 ・底部、平底。	・内外面、ヨコナデ。 ・底部、不明。 ・内面、仕上げナデを施す。	砂粒を含む。	須恵質	暗灰色	(窯)
40-374	27.7	10.0	9.3	・体部は内彎気味に立ち上る。 ・端部は丸味を持つ。 ・底部、平底。	・内外面、ヨコナデ。 ・底部、回転糸切り。 ・底部周縁、ヘラ削り。 ・内面、仕上げナデを施す。	〃	生焼け	黒色	(墓床)
40-375	(30.3)	9.6	10.8	・体部は内彎気味に立ち上り、外反しながら口縁部に続く。 ・端部は丸味を持つ。 ・底部、平底。	・内外面、ヨコナデ。 ・底部、不明。 ・内面、仕上げナデを施す。	〃	瓦質	内、灰白色 外、黒灰色	(〃)
40-381	(20.2)	6.0	(9.7)	・体部は直線的に立ち上る。 ・端部は面を持ち丸く納める。 ・底部、平底。	・内外面、ヨコナデ。 ・底部、回転糸切り。 ・内面、ていねいな仕上げナダを施す。 ・厚手の作り。	〃	須恵質	暗灰色	小型鉢 (床灰)
40-382	(19.8)	7.1	8.2	・体部は内彎気味に立ち上る。 ・端部は凹面を持ち若干上方につまみ出す。 ・底部は円盤状に突出する。	・内外面、ヨコナデ。 ・底部、回転糸切り。 ・内面、仕上げナデを施す。	〃	〃	〃	小型鉢 (〃)
40-383	(22.6)	7.3	8.8	・体部は直線的に立ち上る。 ・端部は上下につまみ出す。 ・底部、平底。	・内外面、ヨコナデ。 ・底部、回転糸切り。 ・内面、ていねいな仕上げナデを施す。	〃	〃	〃	小型鉢 (〃)
40-384	27.9	11.2	8.7	・体部は内彎気味に立ち上る。 ・端部は平坦面を持ち、上方につまみ出す。 ・底部は高台気味に突出する。	・内外面、ヨコナデ。 ・底部、回転糸切り。 ・底部周縁から体部下方ナデ仕上げ。 ・内面、ていねいな仕上げナデを施す。	〃	〃	灰白色 口縁部、黒灰色	(〃)
40-385	27.6	11.0	9.8	・体部は内彎気味に立ち上る。 ・端部は面を持つ。 ・底部、平底。	・内外面、ヨコナデ。 ・底部、静止糸切り。 ・内面、仕上げナデを施す。	〃	瓦質	灰白色 口縁部、黒灰色	(〃)
41-386	32.3	12.0	10.1	・体部は内彎気味に立ち上る。 ・端部は上下につまみ出す。 ・底部、平底。	・内外面、ヨコナデ。 ・底部、回転糸切り。 ・底部周縁、ヘラ削り。 ・内面、仕上げナデを施す。	〃	生焼け	暗灰色 口縁部、体部上半、黒色	(〃)

図版番号	口径	器高	底径	形態の特徴	成形技法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
41-387	30.0	10.6	9.8	・体部は内彎気味に立ち上り，直線的に口縁部に続く。 ・端部は平坦面を持ち，若干外方につまみ出す。 ・底部は高台気味に立ち上る。	・内外面，ヨコナデ。 ・底部，回転糸切り。 ・内面，ていねいな仕上げナデを施す。	砂粒を含む。	須恵質	暗灰色	(床灰)
41-388	32.4	13.1	8.6	・体部は内彎気味に立ち上り，直線的に口縁部に続く。 ・端部は凹面を持ち，上方につまみ出す。 ・底部は円盤状に突出する。	・内外面，ヨコナデ。 ・底部，回転糸切り。 ・底部周縁，ナデ仕上げ。 ・内面，仕上げナデを施す。	〃	瓦質	灰白色 口縁部，黒灰色	(〃)
41-389	30.0	11.7	9.1	・体部は内彎気味に立ち上り，外反しながら，口縁部に続く。 ・端部は凹面を持ち，若干上下につまみ出す。 ・底部は高台気味に立ち上る。	・内外面，ヨコナデ。 ・底部，回転糸切り(？)。 ・内面，ていねいな仕上げナデを施す。	〃	須恵質	暗灰色	(〃)
41-390	(34.6)	13.6	11.3	・体部は内彎気味に立ち上り，外反しながら口縁部に続く。 ・端部は凹面を持ち，上下につまみ出す。 ・底部，平底。	・内外面，ヨコナデ。 ・底部，回転糸切り。 ・底部周縁，ナデ仕上げ。 ・内面，仕上げナデを施す。	〃	瓦質	灰白色 口縁部，黒色	(〃)
41-391	(31.6)	12.9	(8.6)	・体部は内彎気味に立ち上る。 ・端部は上下につまみ出す。 ・底部，平底。	・内外面，ヨコナデ。 ・底部，不明。 ・底部周縁，ヘラ削り。 ・内面，仕上げナデを施す。	〃	須恵質	暗灰色	(〃)
41-392	34.8	12.6	9.1	・体部は内彎気味に立ち上り，外反しながら口縁部に続く。 ・端部は凹面を持ち，上下につまみ出す。 ・底部，平底。	・内外面，ヨコナデ。 ・底部，回転糸切り(？)。 ・底部周縁，ヘラ削り。 ・内面，仕上げナデを施す。	〃	生焼け	黄灰色 口縁部，黒色	(〃)
41-393	(32.4)	12.35	10.5	・体部は内彎気味に立ち上る。 ・端部は凹面を持ち，上下につまみ出す。 ・底部，平底。	・内外面，ヨコナデ。 ・底部，回転糸切り。 ・底部周縁，ヘラ削り。 ・内面，仕上げナデを施す。	〃	〃	黄灰色 口縁部，黒灰色	(〃)
41-394	(36.4)	12.6	(10.9)	・体部は直線的に立ち上る。 ・端部は上下につまみ出す。 ・底部，貼り付け高台。	・内外面，ヨコナデ。 ・高台部両側，ナデ仕上げ。 ・底部，不明。 ・内面，仕上げナデを施す。	〃	瓦質	内，灰白色 外，黒灰色	(〃)
41-395	32.0	12.2	(8.2)	・体部は内彎気味に立ち上り，直線的に口縁部に続く。 ・端部は凹面を持ち，上方につまみ出す。 ・底部，平底。	・内外面，ヨコナデ。 ・底部，不明。 ・底部周縁，ナデ仕上げ。	〃	〃	灰白色 口縁部，黒色	(〃)

図版番号	口径	器高	底径	形態の特徴	成形技法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
41-396	36.8	14.75	9.8	・体部は内彎気味に立ち上り，直線的に口縁部に続く。 ・端部は凹面を持ち，上下につまみ出す。 ・底部，平底。	・内外面，ヨコナデ。 ・底部，回転糸切り。 ・底部周縁，ヘラ削り。 ・内面，仕上げナデを施す。	砂粒を含む。	瓦質	内，黄灰色 外，黒色	〔床灰〕
41-397	(31.4)	12.4	8.7	・体部は内彎気味に立ち上り，直線的に口縁部に続く。 ・端部は凹面を持ち，上下につまみ出す。 ・底部，平底。	・内外面，ヨコナデ。 ・底部，回転糸切り。 ・内面，仕上げナデを施す。	〃	生焼け	灰白色 口縁部，黒灰色	〔〃〕
42-398	(31.2)	(10.1)	—	・体部は内彎気味に立ち上る。 ・端部は凹面を持ち，上下につまみ出す。	・内外面，ヨコナデ。 ・内面，仕上げナデを施す。	〃	須恵質	暗灰色	〔〃〕
42-399	32.0	(8.1)	—	・体部は直線的に立ち上る。 ・端部は凹面を持ち，上下につまみ出す。	・内外面，ヨコナデ。 ・内面，ていねいな仕上げナデを施す。	〃	瓦質	灰白色 口縁部，暗灰色	〔〃〕
42-400	34.2	11.3	8.8	・体部は直線的に立ち上る。 ・端部は凹面を持ち，上下につまみ出す。 ・底部，平底。	・内外面，ヨコナデ。 ・底部，回転糸切り。 ・内面，仕上げナデを施す。	〃	須恵質	暗灰色	〔〃〕
42-401	(33.7)	12.7	9.4	・体部は内彎気味に立ち上り，直線的に口縁部に続く。 ・端部は上方につまみ出す。 ・底部，平底。	・内外面，ヨコナデ。 ・底部，回転糸切り。 ・底部周縁，ナデ仕上げ。 ・内面，下半仕上げナデ。	〃	〃	青灰色	〔〃〕
42-402	33.5	12.35	10.7	・体部は内彎気味に立ち上り，直線的に口縁部に続く。 ・端部は面を持ち，上下につまみ出す。 ・底部，平底。	・内外面，ヨコナデ。 ・底部，回転糸切り。 ・底部周縁，ヘラ削り。 ・底部内面に粘土をつき足す。 ・内面，仕上げナデ。	〃	生焼け	暗灰色 口縁部黒灰色	〔〃〕
42-403	(33.5)	12.1	7.4	・体部は内彎気味に立ち上り，直線的に口縁部に続く。 ・端部は上方につまみ出す。 ・底部，平底。	・内外面，ヨコナデ。 ・底部，回転糸切り。 ・底部周縁，ヘラ削り。 ・内面，仕上げナデを施す。	〃	須恵質	内外灰色 口縁部，暗灰色	〔〃〕
42-404	(33.6)	12.7	9.2	・体部は内彎気味に立ち上り，直線的に口縁部に続く。 ・端部は凹面を持ち，上下につまみ出す。 ・底部，平底。	・内外面，ヨコナデ。 ・底部，回転糸切り。 ・底部周縁，ナデ仕上げ。 ・内面，仕上げナデを施す。	〃	瓦質	灰白色 口縁部，黒灰色	〔〃〕

図版番号	口径	器高	底径	形態の特徴	成形技法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
42-405	33.3	12.25	8.8	・体部は内彎気味に立ち上る。 ・端部は上方につまみ出す。 ・底部、平底。	・内外面、ヨコナデ。 ・底部、回転糸切り。 ・底部周縁、ヘラ削り。 ・内面、仕上げナデを施す。	砂粒を含む。	生焼け	暗灰色 口縁部、黒色	〔床灰〕
42-406	35.4	13.0	(8.0)	・体部は内彎気味に立ち上る。 ・端部は凹面を持ち、上下につまみ出す。 ・底部、平底。	・内外面、ヨコナデ。 ・底部、回転糸切り。 ・底部周縁、ナデ仕上げ。 ・内面、仕上げナデを施す。	〃	〃	黒色	〔〃〕
42-407	31.0	12.9	10.0	・体部は内彎気味に立ち上り、直線的に口縁部に続く。 ・端部は凹面を持ち、上下につまみ出す。 ・底部、平底。	〃	〃	瓦質	灰白色 口縁部、暗灰色	〔〃〕
42-408	(35.3)	14.8	10.3	〃	〃	〃	生焼け	黄灰色 口縁部、黒色	〔〃〕
42-409	(31.8)	(11.85)	−	・体部は内彎気味に立ち上り、直線的に口縁部に続く。 ・端部は平坦面を持ち、若干上方につまみ出す。	・内外面、ヨコナデ。 ・内面、ていねいな仕上げナデを施す。	〃	須恵質	灰色	〔〃〕
43-410	31.0	(10.8)	−	・体部は内彎気味に立ち上り、直線的に口縁部に続く。 ・端部は上方につまみ出す。	・内外面、ヨコナデ。 ・内面、仕上げナデを施す。	〃	〃	暗灰色	〔〃〕
43-411	32.2	11.5	8.8	・体部は内彎気味に立ち上り、外反して口縁部に続く。 ・端部は上下につまみ出す。 ・底部、平底。	・内外面、ヨコナデ。 ・底部、回転糸切り。 ・底部周縁、ナデを施す。 ・内面、仕上げナデを施す。	〃	〃	灰色	〔〃〕
43-412	33.0	14.65	9.1	〃	〃	〃	〃	暗灰色	〔〃〕
43-413	(33.0)	12.9	10.4	・体部は内彎気味に立ち上り、直線的に口縁部に続く。 ・端部は凹面を持ち、上方につまみ出す。 ・底部、平底。	・内外面、ヨコナデ。 ・底部、回転糸切り。 ・底部周縁、ナデ仕上げ。 ・内面、ていねいな仕上げナデを施す。	〃	〃	灰色	〔〃〕

図版番号	口径	器高	底径	形態の特徴	成形技法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
43-414	(34.0)	14.0	10.1	・体部は内彎気味に立ち上り，直線的に口縁部に続く。 ・端部は上下につまみ出す。 ・底部，平底。	・内外面，ヨコナデ。 ・底部，回転糸切り。 ・内面，仕上げナデを施す。	砂粒を含む。	生焼け	灰白色 口縁部，黒灰色	(体灰)
43-415	32.4	13.05	9.4	・体部は直線的に口縁部に続く。 ・端部は上下につまみ出す。 ・底部，平底。	・内外面，ヨコナデ。 ・底部，回転糸切り。 ・内面，仕上げナデを施す。	〃	須恵質	暗灰色	(〃)
43-416	(34.2)	12.2	(10.2)	・体部は内彎気味に立ち上り，外反しながら口縁部に続く。 ・端部は平坦面を持ち，上下につまみ出す。 ・底部，平底。	〃	〃	〃	〃	(〃)
43-417	(32.8)	12.2	(8.4)	・体部は直線的に口縁部に続く。 ・端部は凹面を持ち，上方につまみ出す。 ・底部，平底。	・内外面，ヨコナデ。 ・底部，回転糸切り。 ・底部周縁，ナデ仕上げ。 ・内面，ていねいな仕上げナデを施す。	〃	〃	〃	(〃)
43-418	(35.2)	12.3	10.0	・体部は内彎気味に立ち上り，直線的に口縁部に続く。 ・端部は凹面を持ち，上下につまみ出す。 ・底部，平底。	・内外面，ヨコナデ。 ・底部，回転糸切り(？)。 ・底部周縁，ヘラ削り。 ・内面，ていねいな仕上げナデを施す。	〃	瓦質	灰白色 口縁部黒灰色	(〃)
43-419	(32.0)	11.0	9.6	・体部は内彎気味に立ち上り，直線的に口縁部に続く。 ・端部は凹面を持ち，上方に若干つまみ出す。 ・底部，平底。	・内外面，ヨコナデ。 ・底部，回転糸切り。 ・底部周縁，ナデ仕上げ。 ・内面，ていねいな仕上げナデを施す。	〃	須恵質	灰色	(〃)
43-420	37.0	13.0	11.8	・体部は内彎気味に立ち上り，外反しながら口縁部に続く。 ・端部は凹面を持ち，上下につまみ出す。 ・底部，平底。	・内外面，ヨコナデ。 ・底部，回転糸切り。 ・内面，ていねいな仕上げナデを施す。	〃	〃	暗灰色	(〃)
43-421	29.6	12.1	(9.3)	・体部は内彎気味に立ち上り，外反して口縁部に続く。 ・端部内側を上方につまみ出す。 ・底部，不明。(平底？)	・内外面，ヨコナデ。 ・底部，不明。 ・内面，仕上げナデを上下に施す。 ・底部周縁，ナデ仕上げ。	〃	瓦質	灰白色 口縁部黒灰色	(〃)
44-422	33.0	12.7	(10.4)	・体部は直線的に立ち上り，口縁部で外反する。 ・端部は上下につまみ出す。 ・底部，平底。	・内外面，ヨコナデ。 ・底部，不明。 ・片口部外面に指押え跡あり。 ・内面，仕上げナデを上下に施す。	〃	須恵質	上，黒灰色 下，灰白色	(〃)

図版番号	口径	器高	底径	形態の特徴	成形技法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
44-423	(31.4)	12.7	9.8	・体部は直線的に立ち上る。 ・端部は平坦面を持つ。 ・底部，平底。	・内外面，ヨコナデ。 ・底部，静止糸切り。 ・底部周縁，ナデ仕上げ。 ・内面，ていねいな仕上げナデを施す。	砂粒を含む。	須恵質	暗灰色	(床灰)
44-424	33.0	11.8	11.6	・体部は内彎気味に立ち上り，外反しながら口縁部に続く。 ・端部は平坦面を持ち，若干上下につまみ出す。 ・底部，平底。	・内外面，ヨコナデ。 ・底部，回転糸切り。 ・底部周縁，ナデ仕上げ。 ・内面，仕上げナデを施す。	〃	瓦質	灰白色 口縁部 黒褐色	(〃)
44-425	32.4	13.5	13.5	・体部は内彎気味に立ち上る。 ・端部は凹面を持ち，上方に若干つまみ出す。 ・底部，平底。	〃	〃	須恵質	暗灰色	(〃)
44-426	32.3	12.8	10.7	・体部は内彎気味に立ち上り，直線的に口縁部に続く。 ・端部は凹面を持ち，上下につまみ出す。 ・底部，貼り付け高台。	・内外面，ヨコナデ。 ・底部，不明。高台付近ヨコナデ。 ・内面，仕上げナデを施す。	〃	〃	灰色	(〃)
44-427	33.1	13.25	10.1	・体部は内彎気味に立ち上り，直線的に口縁部に続く。 ・端部は凹面を持ち，上下につまみ出す。 ・底部，平底。	・内外面，ヨコナデ。 ・底部，回転糸切り。 ・内面，仕上げナデを施す。	〃	瓦質	灰白色	(〃)
44-428	(35.5)	14.3	11.3	〃	〃	〃	〃	内，灰白色 外，黒色	(〃)
44-429	31.9	12.9	10.5	・体部は内彎気味に立ち上り，直線的に口縁部に続く。 ・端部は平坦面を持つ。 ・底部は高台気味に立ち上る。	〃	〃	〃	黒灰色 一部，灰色	(〃)
44-430	(36.2)	11.5	9.7	・体部は内彎気味に立ち上り，直線的に口縁部に続く。 ・端部は凹面を持ち，上方につまみ出す。 ・底部，平底。	・内外面，ヨコナデ。 ・底部，回転糸切り。 ・底部周縁，ナデ仕上げ。 ・内面，仕上げナデを施す。	〃	須恵質	暗灰色	(〃)
44-431	31.2	12.6	8.9	・体部は内彎気味に立ち上り，直線的に口縁部に続く。 ・端部は凹面を持ち，上下につまみ出す。 ・底部，平底。	〃	〃	瓦質	〃	両口鉢 (〃)

図版番号	口径	器高	底径	形態の特徴	成形技法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
47-437	29.0	11.7	9.3	・体部は内彎気味に立ち上る。 ・端部は平坦面を持ち、上方につまみ出す。 ・底部、平底。	・内外面、ヨコナデ。 ・底部、不明。 ・底部周縁、ヘラ削り。 ・内面、ていねいな仕上げナデを施す。	砂粒を含む。	瓦質	灰白色 体部上半、黒灰色	〔黄灰〕
47-438	(29.2)	11.4	10.0	・体部は内彎気味に立ち上り、外反しながら口縁部に続く。 ・端部は凹面を持ち、上方につまみ出す。 ・底部、平底。	・内外面、ヨコナデ。 ・底部、回転糸切り。 ・底部、ナデ仕上げ。 ・内面、仕上げナデを施す。	〃	〃	灰白色 口縁部、黒灰色	〔〃〕
47-439	31.0	(9.7)	—	・体部は内彎気味に立ち上り、外反しながら口縁部に続く。 ・端部は平坦面を持ち、若干外方につまみ出す。	・内外面、ヨコナデ。 ・内面、仕上げナデを施す。	〃	須恵質	黒灰色	〔〃〕
47-440	(29.8)	11.2	9.2	・体部は内彎気味に立ち上る。 ・端部は面を持ち、丸く仕上げる。 ・底部、平底。	・内外面、ヨコナデ。 ・底部、回転糸切り。 ・内面、仕上げナデがおおい。	砂粒を含み、良。	瓦質	内、灰白色 外、黒灰色	〔〃〕
47-441	(34.2)	11.3	(11.2)	・体部は直線的に立ち上る。 ・端部に面を持ち、上下につまみ出す。 ・底部、平底。	・内外面、ヨコナデ。 ・底部、回転糸切り。 ・底部周縁、ヘラ削り。 ・内面、ていねいな仕上げナデを施す。	砂粒を含む。	〃	内、灰白色 外、黒色	〔〃〕
47-442	29.7	11.05	8.8	・体部は内彎気味に立ち上り、外反しながら口縁部に続く。 ・端部は平坦面を持ち、上方につまみ出す。 ・底部は高台気味に立ち上る。	・内外面、ヨコナデ。 ・底部、回転糸切り。 ・内面、仕上げナデを施す。	〃	須恵質	暗灰色	〔〃〕
47-443	(34.2)	11.25	(11.0)	・体部は直線的に立ち上る。 ・端部は平坦面を持ち、上下につまみ出す。 ・底部、平底。	・内外面、ヨコナデ。 ・底部、不明。 ・内面、ていねいな仕上げナデを施す。	〃	〃	灰色	〔〃〕
47-444	31.4	12.4	(9.3)	・体部は内彎気味に立ち上り、直線的に口縁部に続く。 ・端部は平坦面を持ち、上下に若干つまみ出す。 ・底部、平底。	・内外面、ヨコナデ。 ・底部、不明。 ・底部周縁、ヘラ削り。 ・内面、仕上げナデを施す。	〃	〃	暗灰色 口縁部、黒色	〔〃〕
47-445	34.5	12.8	9.1	・体部は直線的に口縁部に続く。 ・端部は凹面を持ち、上下につまみ出す。 ・底部、平底。	・内外面、ヨコナデ。 ・底部、回転糸切り。 ・底部周縁　ナデ仕上げ。 ・内面、仕上げナデを施す。	〃	瓦質	灰白色 口縁部、黒灰色	〔〃〕

図版番号	口径	器高	底径	形態の特徴	成形技法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
47-446	31.4	11.3	10.4	・体部は内彎気味に立ち上る。 ・端部は凹面を持ち、上下につまみ出す。 ・底部、平底。	・内外面、ヨコナデ。 ・底部、回転糸切り。 ・内面、仕上げナデを施す。	砂粒を含む。	瓦質	灰白色 口縁部 黒灰色	〔黄灰〕
47-447	(34.2)	13.5	9.4	・体部は内彎気味に立ち上り、直線的に口縁部に続く。 ・端部は凹面を持ち、上下につまみ出す。 ・底部、平底。	・内外面、ヨコナデ。 ・底部、回転糸切り。 ・底部周縁、ヘラ削り。 ・内面、仕上げナデを施す。	〃	〃	灰白色 口縁部、 黒灰色	〔〃〕
47-448	33.0	12.4	9.4	・体部は内彎気味に立ち上る。 ・端部は凹面を持ち、上下につまみ出す。	〃	〃	生焼け	黄灰色 口縁部、 黒色	〔〃〕
48-449	29.2	11.8	8.4	・体部は内彎気味に立ち上り、直線的に口縁部に続く。 ・端部は凹面を持ち、上下につまみ出す。 ・底部、平底。	・内外面、ヨコナデ。 ・底部、回転糸切り。 ・底部周縁、ナデ仕上げ。 ・内面、ていねいな仕上げナデを施す。	〃	瓦質	灰白色 口縁部、 黒灰色	〔〃〕
48-450	(28.0)	(9.65)	—	・体部は直線的に立ち上る。 ・端部は凹面を持ち、上下につまみ出す。	・内外面、ヨコナデ。 ・内面、ていねいな仕上げナデを施す。	〃	須恵質	内、灰白色 外、暗灰色	〔〃〕
48-451	(33.2)	11.6	10.4	・体部は内彎気味に立ち上る。 ・端部は上下につまみ出す。 ・底部は高台気味に突出する。 ・底部、楕円形。	・内外面、ヨコナデ。 ・底部、回転糸切り。 ・内面、仕上げナデを施す。	〃	瓦質	灰白色 口縁部、 黒灰色	〔〃〕
48-452	(29.6)	11.8	10.6	・体部は内彎気味に立ち上り、外反しながら口縁部に続く。 ・端部は凹面を持ち、上方につまみ出す。 ・底部、平底。	・内外面、ヨコナデ。 ・底部、回転糸切り。 ・内面、ていねいな仕上げナデを施す。	〃	〃	内、灰白色 外、黒色	〔〃〕
48-453	(34.0)	13.2	9.9	・体部は内彎気味に立ち上り、直線的に口縁部に続く。 ・端部は凹面を持ち、上下につまみ出す。 ・底部、平底。	・内外面、ヨコナデ。 ・底部、回転糸切り。 ・底部周縁、ヘラ削り。 ・内面、仕上げナデを施す。	〃	須恵質	暗灰色	〔〃〕
48-454	30.1	12.2	10.1	・体部は内彎気味に立ち上る。 ・端部は上下につまみ出す。 ・底部、平底。	・内外面、ヨコナデ。 ・底部、不明。 ・内面、ていねいな仕上げナデを施す。 ・外面、粘土紐の巻き上げの痕跡あり。	〃	瓦質	灰白色 口縁部、 黒灰色	〔〃〕

図版番号	口径	器高	底径	形態の特徴	成形技法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
48-455	(34.8)	13.6	(11.0)	・体部は内彎気味に立ち上り、直線的に口縁部に続く。 ・端部は凹面を持ち、上下につまみ出す。 ・底部、貼り付け高台。	・内外面、ヨコナデ。 ・底部、不明。高台付近、ヨコナデ。 ・内面、仕上げナデを施す。	砂粒を含む。	須恵質	暗灰色	〔黄灰〕
48-456	31.0	11.95	9.2	・体部は内彎気味に立ち上り、直線的に口縁部に続く。 ・端部は凹面を持ち、上下につまみ出す。 ・底部、平底。	・内外面、ヨコナデ。 ・底部、回転糸切り。 ・内面、仕上げナデを施す。	〃	〃	黒灰色	〔〃〕
48-458	(19.6)	4.6	−	・体部は直線的に立ち上る。 ・端部は平坦面を持つ。	・内外面、ヨコナデ。 ・内面、ていねいな仕上げナデを施す。	〃	〃	暗灰色	小型鉢〔灰〕
48-459	(22.8)	6.7	(9.0)	・体部は直線的に立ち上る。 ・端部は凹面を持ち、上下につまみ出す。 ・底部、平底。	・内外面、ヨコナデ。 ・底部、不明。 ・底部周縁、ナデ仕上げ。 ・内面、ていねいな仕上げナデを施す。	〃	〃	〃	小型鉢〔〃〕
48-460	29.6	11.9	9.4	・体部は内彎気味に立ち上り、直線的に口縁部に続く。 ・端部は凹面を持ち、上方につまみ出す。 ・底部、平底。	・内外面、ヨコナデ。 ・底部、回転糸切り。 ・底部周縁、ナデ仕上げ。 ・内面、仕上げナデを施す。	〃	瓦質	灰白色 口縁部、黒灰色	〔〃〕
48-461	(24.8)	9.1	8.6	・体部は直線的に立ち上る。 ・端部は外側につまみ出す。 ・底部、平底。	・内外面、ヨコナデ。 ・底部、回転糸切り。 ・内面、仕上げナデを施す。	〃	〃	内、黒灰色 外、灰白色	〔〃〕
49-462	(28.6)	12.0	8.4	・体部は内彎気味に立ち上り、直線的に口縁部に続く。 ・端部は面を持ち、丸く納める。 ・底部、平底。	・内外面、ヨコナデ。 ・底部、回転糸切り。 ・底部周縁、ナデを施す。 ・内面、ていねいな仕上げナデを施す。	〃	〃	灰白色 口縁部、黒褐色	〔〃〕
49-463	30.1	11.0	10.6	・体部は内彎気味に立ち上り、直線的に口縁部に続く。 ・端部は凹面を持ち、上下につまみ出す。 ・底部、平底。	・内外面、ヨコナデ。 ・底部、回転糸切り。 ・底部周縁、ヘラ削り。 ・内面、仕上げナデを施す。	〃	須恵質	灰色	外面に自然釉がかかる。〔〃〕
49-464	30.6	12.4	10.1	・体部は内彎気味に立ち上り、直線的に口縁部に続く。 ・端部は凹面を持ち、上方につまみ出す。 ・底部、平底。	・内外面、ヨコナデ。 ・底部、回転糸切り(?)。 ・底部周縁、ナデ仕上げ。 ・内面、仕上げナデを施す。	〃	瓦質	灰色 口縁部、黒灰色	〔〃〕

図版番号	口径	器高	底径	形態の特徴	成形技法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
49-465	(30.2)	11.55	(10.1)	・体部は外反気味に立ち上る。 ・端部は面を持ち，上方へつまみ出す。 ・底部，平底。	・内外面，ヨコナデ。 ・底部，回転糸切り。 ・内面，上下の仕上げナデがおおい。	砂粒を含む。	瓦質	内，灰白色 外，黒灰色	(灰)
49-466	32.5	13.7	9.2	・体部は内彎気味に立ち上り，直線的に口縁部に続く。 ・底部，平底。	・内外面，ヨコナデ。 ・底部，回転糸切り。 ・内面，仕上げナデ。	〃	須恵質	灰色 口縁部黒灰色	(〃)
49-467	31.6	11.0	9.5	・体部は直線的に口縁部に続く。 ・端部は円面を持ち，上下につまみ出す。 ・底部，平底。	・内外面，ヨコナデ。 ・底部，回転糸切り。 ・底部周縁，ナデ仕上げ。 ・内面，ていねいな仕上げナデを施す。	〃	〃	暗灰色	(〃)
49-468	(32.5)	12.3	9.4	・体部は内彎気味に立ち上り，外反しながら口縁部に続く。 ・端部は円面を持ち，上下につまみ出す。 ・底部，平底。	・内外面，ヨコナデ。 ・底部，回転糸切り。 ・底部周縁，ヘラ削り。 ・内面，仕上げナデを施す。	〃	瓦質	灰白色 口縁部黒色	(〃)
49-469	(32.8)	12.3	9.5	・体部は内彎気味に立ち上り，直線的に口縁部に続く。 ・端部は円面を持ち，上下につまみ出す。 ・底部，平底。	・内外面，ヨコナデ。 ・底部，回転糸切り。 ・底部周縁，ヘラ削り。 ・内面，ていねいな仕上げナデを施す。	〃	〃	灰白色 口縁部黒灰色	(〃)
49-470	34.2	12.25	10.4	〃	・内外面，ヨコナデ。 ・底部，回転糸切り。 ・底部，ヘラ削り。 ・内面，仕上げナデを施す。	〃	〃	灰白色 口縁部黒色	(〃)
49-471	32.8	13.1	(9.6)	・体部は内彎気味に立ち上り，外反して口縁部に続く。 ・端部は面を持ち，上下につまみ出す。 ・底部，平底。	・内外面，ロクロナデ。 ・底部，静止糸切り。 ・底部周縁，ナデ仕上げ。 ・内面，上下に仕上げナデを施す。	〃	須恵質	上，黒灰色 下，灰色	(〃)
49-472	35.4	14.2	10.6	・体部は内彎気味に立ち上り，口縁部でやや外反する。 ・端部は上下につまみ出す。 ・底部，平底。	・内外面，ロクロナデ。 ・底部，回転糸切り。 ・内面，仕上げナデを施す。	〃	瓦質	灰白色 口縁部黒灰色	(〃)
49-473	31.6	12.0	10.6	・体部は内彎気味に立ち上る。 ・端部は平坦面を持ち，若干上下につまみ出す。 ・底部，平底。	・内外面，ロクロナデ。 ・底部，静止糸切り。 ・底部周縁，ナデ仕上げ。 ・内面，仕上げナデを施す。	〃	須恵質	暗灰色	(〃)

図版番号	口径	器高	底径	形態の特徴	成形技法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
50-474	29.2	11.5	9.4	・体部は内彎気味に立ち上り、直線的に口縁部に続く。 ・端部は凹面を持ち、上下につまみ出す。 ・底部は高台気味に立ち上る。	・内外面、ヨコナデ。 ・底部、回転糸切り。 ・内面、仕上げナデを施す。	砂粒を含む。	須恵質	暗灰色	〔灰〕
50-475	(29.3)	11.6	7.7	・体部は内彎気味に立ち上る。 ・端部は凹面を持ち、上下につまみ出す。 ・底部、平底。	・内外面、ヨコナデ。 ・底部、回転糸切り。 ・底部周縁、ヘラ削り。 ・内面、ていねいな仕上げナデを施す。	〃	〃	〃	(〃)
50-476	(31.0)	10.75	10.8	・体部は内彎気味に立ち上る。 ・端部は凹面を持ち、上方につまみ出す。 ・底部、平底。	・内外面、ヨコナデ。 ・底部、回転糸切り(?)。 ・底部周縁、ナデ仕上げ。 ・内面、ていねいな仕上げナデを施す。	〃	瓦質	灰色 口縁部黒灰色	〔〃〕
50-477	29.6	11.8	9.2	・体部は内彎気味に立ち上り、直線的に口縁部に続く。 ・端部は凹面を持ち、上下につまみ出す。 ・底部、平底。	・内外面、ヨコナデ。 ・底部、回転糸切り。 ・底部周縁、ナデ仕上げ。 ・内面、仕上げナデを施す。	〃	〃	内、灰色 外、灰白色 口縁部黒灰色	〔〃〕
50-478	(32.1)	11.8	9.2	〃	・内外面、ヨコナデ。 ・底部、回転糸切り。 ・底部周縁、ヘラ削り。 ・内面、ていねいな仕上げナデを施す。	〃	〃	灰白色 口縁部黒色	〔〃〕
50-479	31.3	10.8	(8.4)	・体部は直線的に立ち上る。 ・端部は凹面を持ち、上方につまみ出す。 ・底部、平底。	・内外面、ヨコナデ。 ・底部、回転糸切り。 ・底部周縁、ナデ仕上げ。 ・内面、仕上げナデを施す。	〃	〃	〃	〔〃〕
50-480	(32.2)	12.0	8.2	・体部は内彎気味に立ち上り、外反しながら口縁部に続く。 ・端部は凹面を持ち、上方につまみ出す。 ・底部、平底。	・内外面、ヨコナデ。 ・底部、回転糸切り。 ・底部周縁、ヘラ削り。 ・内面、仕上げナデを施す。	〃	〃	〃	(〃)
50-481	32.4	11.8	8.8	・体部は内彎気味に立ち上り、直線的に口縁部に続く。 ・端部は凹面を持ち、上下につまみ出す。 ・底部、平底。	・内外面、ヨコナデ。 ・底部、回転糸切り。 ・内面、仕上げナデを施す。	〃	〃	内、灰白色 外、暗灰色	(〃)
50-482	(33.4)	10.8	(9.4)	・体部は直線的に口縁部に続く。 ・端部は凹面を持ち、上下につまみ出す。 ・底部、平底。	・内外面、ヨコナデ。 ・底部、回転糸切り。 ・内面、ていねいな仕上げナデを施す。	〃	須恵質	暗灰色	〔〃〕

図版番号	口径	器高	底径	形態の特徴	成形技法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
50-483	32.6	13.2	8.8	・体部は内彎気味に立ち上り、直線的に口縁部に続く。 ・端部は凹面を持ち、上下につまみ出す。 ・底部、平底。	・内外面、ヨコナデ。 ・底部、回転糸切り(?)。 ・内面、仕上げナデを施す。	砂粒を含む。	瓦質	暗灰色 口縁部、黒褐色	(灰)
50-484	34.2	13.0	9.2	〃	・内外面、ヨコナデ。 ・底部、回転糸切り。 ・底部周縁、ナデ仕上げ。 ・内面、仕上げナデを施す。	〃	須恵質	灰色 口縁部 暗灰色	(〃)
50-485	(34.0)	12.2	9.3	〃	・内外面、ヨコナデ。 ・底部、回転糸切り。 ・底部周縁、ヘラ削り。 ・内面、仕上げナデを施す。	〃	〃	灰色	(〃)
51-486	(29.6)	11.4	9.0	〃	・内外面、ヨコナデ。 ・底部、回転糸切り。 ・底部周縁、ナデ仕上げ。 ・内面、仕上げナデを施す。	〃	〃	暗灰色	(〃)
51-487	33.2	11.6	10.9	・体部は内彎気味に立ち上り、直線的に口縁部に続く。 ・端部は凹面を持ち、上方につまみ出す。 ・底部、平底。	・内外面、ヨコナデ。 ・底部、回転糸切り。 ・底部周縁、ナデ仕上げ。 ・内面、ていねいな仕上げナデを施す。	〃	瓦質	灰白色 口縁部、黒灰色	(〃)
51-488	32.0	11.5	9.4	・体部は内彎気味に立ち上る。 ・端部は凹面を持ち、上方につまみ出す。 ・底部、平底。	・内外面、ヨコナデ。 ・底部、回転糸切り。 ・底部周縁一部、ナデ仕上げ。 ・内面、仕上げナデを施す。	〃	〃	灰白色 口縁部、暗灰色	(〃)
51-489	(34.2)	11.9	10.4	・体部は内彎気味に立ち上り、直線的に口縁部に続く。 ・端部は凹面を持ち、上下につまみ出す。 ・底部、平底。	・内外面、ヨコナデ。 ・底部、回転糸切り。 ・底部周縁、ヘラ削り。 ・内外面、仕上げナデを施す。	〃	生焼け	黄灰色 口縁部、黒灰色	(〃)
51-490	32.4	12.2	9.0	・体部は内彎気味に立ち上る。 ・端部は凹面を持ち、上下につまみ出す。 ・底部、平底。	・内外面、ヨコナデ。 ・底部、回転糸切り。 ・底部周縁、ナデ仕上げ。 ・内面、仕上げナデを施す。	〃	須恵質	灰色	(〃)
51-491	32.6	12.4	9.5	・体部は内彎気味に立ち上り、外反しながら口縁部に続く。 ・端部は平担面を持ち、上下につまみ出す。 ・底部は円盤状に突出する。	・内外面、ヨコナデ。 ・底部、静止糸切り(?)。 ・底部周縁、ナデ仕上げ。 ・内面、仕上げナデを施す。	〃	〃	暗灰色	(〃)

図版番号	口径	器高	底径	形態の特徴	成形技法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
51-492	34.2	13.1	9.4	・体部は内彎気味に立ち上り、直線的に口縁部に続く。 ・端部は凹面を持ち、上方につまみ出す。 ・底部、平底。	・内外面、ヨコナデ。 ・底部、静止糸切り(?)。 ・底部周縁、ナデ仕上げ。 ・内面、仕上げナデを施す。	砂粒を含む。	須恵質	暗灰色	両口鉢 口縁部に自然釉がかかる。 (灰)
51-493	30.0	11.0	9.8	・体部は内彎気味に立ち上り、外反しながら口縁部に続く。 ・端部は平坦面を持ち、上下に若干つまみ出す。 ・底部、平底。	・内外面、ヨコナデ。 ・底部、回転糸切り。 ・内面、仕上げナデを施す。	〃	〃	〃	(〃)
51-494	33.4	13.35	12.6	・体部は内彎気味に立ち上り、直線的に口縁部に続く。 ・端部は凹面を持ち、上下につまみ出す。 ・底部、貼り付け高台。	・内外面、ヨコナデ。 ・底部、回転糸切り後、貼り付け高台。 ・高台付近、ナデ仕上げ。 ・内面、仕上げナデを施す。	〃	〃	〃	(〃)
51-495	30.6	11.3	10.4	・体部は内彎気味に立ち上る。 ・端部は凹面を持ち、上方につまみ出す。 ・底部、平底。	・内外面、ヨコナデ。 ・底部、回転糸切り。 ・底部周縁、ナデ仕上げ。 ・内面、仕上げナデを施す。	〃	瓦質	灰白色 口縁部黒色	(〃)
51-496	35.0	14.4	10.9	・体部は内彎気味に立ち上り、直線的に口縁部に続く。 ・端部は凹面を持ち、上方につまみ出す。 ・底部、貼り付け高台。	・内外面、ヨコナデ。 ・底部、不明。高台付近、ナデ仕上げ。 ・内面、仕上げナデを施す。	〃	須恵質	暗灰色	(〃)
51-497	32.5	12.6	8.4	・体部は内彎気味に立ち上り、直線的に口縁部に続く。 ・端部は凹面を持ち、上下につまみ出す。 ・底部、平底。	・内外面、ヨコナデ。 ・底部、回転糸切り。 ・底部周縁、回転糸切り。 ・内面、仕上げナデを施す。	〃	〃	〃	口縁部に自然釉がかかる。 (〃)
52-498	37.2	15.2	11.8	・体部は内彎気味に立ち上る。 ・端部は凹面を持ち、上下につまみ出す。 ・底部、貼り付け高台。	・内外面、ヨコナデ。 ・底部、回転糸切り後、貼り付け高台。 ・高台部はナデ仕上げ。 ・内面、ていねいな仕上げナデを施す。	〃	瓦質	灰白色 口縁部黒色	(〃)
52-499	28.6	11.5	9.8	・体部は内彎気味に立ち上る。 ・端部は凹面を持ち、上下につまみ出す。 ・底部、平底。	・内外面、ヨコナデ。 ・底部、回転糸切り。 ・底部周縁、ナデ仕上げ。 ・内面、仕上げナデを施す。	〃	〃	灰白色 口縁部、黒灰色	(〃)
52-500	38.1	15.3	(11.0)	・体部は内彎気味に立ち上る。 ・端部は凹面を持ち、上下につまみ出す。 ・底部、貼り付け高台。	・内外面、ヨコナデ。 ・底部、不明。高台付近、ヨコナデ。 ・内面、仕上げナデを施す。	〃	生焼け	内面外面下半、灰色 外面上半、黒色	(〃)

図版番号	口径	器高	底径	形態の特徴	成形技法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
52-501	29.4	(10.8)	−	・体部は内彎気味に立ち上り，直線的に口縁部に続く。 ・端部は平坦面を持ち，上方につまみ出す。	・内外面，ヨコナデ。 ・内面，ていねいな仕上げナデを施す。	砂粒を含む。	瓦質	内，灰色 外，灰白色	〔灰〕
59-531	(23.0)	7.5	(12.8)	・体部は内彎して立ち上る。 ・端部は平坦面を持ち，外方につまみ出す。 ・底部は高台気味に立ち上る。	・内外面，ヨコナデ。 ・底部，回転糸切り。 ・底部周縁，ヘラ削り。	砂粒を含み良。	須恵質	灰色	〔〃〕
59-532	(22.0)	(11.5)	−	・体部は内彎して立ち上る。 ・端部は平坦面を持ち，外方につまみ出す。 ・底部，丸底。	・内外面，ヨコナデ。 ・内面，仕上げナデを施す。	〃	〃	暗灰色	外面に自然釉がかかる。 〔〃〕
59-533	25.0	9.25	8.2	・体部は内彎気味に立ち上る。 ・端部は凹面を持ち，上方につまみ出す。 ・底部は高台気味に立ち上る。	・内外面，ヨコナデ。 ・底部，回転糸切り。	砂粒を含む。	生焼け	内，灰色 口縁部，黒色	〔〃〕
59-534	(19.6)	(10.7)	−	・体部は内彎して立ち上る。 ・端部は平坦面を持ち，内方につまみ出す。 ・底部，丸底。	・内面，ヨコナデ。 ・外面，叩き。 ・内面，仕上げナデを施す。	砂粒を含み，良	須恵質	黒灰色	内外面に自然釉がかかる。 〔灰褐〕
59-535	(21.8)	(10.7)	−	〃	〃	〃	〃	〃	〃 〔〃〕
59-536	28.4	10.65	9.3	・体部は内彎気味に立ち上り，直線的に口縁部に続く。 ・端部は丸味を持ち，上下につまみ出す。 ・底部，平底。	・内外面，ヨコナデ。 ・底部，回転糸切り。 ・底部周縁，ナデ仕上げ。 ・内面，ていねいな仕上げナデを施す。	砂粒を含む。	瓦質	灰白色 口縁部，暗灰色	〔〃〕
74-659	(24.8)	(5.2)	−	・体部は直線的に立ち上る。 ・口縁部は平坦面を持ち，拡張する。	・内外面，ヨコナデ。	〃	生焼け	黄灰色 口縁部，黒灰色	〔表採〕
74-660	(22.8)	(5.9)	−	・体部は直線的に立ち上る。 ・口縁部は平坦面を持ち，上下に大きく拡張する。	・内外面，ヨコナデ。	〃	須恵質	灰色	口縁部に自然釉がかかる。 〔表採〕

図版番号	口径	器高	底径	形態の特徴	成形技法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
74-661	(26.0)	(7.3)	−	・体部は直線的に立ち上る。 ・口縁部は丸味を持ち,上方に拡張する。	・内外面、ヨコナデ。 ・内面、仕上げナデを施す。	砂粒を含む。	須恵質	灰色	[表採]
74-662	(27.6)	(6.7)	−	・体部は直線的に立ち上る。 ・口縁部は平坦面を持ち、拡張する。	・内外面、ヨコナデ。	〃	〃	暗灰色	内外面に自然釉がかかる。[〃]
74-663	(27.6)	(4.5)	−	・体部は直線的に立ち上る。 ・口縁部は丸味を持ち、拡張する。	〃	〃	〃	〃	[〃]
74-664	(29.0)	(4.7)	−	〃	〃	〃	〃	〃	[〃]
74-665	(29.6)	(4.8)	−	〃	〃	〃	〃	〃	[〃]
74-666	(29.6)	(6.9)	−	・体部は内彎気味に立ち上る。 ・口縁部は平坦面を持ち、上下に拡張する。	・内外面、ヨコナデ。 ・内面、仕上げナデを施す。	〃	〃	〃	[〃]
74-667	(30.2)	(4.5)	−	・体部は直線的に立ち上る。 ・口縁部は丸味を持ち、拡張する。	・内外面、ヨコナデ。 ・内面、仕上げナデを施す。	〃	〃	〃	[〃]
74-668	(31.6)	(5.4)	−	〃	・内外面、ヨコナデ。	〃	〃	〃	[〃]
74-669	(32.4)	(4.5)	−	・体部は直線的に立ち上る。 ・口縁部は凹面を持ち、上下に大きく拡張する。	〃	〃	〃	灰色 口縁部、暗灰色	[〃]

図版番号	口径	器高	底径	形態の特徴	成形技法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
74-670	(31.0)	(5.1)	−	・体部は内湾気味に立ち上る。 ・口縁部は丸味を持ち、拡張する。	・内外面、ヨコナデ。	砂粒を含む。	須恵質	暗灰色	〔裏採〕
74-676	(25.0)	(4.7)	−	・体部は直線的に立ち上る。 ・口縁部は凹面を持ち、上方につまみ出す。	〃	〃	生焼け	黄灰色 口縁部、黒灰色	〔〃〕
74-677	(29.0)	(5.1)	−	・体部は直線的に立ち上る。 ・口縁部は丸味を持ち、拡張する。	〃	〃	須恵質	暗灰色	〔〃〕
74-678	(30.0)	(4.1)	−	・体部は直線的に立ち上る。 ・口縁部は丸味を持ち、上方につまみ出す。	〃	〃	生焼け	内、灰色 外、黒灰色	〔〃〕
74-679	(30.0)	(4.6)	−	・体部は直線的に立ち上る。 ・口縁部は丸味を持ち、上下に大きく拡張する。	〃	〃	須恵質	灰色	〔〃〕
74-680	(30.0)	(3.0)	−	・体部は直線的に立ち上る。 ・口縁部は丸味を持ち、上方に拡張する。	〃	〃	〃	暗灰色	〔〃〕
75-681	(28.8)	(2.8)	−	・体部は直線的に立ち上る。 ・口縁部は平坦面を持ち、拡張する。	〃	〃	〃	灰色	〔〃〕
75-682	(25.0)	(4.8)	−	・体部は直線的に立ち上る。 ・口縁部は凹面を持ち、拡張する。 ・端部は丸く仕上げる。	〃	〃	〃	暗灰色	〔〃〕
75-683	(29.6)	(3.5)	−	・体部は直線的に立ち上る。 ・口縁部は平坦面を持ち、拡張する。	〃	〃	〃	灰白色 口縁部、暗灰色	〔〃〕

図版番号	口径	器高	底径	形態の特徴	成形技法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
75-684	(26.2)	(3.1)	−	・体部は直線的に立ち上る。 ・口縁部は凹面を持ち、拡張する。 ・端部は丸く仕上げる。	・内外面、ヨコナデ。	砂粒を含む。	須恵質	暗灰色	〔表採〕
75-685	(29.8)	(4.2)	−	・体部は直線的に立ち上る。 ・口縁部は丸味を持ち、上下に拡張する。	〃	〃	〃	〃	内面に自然釉がかかる。〔〃〕
75-686	(27.8)	(3.0)	−	・体部は直線的に立ち上る。 ・口縁部は丸味を持ち、上方につまみ出す。	〃	〃	〃	内、灰色 外、黒灰色	外面に自然釉がかかる。〔〃〕
75-687	(31.2)	(3.7)	−	・体部は直線的に立ち上る。 ・口縁部は平坦面を持ち、拡張する。	〃	〃	〃	暗灰色	〔〃〕
75-688	(29.2)	(4.5)	−	・体部は直線的に立ち上る。 ・口縁部は凹面を持ち、上下に大きく拡張する。 ・端部は丸く仕上げる。	〃	〃	〃	〃	〔〃〕
75-689	(28.6)	(4.5)	−	・体部は直線的に立ち上る。 ・口縁部は丸味を持ち、上下に大きく拡張する。	〃	〃	〃	灰色	〔〃〕
75-690	(31.4)	(3.8)	−	・体部は直線的に立ち上る。 ・口縁部は平坦面を持ち、上下に大きく拡張する。 ・端部は丸く仕上げる。	〃	〃	〃	暗灰色	〔〃〕
75-691	(31.8)	(4.9)	−	・体部は直線的に立ち上る。 ・口縁部は丸味を持ち、拡張する。	・内外面、ヨコナデ。 ・内面、仕上げナデを施す。	〃	〃	〃	〔〃〕
75-692	(34.8)	(4.6)	−	〃	・内外面、ヨコナデ。 ・口縁部上端を平坦にナデ仕上げ。	〃	〃	灰色	〔〃〕

図版番号	口径	器高	底径	形態の特徴	成形技法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
75-693	(28.0)	(3.9)	−	・体部は直線的に立ち上る。 ・口縁部は平坦面を持ち、上下に大きく拡張する。	・内外面、ヨコナデ。	砂粒を含む。	須恵質	暗灰色	〔表採〕
75-696	(34.2)	(3.2)	−	・体部は直線的に立ち上る。 ・口縁部は丸味を持ち、大きく拡張する。	〃	〃	〃	〃	〔〃〕
75-697	(23.4)	(4.8)	−	・体部は直線的に立ち上る。 ・口縁部は丸味を持ち、上下に拡張する。	・内外面、ヨコナデ。 ・内面、仕上げナデを施す。	〃	〃	〃	内外面に自然釉がかかる。〔〃〕
75-698	(29.6)	(4.5)	−	・体部は外反気味に立ち上る。 ・口縁部は凹面を持ち、上下に拡張する。	・内外面、ヨコナデ。	〃	〃	灰白色	〔〃〕
75-699	(24.8)	(4.1)	−	・体部は直線的に立ち上る。 ・口縁部は凹面を持ち、上下に大きく拡張する。	〃	〃	〃	灰色	〔〃〕
75-700	(29.2)	(5.0)	−	・体部は直線的に立ち上る。 ・口縁部は丸味を持ち、大きく拡張する。	〃	〃	〃	暗灰色	〔〃〕
75-701	(26.4)	(4.7)	−	・体部は外反気味に立ち上る。 ・口縁部は平坦面を持ち、拡張する。 ・端部は丸く仕上げる。	〃	〃	〃	灰白色	〔〃〕
75-702	(29.6)	(4.0)	−	・体部は直線的に立ち上る。 ・口縁部は凹面を持ち、上下に拡張する。	〃	〃	〃	〃	〔〃〕
75-703	(28.4)	(5.0)	−	・体部は直線的に立ち上る。 ・口縁部は丸味を持ち、上下に大きく拡張する。	〃	〃	〃	灰色	〔〃〕

図版番号	口径	器高	底径	形態の特徴	成形技法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
75-704	(35.4)	(4.5)	−	・体部は直線的に立ち上る。 ・口縁部は凹面を持ち、上下に大きく拡張する。	・内外面、ヨコナデ。	砂粒を含む。	生焼け	黄灰色	〔表採〕
76-705	(27.2)	(5.8)	−	・体部は直線的に立ち上る。 ・口縁部は丸味を持ち、拡張する。	・内外面、ヨコナデ。 ・内面、仕上げナデを施す。	〃	須恵質	灰色	〔〃〕
76-706	(19.2)	(4.2)	−	〃	・内外面、ヨコナデ。	〃	〃	暗灰色	〔〃〕
76-707	(29.0)	(4.3)	−	・体部は直線的に立ち上る。 ・口縁部は丸味を持ち、上下に拡張する。	〃	〃	〃	灰白色 口縁部、黒色	内面は自然釉がかかる。 〔〃〕
76-708	(29.6)	(4.3)	−	・体部は直線的に立ち上る。 ・口縁部は丸味を持ち、拡張する。	・内外面、ヨコナデ。 ・内面、ていねいな刷毛仕上げ。	〃	〃	暗灰色	〔〃〕
76-709	(26.8)	(6.9)	−	・体部は直線的に立ち上る。 ・口縁部は丸味を持ち、上下に拡張する。	・内外面、ヨコナデ。	〃	〃	〃	〔〃〕
76-710	(32.8)	(7.6)	−	・体部は直線的に立ち上る。 ・口縁部は平坦面を持ち、拡張する。	・内外面、ヨコナデ。 ・内面、仕上げナデを施す。	〃	〃	〃	〔〃〕
76-711	(31.8)	(7.0)	−	・体部は直線的に立ち上る。 ・口縁部は丸味を持ち、拡張する。	〃	〃	〃	灰白色	〔〃〕
76-712	(34.8)	(3.9)	−	〃	・内外面、ヨコナデ。	〃	〃	黒灰色	内外面に自然釉がかかる。 〔〃〕

図版番号	口径	器高	底径	形態の特徴	成形技法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
76-713	(34.0)	(8.0)	−	・体部は内彎気味に立ち上る。 ・口縁部は平坦面を持ち、上下に拡張する。	・内外面、ヨコナデ。 ・内面、仕上げナデを施す。	砂粒を含む。	普通質	暗灰色	(表採)
76-717	(21.4)	(4.6)	−	・体部は外反気味に立ち上る。 ・口縁部は丸味を持ち、上下に拡張する。	・内外面、ヨコナデ。	〃	〃	黒色	内外面に自然釉がかかる。〔〃〕
76-718	(24.2)	(4.2)	−	・体部は直線的に立ち上る。 ・口縁部は凹面を持ち、上下に拡張する。	〃	〃	〃	黒灰色	〔〃〕
76-719	(24.6)	(4.9)	−	〃	〃	〃	〃	暗灰色	〔〃〕
76-720	(32.0)	(4.6)	−	・体部は外反気味に立ち上る。 ・口縁部は凹面を持ち、上下に拡張する。	〃	〃	〃	〃	〔〃〕
76-721	(28.0)	(6.5)	−	・体部は外反気味に立ち上る。 ・口縁部は丸味を持ち、上下に大きく拡張する。	〃	〃	〃	〃	〔〃〕
76-722	(35.0)	(4.2)	−	・体部は直線的に立ち上る。 ・口縁部は丸味を持ち、上下に大きく拡張する。	〃	〃	〃	〃	〔〃〕
76-723	(31.8)	(5.8)	−	〃	〃	〃	〃	灰色	内外面に自然釉がかかる。〔〃〕
76-724	(34.0)	(5.7)	−	・体部は直線的に立ち上る。 ・口縁部は丸味を持ち、拡張する。	〃	〃	〃	暗灰色	〔〃〕

図版番号	口径	器高	底径	形態の特徴	成形技法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
76-725	(34.0)	(4.6)	−	・体部は直線的に立ち上る。 ・口縁部は平坦面を持ち，上方に拡張する。	・内外面，ヨコナデ。	砂粒を含む。	須恵質	灰色	〔表採〕
77-726	(18.8)	(4.5)	−	・体部は直線的に立ち上る。 ・口縁部は平坦面を持ち，上下に拡張する。	〃	〃	〃	内，黄灰色 外，黒色	外面に自然釉がかかる。 〔〃〕
77-727	(24.4)	(6.2)	−	・体部は直線的に立ち上る。 ・口縁部は平坦面を持ち，上下に大きく拡張する。	・内外面，ヨコナデ。 ・内面，仕上げナデを施す。	〃	生焼け	黄灰色	〔〃〕
77-728	(24.4)	(4.8)	−	・体部は直線的に立ち上る。 ・口縁部は丸味を持ち，上下に大きく拡張する。	・内外面，ヨコナデ。	〃	須恵質	内，灰色 外，黒灰色	外面に自然釉がかかる。 〔〃〕
77-729	(22.8) (20.6)	(7.8)	4.8	・体部は直線的に立ち上る。 ・口縁部は平坦面を持ち，上下に拡張する。 ・底部，平底。	・内外面，ヨコナデ。 ・底部，回転糸切り。 ・内面窯壁付着のため不明。	〃	〃	灰色	重ね焼。 内面，口縁部に自然釉がかかる。 〔〃〕
77-730	(26.8)	(5.1)	−	・体部は直線的に立ち上る。 ・口縁部は凹面を持ち，上下に大きく拡張する。	・内外面，ヨコナデ。	〃	〃	内，黄灰色 外，黒灰色	外面に自然釉がかかる。 〔〃〕
77-731	(28.2)	(5.2)	−	・体部は直線的に立ち上る。 ・口縁部は平坦面を持ち，上下に大きく拡張する。	・内外面，ヨコナデ。 ・内面，仕上げナデを施す。	〃	〃	暗灰色	〔〃〕
77-732	(25.6)	(6.0)	−	・体部は直線的に立ち上る。 ・口縁部は丸味を持ち，拡張する。	・内外面，ヨコナデ。	〃	〃	灰色	〔〃〕 −
77-733	(28.2)	(4.9)	−	・体部は直線的に立ち上る。 ・口縁部は平坦面を持ち，上下に大きく拡張する。	〃	〃	〃	〃	〔〃〕

図版番号	口径	器高	底径	形態の特徴	成形技法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
77-734	(28.2)	(6.9)	−	・体部は直線的に立ち上る。 ・口縁部は平坦面を持ち、上下に拡張する。	・内外面、ヨコナデ。 ・内面、仕上げナデを施す。	砂粒を含む。	須恵質	暗灰色	[表採]
77-735	(30.0)	(5.3)	−	・体部は直線的に立ち上る。 ・口縁部は平坦面を持ち、上下に大きく拡張する。	・内外面、ヨコナデ。	〃	〃	茶褐色	[〃]
77-736	(30.2)	(4.1)	−	・体部は直線的に立ち上る。 ・口縁部は平坦面を持ち、上下に拡張する。	〃	〃	〃	灰色	[〃]
77-737	(30.2)	(4.9)	−	・体部は直線的に立ち上る。 ・口縁部は平坦面を持ち、上下に大きく拡張する。	〃	〃	〃	〃	[〃]
77-740	(23.3)	(5.7)	−	・体部は直線的に立ち上る。 ・口縁部は丸味を持ち、上下に拡張する。	〃	〃	〃	暗灰色	[〃]
77-741	(25.2)	(5.7)	−	〃	〃	〃	〃	灰褐色	[〃]
77-742	(23.0)	(10.0)	(6.2)	・体部は内彎気味に立ち上る。 ・口縁部は丸味を持ち、上下に大きく拡張する。 ・底部、平底。	・内外面、ヨコナデ。 ・底部、不明。	〃	〃	黒灰色	内外面に自然釉がかかる。[〃]
77-743	(28.0)	(6.9)	−	・体部は直線的に立ち上る。 ・口縁部は丸味を持ち、上下に拡張する。	・内外面、ヨコナデ。	〃	〃	内、灰白色 外、暗灰色	外面に自然釉がかかる。[〃]
77-744	(29.8)	(6.4)	−	・体部は直線的に立ち上る。 ・口縁部は丸味を持ち、上下に大きく拡張する。	〃	〃	〃	茶褐色	[〃]

図版番号	口径	器高	底径	形態の特徴	成形技法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
77-745	(30.1)	(6.8)	−	・体部は外反気味に立ち上る。 ・口縁部は丸味を持ち、上下に大きく拡張する。	・内外面、ヨコナデ。	砂粒を含む。	須恵質	暗灰色	(表採)
77-746	(29.8)	(7.2)	−	・体部は直線的に立ち上る。 ・口縁部は丸味を持ち、拡張する。	〃	〃	生焼け	黄灰色	〔〃〕
77-747	(31.6)	(3.2)	−	・体部は直線的に立ち上る。 ・口縁部は丸味を持ち、上下に拡張する。	〃	〃	須恵質	暗灰色	〔〃〕
78-748	(24.0)	(5.1)	−	・体部は直線的に立ち上る。 ・口縁部は丸味を持ち、大きく拡張する。	〃	〃	〃	灰白色	〔〃〕
78-749	(23.6)	(6.6)	−	・体部は直線的に立ち上る。 ・口縁部は凹面を持ち、拡張する。	〃	〃	生焼け	〃	〔〃〕
78-750	(25.0)	(4.0)	−	・体部は直線的に立ち上る。 ・口縁部は平坦面を持ち、拡張する。	〃	〃	〃	〃	〔〃〕
78-751	(24.0)	(4.0)	−	・体部は直線的に立ち上る。 ・口縁部は丸味を持ち 拡張する。 ・端部は丸く仕上げる。	〃	〃	〃	〃	〔〃〕
78-752	(27.4)	(3.3)	−	・体部は直線的に立ち上る。 ・口縁部は平坦面を持ち、上下に大きく拡張する。	〃	〃	須恵質	灰色	〔〃〕
78-753	(24.8)	(3.9)	−	・体部は直線的に立ち上る。 ・口縁部は丸味を持ち、拡張する。	〃	〃	生焼け	黄灰色	〔〃〕

図版番号	口径	器高	底径	形態の特徴	成形技法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
78-754	(31.0)	(3.4)	−	・体部は直線的に立ち上る。 ・口縁部は平坦面を持ち、拡張する。	・内外面、ヨコナデ。	砂粒を含む。	須恵質	灰白色	〔表採〕
78-755	(32.0)	(3.1)	−	・体部は直線的に立ち上る。 ・口縁部は凹面を持ち、上方につまみ出す。	〃	〃	〃	暗灰色	〔〃〕
78-756	(26.4)	(6.0)	−	・体部は直線的に立ち上る。 ・口縁部は丸味を持ち、拡張する。	〃	〃	〃	〃	〔〃〕
78-757	(28.4)	(3.6)	−	・体部は直線的に立ち上る。 ・口縁部は凹面を持ち、拡張する。	〃	〃	〃	〃	〔〃〕
78-758	(29.6)	(4.0)	−	・体部は外反気味に立ち上る。 ・口縁部は凹面を持ち、拡張する。	・内外面、ヨコナデ。 ・内面、仕上げナデを施す。	〃	〃	灰色	〔〃〕
78-759	(32.6)	(4.2)	−	・体部は直線的に立ち上る。 ・口縁部は凹面を持ち、拡張する。	・内外面、ヨコナデ。	〃	〃	黒灰色	〔〃〕
78-760	(21.0)	(3.8)	−	・体部は直線的に立ち上る。 ・口縁部は丸味を持ち、拡張する。	〃	〃	生焼け	黄灰色	〔〃〕
78-763	(29.0)	(4.8)	−	・体部は直線的に立ち上る。 ・口縁部は丸味を持ち、上下に大きく拡張する。	〃	〃	須恵質	灰白色	〔〃〕
78-764	(30.2)	(5.0)	−	・体部は直線的に立ち上る。 ・口縁部は丸味を持ち上下に拡張する。	・内外面、ヨコナデ。 ・内面、仕上げナデを施す。	〃	〃	暗灰色	〔〃〕

図版番号	口径	器高	底径	形態の特徴	成形技法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
78-765	(21.0)	(5.6)	−	・体部は直線的に立ち上る。 ・口縁部は平坦面を持ち、上下に拡張する。	・内外面、ヨコナデ。	砂粒を含む。	普通質	暗灰色	[表採]
78-766	(35.8)	(3.6)	−	・体部は外反気味に立ち上る。 ・口縁部は凹面を持ち、上下に拡張する。	〃	〃	〃	〃	〔〃〕
78-767	(24.4)	9.7	10.0	・体部は直線的に立ち上る。 ・口縁部は凹面を持ち、上下に大きく拡張する。	・内外面、ヨコナデ。 ・内面、仕上げナデを施す。	〃	〃	〃	内面、窯壁塊が付着。内面口縁部に自然釉がかかる。〔〃〕
78-771	(27.6)	(6.6)	−	・体部は直線的に立ち上る。 ・口縁部は平坦面を持ち、上下に大きく拡張する。	・内外面、ヨコナデ。	〃	〃	内 黒灰色 外、灰色	口縁部から内面に自然釉がかかる。〔〃〕
78-772	(30.6)	(4.6)	−	・体部は直線的に立ち上る。 ・口縁部は凹面を持ち、上下に大きく拡張する。	〃	〃	〃	灰色	〔〃〕
78-773	(28.4)	(3.8)	−	・体部は直線的に立ち上る。 ・口縁部は平坦面を持ち、上下に大きく拡張する。	・内外面、ヨコナデ。	〃	〃	〃	〔〃〕
79-774	(20.0)	43.0)	−	・体部は直線的に立ち上る。 ・口縁部は平坦面を持ち、拡張する。	〃	〃	〃	青灰色	〔〃〕
79-775	(29.4)	(7.8)	−	・体部は直線的に立ち上る。 ・口縁部は丸味を持ち、上方につまみ出す。	〃	〃	〃	暗灰色	〔〃〕
79-780	(27.0)	(3.9)	−	・体部は直線的に立ち上る。 ・口縁部は凹面を持ち、上方につまみ出す。	〃	〃	〃	〃	〔〃〕

図版番号	口径	器高	底径	形態の特徴	成形技法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
79-781	(25.2)	(3.5)	−	・体部は直線的に立ち上る。 ・口縁部は丸味を持ち、上方につまみ出す。	・内外面、ヨコナデ。	砂粒を含む。	須恵質	灰色	〔表採〕
79-782	(27.2)	(3.7)	−	・体部は直線的に立ち上る。 ・口縁部は丸味を持つ。	〃	〃	生焼け	内、黄灰色 外、黒色	〔〃〕
79-783	(28.6)	(4.4)	−	・体部は直線的に立ち上る。 ・口縁部は丸味を持ち、上方につまみ出す。	〃	〃	須恵質	暗灰色	〔〃〕
79-784	(29.4)	(4.5)	−	・体部は直線的に立ち上る。 ・口縁部は平坦面を持ち　拡張する。	〃	〃	瓦質	〃	〔〃〕
79-785	(30.0)	(3.5)	−	・体部は直線的に立ち上る。 ・口縁部は丸味を持ち、上方につまみ出す。	〃	〃	須恵質	〃	〔〃〕
79-786	(30.0)	(3.6)	−	・体部は外反気味に立ち上る。 ・口縁部は凹面を持ち、上方につまみ出す。	〃	〃	〃	〃	〔〃〕
79-787	(30.6)	(3.0)	−	・体部は直線的に立ち上る。 ・口縁部は丸味を持つ。	〃	〃	〃	〃	〔〃〕
79-788	(29.8)	(6.1)	−	・体部は直線的に立ち上る。 ・口縁部は平坦面を持つ。	〃	〃	生焼け	内、黄灰色 外、黒灰色	〔〃〕
79-796	(29.1)	(2.5)	−	・体部は直線的に立ち上る。 ・口縁部は丸味を持つ。	〃	〃	須恵質	暗灰色	〔〃〕

図版番号	口径	器高	底径	形態の特徴	成形技法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
80-798	(17.0)	(4.5)	−	・体部は内彎気味に立ち上る。 ・口縁部は凹面を持ち、内方に若干つまみ出す。	・内外面、ヨコナデ。	砂粒を含む。	須恵質	暗灰色	〔表採〕
80-799	(31.2)	(4.3)	−	・体部は直線的に立ち上る。 ・口縁部は凹面を持ち、上下につまみ出す。	〃	〃	瓦質	黄灰色 口縁部、暗灰色	〔〃〕
80-800	(22.4)	(3.4)	−	・体部は直線的に立ち上る。 ・口縁部は丸味を持ち、拡張する。	〃	〃	須恵質	灰色 口縁部、黒灰色	〔〃〕
80-801	(32.0)	(5.0)	−	・体部は直線的に立ち上る。 ・口縁部は凹面を持ち、上下に大きく拡張する。	〃	〃	〃	灰白色	〔〃〕
80-802	(14.0)	(3.0)	−	・体部は直線的に立ち上る。 ・口縁部は丸味を持つ。	〃	〃	〃	〃	〔〃〕
80-803	(27.0)	(7.4)	−	・体部は内彎気味に立ち上る。 ・口縁部は凹面を持ち、上方につまみ出す。	〃	〃	〃	暗灰色	〔〃〕
80-804	(21.7)	(6.8)	−	・体部は直線的に立ち上る。 ・口縁部は平坦面を持ち、上方につまみ出す。	・内外面、ヨコナデ。 ・内面、仕上げナデを施す。	〃	〃	〃	〔〃〕
80-805	(26.4)	(4.7)	−	・体部は直線的に立ち上る。 ・口縁部は凹面を持ち、上方につまみ出す。	・内外面、ヨコナデ。	〃	〃	〃	〔〃〕
80-806	(28.7)	(4.8)	−	・体部は直線的に立ち上る。 ・口縁部は丸味を持ち、上下に拡張する。	〃	〃	〃	黒灰色	内外面に自然釉がかかる。〔〃〕

図版番号	口径	器高	底径	形態の特徴	成形技法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
80-807	(30.4)	(4.2)	−	・体部は直線的に立ち上る。 ・口縁部は凹面を持ち、拡張する。	・内外面、ヨコナデ。	砂粒を含む。	須恵質	暗灰色	〔蓋転〕
80-808	(30.6)	(4.7)	−	・体部は直線的に立ち上る。 ・口縁部は丸味を持ち、拡張する。	〃	〃	〃	〃	(〃)
80-809	(32.6)	(3.7)	−	・体部は直線的に立ち上る。 ・口縁部は凹面を持ち、上方につまみ出す。	〃	〃	〃	〃	(〃)
80-810	(32.4)	(3.5)	−	〃	〃	〃	〃	〃	(〃)
80-816	(25.0)	9.4	9.2	・体部は内彎気味に立ち上り、直線的に口縁部に続く。 ・端部は丸味を持ち、下方に若干つまみ出す。 ・底部は高台気味に立ち上る。	・内外面、ヨコナデ。 ・底部、回転糸切り(?)。 ・内面、仕上げナデを施す。	〃	瓦質	灰色 口縁部、黒灰色	(〃)
80-817	(32.0)	(10.0)	(9.8)	・体部は内彎気味に立ち上る。 ・端部は凹面を持ち、上方につまみ出す。 ・底部、平底。	・内外面、ヨコナデ。 ・底部、回転糸切り。 ・底部周縁、ナデ仕上げ。 ・内面、仕上げナデを施す。	〃	須恵質	内、暗灰色 外、灰色	(〃)
72-634	−	−	−	・体部は内彎気味に立ち上る。 ・端部は丸く仕上げる。 ・鉢(?)。	・外面、平行叩き。 ・端部、内外面木賊痕。 ・内面、ていねいなナデ仕上げ。	〃	〃	灰色	内面に自然釉がかかる。

海あがり鉢

海あがり鉢(1)

図版番号	口径	器高	底径	形態の特徴	成形技法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	26.8	8.8	9.1	・体部は内彎気味に立ち上り、直線的に口縁部に続く。 ・端部は平坦面を持ち、上方につまみ出す。 ・底部、平底。	・内外面、ヨコナデ。	砂粒を含む。	須恵質	灰色	井上繁広 氏蔵 江井ケ島 沖

図版番号	口径	器高	底径	形態の特徴	成形技法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
2	25.3	9.0	9.0	・体部は内彎気味に立ち上る。 ・端部は平坦面を持ち拡張し、上下につまみ出す。 ・底部　平底。	・内外面、ヨコナデ。 ・底部、回転糸切り。 ・内面、ユビ押えによる仕上げナデを施す。	砂粒を含む。	須恵質	暗灰色	多木建具店蔵 江井ケ島沖
3	(22.1)	7.6	8.3	・体部は内彎気味に立ち上る。 ・端部は丸味を持ち拡張する。 ・底部　平底。	〃	〃	〃	灰色	明石市教育委員会蔵
4	25.7	8.0	9.7	・体部は内彎気味に立ち上り、直線的に口縁部に続く。 ・端部は凹面を持ち拡張し、上下につまみ出す。 ・底部　平底。	〃	〃	〃	〃	〃 口縁部外面に自然釉がかかる。
5	22.5	8.1	9.0	・体部は内彎気味に立ち上る。 ・端部は平坦面を持ち拡張し、上端は内方につまみ出す。 ・底部、平底。	・内外面、ヨコナデ。 ・内面、ユビ押えによる仕上げナデを施す。	〃	〃	〃	北淡町歴史民俗資料館蔵 高島沖 口縁部に黒色釉がかかる。
6	23.6	8.0	8.9	・体部は内彎気味に立ち上り、外反しながら口縁部に続く。 ・端部は凹面を持ち拡張し、上端は内方につまみ出す。 ・底部、平底。	・内外面、ヨコナデ。 ・底部、回転糸切り。 ・内面、ユビ押えによる仕上げナデを施す。	〃	〃	〃	〃
7	24.5	8.2	9.4	・体部は内彎気味に立ち上る。 ・端部は丸味を持ち拡張し、上下につまみ出す。 ・底部、平底。	・内外面、ヨコナデ。 ・底部、回転糸切り。 ・内面、ユビ押えによる仕上げナデを施す。 ・底部内面中央、粘土巻き上げ痕有り。	〃	〃	〃	井上繁広氏蔵 口縁部に自然釉がかかる。
8	21.8	8.1	8.5	・体部は内彎気味に立ち上り、外反しながら口縁部に続く。 ・端部は平坦面を持ち拡張し、上端は内方につまみ出す。 ・底部、平底。	・内外面、ヨコナデ。	〃	〃	〃	明石市教育委員会蔵
9	21.8	7.65	7.7	・体部は内彎気味に立ち上り　外反しながら口縁部に続く。 ・端部は平坦面を持ち拡張し、上端は内方につまみ出す。 ・底部、平底。	・内外面、ヨコナデ。 ・底部、回転糸切り。	〃	〃	〃	井上繁広氏蔵 口縁部に自然釉がかかる。
10	23.3	6.5	7.9	・体部は内彎気味に立ち上り、外反しながら口縁部に続く。 ・端部は平坦面を持ち拡張し、上下につまみ出す。 ・底部、平底。	・内外面、ヨコナデ。	砂粒を含み良。	〃	暗灰色	明石市教育委員会蔵

図版番号	口径	器高	底径	形態の特徴	成形技法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
11	22.0	6.8	9.7	・体部は直線的に立ち上る。 ・端部は凹面を持ち拡張し、上端は内方につまみ出す。 ・底部、平底。	・内外面、ヨコナデ	砂粒を含む。	須恵質	灰色	〃
12	22.2	7.05	7.9	・体部は内彎気味に立ち上る。 ・端部は丸味を持ち拡張し、上下につまみ出す。 ・底部、平底。	〃	〃	〃	暗灰色	井上靈広氏蔵
13	20.1	6.3	9.0	・体部は内彎気味に立ち上る。 ・端部は丸味を持ち拡張し、上端は内方につまみ出す。 ・底部、平底。	〃	〃	〃	灰色	井上靈広氏蔵
14	21.0	6.9	8.7	〃	〃	〃	〃	暗灰色	兵庫県教育委員会蔵 淡路沖
15	22.4	6.9	7.2	・体部は内彎気味に立ち上り、外反しながら口縁部に続く。 ・端部は丸味を持ち拡張し、上端は内方につまみ出す。 ・底部、平底。	・内外面、ヨコナデ。 ・底部、回転糸切り。	〃	〃	〃	西海瓦油株式会社蔵 江井ヶ島沖
16	22.0	7.0	8.6	〃	・内外面、ヨコナデ。	〃	〃	灰色	岩本三郎氏蔵

甕

図版番号	口径	胴径	器高	形態の特徴	成形技法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
11-95	26.2	—	(5.8)	・口縁部は平坦面を持ち、上方につまみ出す。	・口縁部から頸部は内外ともヨコナデ。 ・胴部、粗い(3㎜)平行叩き。 ・胴部内面、ナデ仕上げ。	砂粒を含む。	須恵質	暗灰色	外面に自然釉がかかる。(灰)
11-96	(27.8)	—	(10.4)	〃	・口縁部から頸部は内外ともヨコナデ、頸部は左上りの平行叩きが残る。 ・胴部、粗い(4.5㎜)平行叩き ・胴部内面、ていねいなナデ仕上げ。	〃	〃	〃	(〃)

図版番号	口径	胴径	器高	形態の特徴	成形技法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
12-116	(29.2)	−	(4.8)	・口縁部は平坦面を持ち、上方につまみ出す。	・口縁部から頸部は内外ともヨコナデ。	砂粒を含む。	生焼け	黄灰色	〔底床〕
12-117	(26.4)	−	(9.0)	・口縁部は丸味を持ち、上方につまみ出す。	・口縁部から頸部は内外ともヨコナデ。 ・胴部、粗い(3㎜)平行叩き。 ・胴部内面、ナデ仕上げ後も同心円叩きが残る。	〃	須恵質	青灰色	〔〃〕
12-118	(32.4)	−	(7.8)	・口縁部は平坦面を持ち、上方につまみ出す。	・口縁部から頸部は内外ともヨコナデ。 ・胴部、粗い(3㎜)平行叩き。	〃	瓦質	〃	〔〃〕
16-187	26.9	44.6	(29.6)	・口縁部は平坦面を持ち、上方につまみ出す。 ・胴部、長胴(?)。	・口縁部から頸部内外ともヨコナデ、頸部は左上りの平行叩きが残る。 ・胴部、粗い(4㎜)の平行叩き。 ・胴部内面、ていねいなナデ仕上げ。	〃	須恵質	暗灰色	外面に自然釉がかかる。〔南灰〕
17-188	26.0	38.6	40.6	・口縁部は平坦面をもち、上方につまみ出す。 ・胴部、長胴。 ・底部、丸底。	・口縁部から頸部は内外ともヨコナデ、頸部は平行叩きが残る。 ・胴部、粗い(3㎜)平行叩き。 ・底部内面、縦位のユビナデ。 ・胴部上半、ていねいなナデ仕上げ。	〃	〃	〃	〔〃〕
17-189	24.7	41.4	43.4	〃	・口縁部から頸部は内外ともヨコナデ、頸部は平行叩きが残る。 ・胴部、粗い(4㎜)の平行叩き。 ・胴部内面、縦位のユビナデ。 ・胴部内面上半、ナデ仕上げ。	〃	瓦質	〃	〔〃〕
18-190	(26.4)	−	(17.0)	・口縁部は平坦面を持ち、上方につまみ出す。	・口縁部から頸部は内外ともヨコナデ、頸部は左上りの平行叩きが残る。 ・胴部、粗い(4㎜)平行叩き。 ・胴部内面、ナデ仕上げ。	〃	生焼け	内、茶灰色 外、黒色	〔〃〕
18-191	25.0	43.7	(31.3)	・口縁部は平坦面を持ち、上方につまみ出す。 ・胴部、長胴(?)。	・口縁部から頸部は内外ともていねいなヨコナデ。 ・胴部、粗い(4㎜)平行叩きが重なり合う。	〃	〃	黄灰色	〔〃〕
18-192	25.55	45.8	34.6	・口縁部は平坦面を持ち、上方につまみ出す。 ・胴部、不明。 ・底部、丸底。	・口縁部から頸部は内外ともていねいなヨコナデ。 ・胴部、粗い(4㎜)平行叩き。 ・底部、叩き目が重なり合う。 ・底部内面から胴部上半にかけて縦位のナデ仕上げ。	〃	須恵質	灰色	〔〃〕

図版番号	口径	胴径	器高	形態の特徴	成形技法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
19-200	(22.0)	—	(8.8)	・口縁部は平坦面を持ち、上方につまみ出す。	・口縁部から頸部は内外ともヨコナデ、頸部は平行叩きが残る。 ・胴部、粗い(3㎜)平行叩き。 ・胴部内面、ナデ仕上げ。	砂粒を含む。	須恵質	暗灰色	(灰)
19-201	(31.0)	—	(7.4)	・口縁部は凹面を持ち、拡張する。上端はつまみ出し、下端は垂下する。	・口縁部から頸部は内外ともヨコナデ、頸部は平行叩きが残る。 ・胴部、平行叩き。 ・胴部内面、ナデ仕上げ後も同心円叩きが残る。	〃	〃	内、灰色 外、暗灰色	(〃)
19-202	(36.0)	—	(8.0)	〃	〃	〃	〃	〃	(〃)
19-203	(31.0)	—	(7.4)	〃	・口縁部から頸部は内外ともヨコナデ、頸部は平行叩きが残る。 ・胴部、平行叩き。 ・胴部内面、ナデ仕上げ。	〃	〃	〃	(〃)
19-205	(18.2)	—	(8.0)	〃	〃	〃	〃	内、灰白色 外、暗灰色	(〃)
19-206	(30.0)	(42.8)	(20.5)	・口縁部は平坦面を持ち、拡張する。上端はつまみ出し、下端は垂下する。 ・胴部、丸胴(?)。	・口縁部から頸部は内外ともヨコナデ、頸部は平行叩きが残る。 ・胴部、平行叩き。 ・胴部内面、ナデ消し後も同心円叩きが残り、胴毛仕上げ。	砂粒を含むが、良。	〃	暗灰色	(〃)
20-209	(17.6)	—	(9.0)	・口縁部は平坦面を持ち、上方につまみ出す。	・口縁部から頸部は内外ともヨコナデ。 ・胴部、粗い(3㎜)平行叩き。 ・胴部内面、ナデ消し後も同心円叩きが残る。	砂粒を含む。	〃	〃	(窯床)
20-210	(23.9)	—	(6.2)	・口縁部は平坦面を持ち、上下につまみ出す。	・口縁部から頸部は内外ともヨコナデ。 ・胴部、平行叩き。 ・胴部内面、ナデ仕上げ。	〃	〃	〃	(〃)
20-213	(25.6)	(35.6)	(15.2)	・口縁部は平坦面を持ち、上方につまみ出す。	・口縁部から頸部は内外ともヨコナデ、頸部は平行叩きが残る。 ・胴部、粗い(3㎜)平行叩き。 ・胴部内面、ナデ仕上げ。	〃	〃	灰色	(灰)

図版番号	口径	胴径	器高	形態の特徴	成形技法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
20-214	(15.0)	−	(5.0)	・口縁部は平担面を持ち，拡張し，下端は垂下する。	・口縁部から頸部は内外ともヨコナデ。 ・胴部，平行叩き。	砂粒を含む。	還元焔	黄灰色	〔灰〕
20-215	(26.0)	−	(8.2)	・口縁部は平担面を持ち，上方につまみ出す。	・口縁部から頸部は内外ともヨコナデ，頸部は平行叩きが残る。 ・胴部，粗い(3㎜)平行叩き。 ・胴部内面，ナデ消し後も同心円叩きが残る。	〃	生焼け	灰色	〔〃〕
20-216	26.4	(19.2)	(13.2)	〃	・口縁部から頸部は内外ともヨコナデ，頸部は左上りの平行叩きが残る。 ・胴部，粗い(3.5㎜)平行叩き。 ・胴部内面，ナデ仕上げ。	〃	還元焔	暗灰色	〔〃〕
20-217	(17.0)	(24.4)	(13.5)	・口縁部は上方につまみ出す。	・口縁部から頸部は内外ともヨコナデ。 ・胴部，粗い(2.5㎜)平行叩き。 ・胴部内面，ナデ仕上げ。	〃	〃	灰色	外面に自然釉がかかる。〔〃〕
20-218	(27.2)	(36.2)	(25.8)	・口縁部は平担面を持ち，上方につまみ出す。	・口縁部から頸部は内外ともヨコナデ，頸部は左上りの平行叩きが残る。 ・胴部，粗い(3㎜)平行叩き。 ・胴部内面，ナデ仕上げ。	〃	〃	〃	〔〃〕
20-219	(18.4)	(29.2)	(20.4)	〃	・口縁部から頸部は内外ともヨコナデ，頸部に平行叩きが残る。 ・胴部，粗い(4㎜)平行叩き。 ・胴部内面　縦位のナデ仕上げ。	〃	〃	〃	〔〃〕
21-227	(24.0)	−	(12.5)	・口縁部は平担面を持ち，上方につまみ出す。	・口縁部から頸部は内外ともヨコナデ。 ・胴部，平行叩き。 ・胴部内面，ナデ仕上げ。	〃	〃	黒灰色	内外面に自然釉がかかる。〔窯床〕
21-228	(21.6)	−	(9.6)	・口縁部は平担面を持ち，拡張する。上端はつまみ出し，下端は垂下する。	〃	〃	〃	暗灰色	口縁部に自然釉がかかる。〔〃〕
23-267	(19.8)	(29.0)	(31.3)	・口縁部は平担面を持ち，上下につまみ出す。 ・胴部，丸胴。 ・底部，丸底(？)。	・口縁部から頸部は内外ともヨコナデ。 ・胴部，平行叩き。 ・底部，叩き目が重なり合う。 ・胴部内面，ナデ消し後も同心円叩きが残る。	〃	〃	内，黒灰色 外，茶褐色	〔窯〕

図版番号	口径	胴径	器高	形態の特徴	成形技法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
23-268	19.2	30.2	(28.5)	・口縁部は平坦面を持ち，上下につまみ出す。 ・胴部，丸胴。 ・底部，丸底。	・口縁部から頸部は内外ともヨコナデ。 ・胴部，平行叩き ・胴部内面，ナデ消し後も同心円叩きが残る。	砂粒を含む。	半焼け	内，橙灰色 外，黄灰色	〔窯〕
24-269	21.0	31.8	29.0	・口縁部は平坦面を持ち，上下につまみ出す。 ・胴部，丸胴。 ・底部，丸底。	・口縁部から頸部は内外ともヨコナデ，頸部は平行叩きが残る。 ・胴部，平行叩き。 ・底部，不明。 ・胴部内面，ていねいなナデ仕上げ。	〃	〃	内，橙灰色 外，茶褐色	〔〃〕
24-270	20.8	28.5	(31.1)	・口縁部は平坦面を持ち，上下につまみ出す。 ・胴部，丸胴。	・口縁部から頸部は内外ともヨコナデ。 ・胴部，平行叩き， ・胴部内面，ていねいなナデ仕上げ。	〃	〃	内，橙灰色 外，黄灰色	〔〃〕
24-271	21.0	32.6	28.8	・口縁部は平坦面を持ち，上下につまみ出す。 ・胴部，丸胴。 ・底部，丸底。	・口縁部から頸部は内外ともヨコナデ。 ・胴部，平行叩き。 ・底部，叩き目が重なり合う。 ・胴部内面，ナデ仕上げ。	〃	〃	内，橙灰色 外，茶褐色	〔〃〕
24-272	20.9	31.3	28.2	〃	・口縁部から頸部は内外ともヨコナデ。 ・胴部，平行叩き。 ・底部，叩き目が重なり合う。 ・胴部内面，ナデ消し後も同心円叩きが残る。	〃	〃	黄灰色	〔〃〕
24-273	21.4	30.8	(30.0)	〃	・口縁部から頸部は内外ともヨコナデ。 ・胴部，平行叩き。 ・底部，叩き目が重り合う。 ・胴部内面，ていねいなナデ仕上げ。	〃	〃	〃	〔〃〕
24-274	22.4	32.8	30.4	・口縁部は平坦面を持ち，上下につまみ出す。 ・胴部，丸胴。 ・底部，丸底。	・口縁部から頸部は内外ともヨコナデ。 ・胴部，平行叩き。 ・底部，叩き目が重なり合う。 ・胴部内面，ナデ消し後も同心円叩きが残る。	〃	須恵質	内，灰色 外，黄灰色	〔〃〕
25-275	(39.4)	－	(8.4)	・口縁部は凹面を持ち，大きく拡張する。上端はつまみ出し，下端は垂下する。	・口縁部から頸部は内外ともヨコナデ。 ・胴部，平行叩き， ・胴部内面，ナデ仕上げ。	〃	〃	橙灰色	頸部外面，ヘラ書き。〔〃〕
25-276	19.8	31.1	(22.5)	・口縁部は平坦面を持ち，上下につまみ出す。 ・胴部，丸胴(？)。	・口縁部から頸部は内外ともヨコナデ。 ・胴部，平行叩き。 ・胴部内面，ナデ消し後も同円心叩きが残る。	〃	〃	内，茶灰色 外，茶褐色	〔〃〕

図版番号	口径	胴径	器高	形態の特徴	成形技法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
25-277	20.0	31.6	(20.9)	・口縁部は平坦面を持ち、上下につまみ出す。 ・胴部、丸胴(?)。	・口縁部から頸部は内外ともヨコナデ。 ・胴部、平行叩き。 ・胴部内面、ナデ消し後も同円心叩きが残る。	砂粒を含む。	須恵質	内、茶灰色 外、茶褐色	(窯)
25-278	16.7	27.6	27.7	・口縁部は平坦面を持ち、上下につまみ出す。 ・胴部、丸胴。 ・底部、丸底。	・口縁部から頸部は内外ともヨコナデ。 ・胴部、平行叩き ・底部、叩き目が重なり合う。 ・胴部内面、ナデ消し後も同心円叩きが残る。	〃	〃	内、暗灰色 外、茶褐色	(〃)
25-279	21.8	32.6	(23.5)	・口縁部は平坦面を持ち、上下につまみ出す。 ・胴部、丸胴。	〃	〃	〃	内、黄灰色 外、茶褐色	(〃)
25-280	(19.6)	30.7	(26.0)	・口縁部は平坦面を持ち、上下につまみ出す。 ・胴部、丸胴。	・口縁部から頸部は内外ともヨコナデ。 ・胴部、平行叩き。 ・胴部内面、ナデ消し後も同心円叩きが残る。	〃	〃	灰褐色	(〃)
25-281	21.4	33.0	(25.5)	・口縁部は平坦面を持ち、上下につまみ出す。 ・胴部、丸胴(?)。	〃	〃	生焼け	黄灰色	(〃)
26-282	21.0	(30.0)	(8.4)	・口縁部に平坦面を持ち、上下につまみ出す。	・口縁部から頸部は内外ともヨコナデ。 ・胴部、平行叩き。 ・胴部内面、ナデ仕上げ。	〃	〃	茶褐色	(〃)
26-283	18.8	(20.8)	(9.6)	〃	・口縁部から頸部は内外ともヨコナデ。	〃	〃	内、灰色 外、茶褐色	(〃)
26-284	(19.2)	27.8	(26.5)	・口縁部は平坦面を持ち、上下につまみ出す。 ・胴部、長胴。 ・底部、丸底。	・口縁部から頸部は内外ともヨコナデ。 ・胴部、平行叩き。 ・底部、叩き目が重なり合う。 ・胴部内面、ナデ仕上げ。 ・厚手のつくり。	〃	〃	黒色	(〃)
26-285	15.8	26.0	(26.0)	〃	〃	〃	〃	〃	(〃)

図版番号	口径	胴径	器高	形態の特徴	成形技法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
26-286	17.8	(26.45)	(25.2)	・口縁部は丸味を持ち、上方につまみ出す。 ・胴部、長胴。 ・底部、丸底(?)。	・口縁部から頸部は内外ともヨコナデ。 ・胴部、平行叩き。 ・底部、叩き目が重なり合う。 ・胴部内面、ナデ仕上げ。 ・厚手のつくり。	砂粒を含む。	生焼け	内、灰色 外、黒色	〔窯〕
26-287	21.2	(32.4)	(12.3)	・口縁部は平坦面を持ち、上下につまみ出す。	・口縁部から頸部は内外ともヨコナデ。 ・胴部、平行叩き。 ・胴部内面、ナデ仕上げ。	〃	〃	茶褐色	〔〃〕
26-288	20.8	(31.6)	(11.9)	〃	〃	〃	〃	〃	〔〃〕
26-289	18.8	(31.0)	(11.0)	〃	・口縁部から頸部は内外ともヨコナデ。 ・胴部、平行叩き。 ・胴部内面、ナデ消し後も同心円叩きが残る。	〃	〃	黄灰色	〔〃〕
26-290	21.7	(31.35)	(14.4)	〃	〃	〃	須恵質	内、灰色 外、茶褐色	〔〃〕
26-291	21.8	(34.6)	(15.0)	・口縁部は平坦面を持ち、上下につまみ出す。 ・胴部、丸胴(?)。	・口縁部から頸部は内外ともヨコナデ。 ・胴部、平行叩き。	〃	〃	〃	〔〃〕
27-299	(16.5)	(29.4)	(17.9)	・口縁部は上方につまみ出す。	・口縁部から頸部は内外ともヨコナデ。 ・胴部、粗い(3㎜)平行叩き。 ・胴部内面、横位のナデ仕上げ。 ・胴部内面、上半縦位のナデ仕上げ。	〃	〃	灰白色	外面に自然釉がかかる。 〔前〕
27-300	(19.7)	(31.5)	(15.2)	・口縁部は平坦面を持ち、上下につまみ出す。	・口縁部から頸部は内外ともヨコナデ。、頸部は平行叩きが残る。 ・胴部、粗い(3㎜)平行叩き。 ・胴部内面、ナデ消し後も同心円叩きが残る。	〃	〃	暗灰色	〃 〔〃〕
27-301	18.2	(27.2)	(19.2)	・口縁部は平坦面を持ち、上下に拡張する。	・口縁部から頸部は内外ともヨコナデ。 ・胴部、平行叩き。 ・胴部内面、縦位のナデ仕上げ。	砂粒を含み、良。	〃	灰白色	〃 〔〃〕

図版番号	口径	胴径	器高	形態の特徴	成形技法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
27-302	30.1	(34.3)	(6.4)	・口縁部は凹面を持ち、拡張する。上端はつまみ出し、下端は若干垂下する。	・口縁部から頸部は内外ともヨコナデ、頸部は平行叩きが残る。 ・胴部、粗い(4㎜)平行叩き。	砂粒を含む。	瓦質	内、灰白色、外、暗灰色	[前]
27-303	21.0	31.6	(30.7)	・口縁部は平坦面を持ち、上方につまみ出す。 ・胴部、丸胴。 ・底部、丸底。	・口縁部から頸部は内外ともヨコナデ、頸部は平行叩きが残る。 ・胴部、粗い(4㎜)平行叩き。 ・底部、叩き目が重なり合う。 ・胴部内面、ナデ消し後も同心円叩きが残る。	〃	須恵質	内、灰色外、暗灰色	〔〃〕
28-304	(21.9)	(36.2)	(11.2)	・口縁部は平坦面を持ち、上方につまみ出す。	・口縁部から頸部は内外ともヨコナデ。 ・胴部、平行叩き。 ・胴部内面、ナデ仕上げ。	〃	〃	灰色	口縁部内面、ヘラ書き。〔〃〕
28-305	25.0	(39.1)	(13.4)	〃	・口縁部から頸部は内外ともヨコナデ、頸部は平行叩きが残る。 ・胴部、平行叩き。 ・胴部内面、ナデ仕上げ。	〃	生焼け	内、黄灰色外、灰色	〔〃〕
28-306	(29.1)	(37.0)	(14.1)	〃	・口縁部から頸部は内外ともヨコナデ、頸部は平行叩きが残る。 ・胴部、粗い(3㎜)平行叩き。 ・胴部内面、ナデ仕上げ。	〃	〃	内、茶褐色外、黒色	〔〃〕
28-307	24.6	(35.2)	(22.5)	・口縁部は平坦面を持ち、上方につまみ出す。 ・胴部、丸胴。	・口縁部から頸部は内外ともヨコナデ、頸部は平行叩きが残る。 ・胴部、粗い(3.5㎜)平行叩き。 ・胴部内面、ナデ仕上げ。	〃	須恵質	暗灰色	〔〃〕
28-308	(25.9)	(38.4)	(23.4)	・口縁部は平坦面を持ち、上方につまみ出す。	・口縁部から頸部は内外ともヨコナデ、頸部は平行叩きが残る。 ・胴部、粗い(4㎜)平行叩き。 ・胴部内面、縦位のナデ仕上げ。	〃	瓦質	内、灰白色外、黒灰色	〔〃〕
29-309	31.7	(42.4)	(25.5)	・口縁部は凹面を持ち、上方につまみ出す。 ・胴部、丸胴(?)。	・口縁部から頸部は内外ともヨコナデ、頸部は平行叩きが残る。 ・胴部、粗い(4㎜)平行叩き。 ・胴部内面、縦位のナデ仕上げ。	〃	〃	灰色	〔〃〕
28-310	(30.0)	(40.2)	(28.7)	・口縁部は凹面を持ち、上方につまみ出す。 ・胴部、長胴(?)。	・口縁部から頸部は内外ともヨコナデ、頸部は平行叩きが残る。 ・胴部、粗い(3㎜)平行叩き。 ・胴部内面、ていねいなナデ仕上げ。	〃	〃	内、灰色外、黒灰色	〔〃〕

図版番号	口径	胴径	器高	形態の特徴	成形技法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
29-311	28.0	(36.6)	(41.8)	・口縁部は平坦面を持ち、上方につまみ出す。 ・胴部、長胴。	・口縁部から頸部は内外ともヨコナデ、頸部は平行叩きが残る。 ・胴部、粗い(4㎜)平行叩き。 ・底部、叩き目が重なり合う。 ・胴部内面、ナデ仕上げ。	砂粒を含む。	生焼け	内、灰色 外、黒灰色	(前)
30-312	(27.0)	(38.4)	(25.7)	・口縁部は上方につまみ出す。 ・胴部、長胴。	・口縁部から頸部は内外ともヨコナデ、頸部は平行叩きが残る。 ・胴部、粗い(3㎜)平行叩き。 ・胴部内面、ナデ仕上げ後も同心円叩きが残る。	〃	瓦質	黒灰色	〔〃〕
30-313	(25.9)	(41.5)	(23.6)	・口縁部は平坦面を持ち、上方につまみ出す。	・口縁部から頸部は内外ともヨコナデ、頸部は左上りの平行叩きが残る。 ・胴部、粗い(3㎜)平行叩き。 ・胴部内面、ナデ仕上げ。	〃	〃	灰色	〔〃〕
30-314	29.2	41.9	(42.3)	・口縁部は平坦面を持ち、上方につまみ出す。 ・胴部、丸胴。 ・底部、丸底〔?〕。	・口縁部から頸部は内外ともヨコナデ、頸部は平行叩きが残る。 ・胴部、粗い(4㎜)平行叩き。 ・底部、叩き目が重なり合う。 ・胴部内面、ナデ仕上げ。	〃	〃	内、灰白色 外、黒色	〔〃〕
31-315	(26.9)	(41.2)	(13.4)	・口縁部は平坦面を持ち、上方につまみ出す。	・口縁部から頸部は内外ともヨコナデ、頸部は平行叩きが残る。 ・胴部、粗い(4㎜)平行叩き。 ・胴部内面、ナデ仕上げ後、刷毛仕上げ。	〃	須恵質	灰色	外面に自然釉がかかる。 〔〃〕
31-316	(26.7)	(41.6)	(16.9)	〃	・口縁部から頸部は内外ともヨコナデ、頸部は平行叩きが残る。 ・胴部、粗い(3㎜)平行叩き。 ・胴部内面、ナデ仕上げ。	〃	生焼け	黒灰色	〔〃〕
31-317	30.7	(49.6)	(18.0)	〃	・口縁部から頸部は内外ともヨコナデ、頸部は平行叩きが残る。 ・胴部、粗い(4㎜)平行叩き。 ・胴部内面、ナデ消し後も刷毛仕上げが残る。	〃	瓦質	内、暗灰色 外、灰白色	〔〃〕
31-318	29.4	(44.2)	(32.5)	・口縁部は丸味を持ち、上方につまみ出す。 ・胴部、長胴。	・口縁部から頸部は内外ともヨコナデ、頸部は平行叩きが残る。 ・胴部、粗い(3－4㎜)平行叩き。 ・胴部内面、ナデ消し後も同心円叩きが残る。	〃	〃	暗灰色	〔〃〕
32-319	28.8	(41.8)	(17.1)	・口縁部は丸味を持ち、上方につまみ出す。	・口縁部から頸部は内外ともヨコナデ、頸部は平行叩きが残る。 ・胴部、粗い(4㎜)平行叩き。 ・胴部内面、ナデ消し後も同心円叩きが残る。	〃	〃	〃	〔〃〕

図版番号	口径	胴径	器高	形態の特徴	成形技法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
32-320	(26.4)	(40.4)	(16.1)	・口縁部は凹面を持ち，上下に大きく拡張する。上端はつまみ出し，下端は垂下する。	・口縁部から頸部は内外ともヨコナデ，頸部は平行叩きが残る。 ・胴部，平行叩き， ・胴部内面，ナデ仕上げ後も平行叩きが残る。	砂粒を含む。	須恵質	灰白色	外面に自然釉がかかる。[前]
32-321	(32.0)	(45.6)	(10.5)	〃	・口縁部から頸部は内外ともヨコナデ，頸部は平行叩きが残る。 ・胴部，平行叩き ・胴部内面，ナデ仕上げ。	砂粒を含み，良。	生焼け	〃	〔〃〕
31-322	(27.0)	(47.8)	(20.2)	・口縁部は平担面を持つ。上端はつまみ出し，下端は垂下する。	・口縁部から頸部は内外ともヨコナデ， ・胴部，平行叩き。 ・胴部内面，ナデ仕上げ。	〃	瓦質	灰色	〔〃〕
32-323	(34.8)	(43.1)	(14.9)	・口縁部は凹面を持ち，上下に大きく拡張する。下端は垂下する。	・口縁部から頸部は内外ともヨコナデ，頸部は平行叩きが残る。 ・胴部，平行叩き。 ・胴部内面，ナデ仕上げ。	〃	須恵質	〃	〔〃〕
34-349	(22.1)	30.3	33.0	・口縁部は丸味を持ち，上方につまみ出す。 ・胴部，長胴。 ・底部，丸底。	・口縁部から頸部は内外ともヨコナデ，頸部は左上りの平行叩きが残る。 ・胴部，粗い(4㎜)平行叩き。 ・胴部内面，ナデ仕上げ後も同心円叩きが残る。	砂粒を含む。	〃	暗灰色	外面は自然釉がかかる。[灰]
34-350	(24.0)	(33.2)	(21.6)	・口縁部は凹面を持ち，拡張する。上端はつまみ出し，下端は垂下する。	・口縁部から頸部は内外ともヨコナデ，頸部は平行叩きが残る。 ・胴部，平行叩き。 ・胴部内面，ていねいな横位のナデ仕上げ。	〃	〃	〃	〔〃〕
34-351	(23.6)	(32.0)	(18.0)	・口縁部は平担面を持ち，上方につまみ出す。	・口縁部から頸部は内外ともヨコナデ，頸部は平行叩きが残る。 ・胴部，平行叩き。 ・胴部内面，ていねいな横位のナデ仕上げ。	〃	〃	〃	〔〃〕
35-352	(25.4)	(36.4)	36.5	・口縁部は平担面を持ち，上方につまみ出す。 ・胴部，長胴。 ・底部，丸底。	・口縁部から頸部は内外ともヨコナデ，頸部は左上りの平行叩きが残る。 ・胴部，粗い(3㎜)平行叩き， ・底部，叩き目が重なり合う。 ・胴部内面，ナデ仕上げ。	〃	〃	〃	〔〃〕
35-353	(33.6)	(46.0)	(46.2)	〃	・口縁部から頸部は内外ともヨコナデ，頸部は平行叩きが残る。 ・胴部，粗い(3㎜)平行叩きが重なり合う。 ・底部，叩き目が重なり合う。 ・胴部内面，ナデ消し後も同心円叩きが残る。	〃	〃	〃	〔〃〕

図版番号	口径	胴径	器高	形態の特徴	成形技法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
36-354	29.7	(40.3)	[12.2]	・口縁部は上方につまみ出す。	・口縁部から頸部は内外ともヨコナデ、胴部は平行叩きが残る。 ・胴部、平行叩き。 ・胴部内面、ナデ仕上げ。	砂粒を含む。	須恵質	暗灰色	(灰)
36-355	(25.4)	37.8	39.7	・口縁部は平坦面を持ち、上方につまみ出す。 ・胴部、長胴。 ・底部、丸底。	・口縁部から頸部は内外ともヨコナデ、胴部は平行叩きが残る。 ・胴部、粗い(3mm)平行叩き。 ・底部、叩き目が重なり合う。 ・胴部内面、ナデ消し後も同心円叩きが残る。	〃	〃	〃	(〃)
36-356	(24.5)	(40.9)	(39.9)	・口縁部は平坦面を持ち、上方につまみ出す。 ・胴部、長胴。 ・底部、丸底(?)。	〃	〃	瓦質	黒灰色 底部、丸く灰白色	(〃)
37-357	29.3	[39.8]	(14.9)	・口縁部は拡張して平坦面を持ち、上方につまみ出す。	・口縁部から頸部は内外ともヨコナデ、胴部は平行叩きが残る。 ・胴部、粗い(4mm)平行叩き。 ・胴部内面、ナデ消し後も同心円叩きが残る。	〃	須恵質	暗灰色	(〃)
37-358	22.4	35.2	40.2	・口縁部は平坦面を持ち、上方につまみ出す。 ・胴部、長胴。 ・底部、丸底。	・口縁部から頸部は内外ともヨコナデ、胴部は平行叩きが残る。 ・胴部、粗い(4mm)平行叩き。 ・底部、叩き目が重なり合う。 ・胴部内面、擬似のナデ消し後も同心円叩きが残る。	〃	〃	灰白色	(〃)
37-359	28.5	38.2	(38.0)	・口縁部は平坦面を持ち、上方につまみ出す。 ・胴部、長胴。 ・底部、丸底(?)。	・口縁部から頸部は内外ともヨコナデ。 ・胴部、粗い(3mm)平行叩き。 ・底部、叩き目が重なり合う。 ・胴部内面、ナデ仕上げ。	〃	瓦質	黒灰色	(〃)
38-360	(16.8)	36.8	(28.2)	・口縁部は平坦面を持ち、上方につまみ出す。 ・胴部、長胴。	・口縁部から頸部は内外ともヨコナデ、頸部は平行叩きが残る。 ・胴部、粗い(4mm)平行叩き。 ・胴部内面、ナデ仕上げ後も同心円叩きが残る。	〃	須恵質	暗灰色	(〃)
38-361	28.8	(40.5)	(20.3)	・口縁部は平坦面を持ち、上方につまみ出す。 ・胴部、長胴(?)。	・口縁部から頸部は内外ともヨコナデ、頸部は平行叩きが残る。 ・胴部、粗い(3mm)平行叩き。 ・胴部内面、ナデ仕上げ。	〃	〃	灰色	外面に自然釉がかかる。(〃)
38-362	(22.6)	[40.0]	(36.0)	・口縁部は平坦面を持ち、上方につまみ出す。 ・胴部、長胴。	・口縁部から頸部は内外ともヨコナデ、頸部は左上りの平行叩きが残る。 ・胴部、粗い(4mm)平行叩き。 ・胴部内面、ナデ仕上げ。	〃	瓦質	黒灰色	(〃)

図版番号	口径	胴径	器高	形態の特徴	成形技法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
39-363	(50.1)	−	−	・口縁部は凹面を持ち、上方につまみ出す。	・口縁部から頸部は内外ともヨコナデ。	砂粒を含む。	須恵質	暗灰色	内面にヘラ描き。[灰]
39-364	(53.2)	−	−	〃	・口縁部から頸部は内外ともヨコナデ、頸部外面は横位の叩きが残る。	〃	〃	〃	〃〔〃〕
39-365	(45.7)	−	−	〃	〃	〃	〃	〃	〔〃〕
39-366	(26.4)	(34.6)	(18.1)	・口縁部は平坦面を持ち、上方につまみ出す。	・口縁部から頸部は内外ともヨコナデ、頸部は平行叩きが残る。 ・胴部、平行叩き。 ・胴部内面、ナデ仕上げ。	〃	〃	〃	外面に自然釉がかかる。〔〃〕
39-367	27.2	41.6	39.0	・口縁部は平坦面を持ち、上方につまみ出す。 ・胴部、丸胴。 ・底部、丸底。	・口縁部から頸部は内外ともヨコナデ、頸部は平行叩きが残る。 ・胴部、粗い(3㎜)平行叩き。 ・底部、叩き目が重なり合う。 ・胴部内面、下半横位のナデ、上半縦位のナデ仕上げ。	〃	〃	〃	〔〃〕
44-432	(22.6)	(20.3)	(33.8)	・口縁部は平坦面を持ち、上方につまみ出す。	・口縁部から頸部は内外ともヨコナデ、頸部は平行叩きが残る。 ・胴部、粗い(3㎜)平行叩き。 ・胴部内面、ていねいなナデ仕上げ。	〃	瓦質	内、灰白色 外、黒灰色	(床灰)
45-433	(29.4)	(43.6)	(32.3)	〃	・口縁部から頸部は内外ともヨコナデ。 ・胴部、粗い(4㎜)平行叩き。 ・胴部内面、縦位のていねいなナデ仕上げ。	〃	須恵質	暗灰色	〔〃〕
45-434	(28.8)	43.2	(43.3)	・口縁部は平坦面を持ち、上方につまみ出す。 ・胴部、長胴。	・口縁部から頸部は内外ともヨコナデ、頸部は平行叩きが残る。 ・胴部、粗い(3㎜)平行叩きが残る。 ・底部、叩き目が重なり合う。 ・胴部内面、下半横位のユビナデ、上半横位のナデ仕上げ。	〃	〃	内、灰白色 外、暗灰色	〔〃〕
46-435	(35.1)	(52.0)	(40.6)	・口縁部は丸味を持ち、上方につまみ出す。 ・胴部、丸胴(?)。	・口縁部から頸部は内外ともヨコナデ、頸部は平行叩きが残る。 ・胴部、格子目叩き(13×2㎜)。 ・胴部内面、ナデ仕上げ。	〃	〃	〃	〔〃〕

図版番号	口径	胴径	器高	形態の特徴	成形技法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
46-436	29.6	43.2	47.0	・口縁部は丸味を持ち、上方につまみ出す。 ・胴部、長胴。 ・底部、丸底。	・口縁部から頸部は内外ともヨコナデ、頸部は左上りの平行叩きが残る。 ・胴部、格子目叩き(12×3mm)。 ・胴部内面、ナデ仕上げ。	砂粒を含む。	瓦質	暗灰色	[床灰]
52-502	(17.0)	(27.6)	(25.4)	・口縁部は平坦面を持ち、上方につまみ出す。	・口縁部から頸部は内外ともヨコナデ、頸部は平行叩きが残る。 ・胴部、平行叩き。 ・胴部内面、ナデ仕上げ。	〃	須恵質	〃	[灰]
52-503	(18.0)	(27.2)	28.1	・口縁部は平坦面を持ち、拡張する。上端はつまみ出し、下端は垂下する。 ・胴部、丸胴。 ・底部、丸底。	・口縁部から頸部は内外ともヨコナデ、頸部は平行叩きが残る。 ・胴部、粗い(3mm)平行叩き。 ・底部、叩き目が重なり合う。 ・胴部内面、ナデ仕上げ。	〃	〃	〃	外面に自然釉がかかる。[〃]
52-504	17.5	29.8	32.2	・口縁部は平坦面を持ち、拡張する。上端はつまみ出し、下端は垂下する。 ・胴部、長胴。 ・底部、丸底。	・口縁部から頸部は内外ともヨコナデ、頸部は平行叩きが残る。 ・胴部、平行叩き。 ・底部、叩き目が重なり合う。 ・胴部内面、ていねいなナデ仕上げ。 ・胴部上半、同心円叩きが残る。	〃	〃	〃	[〃]
52-505	17.7	30.8	(28.4)	・口縁部は平坦面を持ち、上方につまみ出す。 ・胴部、丸胴。 ・底部、不明。	・口縁部から頸部は内外ともヨコナデ、頸部は平行叩きが残る。 ・胴部、粗い(3mm)平行叩きが残る。 ・底部、叩き目が重なり合う。 ・胴部内面、ていねいなナデ仕上げ。	〃	〃	〃	[〃]
53-506	(22.6)	(33.8)	(29.5)	・口縁部は平坦面を持ち、上方につまみ出す。 ・胴部、丸胴。	・口縁部から頸部は内外ともヨコナデ、頸部は平行叩きが残る。 ・胴部、格子目叩き(18×3mm)。 ・胴部内面、ていねいなナデ仕上げを施すが、同心円叩きも残る。	〃	〃	〃	[〃]
53-507	(23.5)	(35.7)	(19.0)	・口縁部は平坦面を持ち、上方につまみ出す。	・口縁部から頸部は内外ともヨコナデ、頸部に平行叩きが残る。 ・胴部、平行叩き。 ・胴部内面、ナデ仕上げ。	〃	瓦質	内、灰白色 外、暗灰色	[〃]
53-508	21.8	35.0	(31.5)	・口縁部は平坦面を持ち、上方につまみ出す。 ・胴部、丸胴。	〃	〃	須恵質	暗灰色	[〃]
53-509	19.0	(30.5)	(27.1)	・口縁部は丸味を持ち、上方につまみ出す。 ・胴部、丸胴(?)。	・口縁部から頸部は内外ともヨコナデ、頸部は平行叩きが残る。 ・胴部、平行叩き。 ・胴部内面、ていねいなナデ仕上げ。	〃	〃	〃	[〃]

図版番号	口径	胴径	器高	形態の特徴	成形技法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
53-510	19.5	32.0	(31.6)	・口縁部は平坦面を持ち、上方につまみ出す。 ・胴部、丸胴。 ・底部、丸底(?)。	・口縁部から頸部は内外ともヨコナデ、頸部は平行叩きが残る。 ・胴部、粗い(3mm)平行叩き。 ・胴部内面、ていねいなナデ仕上げ。	砂粒を含む。	須恵質	暗灰色	[灰]
53-511	24.15	35.5	(35.7)	・口縁部は平坦面を持ち、上方につまみ出す。 ・胴部、丸胴。 ・底部、丸底。	・口縁部から頸部は内外ともヨコナデ、頸部は平行叩きが残る。 ・胴部、格子目叩き(14×3mm)。 ・底部、格子目叩き(9×3mm)が重なり合う。 ・胴部内面、ナデ仕上げ。	〃	〃	暗灰色 底部外面、灰白色	[〃]
54-512	29.1	42.7	40.45	〃	・口縁部から頸部は内外ともヨコナデ、頸部は平行叩きが残る。 ・胴部、粗い(4mm)平行叩き。 ・底部、叩き目が重り合う。 ・胴部内面、ナデ仕上げ。	〃	〃	暗灰色	外面に自然釉がかかる。 [〃]
54-513	37.6	48.8	(35.2)	・口縁部は凹面を持ち、上方につまみ出す。	・口縁部から頸部は内外ともヨコナデ、頸部は平行叩きが残る。 ・胴部、粗い(3mm)平行叩き。 ・胴部内面、ナデ仕上げ。	〃	〃	〃	[〃]
55-514	25.4	39.7	45.4	・口縁部は平坦面を持ち、上方につまみ出す。 ・胴部、長胴。 ・底部、丸底。	・口縁部から頸部は内外ともヨコナデ、頸部は平行叩きが残る。 ・胴部格子目叩き(13×3mm)。 ・底部、格子目叩きが重なり合う。 ・胴部内面、下半縦位のユビナデ、上半横位のナデ仕上げ。	〃	〃	内、灰白色 外、暗灰色	[〃]
55-515	29.0	41.4	42.2	〃	・口縁部から頸部は内外ともヨコナデ、頸部は平行叩きが残る。 ・胴部、格子目叩き(12×2mm)。 ・底部、格子目叩き(8×3mm)が重なり合う。 ・底部内面、縦位のナデ仕上げ。 ・胴部内面上半、ナデ仕上げ。	〃	〃	暗灰色	[〃]
56-516	26.0	39.9	41.95	〃	・口縁部から頸部は内外ともヨコナデ、頸部は平行叩きが残る。 ・胴部、粗い(4mm)平行叩き。 ・底部、叩き目が重なり合う。 ・胴部内面ナデ仕上げ後も同心円叩きが残る。	〃	〃	暗灰色 底部外面、灰色	[〃]
56-517	(34.8)	(53.2)	48.0	・口縁部は平坦面を持ち、上方につまみ出す。 ・胴部、丸胴。 ・底部、丸底。	・口縁部から頸部は内外ともヨコナデ、頸部は平行叩きが残る。 ・胴部、粗い(3mm)平行叩き。 ・底部、叩き目が重なり合う。 ・胴部内面、ナデ仕上げ後も同心円叩きが残る。	〃	〃	内、灰白色 外、暗灰色	[〃]
57-518	(30.5)	(40.4)	(22.7)	・口縁部は平坦面を持ち、上方につまみ出す。	・口縁部から頸部は内外ともヨコナデ、頸部は平行叩きが残る。 ・胴部、粗い(3.5mm)平行叩き。 ・胴部内面、ナデ仕上げ。	〃	〃	暗灰色	[〃]

図版番号	口径	胴径	器高	形態の特徴	成形技法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
57-519	(27.9)	(40.4)	(22.4)	・口縁部は平坦面を持ち、上方につまみ出す。	・口縁部から頸部は内外ともヨコナデ、頸部は平行叩きが残る。 ・胴部、粗い（4㎜）平行叩き。 ・胴部内面、ナデ仕上げ。	砂粒を含む。	須恵質	暗灰色	外面に自然釉がかかる。〔灰〕
57-520	(29.3)	(41.7)	(27.7)	・口縁部は平坦面を持ち、上方につまみ出す。 ・胴部、長胴（？）。	・口縁部から頸部は内外ともヨコナデ、頸部は平行叩きが残る。 ・胴部、平行叩き。 ・胴部内面、ていねいなナデ仕上げ後も同心円叩きが残る。	〃	〃	〃	〔〃〕
58-521	(28.0)	(43.0)	(26.2)	・口縁部は平坦面を持ち、上方につまみ出す。	・口縁部から頸部は内外ともヨコナデ。 ・胴部、粗い（3.5㎜）平行叩き。 ・胴部内面、中位は上下のナデ仕上げ。 ・胴部上半、横位のナデ仕上げ。	〃	〃	〃	〔〃〕
58-522	(28.8)	(40.6)	(22.2)	〃	・口縁部から頸部は内外ともヨコナデ、頸部は平行叩きが残る。 ・胴部、粗い（3㎜）平行叩き。 ・胴部内面、ナデ仕上げ後も同心円叩きが残る。	〃	〃	〃	〔〃〕
58-523	(31.9)	(46.2)	(29.3)	・口縁部は丸味を持ち、上方につまみ出す。	・口縁部から頸部内外ともヨコナデ。 ・胴部、平行叩き。 ・胴部内面、ナデ仕上げ。 ・胴部内面上半、刷毛仕上げ。	〃	〃	黒灰色	〔〃〕
59-537	18.0	28.4	(14.0)	・口縁部は平坦面を持ち、垂下する。 ・胴部、丸胴（？）。	・口縁部から頸部は内外ともヨコナデ、頸部は平行叩き残る。 ・胴部、平行叩き。 ・胴部内面、ていねいなナデ仕上げ後も同心円叩きが残る。	砂粒を含み、良。	〃	灰色	〔灰褐〕
59-538	(17.9)	(27.5)	(27.65)	・口縁部は平坦面を持ち、上方につまみ出す。	・口縁部から頸部は内外ともヨコナデ。 ・胴部、平行叩き。 ・胴部内面、縦位のナデ仕上げ。	砂粒を含む。	〃	黒灰色	〔〃〕
59-539	(18.1)	(26.8)	(24.0)	・口縁部は丸味を持ち、上方につまみ出す。 ・胴部、丸胴（？）	・口縁部から頸部は内外ともヨコナデ。 ・胴部、平行叩き。 ・胴部内面、ていねいなナデ仕上げ。	〃	〃	暗灰色	〔〃〕
59-540	(20.8)	(32.5)	(21.6)	・口縁部は凹面を持ち、上方につまみ出す。 ・胴部、丸胴。	・口縁部から頸部は内外ともヨコナデ、頸部は平行叩きが残る。 ・胴部、平行叩き。 ・胴部内面、ナデ仕上げ後も一部同心円叩きが残る。	〃	〃	〃	〔〃〕

図版番号	口径	胴径	器高	形態の特徴	成形技法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
60-541	29.0	41.0	37.7	・口縁部は丸味を持ち拡張する。上端はつまみ出し、下端は垂下する。 ・胴部、丸胴。 ・底部、丸底。	・口縁部から頸部は内外ともヨコナデ、頸部は平行叩きが残る。 ・胴部、平行叩き。 ・底部、叩き目が重なり合う。 ・胴部内面ナデ仕上げ後刷毛仕上げ。	砂粒を含む。	須恵質	暗灰色	胴部外面に自然釉がかかる。(灰釉)
60-542	39.2	(63.0)	50.5	・口縁部は平坦面を持ち拡張する。上端はつまみ出し、下端は垂下する。 ・胴部、丸胴。 ・底部、丸底。	・口縁部から頸部は内外ともヨコナデ、頸部は平行叩きが残る。 ・胴部、平行叩き。 ・底部、叩き目が重なり合う。 ・胴部内面、ナデ仕上げ。	〃	生焼け	内、黄灰色 外、黒色	(〃)
61-543	29.0	39.0	38.4	・口縁部は凹面を持ち、大きく拡張する。上端はつまみ出し、下端は垂下する。 ・胴部、丸胴。 ・底部、丸底。	〃	〃	瓦質	内、灰白色 外、暗灰色	(〃)
61-544	(46.4)	(58.0)	52.0	・口縁部は凹面を持ち、拡張する。上端はつまみ出し、下端は垂下する。 ・胴部、丸胴。 ・底部、丸底。	・口縁部から頸部は内外ともヨコナデ、頸部は平行叩きが残る。 ・胴部、平行叩き。 ・底部、叩き目が重なり合う。 ・胴部内面、下半最位のユビナデ上半横位のナデ仕上げ。 ・胴部下もナデ消し後も同心円叩きが残る。	〃	須恵質	暗灰色	(〃)
62-545	(28.6)	(43.2)	(31.8)	・口縁部は凹面を持ち拡張する。上端はつまみ出し、下端は垂下する。 ・胴部、長胴。	・口縁部から頸部内外ともヨコナデ、頸部は平行叩きが残る。 ・胴部、平行叩き。 ・胴部内面、ナデ消し後も同心円叩きが残る。	〃	瓦質	内、黒灰色 外、黒色	(〃)
62-546	39.6	54.7	55.9	・口縁部は平坦面を持ち、拡張する。上端はつまみ出し、下端は垂下する。 ・胴部、長胴。 ・底部、丸底。	・口縁部から頸部は内外ともヨコナデ、頸部は平行叩きが残る。 ・胴部、平行叩き。 ・底部、叩き目が重なり合う。 ・胴部内面、下半最位のナデ、上半、横位のナデ仕上げ。 ・底部、内面刷毛仕上げ。	〃	須恵質	暗褐色 底部外面、灰色	(〃)
63-547	(35.2)	(53.0)	(41.6)	・口縁部は凹面を持ち拡張する。上端はつまみ出し、下端は垂下する。	・口縁部から頸部は内外ともヨコナデ。 ・胴部、平行叩き。 ・胴部内面、ナデ仕上げ。	〃	瓦質	内、灰白色 外、暗灰色	(〃)
63-548	36.0	(50.0)	50.1	・口縁部は凹面を持ち、拡張する。上端はつまみ出し、下端は垂下する。 ・胴部、丸胴。 ・底部、丸底。	・口縁部から頸部は内外ともヨコナデ、頸部は平行叩き。 ・胴部、平行叩き。 ・底部、叩き目が重なり合う。 ・胴部内面、縦位のナデ仕上げ。	〃	須恵質	暗灰色	(〃)
64-549	(30.0)	(53.2)	(42.3)	・口縁部は平坦面を持ち拡張する。下端は垂下する。	・口縁部から頸部は内外ともヨコナデ、頸部は平行叩きが残る。 ・胴部、平行叩き。 ・胴部内面、ナデ仕上げ後も同心円叩きが残る。	〃	〃	内、茶褐色 外、暗灰色	(〃)

図版番号	口径	胴径	器高	形態の特徴	成形技法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
64-550	(40.6)	51.8	(40.1)	・口縁部は平坦面を持ち拡張する。上端はつまみ出し、下端は垂下する。	・口縁部から頸部は内外ともヨコナデ、頸部は平行叩きが残る。 ・胴部平行叩き。 ・胴部内面、ナデ消し後も同心円叩きが残る。	砂粒を含む。	須恵質	暗灰色	〔灰釉〕
74-671	(28.4)	—	(4.2)	・上端部は平坦面を持ち、上下につまみ出す。	・口縁部から頸部は内外ともヨコナデ。 ・胴部、平行叩き。	砂粒を含み、良。	〃	灰色	〔表採〕
74-672	(21.8)	—	(6.0)	〃	・口縁部から頸部は内外ともヨコナデ、頸部は、平行叩きが残る。 ・胴部、平行叩き。	砂粒を含む。	〃	暗灰色	〔〃〕
76-714	(26.4)	—	(4.3)	・口縁部は凹面を持ち、上方につまみ出す。	・口縁部から頸部は内外ともヨコナデ、頸部は左上りの平行叩きが残る。	〃	〃	〃	〔〃〕
79-776	(28.6)	—	(4.8)	・口縁部は平坦面を持ち拡張する。上端はつまみ出し、下端は垂下する。	・口縁部から頸部は内外ともヨコナデ、頸部は平行叩きが残る。 ・胴部、平行叩き。	砂粒を含み、良。	〃	灰白色	外面に自然釉がかかる。〔〃〕
79-777	(27.0)	—	(4.2)	〃	・口縁部から頸部は内外ともヨコナデ。	砂粒を含む。	〃	灰色	〔〃〕
79-778	(31.0)	—	(1.8)	・口縁部は平坦面を持ち、上方につまみ出す。	〃	砂粒を含み、良。	〃	〃	〔〃〕
79-779	(29.0)	—	(3.2)	〃	・口縁部から頸部は内外ともヨコナデ、頸部は平行叩きが残る。	砂粒を含む。	〃	暗灰色	口縁部に自然釉がかかる。〔表採〕
79-789	(20.7)	—	(5.2)	・口縁部は平坦面を持ち、拡張する。上端は丸く、下端は垂下する。	〃	〃	〃	灰白色	外面に自然釉がかかる。〔〃〕

図版番号	口径	胴径	器高	形態の特徴	成形技法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
79-790	(24.2)	−	(5.0)	・口縁部は平坦面を持ち，上方につまみ出す。	・口縁部から頸部は内外ともヨコナデ。	砂粒を含む。	須恵質	灰色	(表採)
79-791	(29.5)	−	(4.2)	・口縁部は平坦面を持ち，拡張する。上端はつまみ出し，下端は垂下する。	・口縁部から頸部は内外ともヨコナデ，頸部は平行叩きが残る。	〃	〃	暗灰色	〔〃〕
79-792	(31.1)	−	(5.2)	・口縁部は凹面を持ち，拡張する。上端はつまみ出し，下端は垂下する。	・口縁部から頸部は内外ともヨコナデ。 ・胴部，平行叩き。	〃	〃	灰色	〔〃〕
79-793	(29.6)	−	(6.0)	・口縁部は平坦面を持ち，上方につまみ出す。	・口縁部から頸部は内外ともヨコナデ。 ・胴部，平行叩き。	〃	〃	暗灰色	内外面に自然釉がかかる。〔〃〕
79-795	(28.9)	−	(4.4)	・口縁部は平坦面を持ち，拡張する。下端は垂下する。	・口縁部から頸部は内外ともヨコナデ，頸部は平行叩きが残る。	〃	〃	灰色	〃 〔〃〕
80-797	(21.6)	−	(5.0)	・口縁部は丸味を持ち，上方につまみ出す。	・口縁部から頸部は内外ともヨコナデ。	〃	生焼け	黒色	〔〃〕
80-811	(28.5)	−	(5.6)	・口縁部は凹面を持ち，上方につまみ出す。	・口縁部から頸部は内外ともヨコナデ，頸部は平行叩きが残る。 ・胴部，粗い（4㎜）平行叩き。	〃	〃	暗灰色	〔〃〕
80-812	(28.6)	−	(5.8)	〃	〃	〃	瓦質	内，灰白色 外，暗灰色	(表採)
80-818	(30.8)	−	(6.8)	・口縁部は平坦面を持ち，上方につまみ出す。	・口縁部から頸部は内外ともヨコナデ，頸部は左上りの平行叩きが残る。 ・胴部，平行叩き。	〃	須恵質	暗灰色	外面に自然釉がかかる。〔〃〕

釜・鍋類

表09

図版番号	口径	胴径	器高	形態の特徴	成形技法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
12-109	−	(22.8)	−	・口縁部は内傾して立ち上る。 ・体部は内彎する。	・体部内外面、刷毛目。 ・体部外面、平行叩き後刷毛仕上げ。	砂粒を含む。	土師器	橙灰色	釜 〔窯〕
40-370	24.0	−	15.4	・口縁部は頸部から内彎気味に立ち上る ・端部は丸く納める。 ・体部は内湾し、底部は丸底。	・体部外面、平行叩き。 ・口縁部内外面、ヨコナデ。 ・体部内面上半、刷毛仕上げ。 ・体部内面下半から底部ナデ。	〃	〃	〃	三足付鍋 体部外面にスス付着。 〔整床〕
72-631	−	−	−	・口縁部は平坦面を持つ。 ・体部外面、つば有り。		滑石		灰褐色	石鍋
72-632	−	−	−	・体部外面、つば有り。	・体部内外面、ナデ仕上げ後つばを付ける。	砂粒を含む。	須恵質(硬質)	灰色	鍋(?)

壺

壺(1)

図版番号	口径	器高	底径	形態の特徴	成形技法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
21-220	9.9	(21.0)	−	・体部は外方に内彎気味に立ち上り、肩部を張り出す。 ・頸部から外反し口縁部に至る。 ・端部は内傾して丸味を持つ。	・内外面、ヨコナデ。 ・体部外面、10条のヘラ沈線有り。	砂粒を含む。	生焼け	内、黄灰色 外、黒色	〔整床〕
21-233	(9.1)	−	−	・頸部から外反し口縁部に至る。 ・端部は内傾して丸味を持つ。	・内外面、ヨコナデ。	〃	須恵質	暗灰色	〔窯〕
21-234	−	(6.5)	9.5	・体部は底部から外方に立ち上る。	・内外面、ヨコナデ。 ・底部、回転糸切り。	〃	生焼け	橙灰色	〔〃〕
48-457	11.1	(12.7)	−	・体部は内彎気味に立ち上り、肩部を張り出す。 ・頸部から外反し口縁部に至る。 ・端部は内傾し、丸味を持つ。	・内外面、ヨコナデ。	〃	須恵質	暗灰色	〔灰〕

図版番号	口径	器高	底径	形態の特徴	成形技法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
59-525	12.3	−	−	・頸部から外反し口縁部に至る。 ・端部は内傾して丸く納める。	〃	砂粒を含む。	須恵質	暗灰色	〔灰〕
72-628	10.8	−	−	・頸部から外反し口縁部に至る。 ・端部は内傾して丸味を持つ。	〃	〃	〃	〃	〔盛〕
79-794	(8.6)	(4.8)	−	・口縁部は外方につまみ出し，丸く納める。	・口縁部から頸部は内外ともヨコナデ。	砂粒を含み，良。	〃	青灰色	〔表採〕

軒丸瓦

図版番号	天地径	左右幅	文様区径	甲房径	連子数	珠文数	形態及び成形技法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
65-551	150	152	119	52	1＋8	8	・瓦当の裏側に丸瓦を接合させるために指で作ったと思われる縄有り。 ・裏面は不定方向のナデ仕上げ。	砂粒を含み，良。	須恵質	暗灰色	22−〔前〕
65-552	148	−	122	53	1＋8	(6)	・瓦当の裏側に縄有り。 ・縁に丸瓦の一部残る。 ・裏面剝落のためナデ不明。	〃	〃	灰色	22-〔灰〕
65-553	−	156	124	56	1＋8	(4)	・瓦当裏面に縄有り。 ・裏面不定方向のナデ仕上げ。	〃	瓦質	黒灰色	22-〔〃〕
65-554	−	−	−	53	1＋8	(4)	・瓦当外縁上半分欠損。 ・裏面不定方向のナデ仕上げ。	〃	須恵質	灰色	30-〔前〕
65-555	−	−	−	−	−	−	・瓦当の裏面に縄有り。 ・裏面ナデ方向不明。	〃	〃	〃	瓦当面には黒灰色の自然釉がかかる。〔盛〕

図版番号	天地径	左右幅	文様区径	中房径	蓮子数	珠文数	形態及び成形技法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
65-556	−	−	−	−	−	−	・瓦当と丸瓦は包み込み式で接合。 ・断面半月状の空隙有り。 ・裏面ナデ方向不明。	砂粒を含み、良。	須恵質	灰色	瓦当面には黒灰色の自然釉がかかる。 〔盛〕
65-557	−	−	−	−	−	−	・瓦当の半分は欠損。 ・裏面ナデ方向不明。	〃	〃	〃	瓦当の下端から裏面にかけて自然釉。 30-〔庫灰〕
65-558	129	134	107	51	1＋(4)	−	・瓦当裏面に溝有り。 ・裏面剝落のためナデ不明。	〃	生焼け	黒灰色	30-〔灰〕
65-559	−	−	−	−	−	−	・瓦当裏面に溝有り。 ・瓦当下半分欠損のためナデ方向不明。	〃	〃	〃	22-〔前〕
65-560	−	−	−	−	−	−	・瓦当上半分は欠損。 ・裏面剝落・欠損のためナデ不明。	〃	〃	〃	〔盛〕
65-561	−	−	−	−	−	−	・瓦当裏面に溝有り。 ・瓦当下半分欠損のため裏面ナデ方向不明。	〃	須恵質	灰色	33-〔焼灰〕
65-562	−	−	−	−	−	−	・瓦当の上半分以上欠損。 ・瓦当裏面に指ナデ。 ・ナデ方向不明。 ・下端部にワラ状圧痕土有り。	〃	〃	黒灰色	〔盛〕
65-563	−	−	−	−	−	−	・瓦当の上半分以上欠損。 ・裏面、不定方向のナデ仕上げ。	〃	〃	暗灰色	22-〔灰〕

軒平瓦

図版番号	上弦幅	下弦幅	弦深	瓦当面厚さ	文様区幅	文様区厚さ	形態及び成形技法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
66-564	230	250	28	45	236	29	・瓦当と平瓦は強み込み式で接合。 ・接合付近の瓦当上面から平瓦凹面にかけては不定方向のナデ。 ・顎から平瓦凸面にかけては横ナデ。 ・瓦当左右端は平瓦側縁にかけてナデ仕上げ。	砂粒を含み、良。	須恵質	暗灰色	〔盛〕
66-565	265	295	37	47	259	32	〃	〃	〃	〃	〔〃〕
66-566	185	199	20	48	179	30	〃	〃	〃	灰白色	〔〃〕
66-567	185	199	24	50	179	30	〃	〃	〃	暗灰色	30－〔前〕
66-568	－	－	－	－	－	－	・瓦当左端を残す小破片。	〃	〃	灰　色	〔盛〕
65-569	－	－	－	46	－	34	・瓦当左側を残す破片。 ・瓦当裏面に平瓦を挿入させるために指で作ったと思われる調有り。 ・顎部は横ナデ。	〃	〃	暗灰色	22－〔灰〕
66-570	－	－	－	－	－	－	・瓦当中央よりやや左側を残す小破片。 ・瓦当裏面に調有り。 ・顎部は横ナデ。	〃	〃	〃	〔盛〕
66-571	－	－	－	－	－	－	・瓦当中央から右側にかけて残る破片。 ・瓦当裏面に調有り。 ・顎部は横ナデ。	〃	〃	〃	〔灰〕
66-572	－	－	－	－	－	－	・瓦当左側の一部を残す小破片。 ・瓦当裏面に調有り。 ・顎部は横ナデ。	〃	瓦質	黄灰色	22－〔窯〕

図版番号	上弦幅	下弦幅	弦深	瓦当面厚さ	文様区幅	文様区厚さ	形態及び成形技法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
66-573	−	−	−	−	−	−	・瓦当右端を残す小破片。 ・瓦当の裏面に縄有り。 ・ナデは剝落のため不明。	砂粒を含み、良。	瓦質	黄灰色	〔盛〕
66-574	−	−	−	−	−	−	・瓦当左端部を残す小破片。 ・瓦当裏面に縄有り。 ・ナデは欠損のため不明。	〃	須恵質	灰色	22−〔灰〕
66-575	−	−	−	−	−	−	・瓦当中央上部を残す破片。 ・瓦当と平瓦は包み込み式で接合。 ・瞬面半月状の空隙有り。 ・瓦当上面から平瓦凹面にかけては不定方向のナデ仕上げ。	〃	瓦質	灰白色	22−〔前〕
66-576	−	−	−	52	−	32	・瓦当中央から右側にかけて残る破片。 ・瓦当の裏面に縄有り。 ・顎部は横ナデ。	〃	〃	〃	〔盛〕
66-577	−	−	−	53	−	38	・瓦当中央から右端まで残す破片。 ・瓦当裏面に縄有り。 ・ナデは剝落のため不明。	〃	須恵質	灰色	22−〔前〕
66-578	−	−	−	56	−	36	・瓦当中央部から左端にかけて残る破片。 ・瓦当と平瓦は包み込み式で接合。 ・接合部分は空隙なし。 ・瓦当上面から平瓦凹面にかけてのナデは不定方向。 ・顎から凸面にかけては横ナデ。 ・瓦当左端から平瓦にかけては横ナデ仕上げ。	〃	〃	暗灰色	22−〔〃〕
66-579	−	−	−	53	−	32	〃	〃	〃	〃	22−〔〃〕
66-580	−	−	−	44	−	−	・瓦当左端を残す破片。 ・瓦当裏面に縄有り。 ・顎部は横ナデ。	〃	〃	〃	〔盛〕
66-581	−	−	−	58	−	39	・瓦当中央から左端にかけて残る破片。 ・瓦当と平瓦は包み込み式で接合。 ・接合部分は空隙なし。 ・ナデは剝落のため不明。	〃	生焼け	黄灰色	22−〔橙〕

図版番号	上弦幅	下弦幅	弦深	瓦当面厚さ	文様区幅	文様区厚さ	形態及び成形技法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
67-582	–	–	–	56	–	38	・瓦当は右側を欠損。 ・瓦当と平瓦は包み込み式で接合。 ・接合部分は空隙なし。 ・瓦当上面から平瓦凹面にかけては不定方向のナデ。 ・顎部から平瓦にかけては横ナデ。 ・瓦当左右端から平瓦にかけては欠損のため不明。	砂粒を含み、良。	生焼け	黄灰色	〔瓶〕
67-583	–	–	–	55	–	37	・瓦当左半分を残す。 ・瓦当と平瓦は包み込み式で接合。 ・ナデは剝落のため不明。	〃	〃	黒灰色	22－〔灰〕
67-584	–	–	–	–	–	–	・瓦当左半分の下端を残す。 ・瓦当裏面に糸切り。 ・顎部は横ナデ。	〃	須恵質	暗灰色	30－〔搜〕
67-585	–	–	–	62	–	41	・瓦当左側を残す。 ・瓦当と平瓦は包み込み式で接合。 ・接合部分に空隙なし。 ・瓦当上面から凹面にかけては不定方向のナデ。 ・顎部から平瓦凸面にかけては横ナデ。 ・瓦当左端から平瓦側縁にかけて横ナデ仕上げ。	〃	〃	黄灰色	〔瓶〕
67-586	–	–	–	55	–	38	・瓦当中央部を残す破片。 ・瓦当と平瓦は包み込み式により接合。 ・顎部は横ナデ。	〃	〃	灰色	〔〃〕
67-587	–	–	–	–	–	–	・瓦当右端下を残す破片。 ・瓦当と平瓦は包み込み式により接合。 ・顎部は不定方向のナデ。 ・他は欠損のため不明。	〃	〃	〃	〔〃〕
67-588	–	–	–	–	–	–	・瓦当中央下端部を残す小破片。	〃	〃	〃	〔〃〕
67-589	–	–	–	59	–	39	・瓦当右側半分を残す破片。 ・瓦当と平瓦は包み込み式で接合。 ・接合部分に空隙有り。 ・瓦当上面から平瓦凹面にかけて、顎部から平瓦凸部にかけてはヨコナデ。 ・粗雑なナデ仕上げ。	〃	〃	〃	瓦当から平瓦凹面にかけて自然釉。〔〃〕
67-590	198	195	16	46	189	33	・瓦当と平瓦は包み込み式で接合。 ・接合付近の瓦当上面から平瓦凹面にかけて、顎部から平瓦凸面にかけては横ナデ。 ・粗雑なナデ仕上げ。	〃	〃	暗灰色	瓦当面に自然釉がかかる。 30－〔前〕

図版番号	上弦幅	下弦幅	弦深	瓦当面厚さ	文様区幅	文様区厚さ	形態及び成形技法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
67-591	–	195	9	43	187	32	・瓦当と平瓦は包み込み式で接合。 ・接合付近の瓦当上面から平瓦凹面にかけて、顎部から平瓦凸面にかけてはヨコナデ。 ・粗雑なナデ仕上げ。	砂粒を含み、良。	須恵質	暗灰色	30－[前]
67-592	–	–	–	–	–	–	・瓦当の左側下部を残す破片。 ・瓦当裏面に縄有り。 ・顎部は横ナデ。	〃	〃	〃	22－[灰]
67-593	–	–	–	48	–	28	・瓦当中央部を残す破片。 ・瓦当と平瓦は包み込み式で接合。 ・接合部分に少し空隙有り。 ・瓦当上面から凹面にかけて、顎部から凸面にかけては横ナデ。	〃	〃	灰色	30－[横]
67-594	–	–	–	52	–	31	・瓦当左側を残す破片。 ・瓦当裏面に縄有り。 ・ナデは剥落のため不明。	〃	瓦質	黄灰色	[横]

丸瓦・平瓦

図版番号	全長	最大幅	厚さ	布目㎝	形態及び成形技法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
68-600	329	139	18	縦6 横8	・凸面は端縁と平行ナデ。 ・凹面の布目は乱れ、シワが多い。 ・端縁とその内側、側縁の凸面側、側縁、その内側の順序でヘラ削りをする。 ・凹面に糸切痕有り。 ・玉縁と丸瓦部の段は回転ナデ。	砂粒を含み、良。	須恵質	暗灰色	22－[灰]
68-601	329	135	17	縦5 横8	〃	〃	〃	〃	22－[〃]
68-602	325	140	18	縦6 横10	・凹面は布目の上に所々砂が付着。 ・凸面は3条の櫛をもつ引き板により側縁と平行引き、端縁と平行ナデ。 ・凹面の布目は粗い、シワも少ない。 ・側端縁のヘラ削りは600番と同じ。 ・凹面は糸切痕有り。 ・玉縁と丸瓦部の段は回転ナデ。 ・端縁二辺にワラ状圧痕有り。	〃	〃	灰白色	22－[前]
68-603	327	121	12	縦7 横8	・凸面は端縁と平行ナデ。 ・凹面の布目は粗い、シワが少ない。 ・端側縁のヘラ削りは600番と同じ。 ・凹面に糸切痕有り。 ・玉縁と丸瓦部の段は回転ナデ。	〃	〃	〃	30－[〃]

図版番号	全長	最大幅	厚さ	布目cm	形態及び成形技法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
69-604	335	215	22	縦9 横9	・凸面全体に8条の溝をもつ叩き板により、端縁のほぼ中央を基点として右から左への叩き目を持つ。 ・端縁、側縁凹凸面の布目と叩きの順番で調整。 ・端縁の辺に、乾燥させる際に付いたと思われるワラ状圧痕有り。 ・凹面には糸切痕有り。	砂粒を含み、良。	須恵質	灰白色	29-(南灰)
69-605	321	222	25	縦7 横11	・端側縁をヘラ削り後、凸面を叩き不定方向のナデ仕上げ、はみ出した粘土を側縁に折り曲げる。 ・端縁の一辺にワラ状圧痕有り。 ・糸切痕不明。 ・布目は不定方向のナデによりほとんど消されている。	〃	〃	黄灰色	29-(窯床)
69-606	330	219	26	縦7 横10	・端、側縁をヘラ削り。 ・凸面を側縁に平行叩き、同じ方向にナデ仕上げ、はみ出した粘土を側縁に折り曲げる。 ・端縁の一辺にシワ状圧痕有り。 ・凹面に糸切痕有り。	〃	〃	〃	29-〔〃〕
70-607	375	238	25	縦6 横7	・凹凸面には布目、ナデの上に砂が付着。 ・端・側縁をヘラ削り。 ・凸面を叩き、ナデの後、凹凸面の八辺をヘラで面取り。 ・端縁の辺にワラ状圧痕有り。 ・凹凸面に糸切痕有り。	〃	〃	灰色	22-〔前〕
70-608	369	235	22	縦6 横8	・凹面にはナデの上に砂が付着。 ・端、側縁をヘラ削り。 ・凸面を側面に平行叩き、同じ方向にナデ仕上げ。 ・糸切痕不明。 ・端縁の一辺にワラ状圧痕有り。 ・凸面の側縁と端縁の一辺と凹面の端縁をヘラで面取り。	〃	〃	〃	22-〔〃〕
70-609	280	256	28	縦7 横7	・凹凸面には布目・ナデ後砂が付着。 ・端、側縁をヘラ削りし、凸面を叩き、ナデ仕上げ後、端、側縁をナデ仕上げ。 ・凹面の端縁と凸面の四辺をヘラで面取り。 ・糸切痕不明。	〃	生焼け	黒灰色	22-〔〃〕
70-610	366	248	23	縦7 横9	・端、側縁をヘラ削りし、端縁のほぼ中央を基点に叩き、不定方向のナデ仕上げ。 ・端、側縁はナデ仕上げ。 ・凸面には擂痕痕有り。 ・糸切痕不明。 ・端縁の一辺にワラ状圧痕有り。	〃	須恵質	暗灰色	22-〔〃〕
71-611	329	228	25	縦3 横6	・端、側縁をヘラ削りし、端縁の右角から左に扇状に叩き、ナデ仕上げ。 ・凹面には糸切痕有り。 ・凹面の一部にナデが有る。 ・端縁の一辺にワラ状圧痕有り。	〃	瓦質	黒灰色	22-(灰)
71-612	290	188	22	縦8 横11	・端、側縁をヘラ削りし、端縁の右角から左に扇状に叩き、はみ出した粘土を側縁に折り曲げナデ仕上げ。 ・凹面に糸切痕有り。 ・端縁の一辺にワラ状痕有り。	〃	須恵質	〃	30-(前)

図版番号	全長	最大幅	厚さ	布目cm	形態及び成形技法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
71-613	378	241	23	縦8 横11	・凹凸面全体は布目、ナデの上に砂が付着。 ・端、側縁をヘラ削り、凸面を叩き、ナデ仕上げ。 ・凸面四辺と凹面の端縁を面取りしている。 ・凹面に糸切痕有り。 ・端縁の一辺にワラ状圧痕有り。	砂粒を含み、良。	生焼け	黒灰色	33-〔窯床〕
71-614	364	233	35	縦8 横5	・端、側縁をヘラ削りし、端縁の右角から左に扇状に叩き、ナデ仕上げ。 ・凹面には、糸切痕有り。 ・端縁2辺にワラ状圧痕有り。 ・凹面のほぼ中央部に指による「×」印を付ける。	〃	瓦質	〃	30-〔前〕

鬼瓦

鬼瓦

図版番号	形態及び成形技法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
67-595	・周縁の一部が残る破片。 ・側面から裏面にかけて、ていねいなヘラ削り。 ・残存高、52.5cm。 ・珠文から裏面までの厚みは31.5cm。	砂粒を含み、良。	須恵質	暗灰色	(鐙)
67-596	・周縁の一部が残る破片。 ・側面、裏面にていねいなヘラ削り。 ・裏面には、その上横ナデ仕上げを施す。 ・残存高、106.5cm。 ・珠文から裏面までの厚みは30.5cm。	〃	〃	灰白色	珠文帯に自然釉がかかる。〔〃〕
67-597	・周縁の左下底部を残す破片。 ・側面から裏面にかけて、ていねいなヘラ削り。 ・下底部幅、35.5cm。 ・珠文から裏面までの厚みは33cm。	〃	〃	灰色	〔〃〕
67-598	・目・鼻と思われる部分から周縁にかけて一部残る破片。 ・残在高、66cm。 ・珠文から裏面までの厚み38.5cm。	〃	〃	暗灰色	〔〃〕
67-599	・周縁の右下底部を残す破片。 ・下底部幅、48.5cm。 ・珠文から裏面までの厚み28cm。	〃	〃	〃	全体的に自然釉がかかる。〔〃〕

焼き台

図版番号	口径	器高	底径	形態の特徴	成形技法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
73-635	(6.7)	3.5	(10.2)	・体部は内彎気味に立ち上り、端部は丸く納める。 ・底部は高台気味に立ち上る。	・内外面、ヨコナデ。 ・底部、糸切り。	砂粒を含む。	須恵質	黒褐色	内外面に自然釉がかかる。[盛]
73-636	(16.0)	5.75	(13.2)	・体部は直立気味に立ち上り、口縁部で外反する。 ・底部、平底。	〃	〃	〃	暗灰色	[〃]
73-637	(13.5)	(5.7)	-	・体部は直立気味に立ち上り、口縁部で外反する。	・口縁部から頸部はヨコナデ、頸部は平行叩きが残る。 ・体部外面、平行叩き。 ・内面、ナデ仕上げ。	〃	〃	内、灰色 外、暗灰色	外面に自然釉がかかる。[〃]
73-638	(13.8)	(7.9)	-	〃	・内外面、ヨコナデ。	〃	〃	暗灰色	[〃]
73-639	(13.0)	(8.45)	-	〃	〃	〃	〃	内、灰色 外、黄灰色	外面に自然釉がかかる。[盛]
73-640	(13.6)	(7.55)	-	〃	〃	〃	〃	暗灰色	[〃]
73-641	(15.0)	(10.7)	-	〃	・口縁部から頸部は内外ともヨコナデ。 ・体部外面、平行叩き。 ・内面、ヨコナデ。	〃	〃	灰色	[〃]
73-642	(11.4)	(8.95)	(9.9)	〃	・口縁部から頸部は内外ともヨコナデ。 ・体部外面、縦位のナデ仕上げ。 ・内面、粘土紐の巻き上げ痕有り。	〃	〃	〃	外面に自然釉がかかる。[〃]
73-643	(15.5)	(7.25)	-	〃	・内外面、ヨコナデ。	〃	〃	灰白色	〃 [〃]

図版番号	口径	器高	底径	形態の特徴	成形技法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
73-644	(18.5)	(6.8)	−	・体部は直立気味に立ち上り，口縁部は平坦面を持ち，上下につまみ出す。	・口縁部から頸部は内外ともヨコナデ。 ・体部内外面，ナデ仕上げ。	砂粒を含む。	須恵質	灰色	外面に自然釉がかかる。〔盛〕
73-645	(16.0)	(6.7)	−	・体部は内湾気味に立ち上り，口縁部で外反する。	・口縁部から頸部は，内外ともヨコナデ。 ・体部外面，緩位のナデ仕上げ。 ・体部内面，ナデ仕上げ。	〃	〃	暗灰色	〔〃〕
73-646	(11.5)	(4.4)	−	・体部は内湾気味に立ち上り，直線的に口縁部に続く。	・口縁部から頸部は内外ともヨコナデ。	〃	〃	黒灰色	内外面に自然釉がかかる。〔〃〕
73-647	(12.4)	(6.9)	−	〃	・口縁部から頸部は内外ともヨコナデ。 ・内面，粘土紐の巻き上げ痕有り。	〃	〃	〃	外面に自然釉がかかる。〔〃〕
73-648	(18.4)	8.5	(16.1)	・体部は直立気味に立ち上り，口縁部で外反する。	・口縁部から頸部は内外ともヨコナデ。 ・体部内外面，ヨコナデ。 ・底部，糸切り。	〃	〃	暗灰色	〔〃〕
73-649	(13.6)	7.6	(15.0)	〃	〃	〃	生焼け	黄灰色	〔〃〕
73-650	−	(10.4)	(10.5)	・体部は直立気味に立ち上る。	・体部内外面，ヨコナデ。 ・底部，糸切り。	〃	須恵質	黒灰色	内外面に自然釉がかかる。〔〃〕
73-651	−	(7.4)	(19.8)	・体部は内傾気味に立ち上る。	・体部内外面，ナデ。 ・体部内外面，粘土紐の巻き上げ痕有り。	〃	〃	灰色	外面に自然釉がかかる。〔〃〕
73-652	−	(7.45)	(14.0)	〃	〃	〃	〃	〃	〔〃〕

図版番号	口径	器高	底径	形態の特徴	成形技法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
73-653	−	(4.1)	(8.0)	・体部は内彎気味に立ち上る。	・体部内外面、ヨコナデ。 ・底部、糸切り。	砂粒を含む。	須恵質	内、橙灰色 外、黒灰色	外面に自然釉がかかる。 〔・〕
73-654	−	(6.2)	(24.5)	・体部は直立気味に立ち上る。	・体部内面、ナデ仕上げ。 ・体部外面、平行叩き後一部ナデ仕上げ。	〃	〃	灰色	〔・〕
73-655	−	(6.7)	(18.5)	・体部は内傾して立ち上る。	・体部内面、ナデ仕上げ。 ・体部外面、最位のヘラ削り。	〃	〃	〃	外面に自然釉がかかる。 〔・〕
73-656	−	(7.9)	(19.7)	〃	・体部内面、ナデ仕上げ。 ・体部外面、平行叩き。 ・体部、粘土紐の巻き上げ痕有り。	〃	〃	暗灰色	〔・〕
73-657	−	(6.2)	(16.0)	〃	・体部内面、ナデ仕上げ。 ・体部外面、最位のヘラ削り。	〃	〃	〃	〔・〕
73-658	−	(7.9)	(17.0)	・体部は直立気味に立ち上る。	・体部内外面、ヨコナデ。 ・底部、糸切り。	〃	〃	〃	〔・〕
74-673	(20.0)	8.7	(12.6)	・体部は内彎気味に立ち上り、口縁部で外反する。	〃	〃	〃	〃	〔裏採〕
74-674	(10.4)	8.7	(14.2)	〃	〃	〃	〃	〃	外面に自然釉がかかる。 〔・〕
74-675	(16.0)	13.0	(24.4)	・体部は内傾して立ち上り、口縁部で外反する。	・口縁部から頸部はヨコナデ。 ・体部内面、ヨコナデ。 ・体部外面、平行叩き。 ・底部、糸切り。	〃	〃	灰色	〃 〔・〕

図版番号	口径	器高	底径	形態の特徴	成形技法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
75-694	(12.4)	6.3	(10.9)	・体部は直立気味に立ち上る。	・体部内外面、ヨコナデ。	砂粒を含む。	須恵質	灰色	[良好]
74-695	(13.4)	6.8	(16.2)	・体部は内傾して立ち上り、口縁部で外反する。	〃	〃	〃	暗灰色	[〃]
76-715	(14.8)	(6.8)	(14.8)	・体部は直立気味に立ち上り、口縁部で外反する。	・体部内外面、ヨコナデ。 ・底部、糸切り。 ・体部中央に穿孔有り。	〃	〃	黒灰色	内面に自然釉がかかる。 [〃]
76-716	(14.6)	(6.5)	(14.8)	・体部は内湾気味に立ち上り、口縁部で外反する。	・体部内外面、ヨコナデ。 ・底部、糸切り。	〃	〃	〃	[〃]
77-738	(12.8)	6.0	(13.2)	・体部は直立して立ち上り、口縁部で外反する。	・体部内外面、ヨコナデ。	〃	生焼け	黄灰色	[〃]
77-739	(13.4)	(6.5)	(13.6)	〃	〃	〃	須恵質	灰色	[〃]
78-761	(14.7)	6.3	(15.0)	・体部は直立して立ち上る。	〃	〃	〃	暗灰色	内外面に自然釉がかかる。 [〃]
78-762	(16.6)	8.1	(19.2)	・体部は直立して立ち上り、口縁部で外反する。	・体部内外面、ヨコナデ。 ・底部、糸切り。	〃	〃	灰色	外面に自然釉がかかる。 [〃]
78-768	(14.4)	6.3	16.5	〃	〃	〃	〃	〃	内外面に自然釉がかかる。 [〃]

図版番号	口径	器高	底径	形態の特徴	成形技法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
78-769	(9.6)	6.0	14.0	・体部は内傾して立ち上り、口縁部で外反する。	・体部内外面、ヨコナデ。 ・平底、糸切り。	砂粒を含む。	須恵質	暗灰色	(表採)
78-770	(10.6)	7.0	(13.4)	〃	・体部内外面、ヨコナデ。 ・底部、糸切り。 ・体部中央に未穿孔痕が有る	〃	〃	〃	(〃)

土錘・その他

図版番号	長さ	胴径	形態の特徴	成形技法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
72-615	5.9	11.9	・中心部に孔をあけ、管状。	・棒状のものに粘土を巻きつける。 ・外面、平行叩き。 ・外面叩き後、ヘラで「メ」印。 ・内面両端、ナデ仕上げ。	砂粒を含む。	須恵質	灰色	30-(灰)
72-616	6.1	11.7	〃	〃	〃	〃	〃	30-(〃)
72-617	5.8	11.3	〃	〃	〃	〃	〃	30-(〃)
72-618	10.5	(5.1)	〃	・棒状のものに粘土を巻きつける。 ・外面、ナデ仕上げ。 ・内面両端、ナデ仕上げ。	〃	〃	〃	22-(〃)
72-619	10.8	5.6	〃	〃	〃	〃	〃	(〃)
72-620	12.2	6.0	〃	・棒状のものに粘土を巻きつける。 ・外面平行叩き後、ナデ仕上げ。 ・内面両端、ナデ仕上げ。	〃	〃	暗灰色	外面に自然釉がかかる。 22-(〃)

図版番号	長さ	胴径	形態の特徴	成形技法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
72-621	9.2	5.9	・中心部に孔をあけ，管状。	・棒状のものに粘土を巻きつける。 ・外面，ナデ仕上げ。 ・内面両端，ナデ仕上げ。	砂粒を含む。	瓦質	灰色	【盛】
72-622	7.7	3.5	〃	〃	〃	須恵質	灰白色	外面に自然釉がかかる。 【盛】
72-623	5.2	2.3	〃	・棒状のものに粘土を巻きつける。 ・外面，ナデ仕上げ。	〃	生焼け	黒灰色	【盛】
72-624	5.6	2.25	〃	・棒状のものに粘土をまきつける。 ・外面，ナデ仕上げ。	〃	〃	黄褐色	【盛】
72-625	(7.75)	2.3	・上端に穿孔有り。	・断面，四角形にナデ仕上げ。	〃	須恵質	暗灰色	22－(灰)
72-629	(6.0)	3.2	・断面，円形。 ・下方を若干ふくらます。	・ナデ仕上げ。	〃	〃	〃	【盛】
72-630	(4.4)	3.7	〃	〃	〃	〃	〃	【盛】

下駄

下駄

図版番号	長さ	幅	高さ	形態の特徴	材質	木取り	備考
72-633	20.8	8.3	2.0	・台は長円形。 ・緒穴は2個あり，1個欠損。 ・歯部は鋸で切り出し痕有り。 ・歯底部は欠損。		板目	22－(灰)

魚住古窯跡群

（本文編）

昭和58年3月31日発行

編集発行　兵庫県教育委員会
印　　刷　三ッ輪印刷工業株式会社

兵庫県文化財調査報告第19冊

魚住古窯跡群

（図版編）

1983.3

兵庫県教育委員会

調査区航空写真

38・29号窯全景

例　　言

1. 本書は、兵庫県明姫幹線建設事務所から事業委託を受け、兵庫県教育委員会が調査主体となり実施した明石市魚住町中尾字向ィ原字中原、国道250号線バイパス明姫幹線道予定地内に所在した、古窯跡6基の発掘調査報告書〔図版編〕である。
2. 図版のうち、遺構実測図に関するものは縮尺不統一であるが、遺物実測図は、特殊遺物・瓦を除いて⅓に統一してある。
3. 遺物写真は、おおむね以下の縮尺で統一してある。

小　皿	½	壺	⅓
埦	⅓	瓦	⅓
鉢	⅓	特殊遺物	⅓
甕	⅙・⅛	俯瞰写真	½

4. 遺構実測図のうち で表示してある部分は地山（黄灰色シルト）であり、 で表示してある部分は赤色酸化層、 で表示してある部分は灰層をあらわす。
5. 遺構実測図で用いてある標高は、明姫幹線道の工事用 B.M. からの海抜絶対高（T.P.）である。
6. 遺構実測図等の方位は、磁北である。

図 版 目 次

巻頭図版 1　調査区航空写真

巻頭図版 2　38・29号窯全景

図版　1　魚住古窯跡群分布図

図版　2　魚住古窯跡群　等高線図

図版　3　遺構全体図　（調査前）

図版　4　遺構全体図　（調査後）

図版　5　遺構実測図　（38号・29号）

図版　6　遺構実測図　（33号）

図版　7　遺構実測図　（32号）

図版　8　遺構実測図　（22号）

図版　9　遺構実測図　（30号）

図版　10　遺物実測図　（38号）

図版　11　遺物実測図　（38号）

図版　12　遺物実測図　（29号）

図版　13　遺物実測図　（29号）

図版　14　遺物実測図　（29号）

図版　15　遺物実測図　（29号）

図版　16　遺物実測図　（29号）

図版　17　遺物実測図　（29号）

図版　18　遺物実測図　（29号）

図版　19　遺物実測図　（33号）

図版　20　遺物実測図　（32号）

図版　21　遺物実測図　（22号）

図版　22　遺物実測図　（22号）

図版　23　遺物実測図　（22号）

図版　24　遺物実測図　（22号）

図版　25　遺物実測図　（22号）

図版　26　遺物実測図　（22号）

図版　27　遺物実測図　（22号）

図版　28　遺物実測図　（22号）
図版　29　遺物実測図　（22号）
図版　30　遺物実測図　（22号）
図版　31　遺物実測図　（22号）
図版　32　遺物実測図　（22号）
図版　33　遺物実測図　（22号）
図版　34　遺物実測図　（22号）
図版　35　遺物実測図　（22号）
図版　36　遺物実測図　（22号）
図版　37　遺物実測図　（22号）
図版　38　遺物実測図　（22号）
図版　39　遺物実測図　（22号）
図版　40　遺物実測図　（30号）
図版　41　遺物実測図　（30号）
図版　42　遺物実測図　（30号）
図版　43　遺物実測図　（30号）
図版　44　遺物実測図　（30号）
図版　45　遺物実測図　（30号）
図版　46　遺物実測図　（30号）
図版　47　遺物実測図　（30号）
図版　48　遺物実測図　（30号）
図版　49　遺物実測図　（30号）
図版　50　遺物実測図　（30号）
図版　51　遺物実測図　（30号）
図版　52　遺物実測図　（30号）
図版　53　遺物実測図　（30号）
図版　54　遺物実測図　（30号）
図版　55　遺物実測図　（30号）
図版　56　遺物実測図　（30号）
図版　57　遺物実測図　（30号）
図版　58　遺物実測図　（30号）
図版　59　遺物実測図　（30号）

図版　60　遺物実測図　（30号）
図版　61　遺物実測図　（30号）
図版　62　遺物実測図　（30号）
図版　63　遺物実測図　（30号）
図版　64　遺物実測図　（30号）
図版　65　遺物実測図　（瓦１）
図版　66　遺物実測図　（瓦２）
図版　67　遺物実測図　（瓦３）
図版　68　遺物実測図　（瓦４）
図版　69　遺物実測図　（瓦５）
図版　70　遺物実測図　（瓦６）
図版　71　遺物実測図　（瓦７）
図版　72　遺物実測図　（土錘・その他）
図版　73　遺物実測図　（焼き台）
図版　74　遺物実測図　（１号・２号）
図版　75　遺物実測図　（３号・４号・５号）
図版　76　遺物実測図　（６号・７号・８号）
図版　77　遺物実測図　（10号・11号）
図版　78　遺物実測図　（12号・13号・14号・15号）
図版　79　遺物実測図　（17号・18号・19号・20号）
図版　80　遺物実測図　（21号・23号・24号・27号・39号）
図版　81　調査区遠景　（上）　調査区（皿池から）
（下）　調査前　西側斜面（東から）
図版　82　調査区遠景　（上）　調査前　東側斜面（西から）
（下）　調査後　西側斜面（東から）
図版　83　遺構写真　（上）　38号・29号窯全景（西から）
（下）　29号窯近景（西から）
図版　84　遺構写真　（上）　32号窯全景（東から）
（下）　33号窯全景（東から）
図版　85　遺構写真　（上）　22号窯全景（東から）
（下）　22号窯全景（東から）
図版　86　遺構写真　（上）　30号窯全景（東から）

（下） 30号竈近景（東から）

図版 87 遺物写真 （38号）

図版 88 遺物写真 （38号・29号・33号）

図版 89 遺物写真 （38号）

図版 90 遺物写真 （38号）

図版 91 遺物写真 （29号）

図版 92 遺物写真 （29号）

図版 93 遺物写真 （29号）

図版 94 遺物写真 （29号）

図版 95 遺物写真 （29号）

図版 96 遺物写真 （32号・33号）

図版 97 遺物写真 （32号・33号）

図版 98 遺物写真 （22号）

図版 99 遺物写真 （22号）

図版 100 遺物写真 （22号）

図版 101 遺物写真 （22号）

図版 102 遺物写真 （22号）

図版 103 遺物写真 （22号）

図版 104 遺物写真 （22号）

図版 105 遺物写真 （22号）

図版 106 遺物写真 （22号）

図版 107 遺物写真 （30号）

図版 108 遺物写真 （30号）

図版 109 遺物写真 （30号）

図版 110 遺物写真 （30号）

図版 111 遺物写真 （30号）

図版 112 遺物写真 （30号）

図版 113 遺物写真 （30号）

図版 114 遺物写真 （30号）

図版 115 遺物写真 （30号）

図版 116 遺物写真 （30号）

図版 117 遺物写真 （30号）

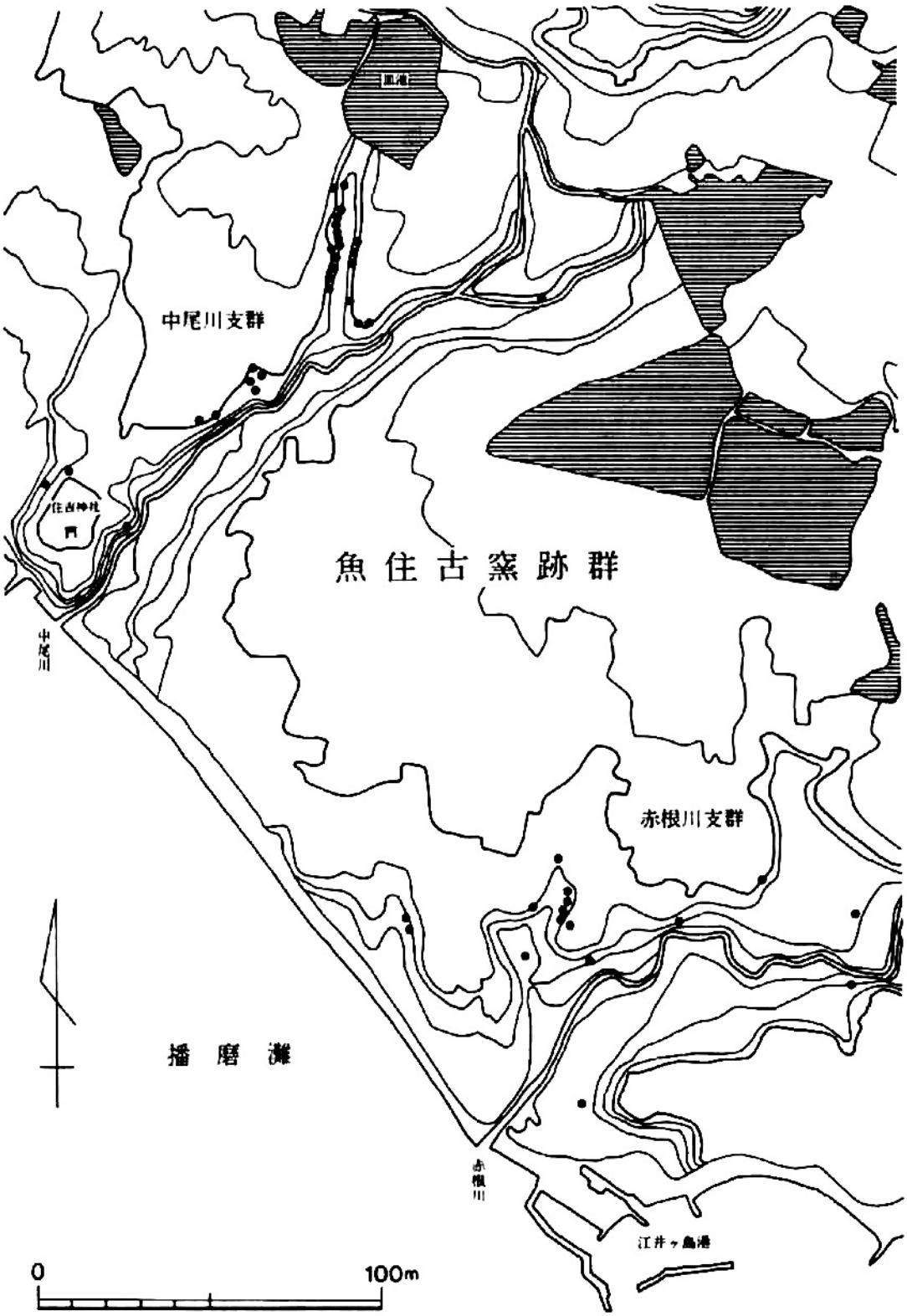
図版 118　遺物写真　(30号)
図版 119　遺物写真　(瓦1)
図版 120　遺物写真　(瓦2)
図版 121　遺物写真　(瓦3)
図版 122　遺物写真　(瓦4)
図版 123　遺物写真　(瓦5)
図版 124　遺物写真　(瓦6)
図版 125　遺物写真　(瓦7)
図版 126　遺物写真　(瓦8)
図版 127　遺物写真　(瓦9)
図版 128　遺物写真　(瓦10)
図版 129　遺物写真　(瓦11)
図版 130　遺物写真　(焼き台)
図版 131　遺物写真　左　358 (上から頸部・胴部・底部)
　　右　514 (　〃　)
図版 132　遺物写真　左　274 (　〃　)
　　右　544 (　〃　)
図版 133　遺物写真　(甕押印文)
図版 134　遺物写真　(甕押印文・土錘)
図版 135　遺物写真　(特殊遺物・10号・14号)
図版 136　遺物写真　(1号・2号)
図版 137　遺物写真　(3号・4号・5号)
図版 138　遺物写真　(6号・7号・8号)
図版 139　遺物写真　(10号・11号)
図版 140　遺物写真　(12号・13号)
図版 141　遺物写真　(14号・15号・16号)
図版 142　遺物写真　(18号・19号・20号・21号・23号)
図版 143　遺物写真　(24号・27号・39号)
図版 144　遺物写真　(海あがり鉢)

図　　版

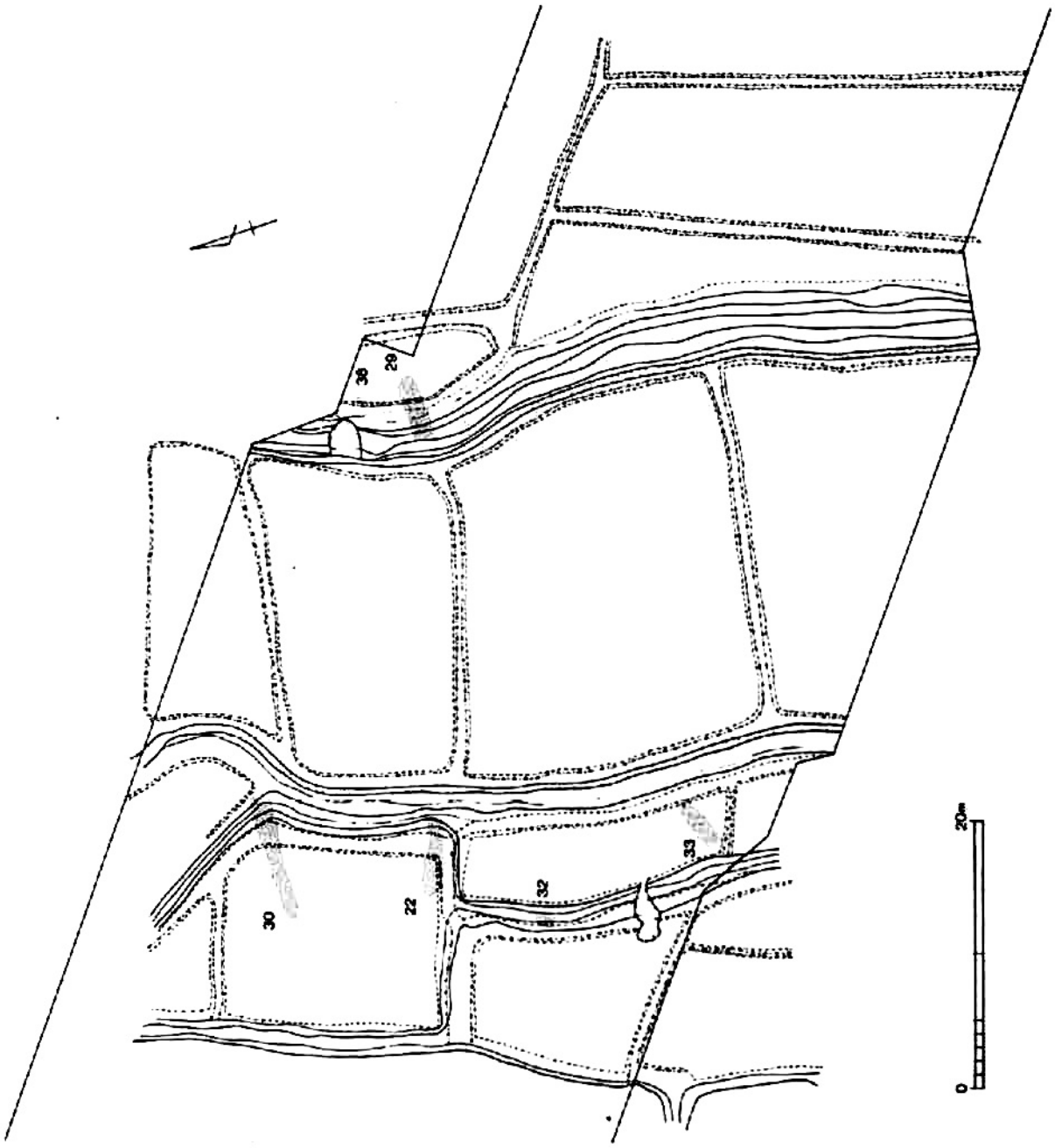
図版一

魚住古窯跡群分布図

図版二　魚住古窯跡群　等高線図

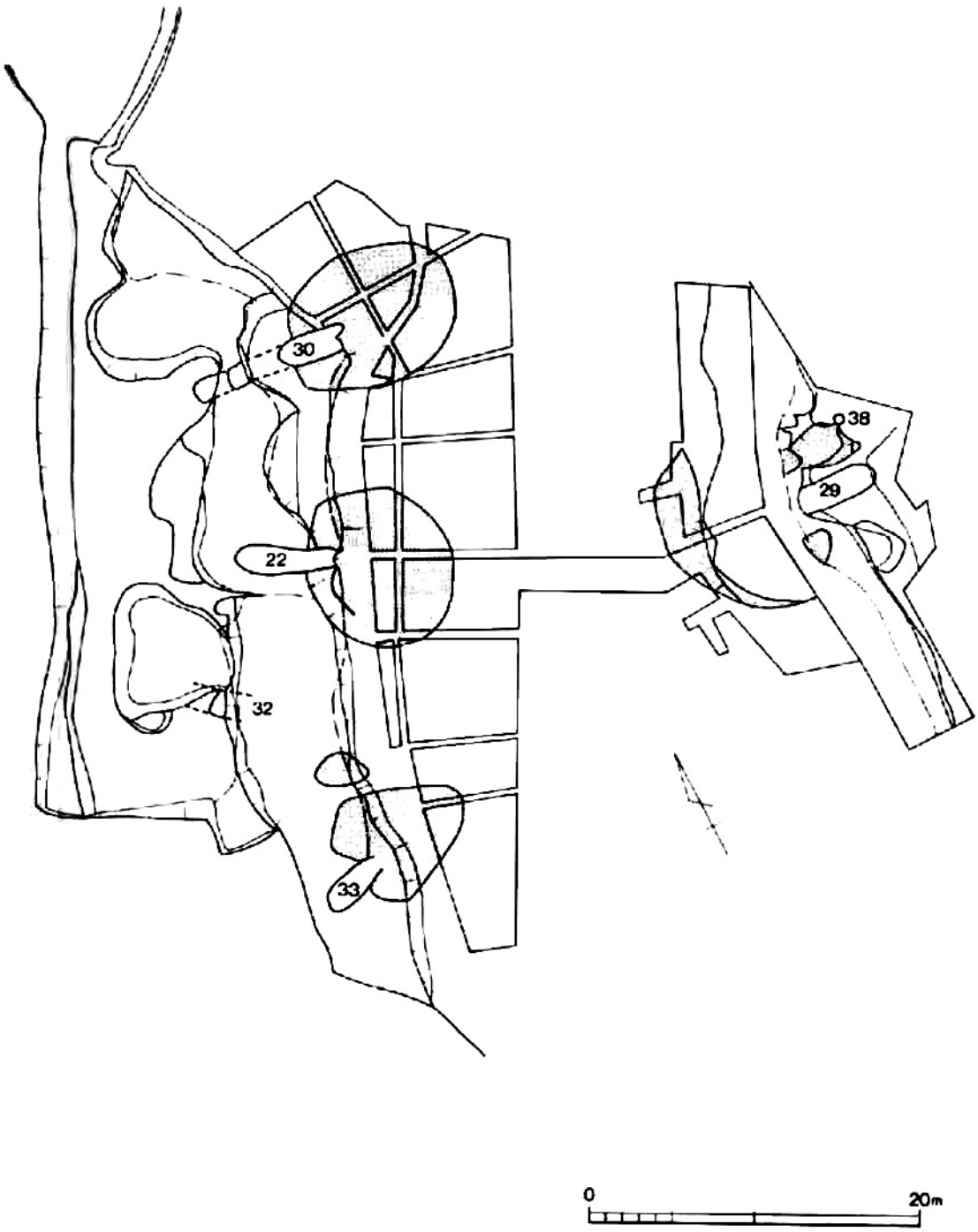


図版11　　遺構全体図（調査前）

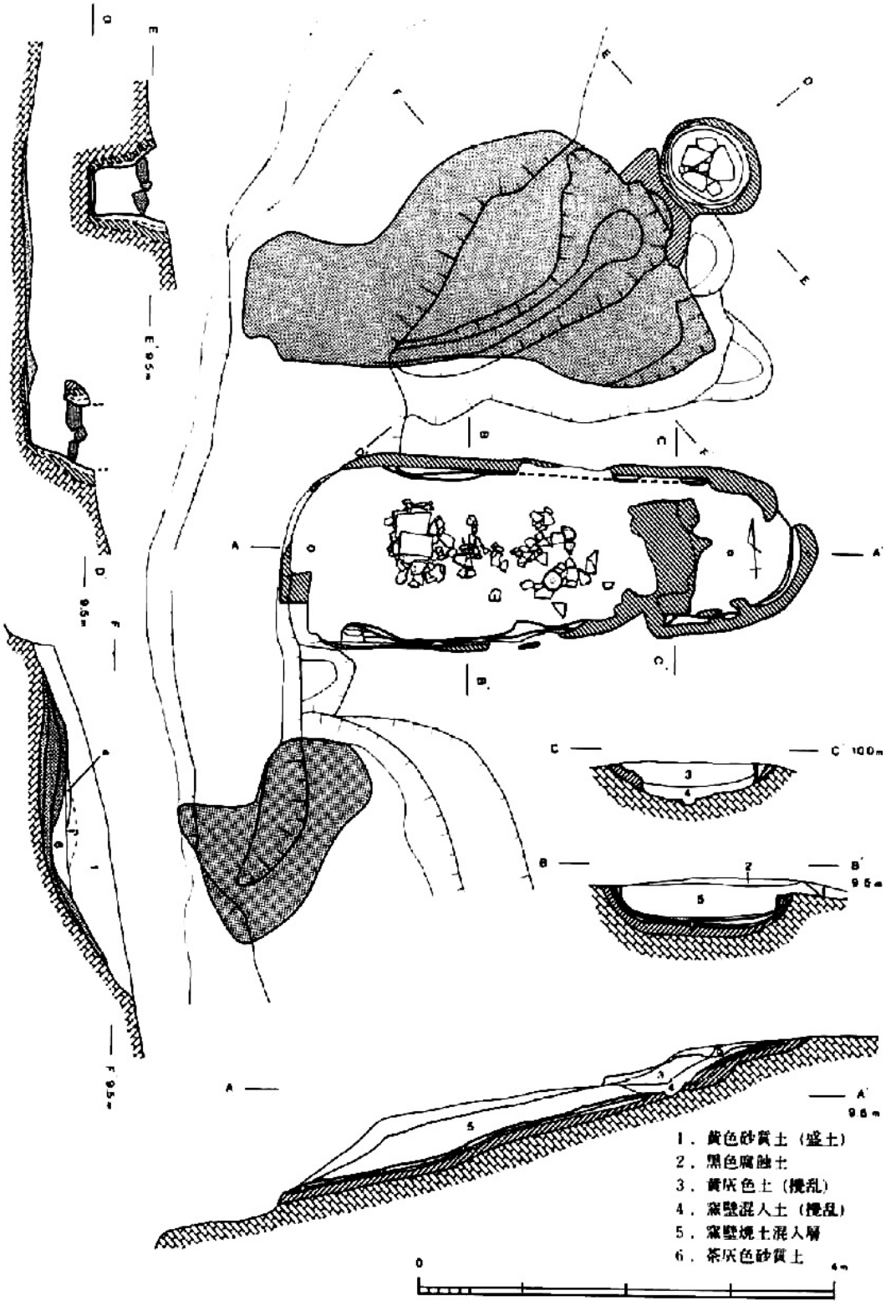


図版四

遺構全体図（調査後）

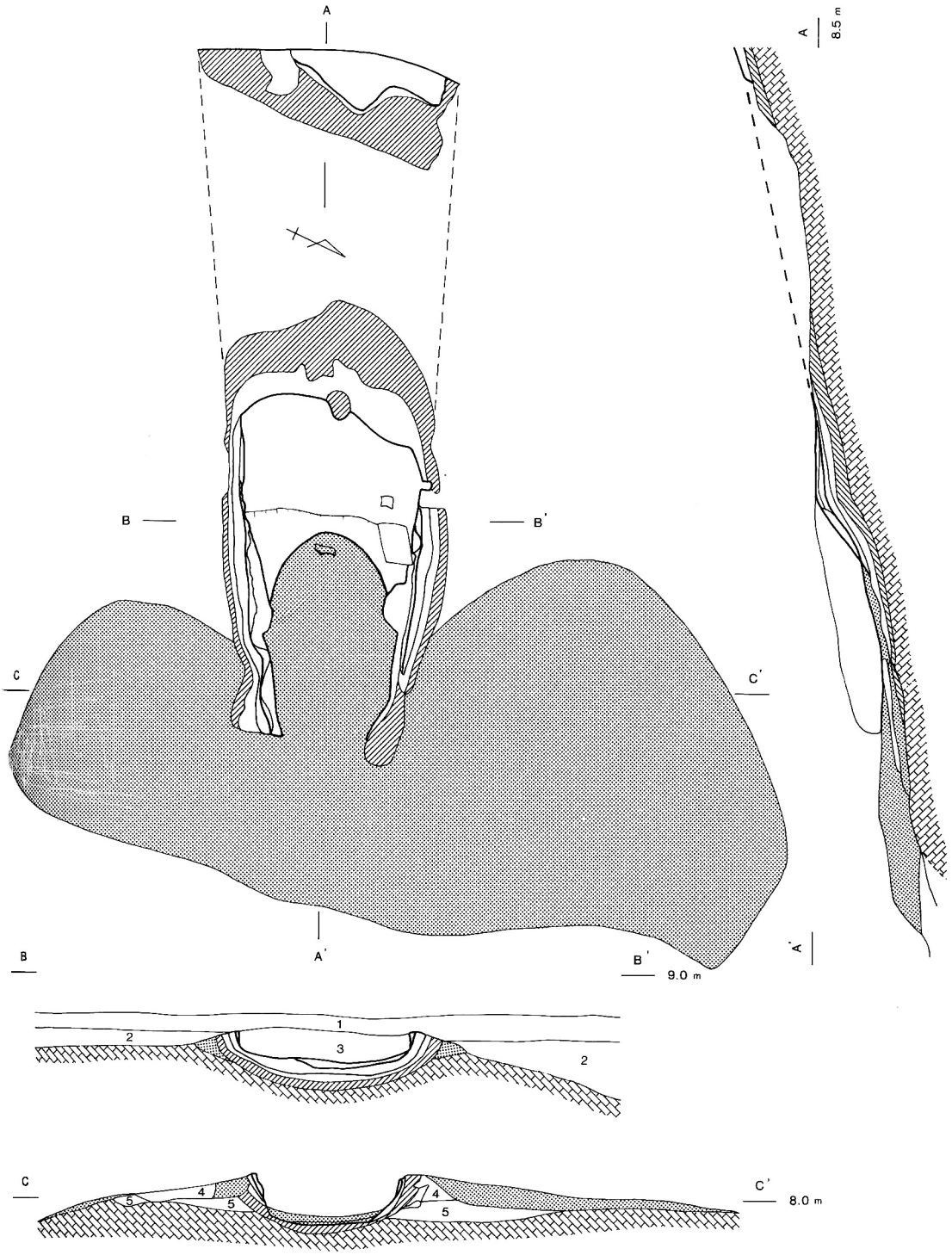


図版五　遺構実測図（38号・29号）



図版六

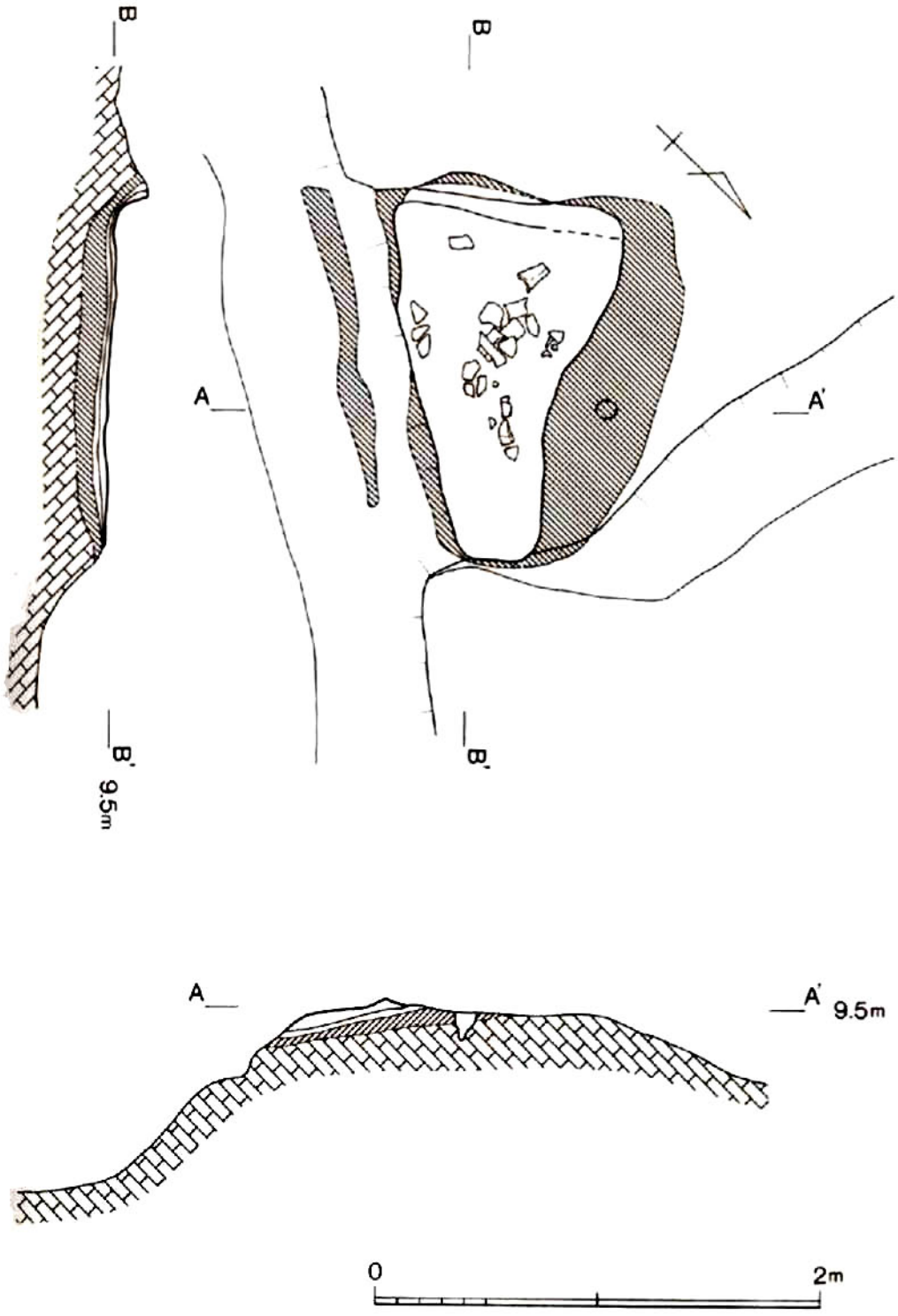
遺構実測図（33号）



1．床土
2．茶灰色砂層
3．窯壁焼土混入層
4．灰色土
5．黄灰色土

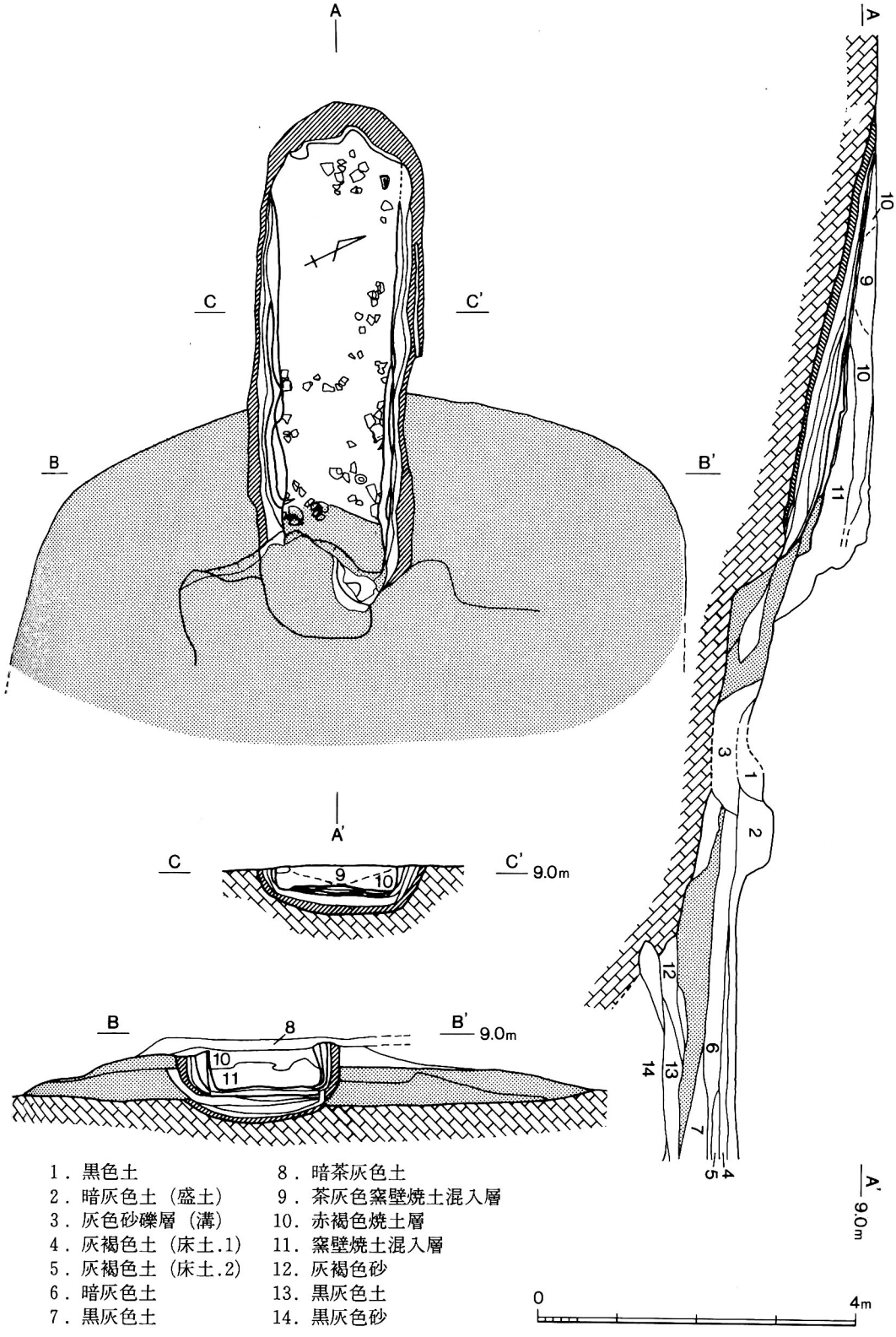
図版七

遺構実測図（32号）



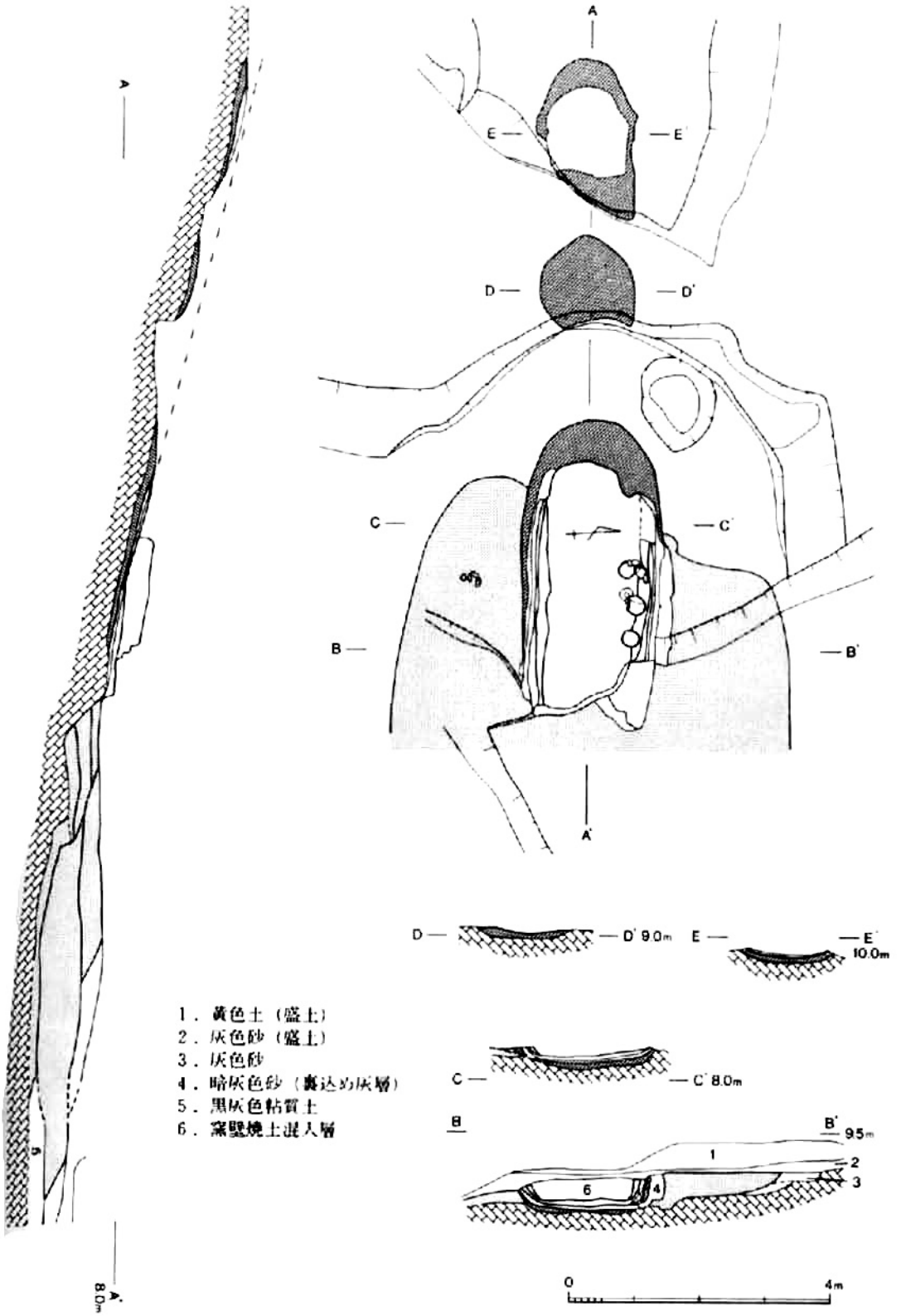
図版八

遺構実測図（22号）

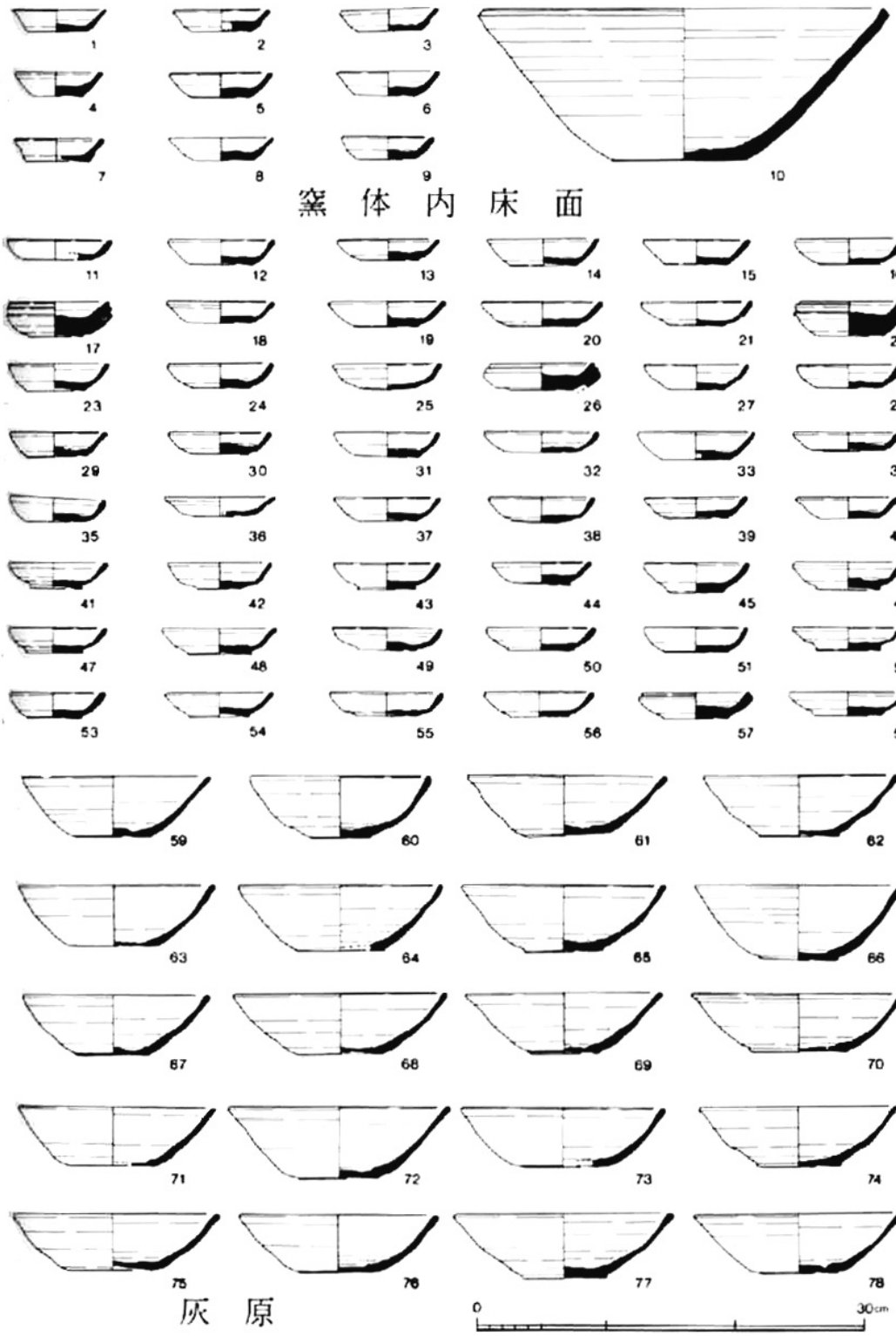


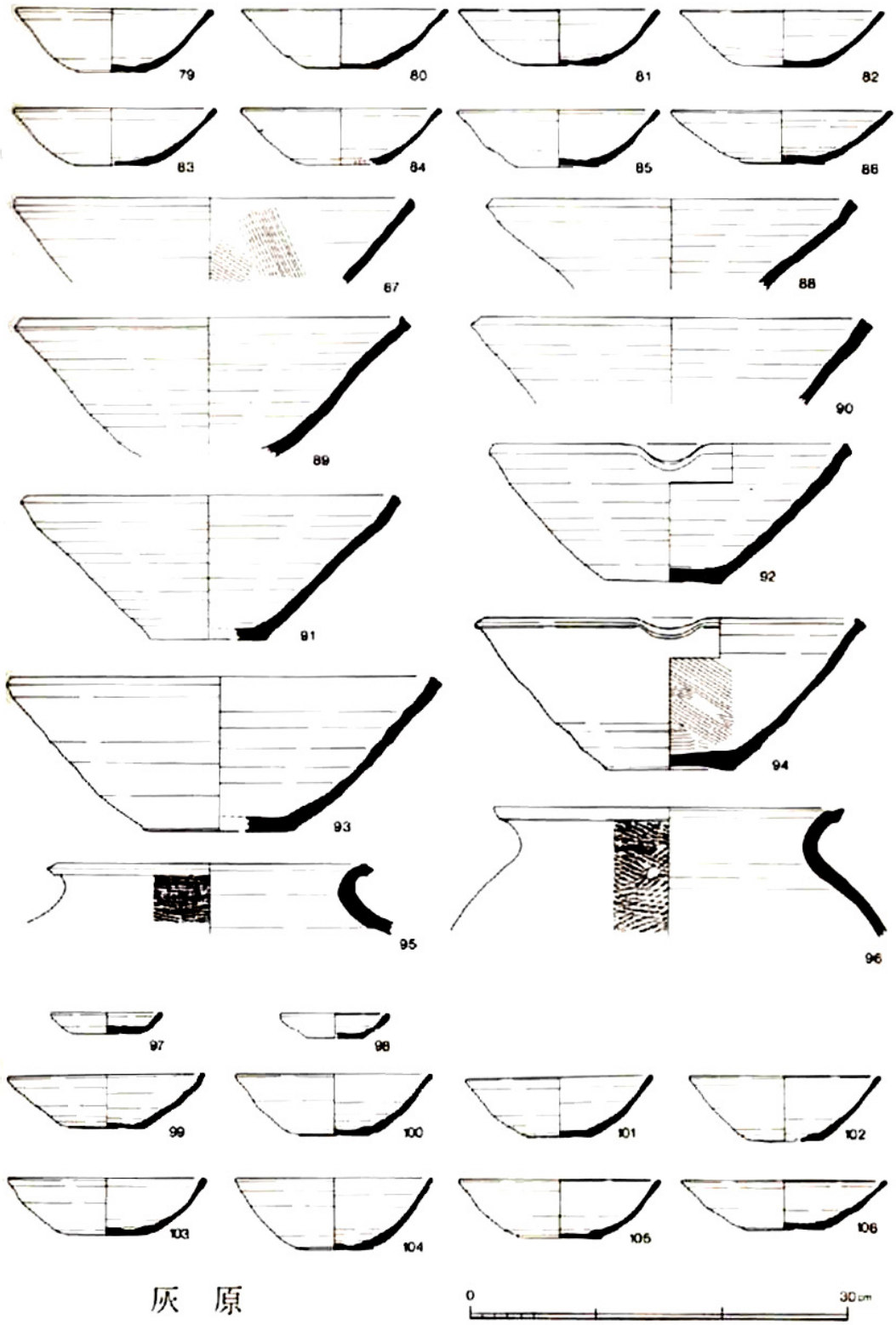
1．黒色土
2．暗灰色土（盛土）
3．灰色砂礫層（溝）
4．灰褐色土（床土.1）
5．灰褐色土（床土.2）
6．暗灰色土
7．黒灰色土
8．暗茶灰色土
9．茶灰色窯壁焼土混入層
10．赤褐色焼土層
11．窯壁焼土混入層
12．灰褐色砂
13．黒灰色土
14．黒灰色砂

図版九　遺構実測図（30号）

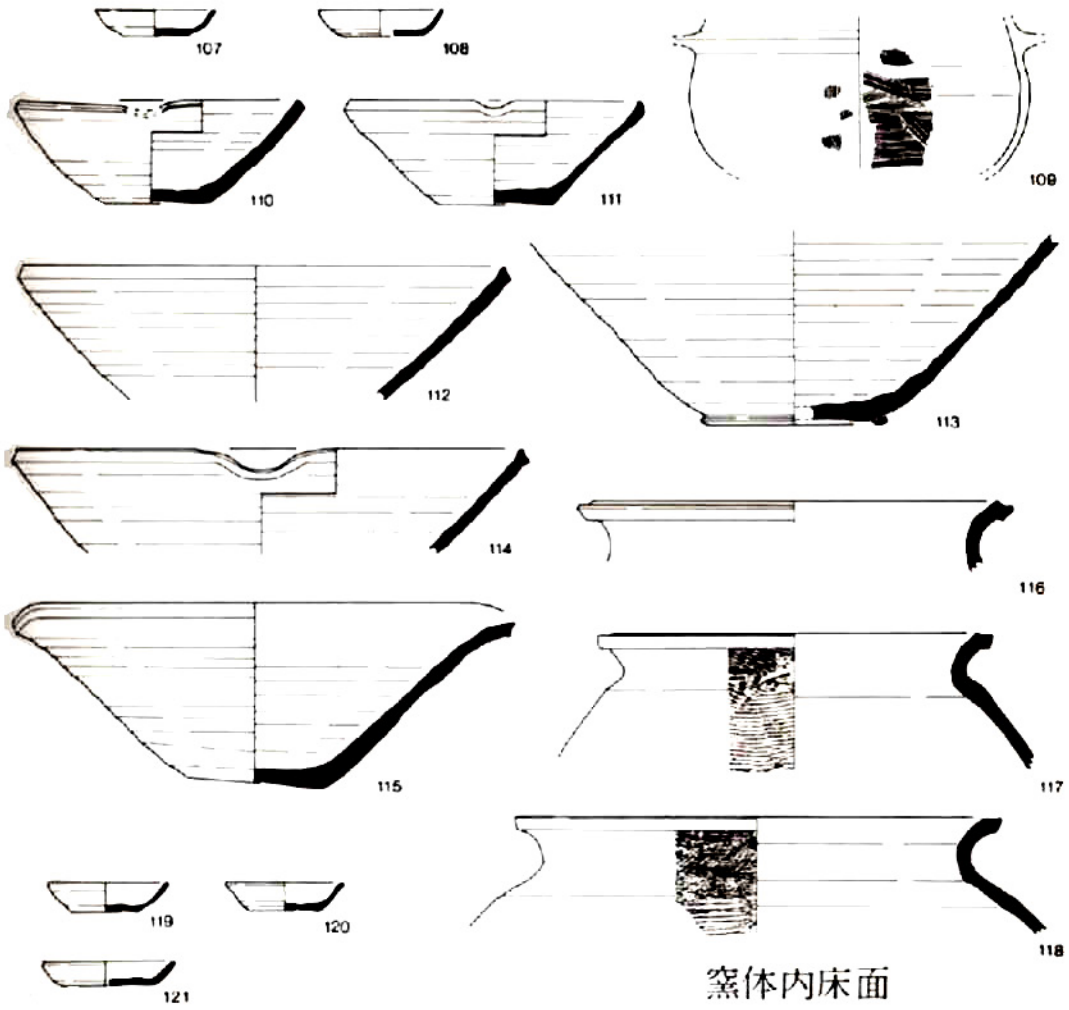


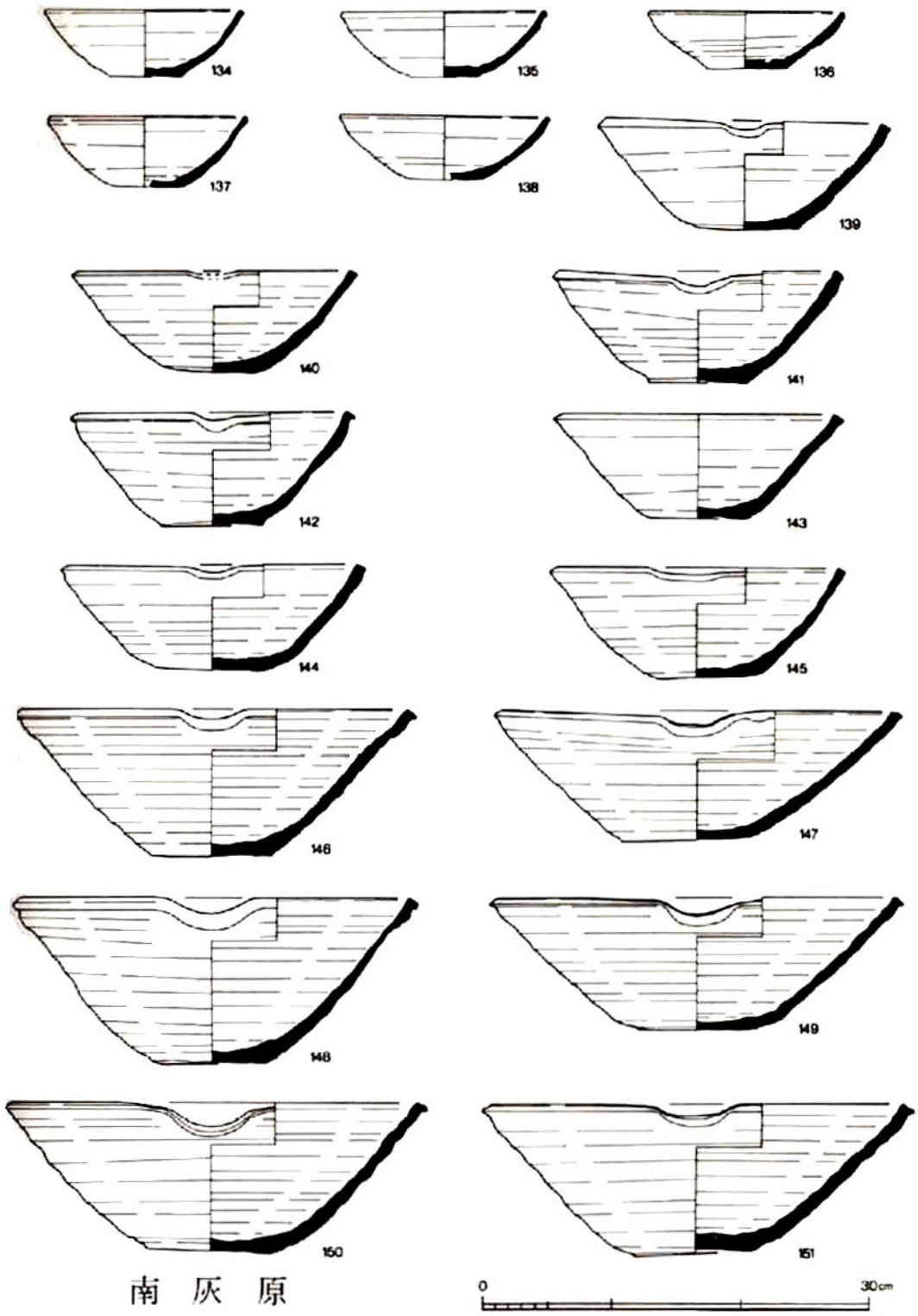
図版一〇　遺物実測図（38号）

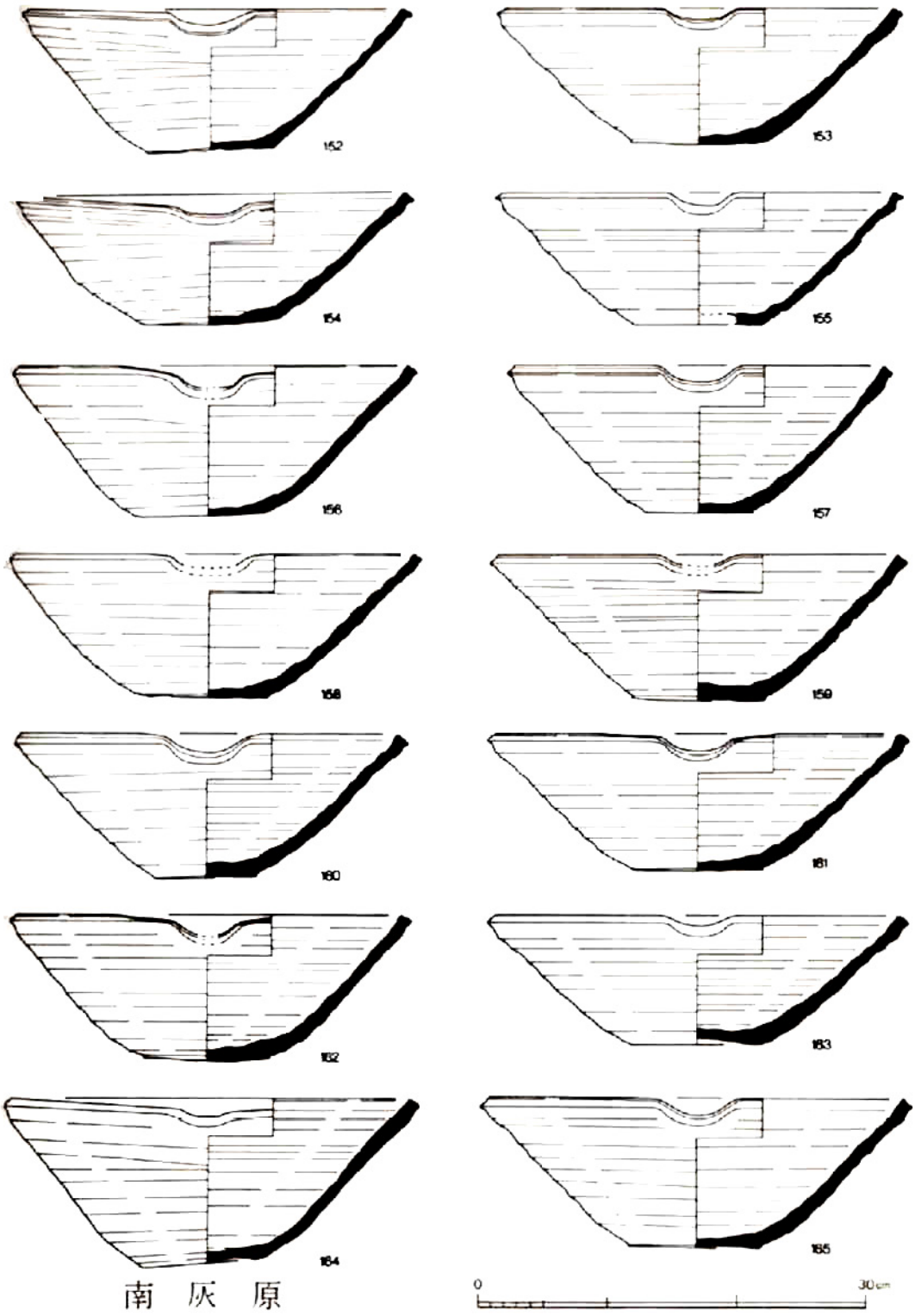



79
80
81
82
83
84
85
86
87
88
89
90
91
92
93
94
95
96
97
98
99
100
101
102
103
104
105
106
0
30cm

灰　原

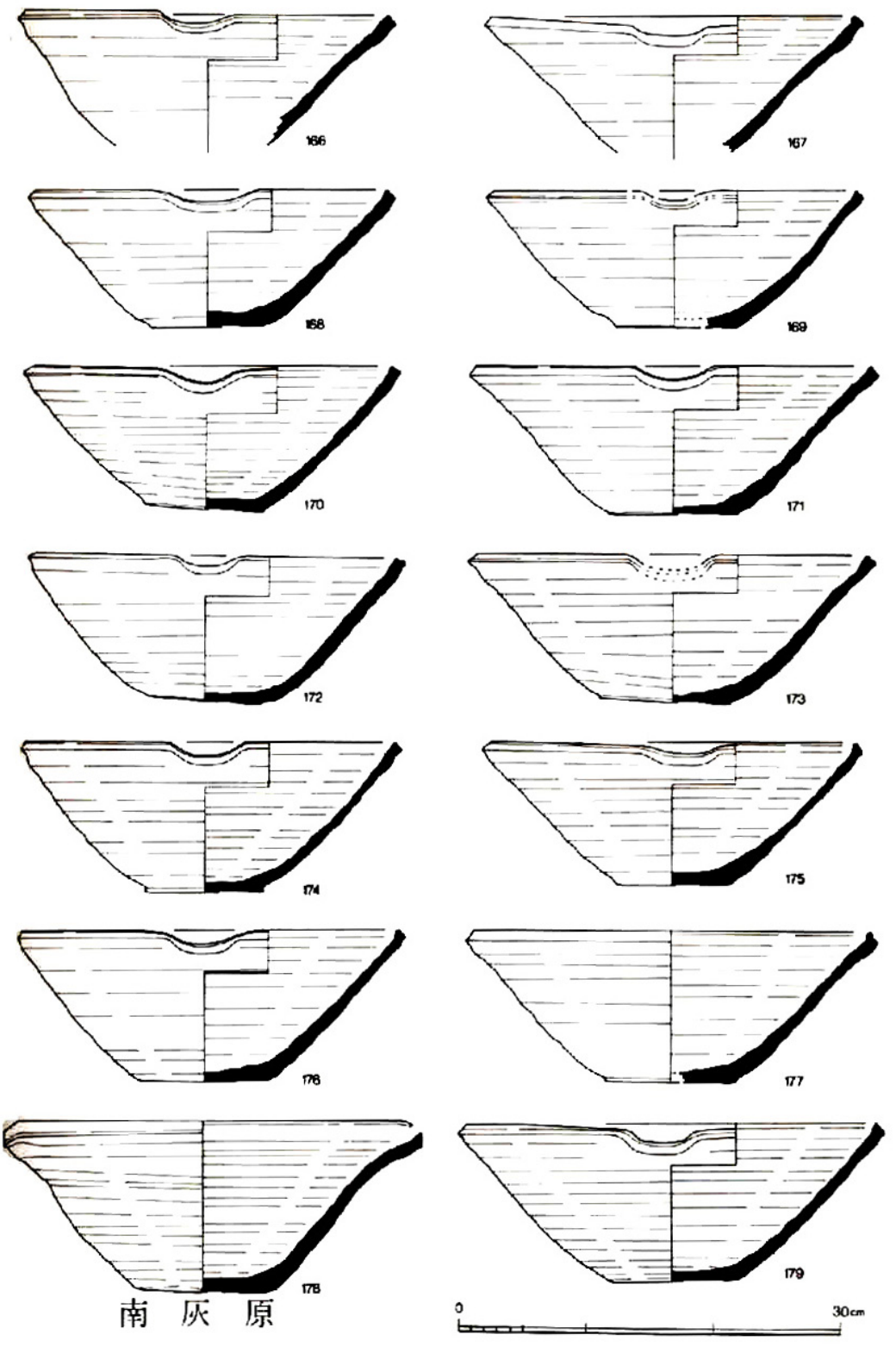

107
108
109
110
111
112
113
114
115
116
117
118
119
120
121
窯体内床面
西　灰　原
122
123
124
125
126
127
128
129
130
131
132
133
南　灰　原
0
30cm


134
135
136
137
138
139
140
141
142
143
144
145
146
147
148
149
150
151
南　灰　原
0
30cm

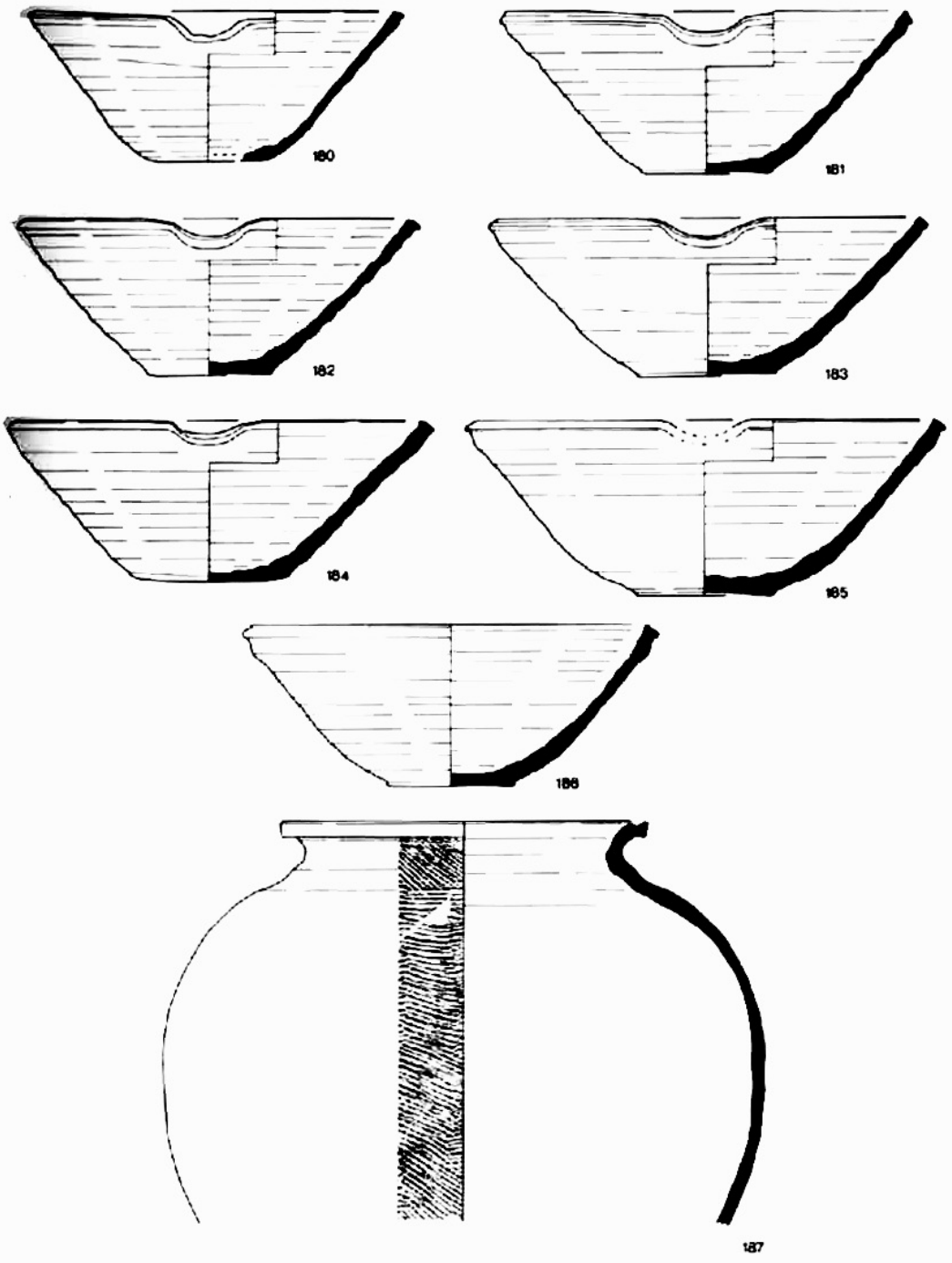


南　灰　原

図版一五　遺物実測図（29号）

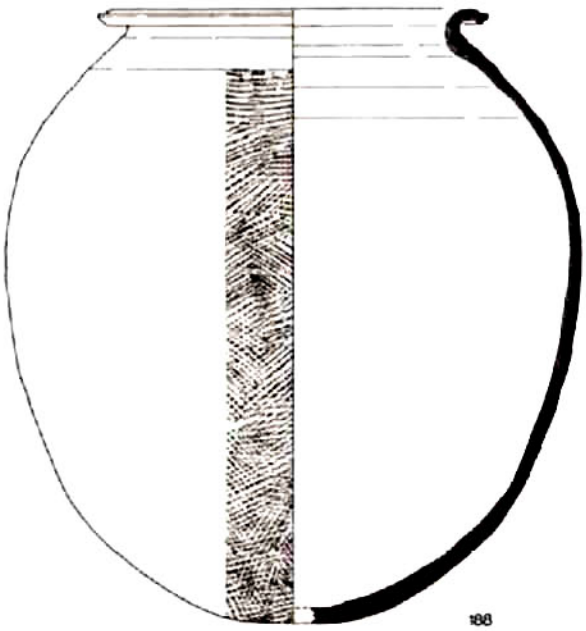


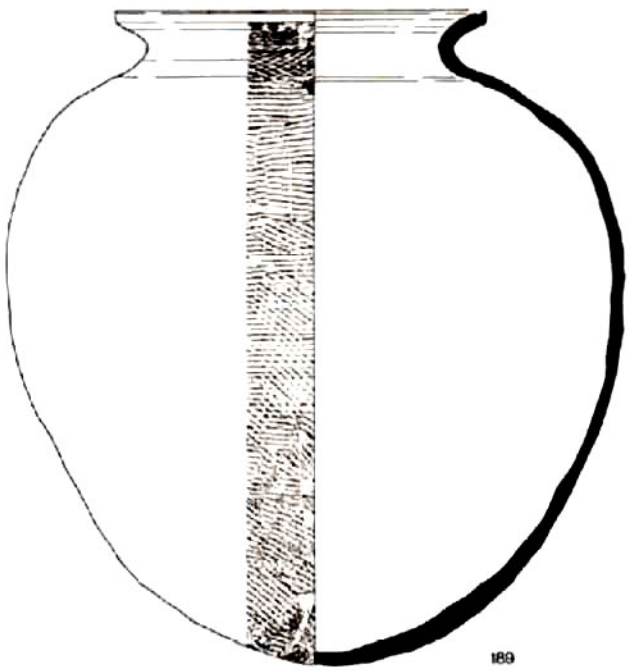
図版一六　遺物実測図（29号）



南灰原

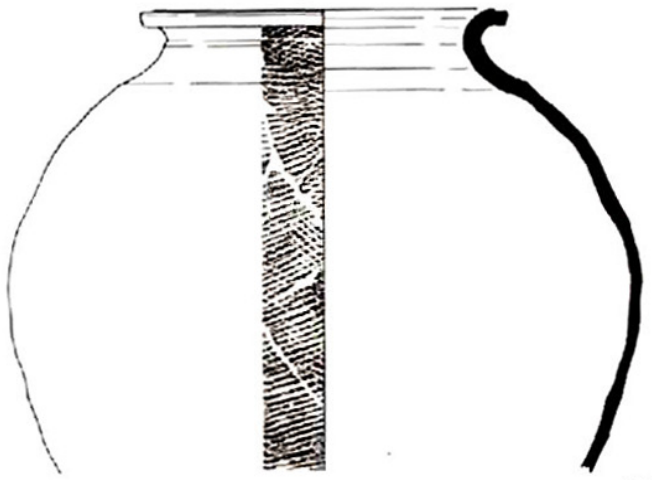
図版一七　遺物実測図（29号）

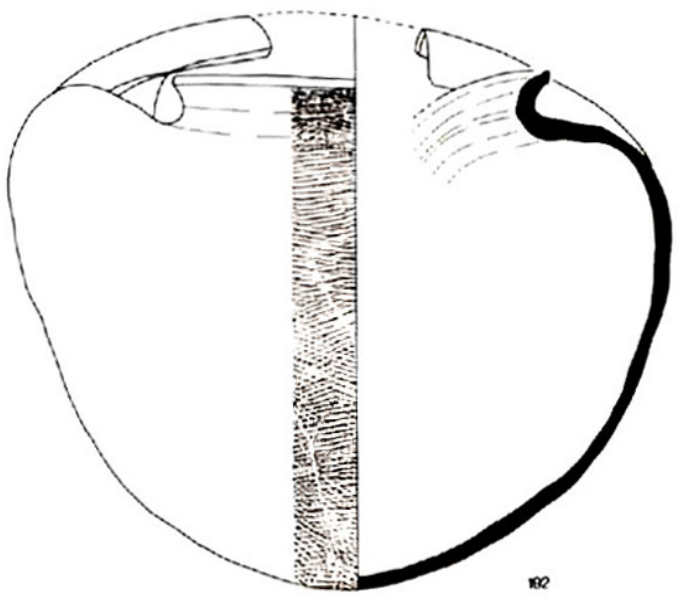




南　灰　原

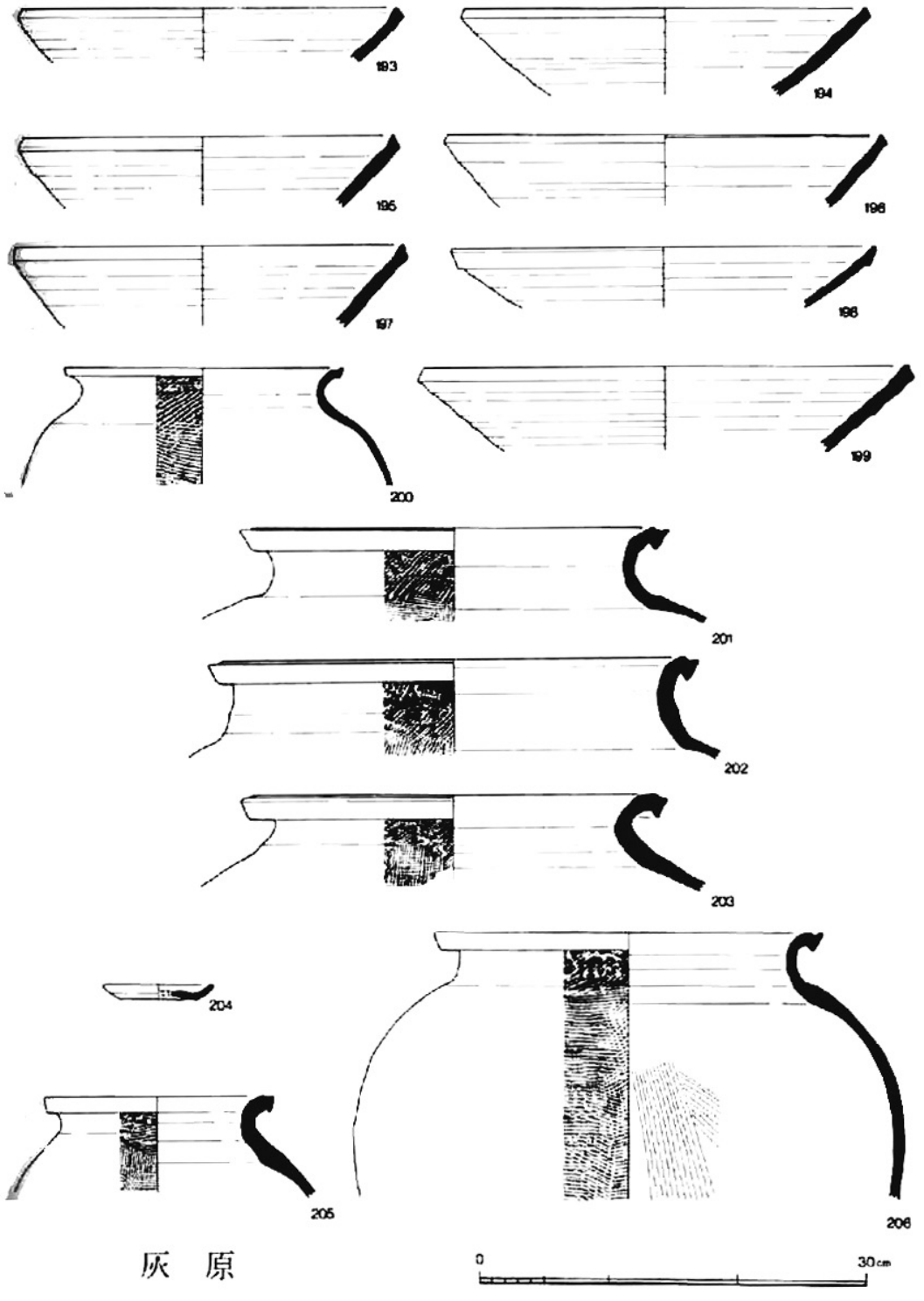
図版一八　遺物実測図（29号）





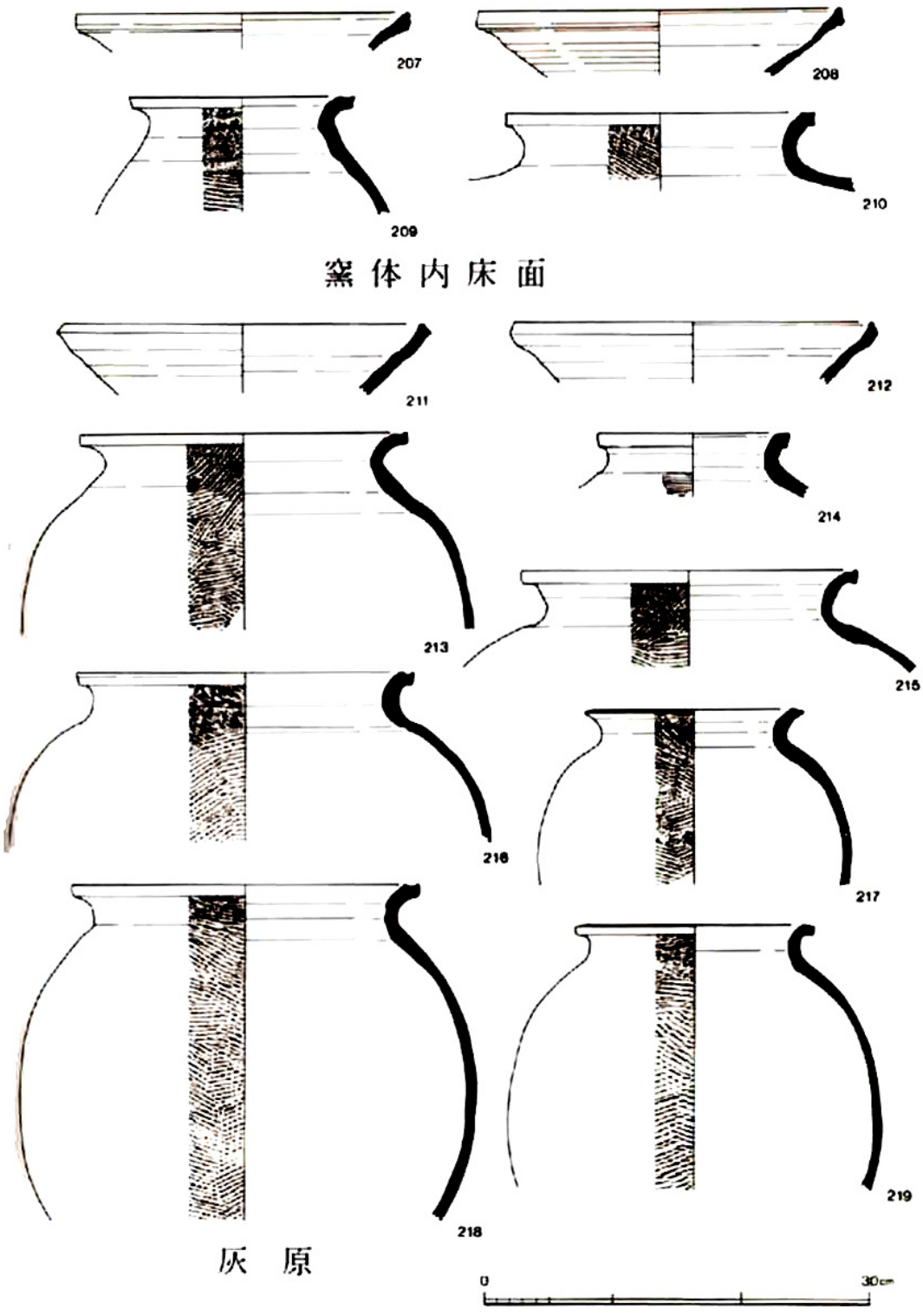
南　灰　原

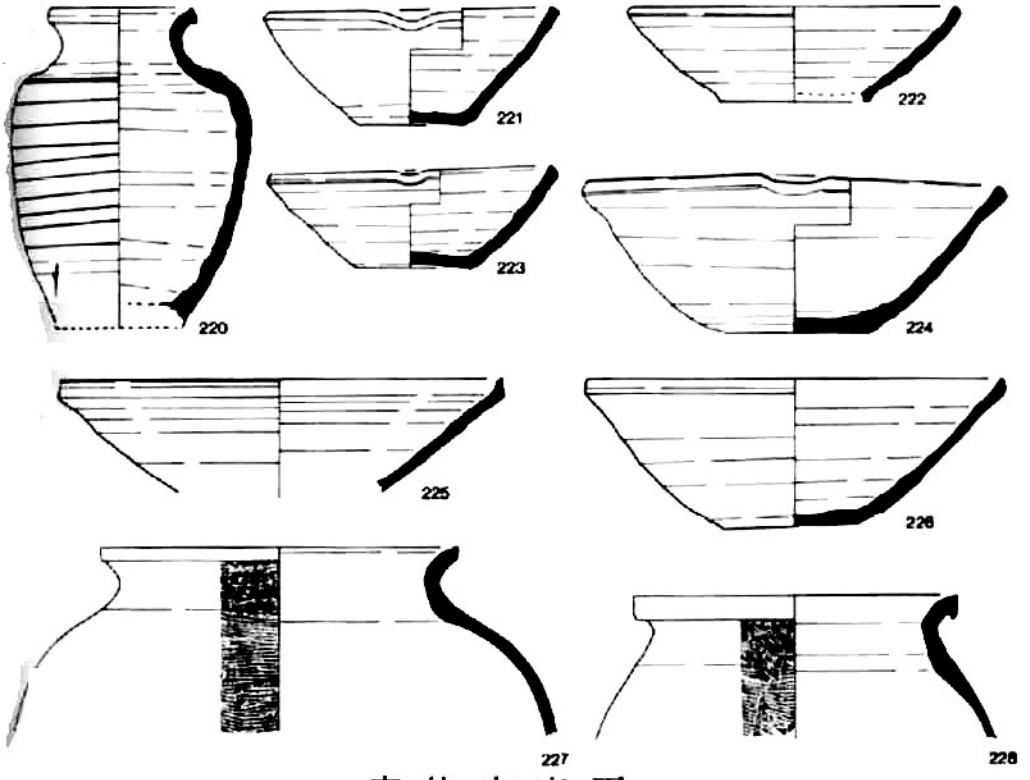
図版一九　遺物実測図（33号）



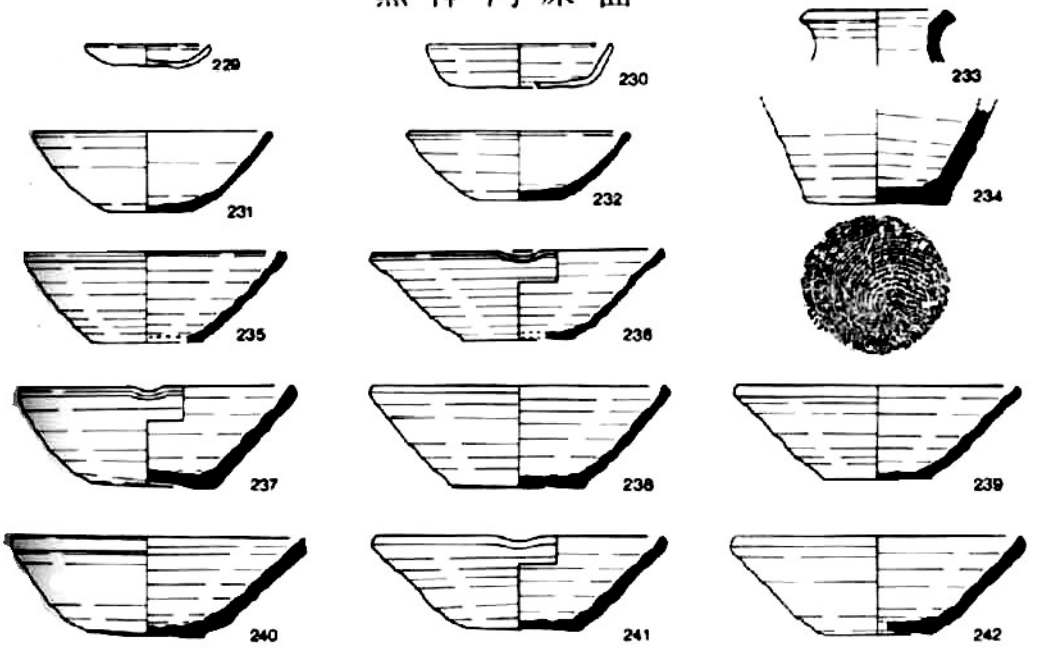
灰　原

図版二〇　遺物実測図（32号）



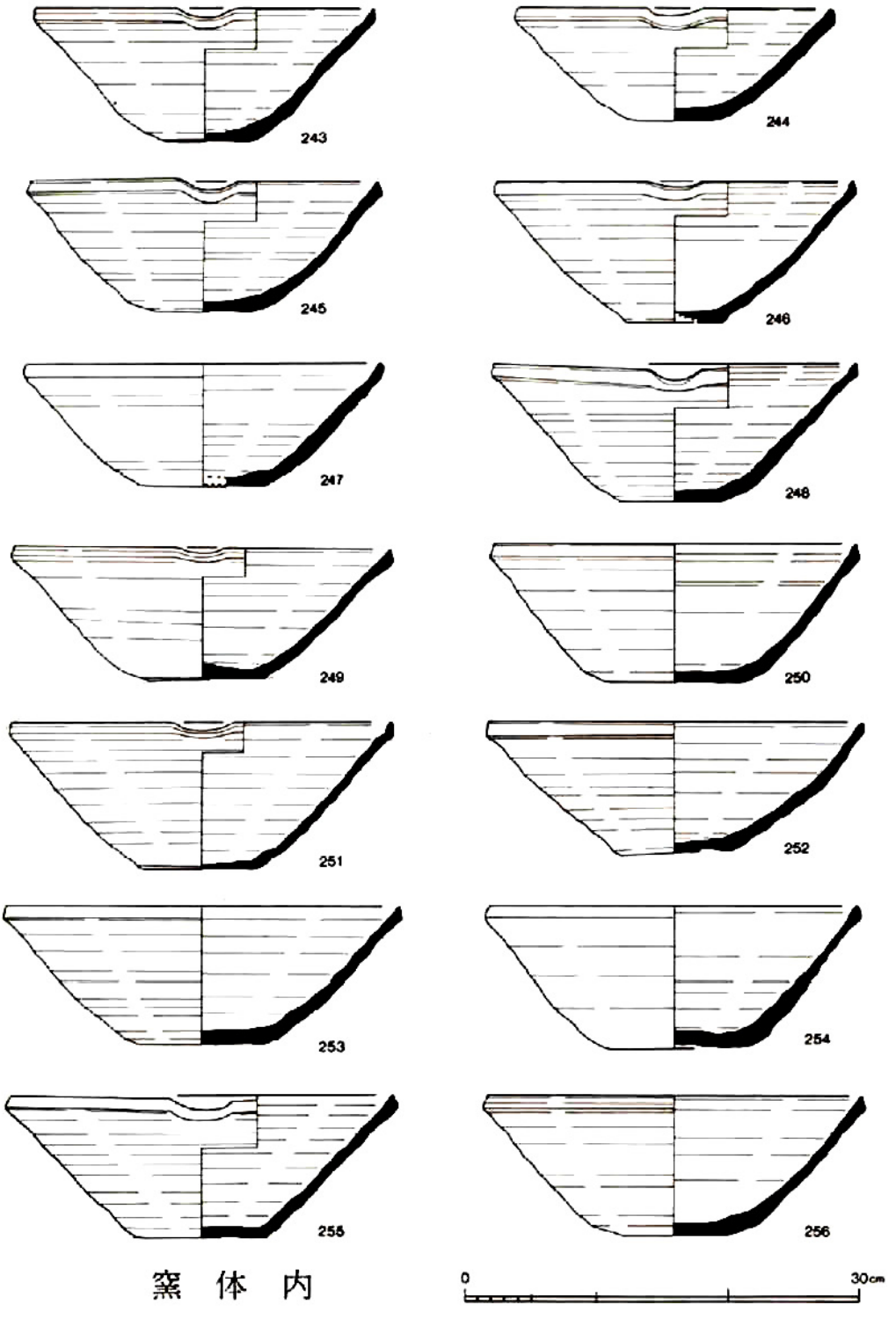

220
221
222
223
224
225
226
227
228

窯体内床面

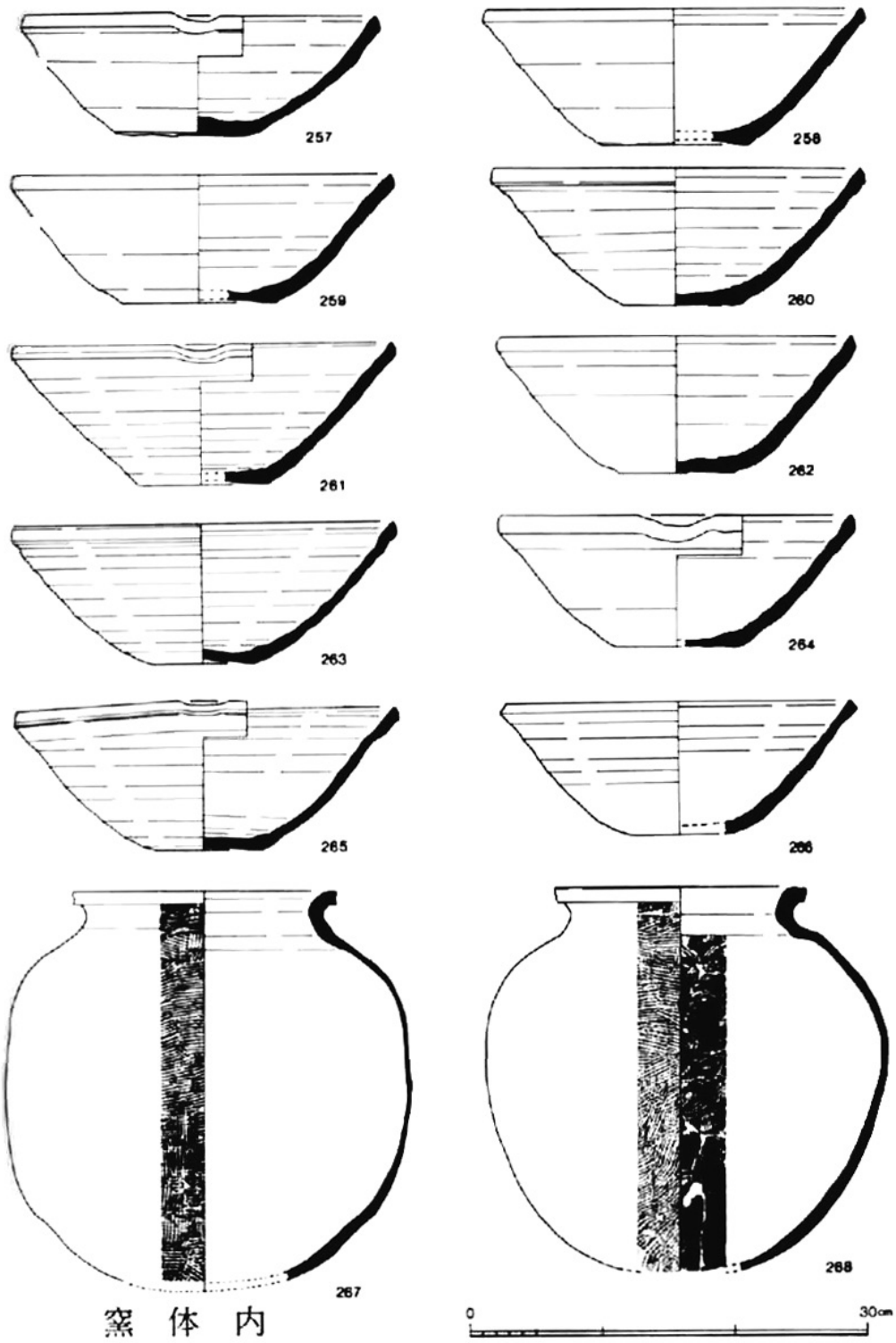

229
230
231
232
233
234
235
236
237
238
239
240
241
242
0
30cm

窯体内

図版二二　遺物実測図（22号）

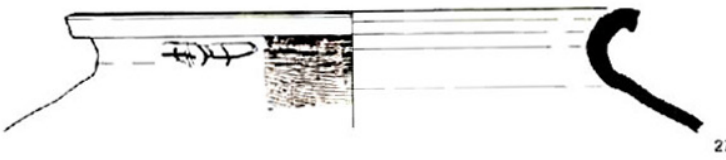


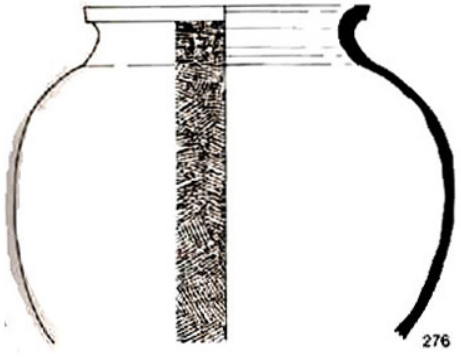
図版二三　遺物実測図（22号）

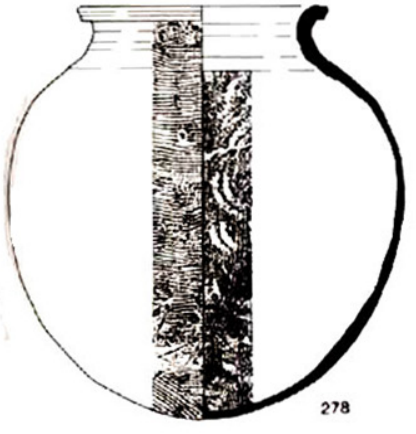


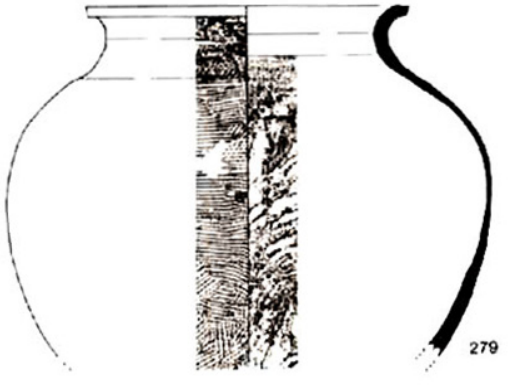
図版二四　遺物実測図（22号）

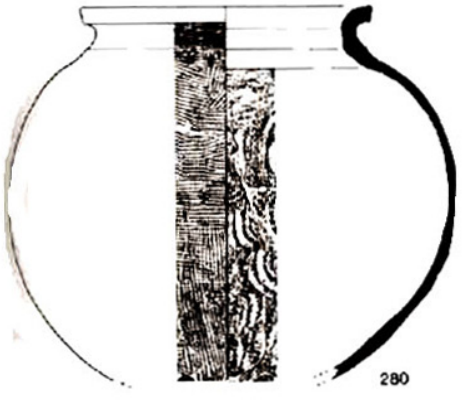
図版二五　遺物実測図（22号）

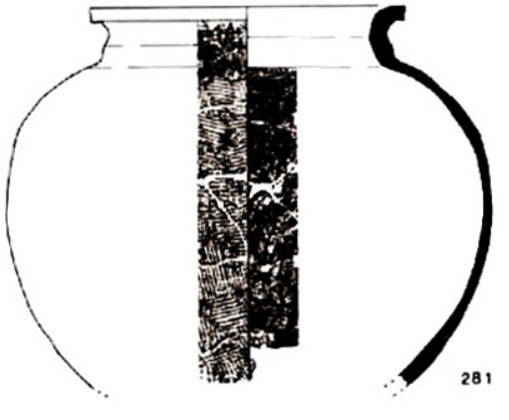






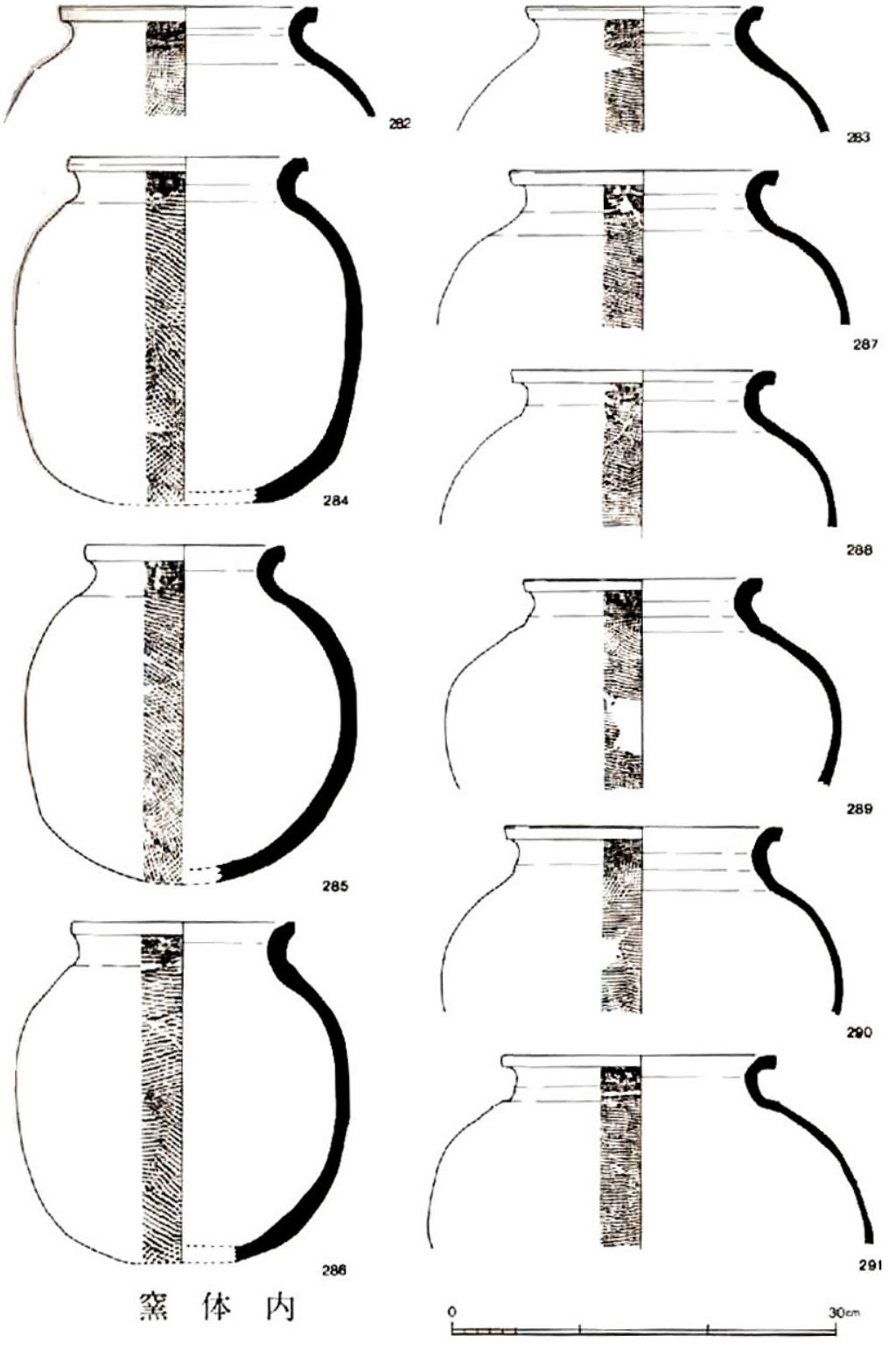




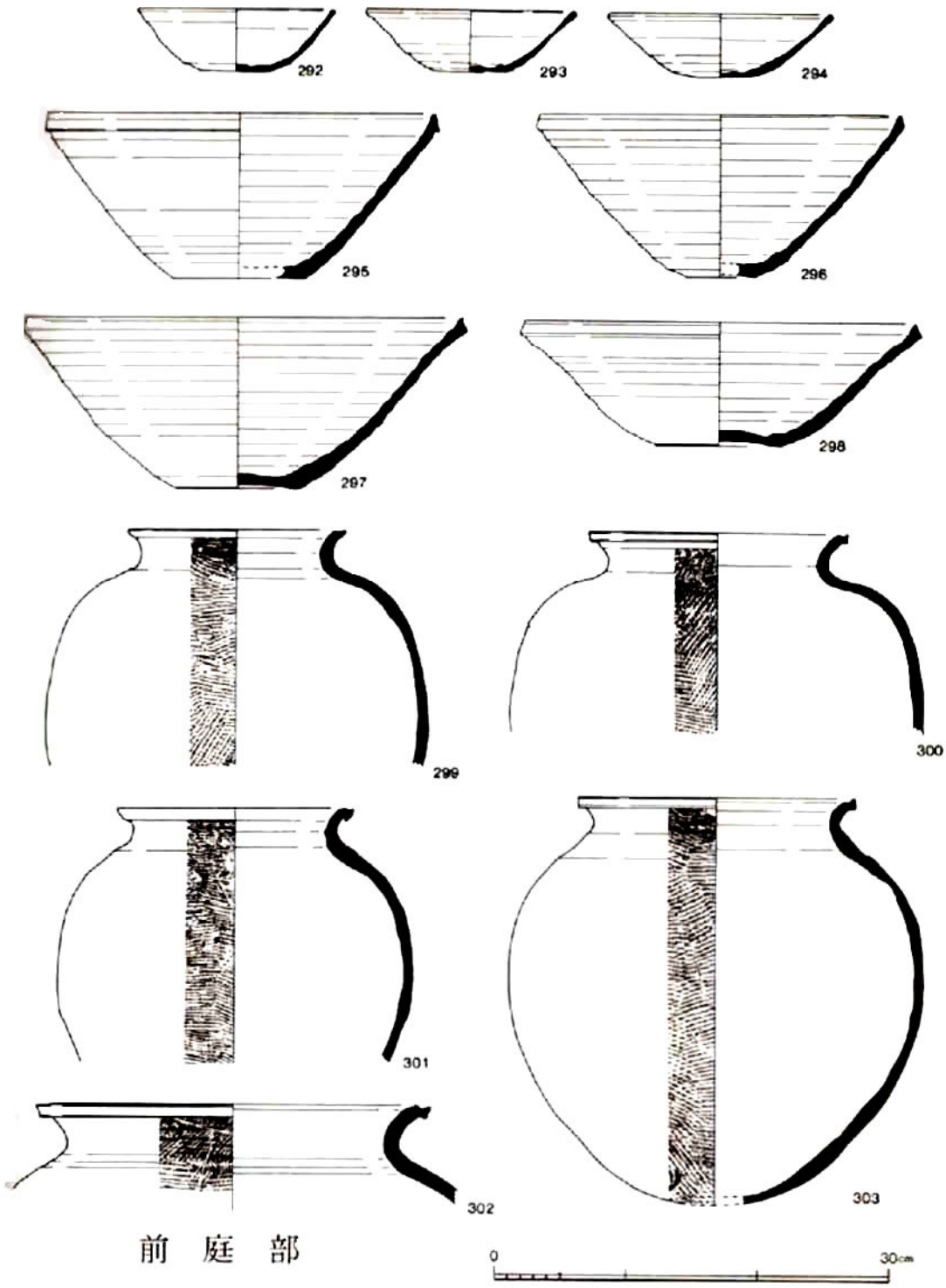


窯　体　内

図版二六　遺物実測図（22号）

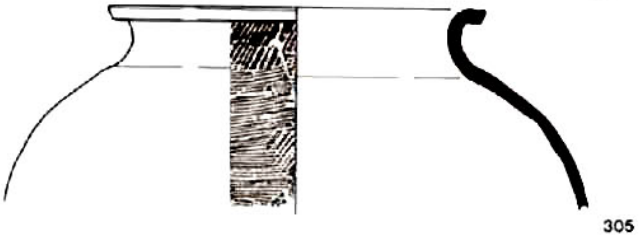


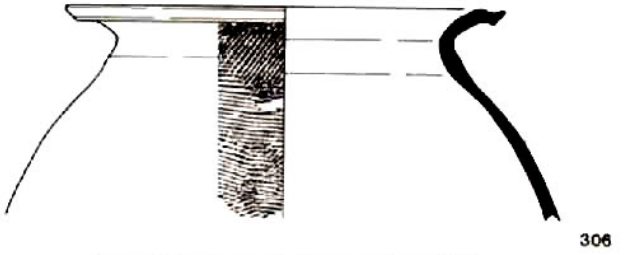
図版二七　遺物実測図（22号）

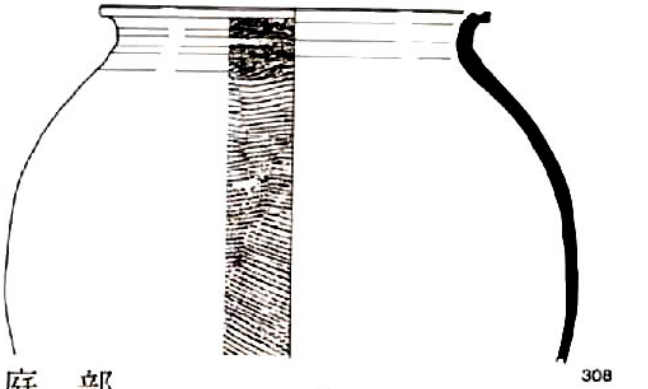


前　庭　部

図版二八　遺物実測図（22号）

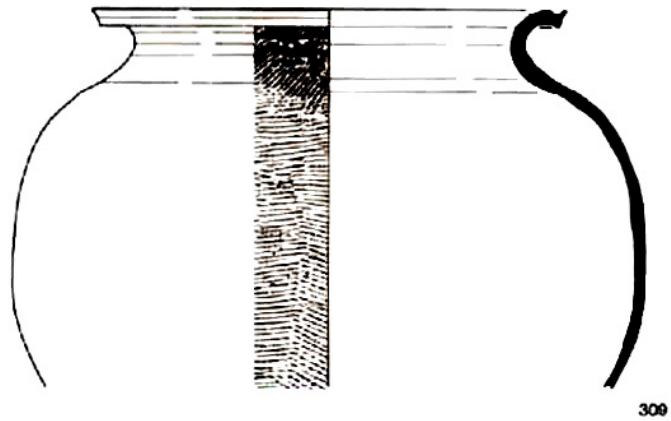


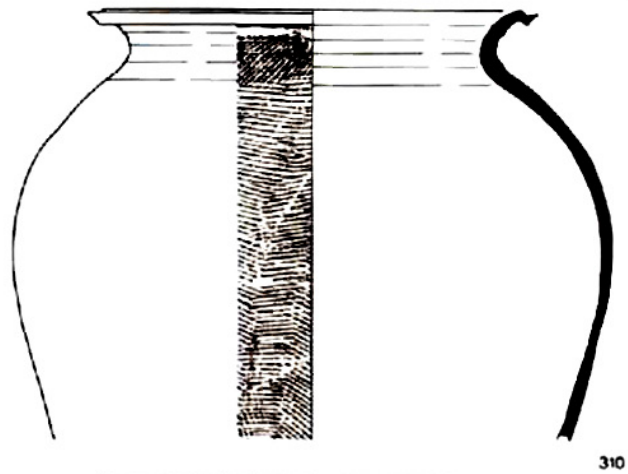


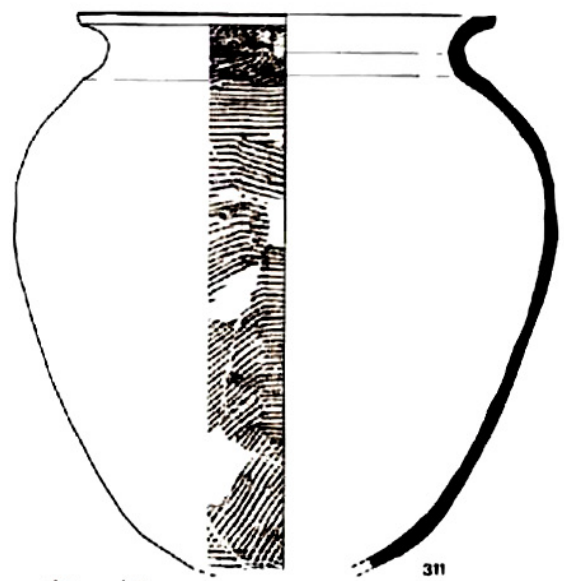


前　庭　部

図版二九　遺物実測図（22号）

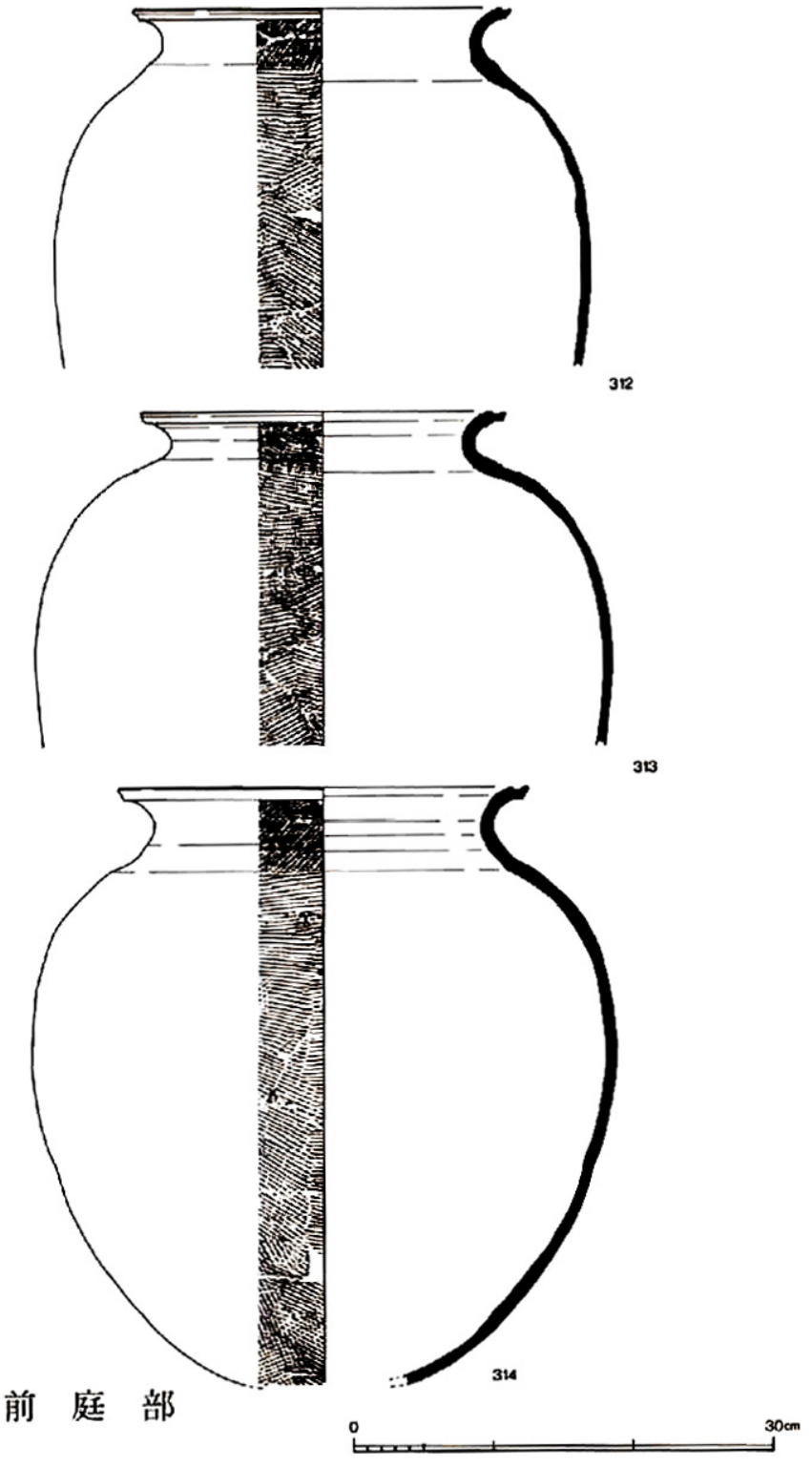




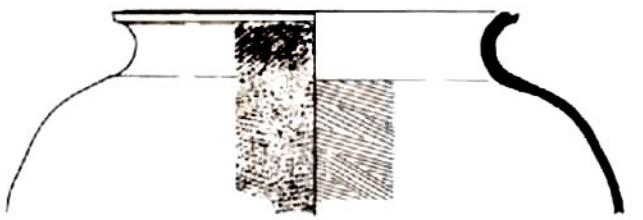


前　庭　部

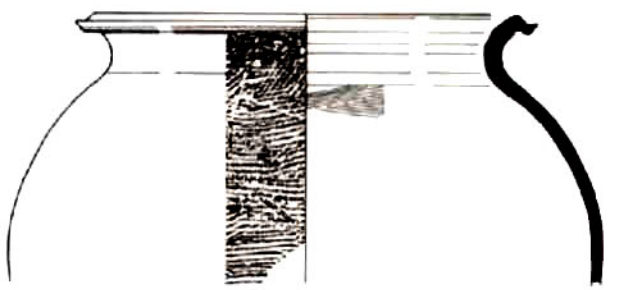
図版三〇　遺物実測図（22号）



図版三一　遺物実測図（22号）


315

316

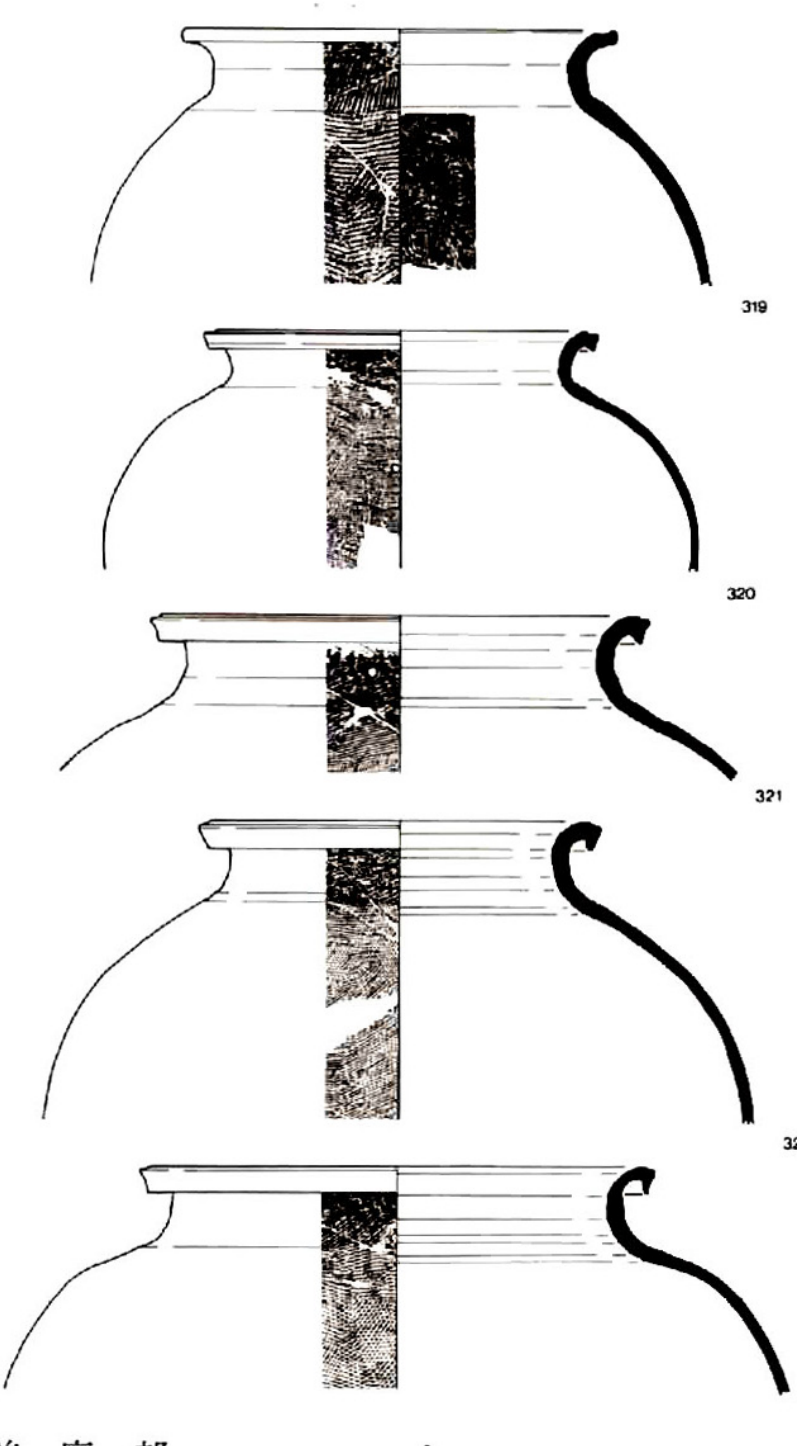

317

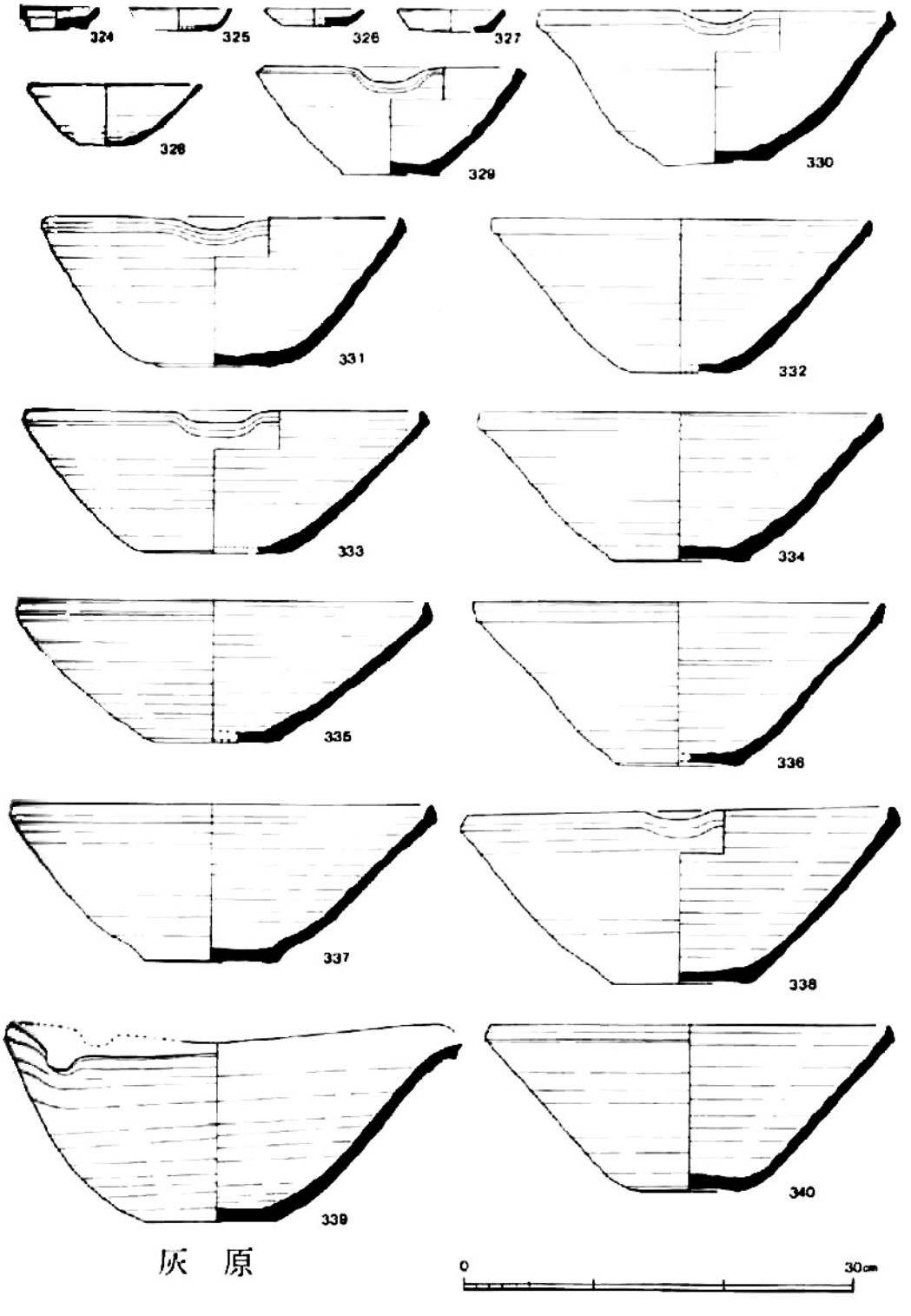
318

前　庭　部

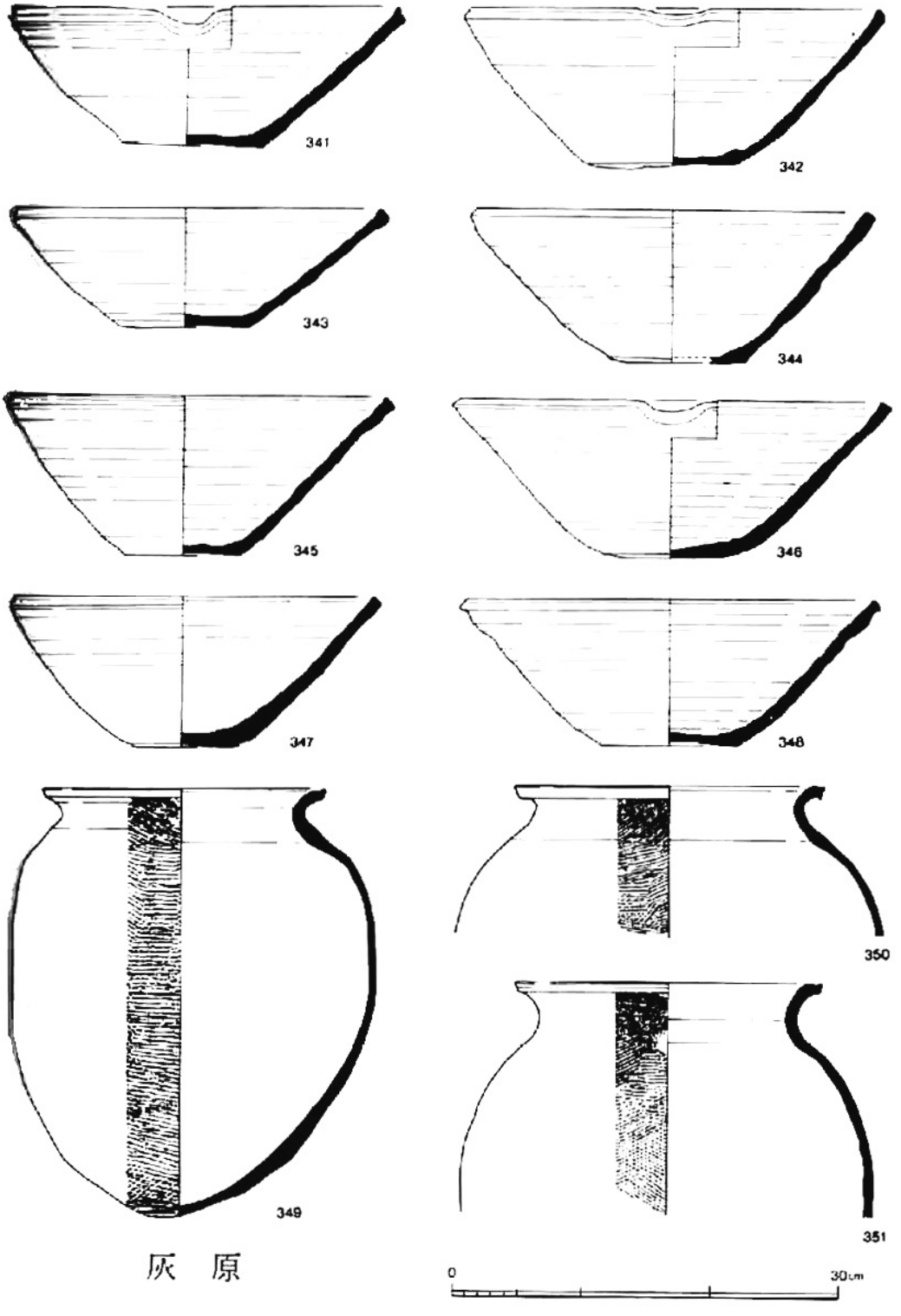
0　30cm

図版三二　遺物実測図（22号）



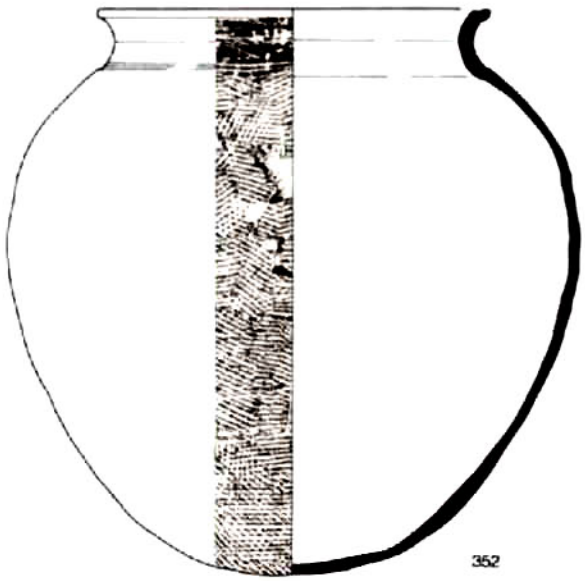

324
325
326
327
328
329
330
331
332
333
334
335
336
337
338
339
340
灰　原
0
30cm

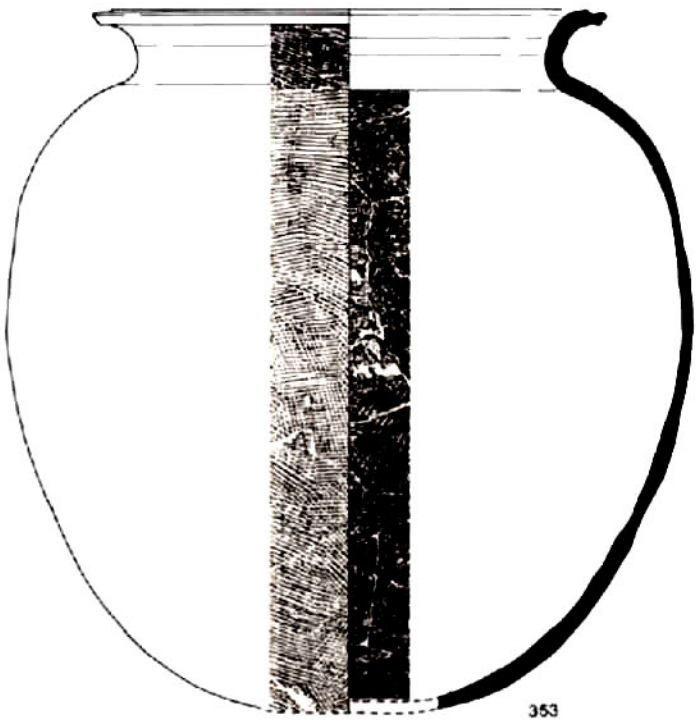
図版三四　遺物実測図（22号）



灰　原

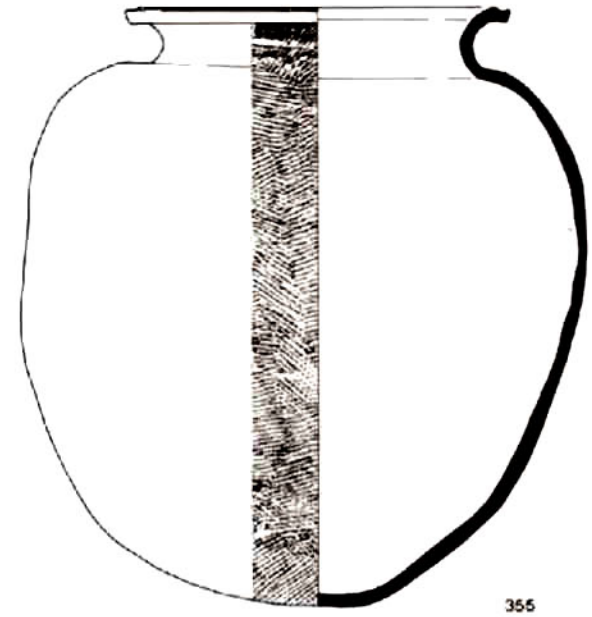
図版三五　遺物実測図（22号）

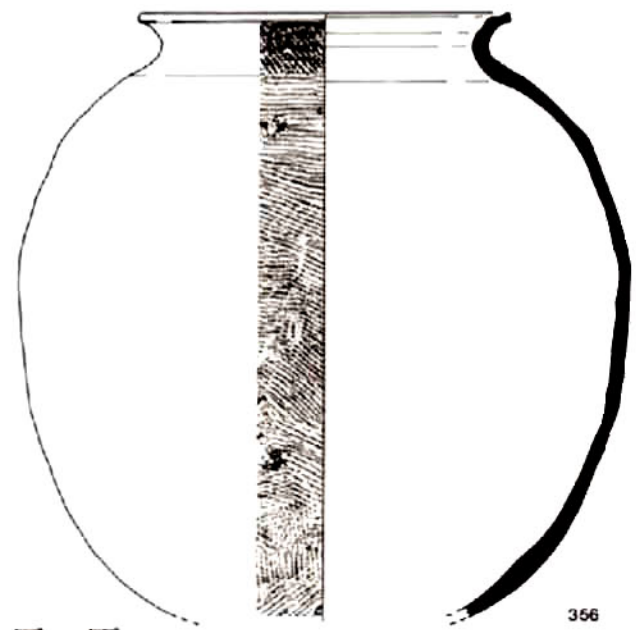




灰　原

図版三六　遺物実測図（22号）

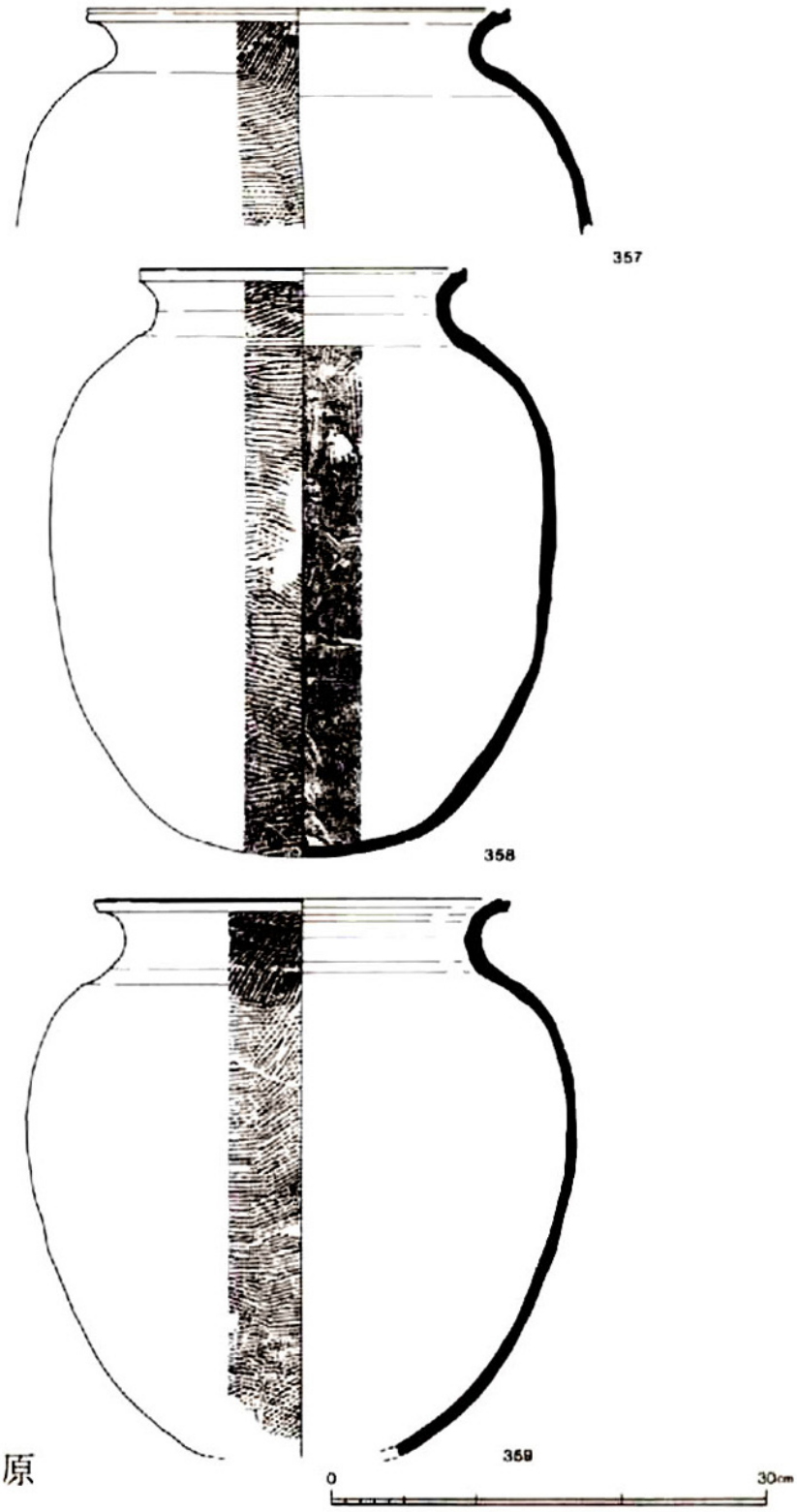




灰　原

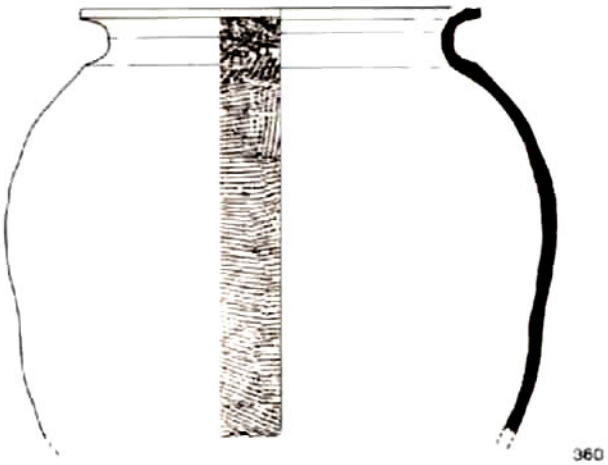
0　30cm

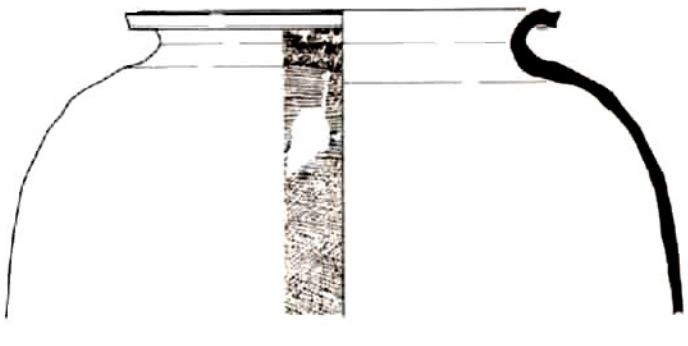
図版三七　遺物実測図（22号）

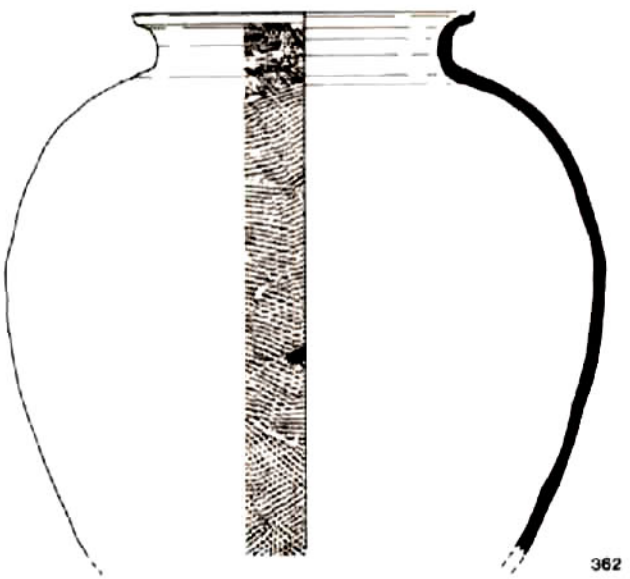


灰　原

図版三八　遺物実測図（22号）

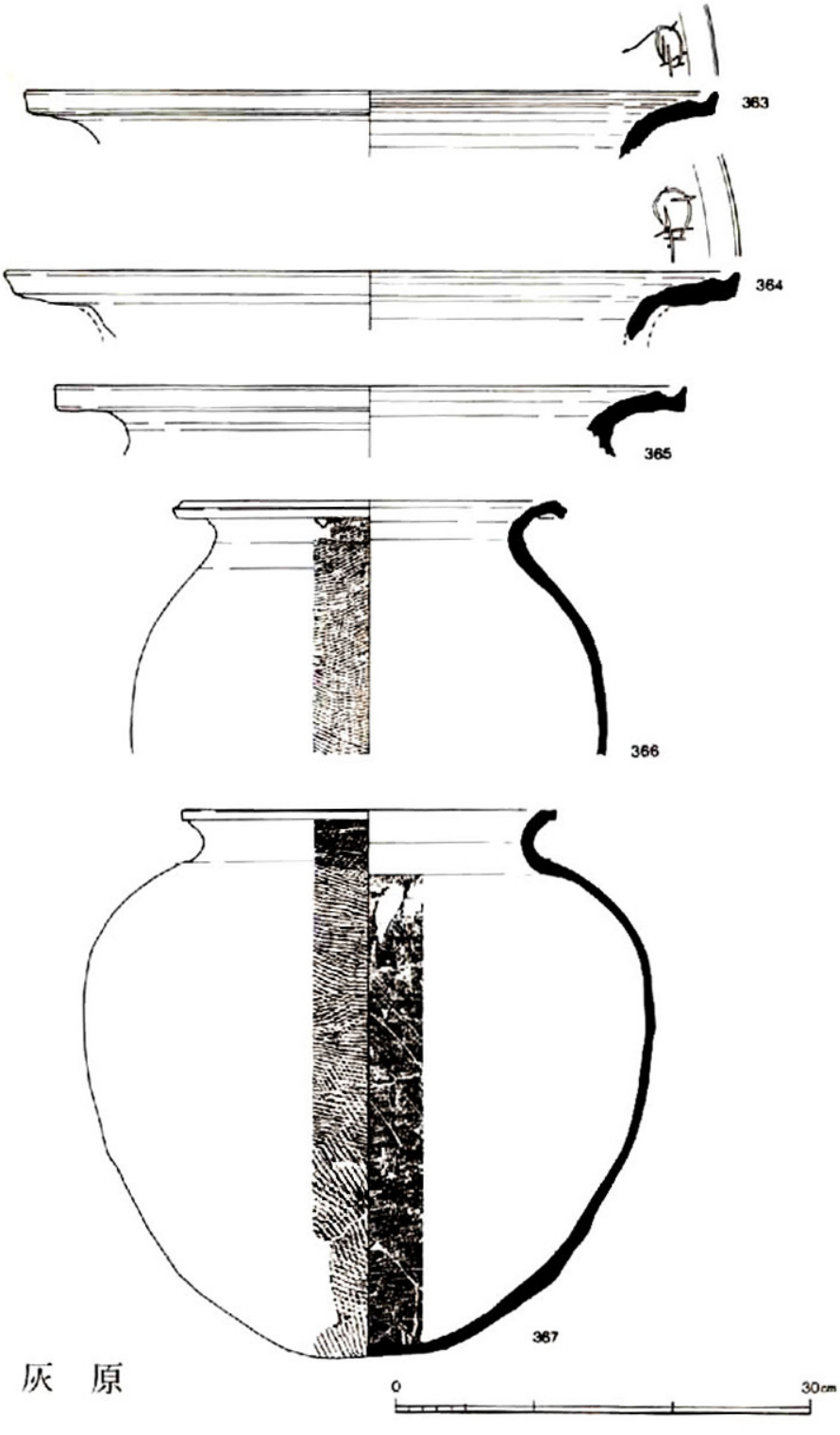




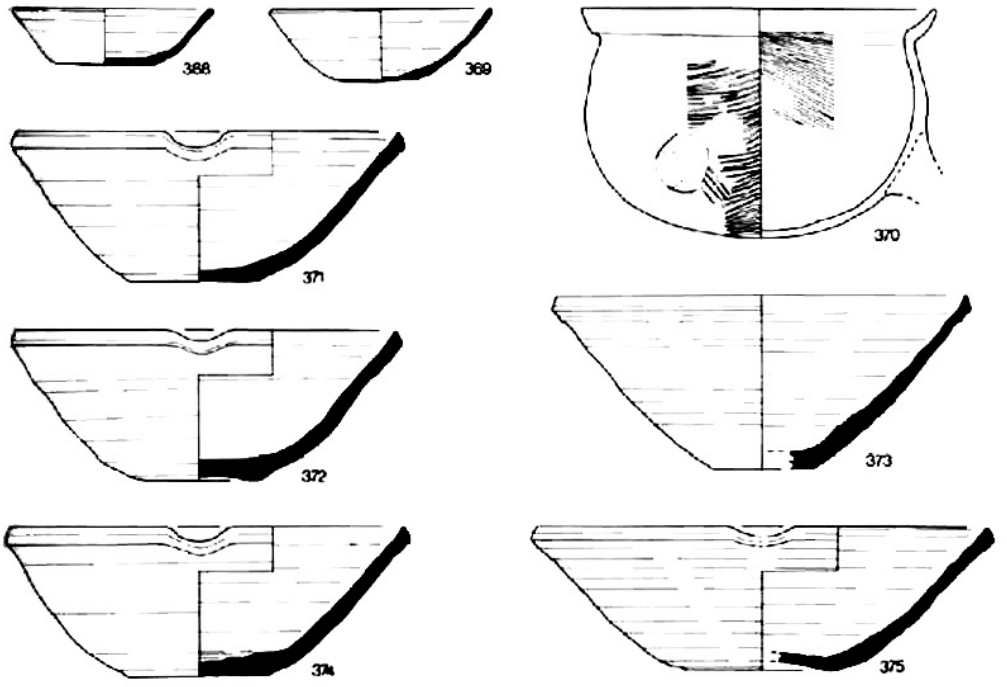


灰　原

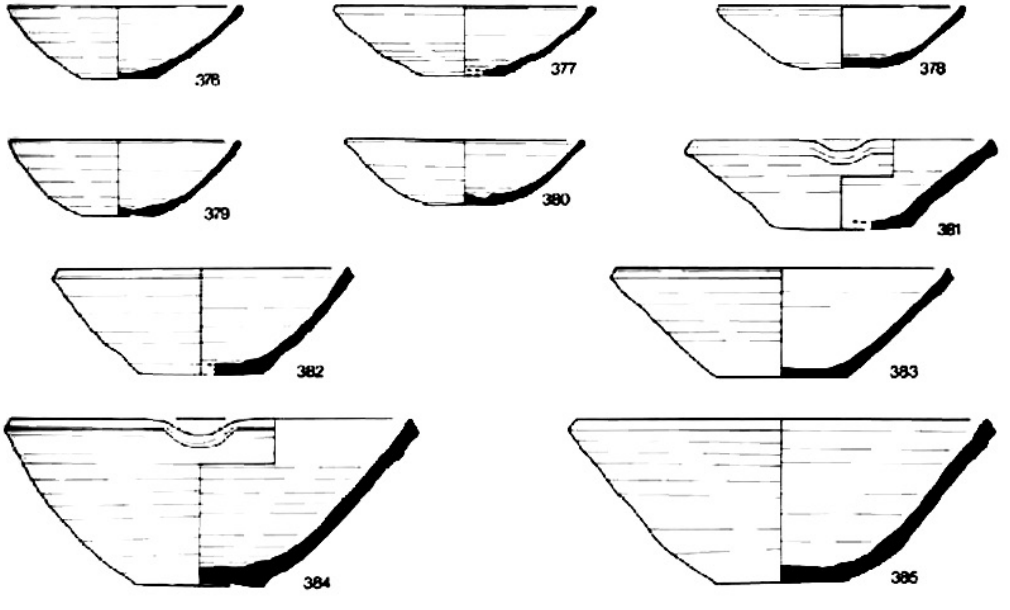
図版三九　遺物実測図（22号）



灰　原

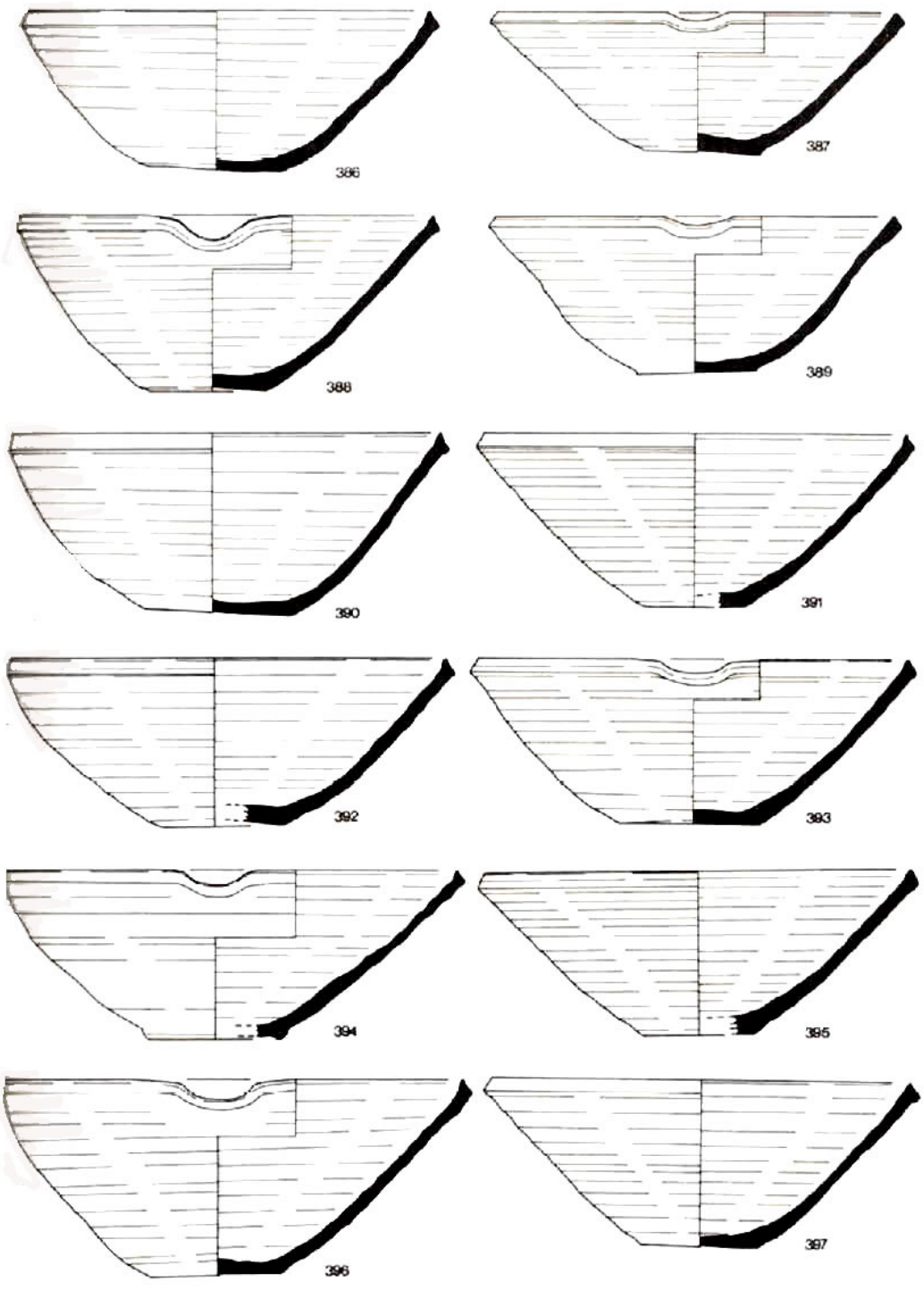

368
369
370
371
372
373
374
375

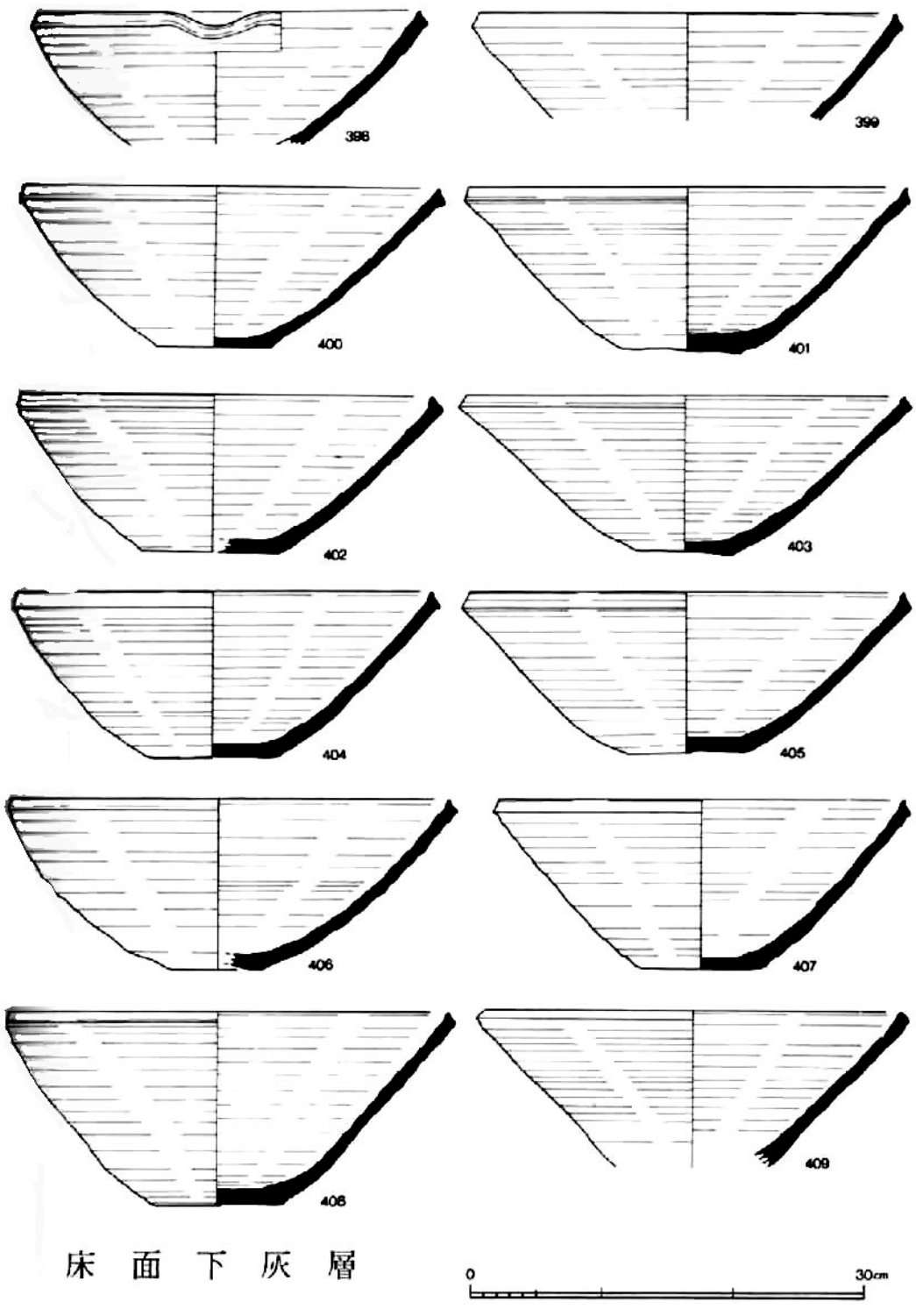
窯体内床面

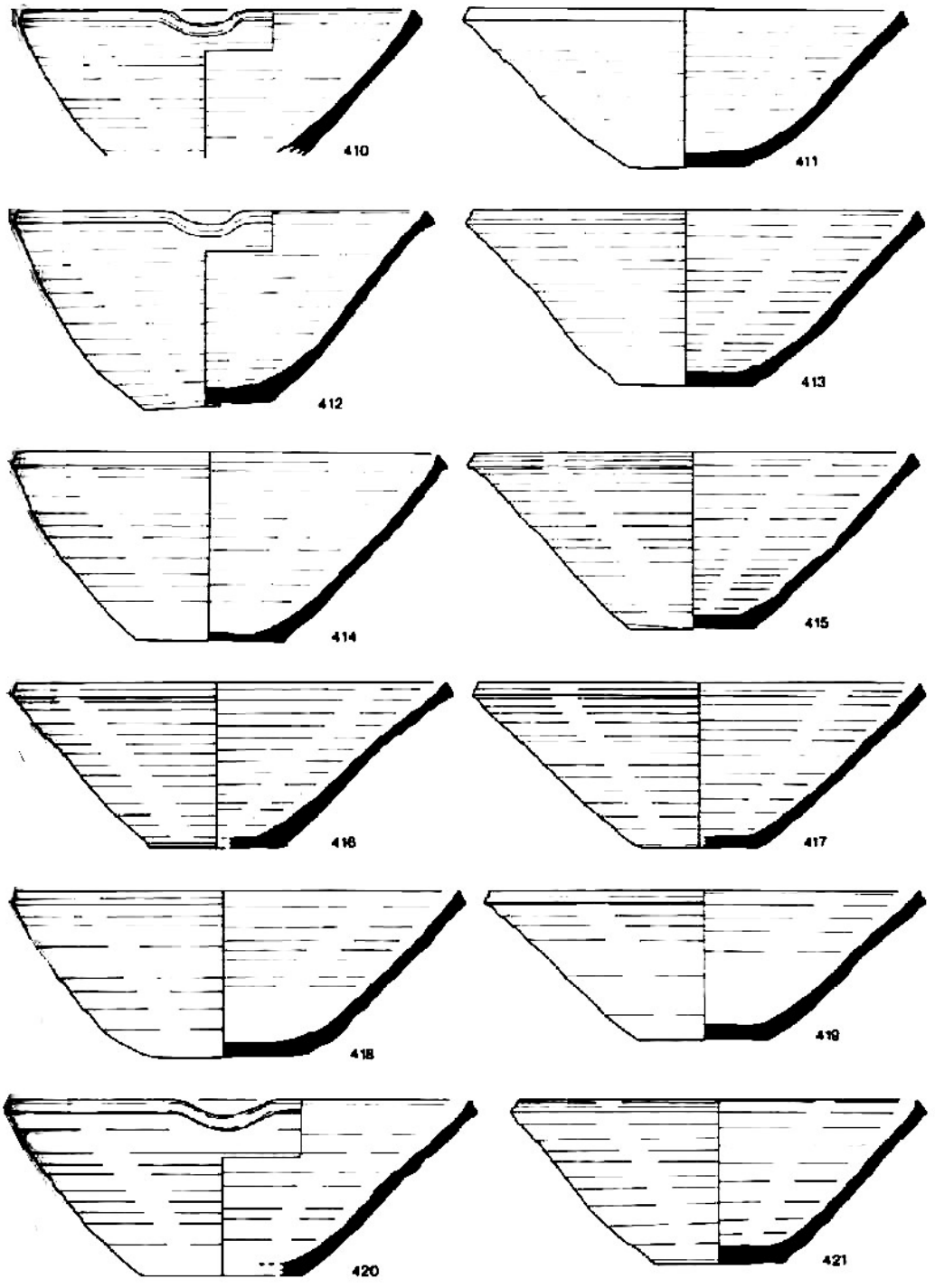

376
377
378
379
380
381
382
383
384
385

床面下灰層

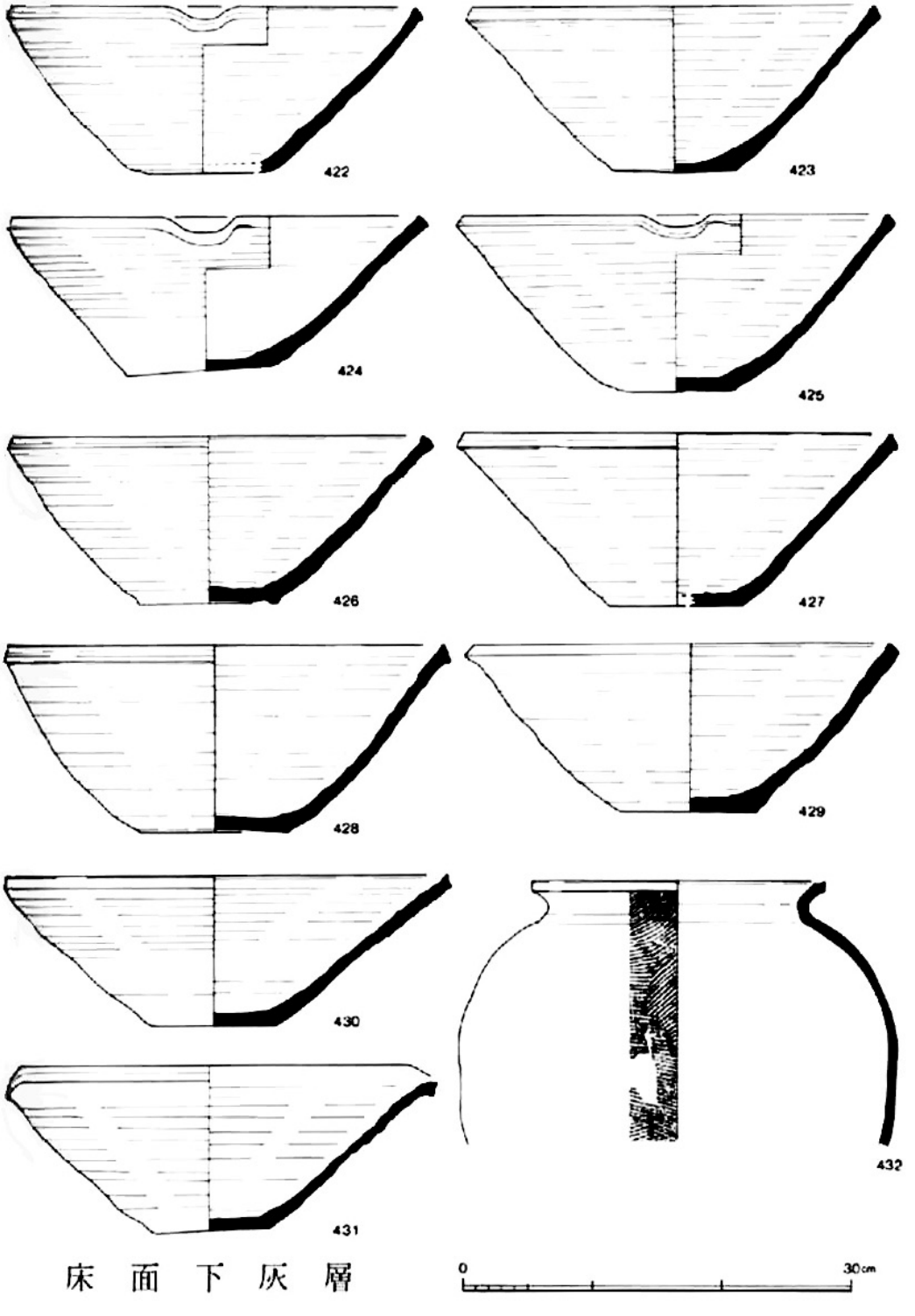
0
30cm


386
387
388
389
390
391
392
393
394
395
396
397
床面下灰層
0
30cm

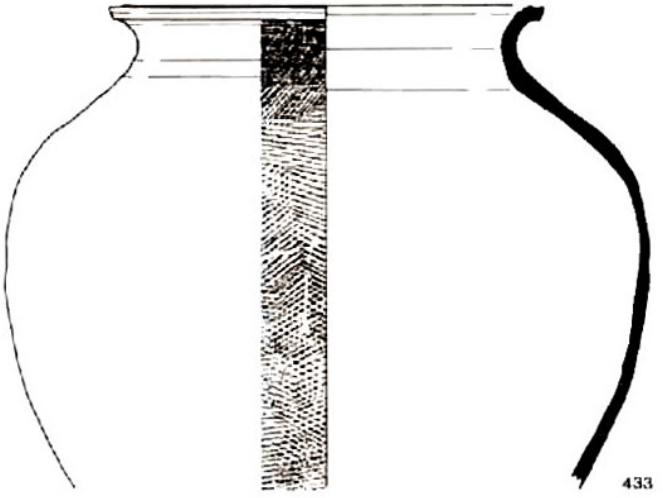

398
399
400
401
402
403
404
405
406
407
408
409
床面下灰層
0
30cm

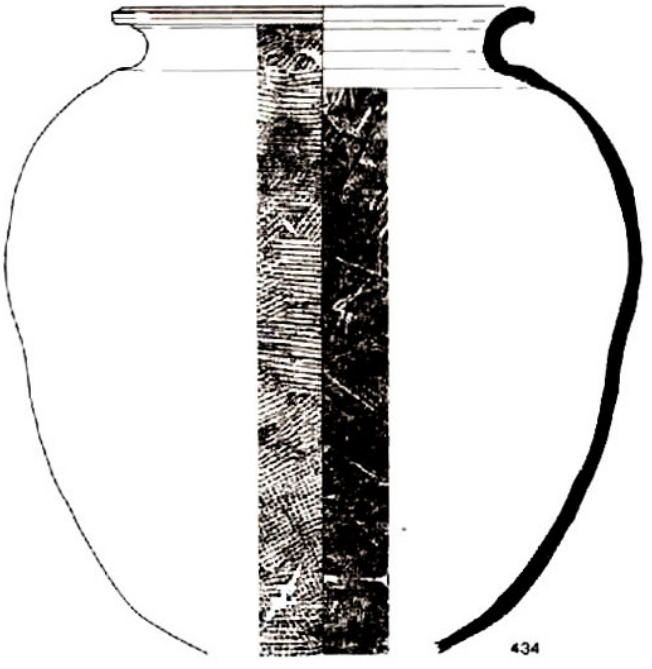

410
411
412
413
414
415
416
417
418
419
420
421
床面下灰層
0
30cm

図版四四　遺物実測図（30号）



図版四五　遺物実測図（30号）

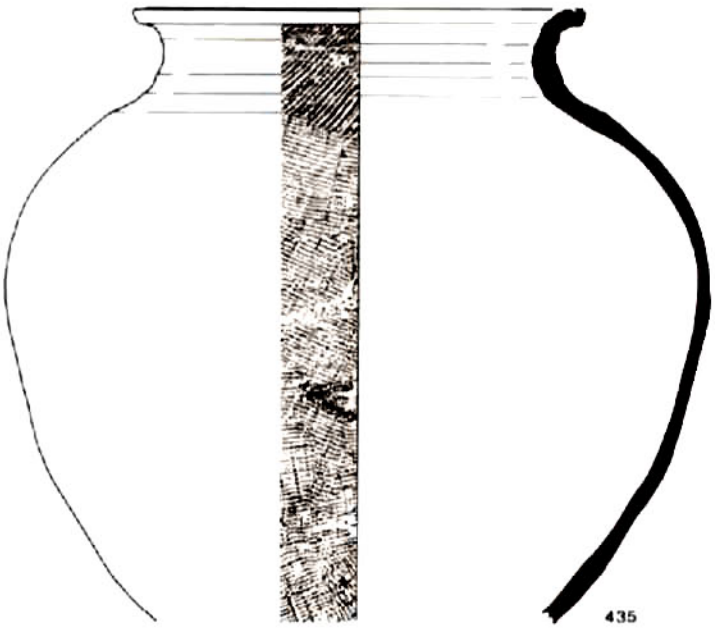


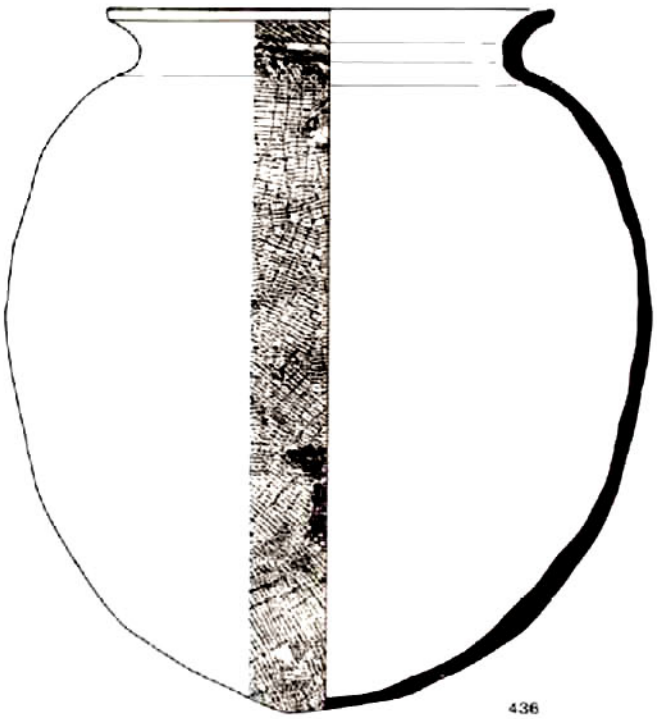


床　面　下　灰　層

0　30cm

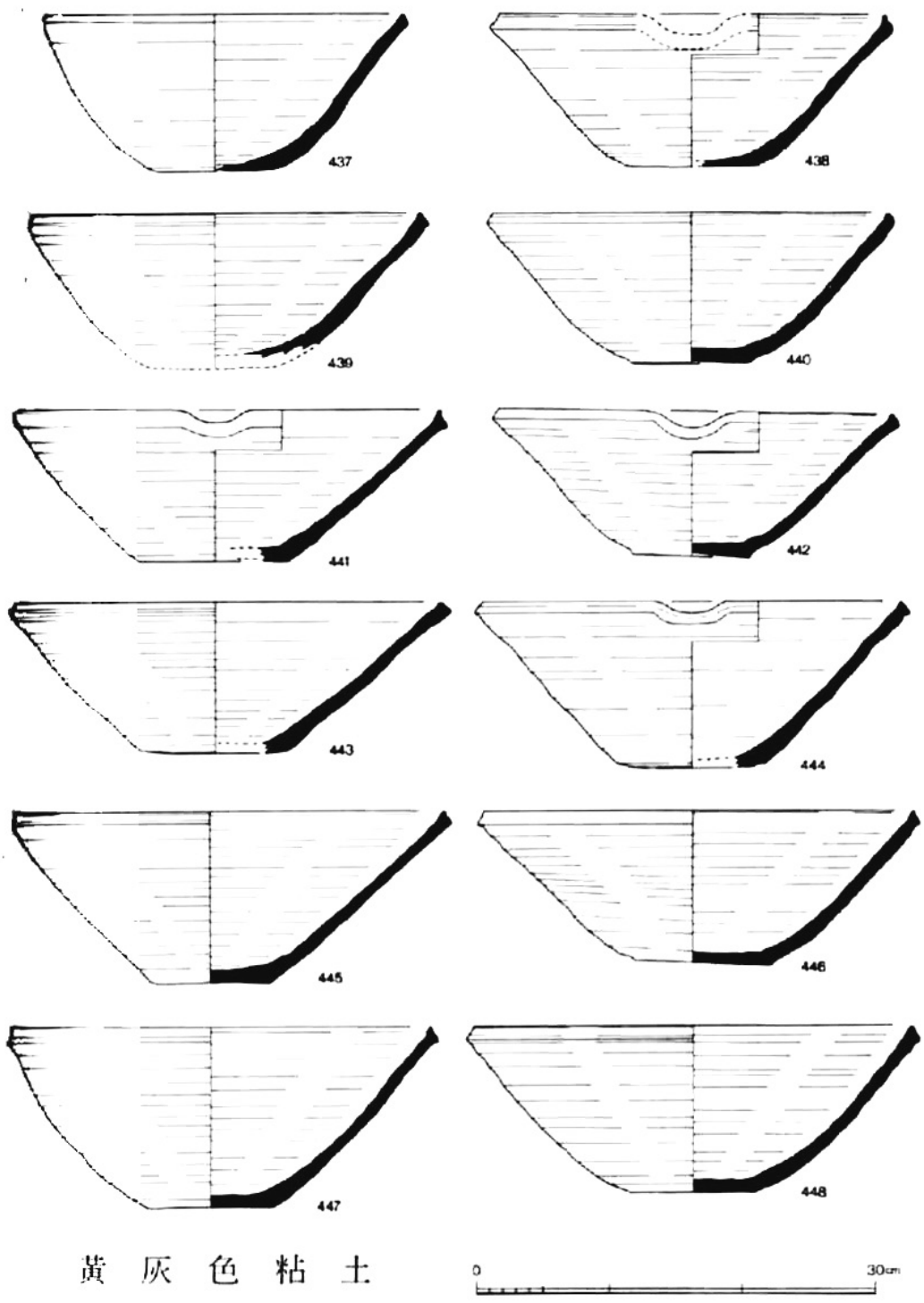
図版四六　遺物実測図（30号）



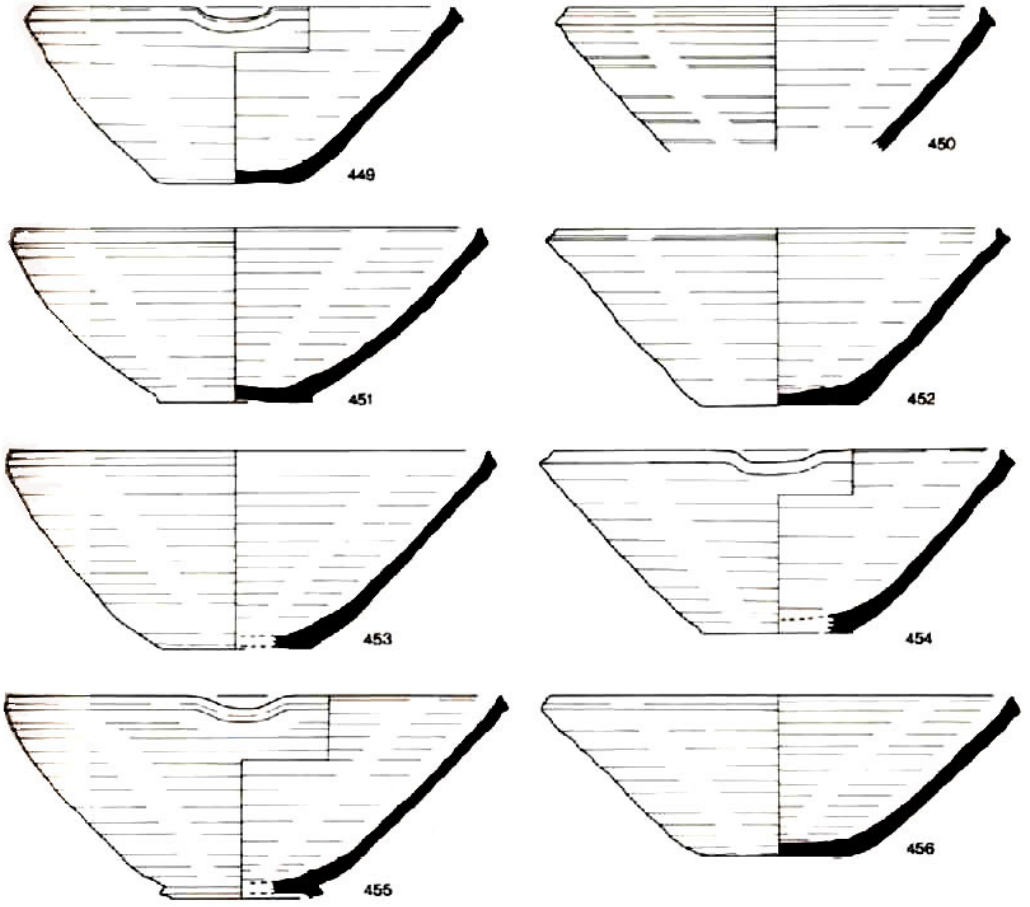


床　面　下　灰　層

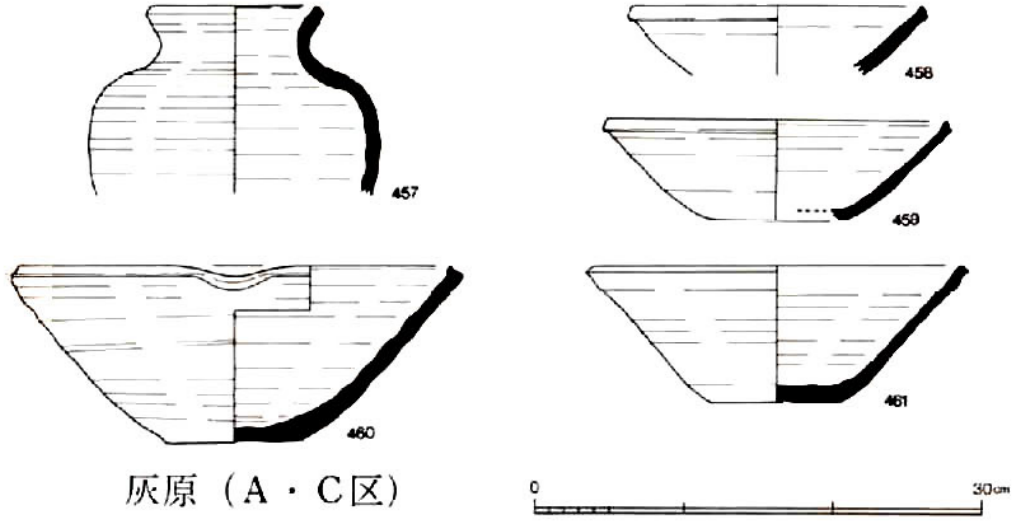
0　30cm


437
438
439
440
441
442
443
444
445
446
447
448
黄　灰　色　粘　土
0
30cm

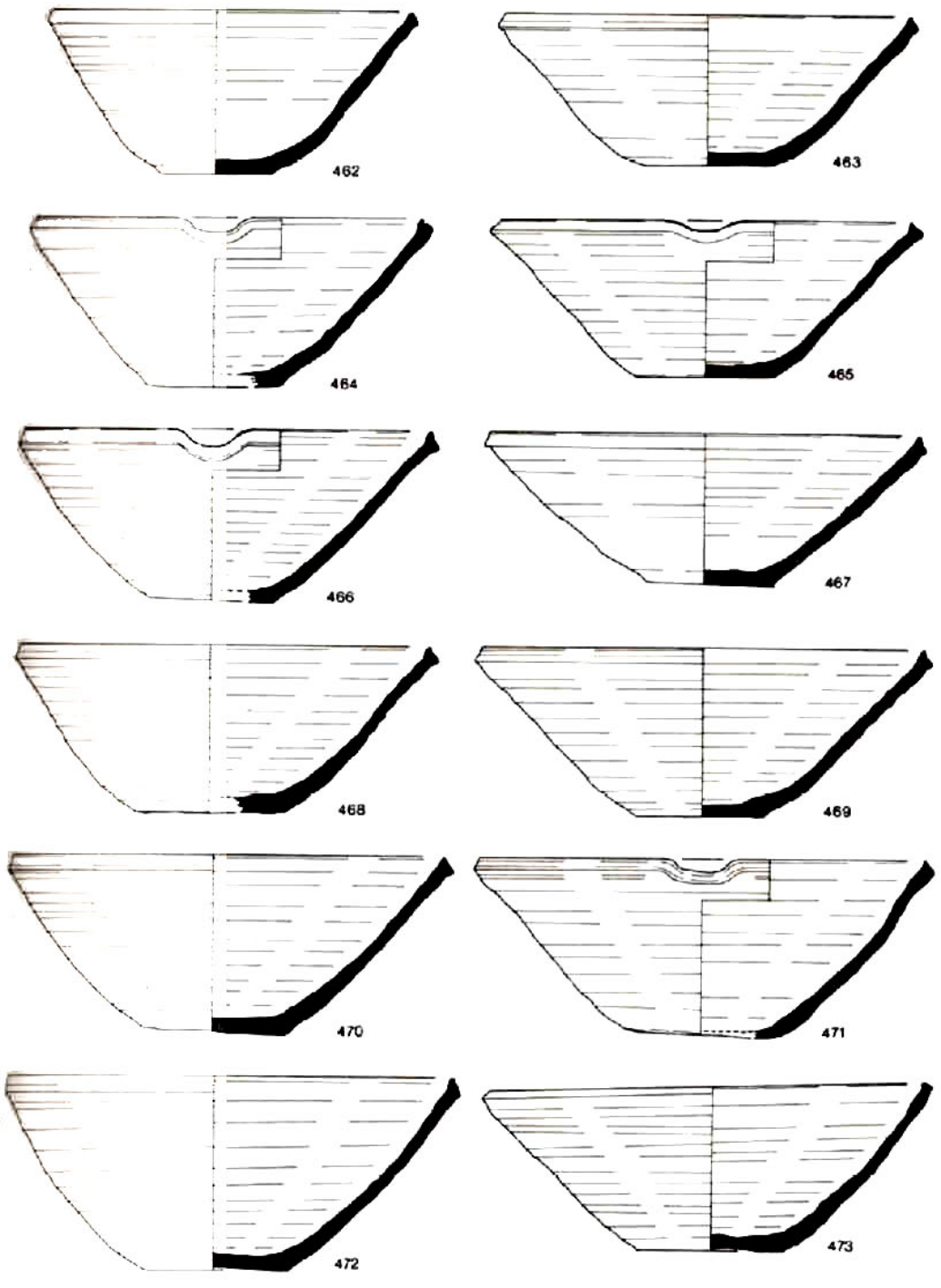
図版四八　遺物実測図（30号）



黄　灰　色　粘　土

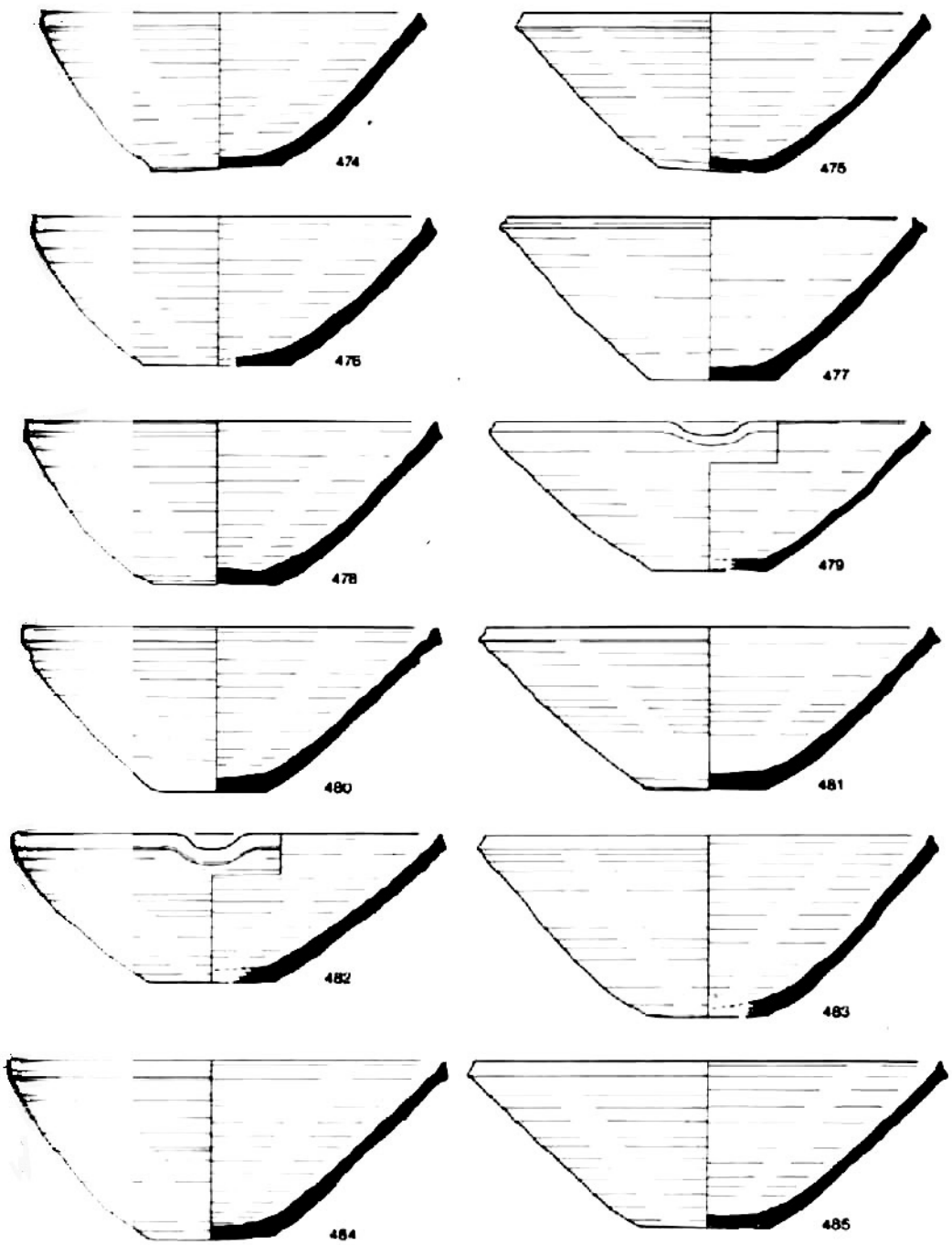


灰原（A・C区）

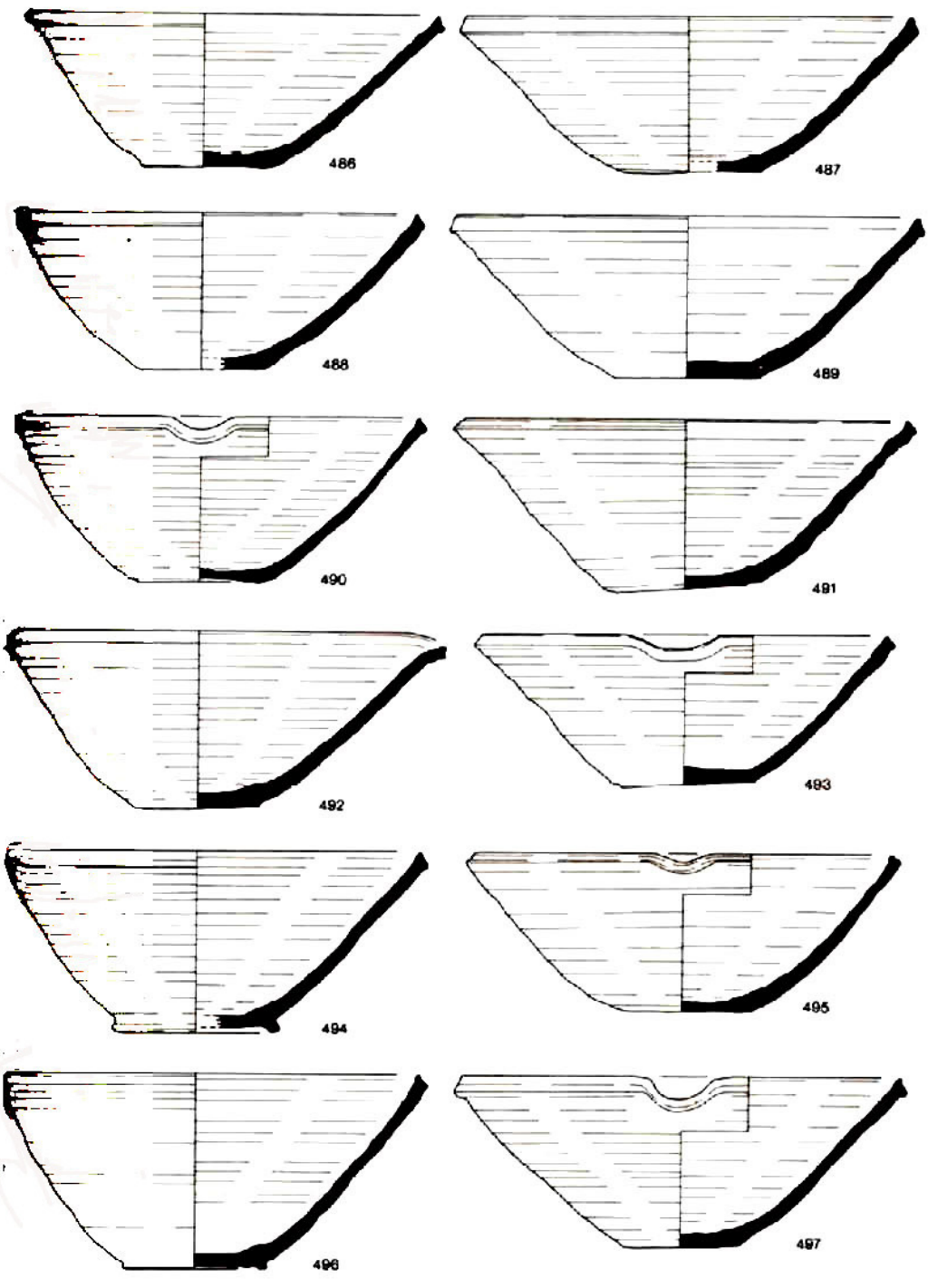


灰原（A・C区）

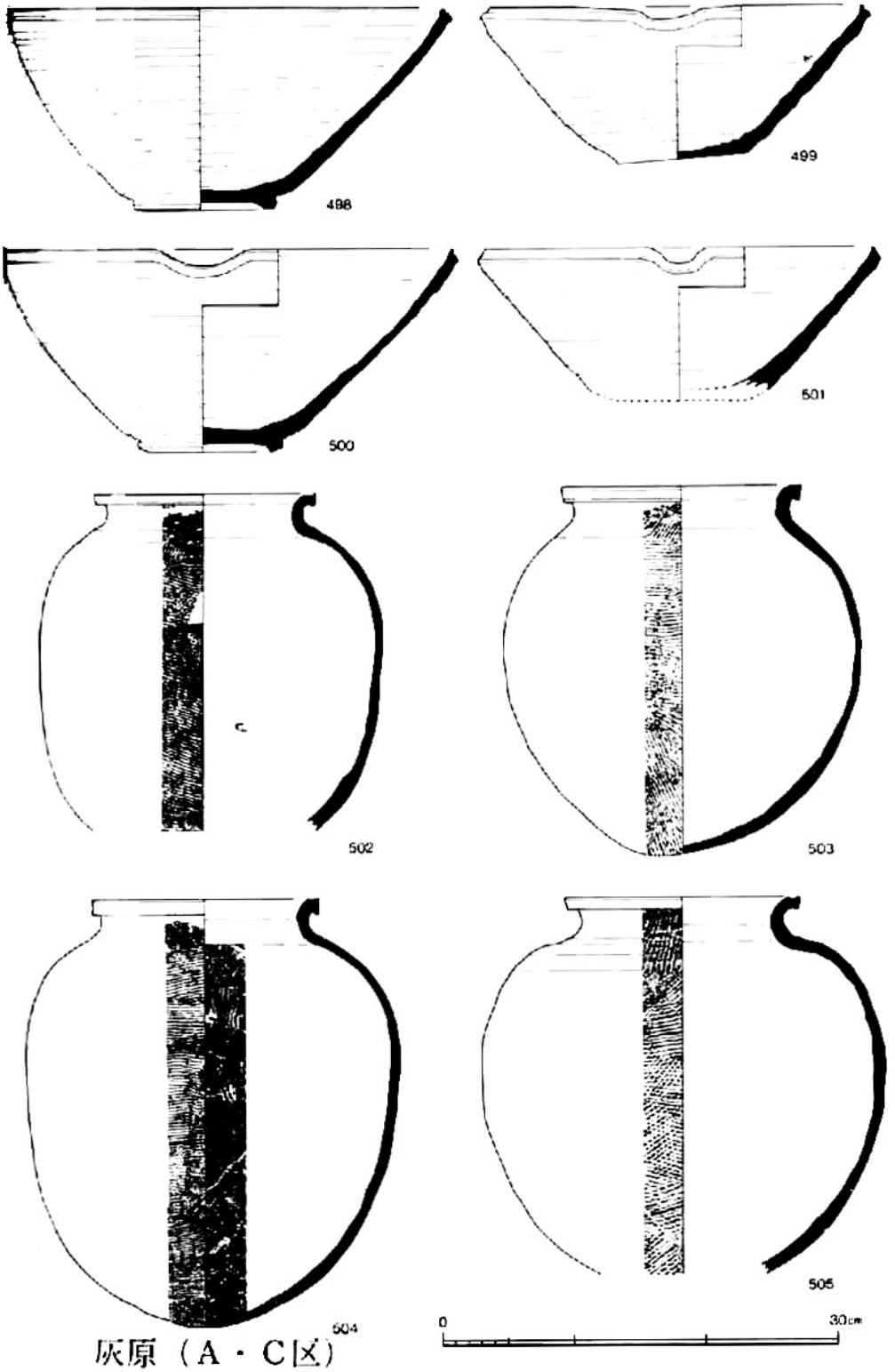
図版五〇　遺物実測図（30号）



灰原（A・C区）

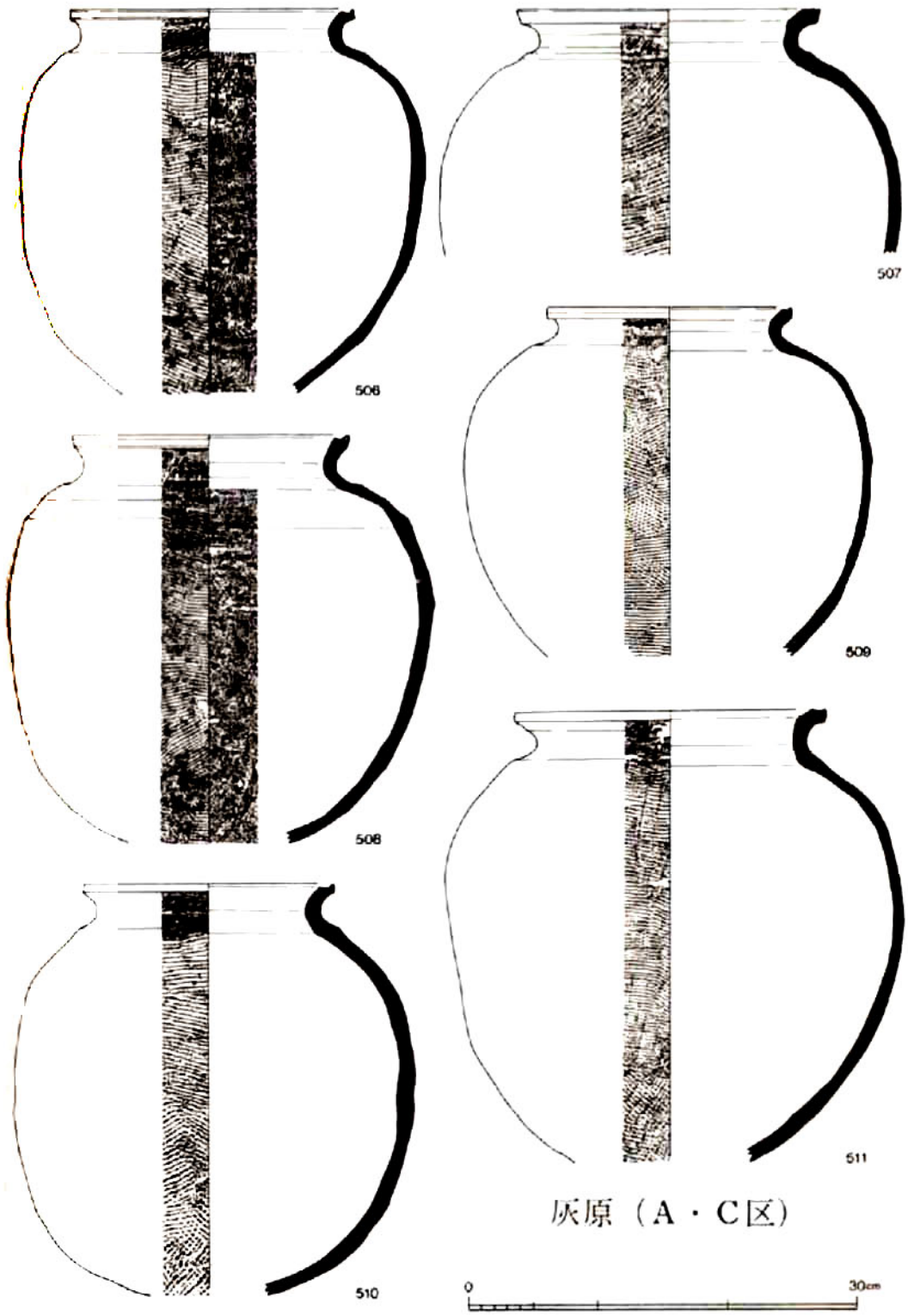


灰原（A・C区）

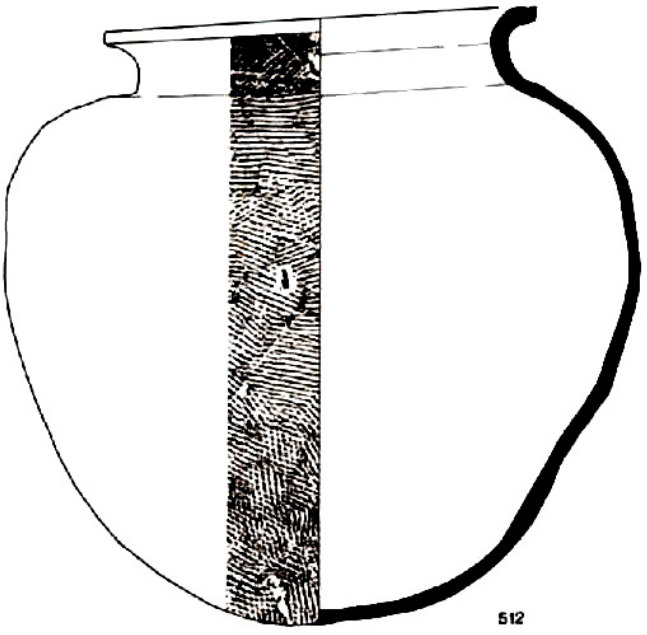


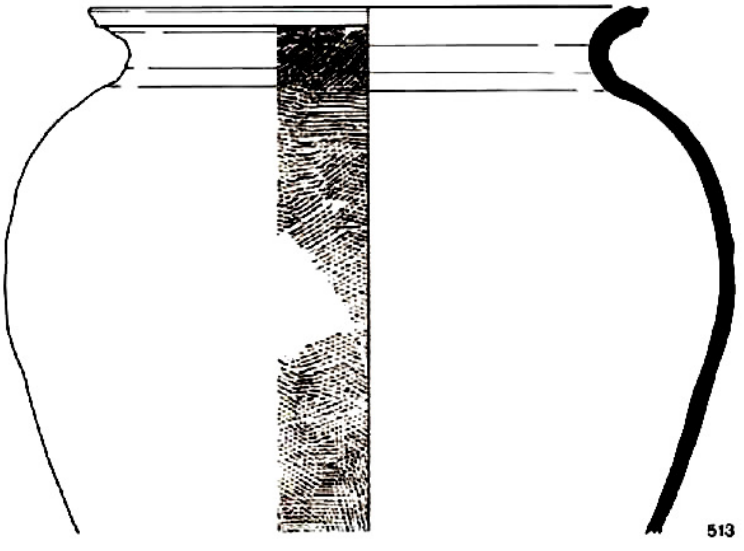
灰原（A・C区）

図版五三　遺物実測図（30号）

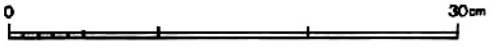


図版五四　遺物実測図（30号）

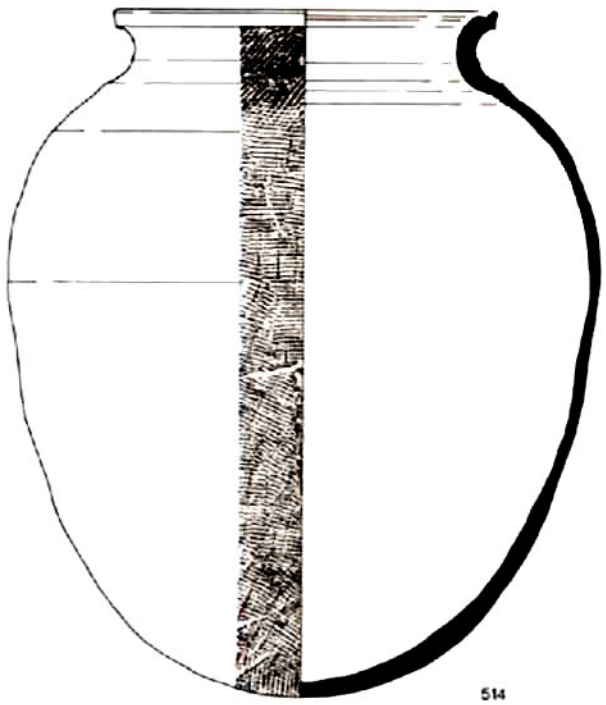


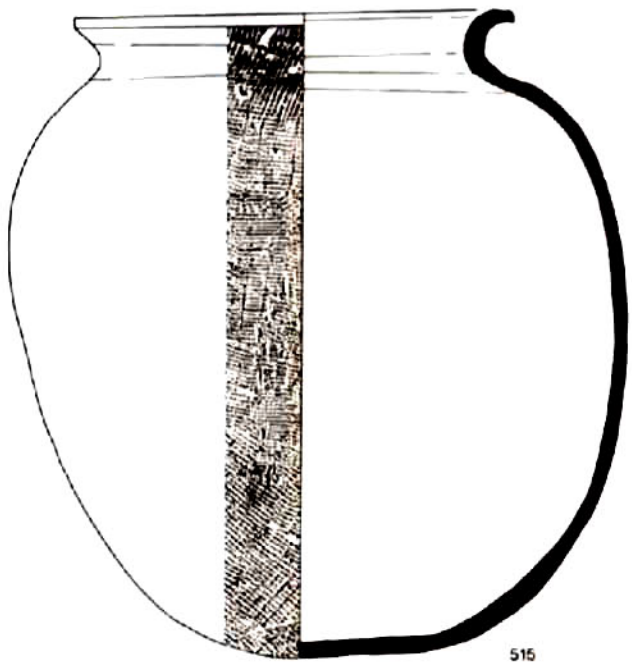


灰原（A・C区）



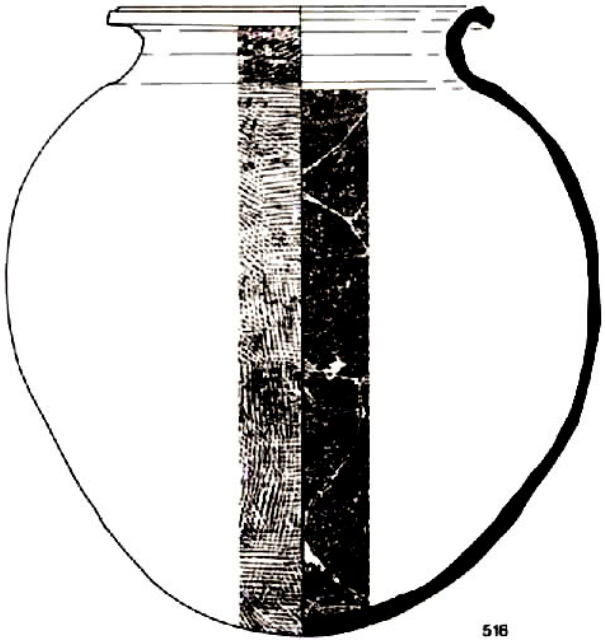
図版五五　遺物実測図（30号）

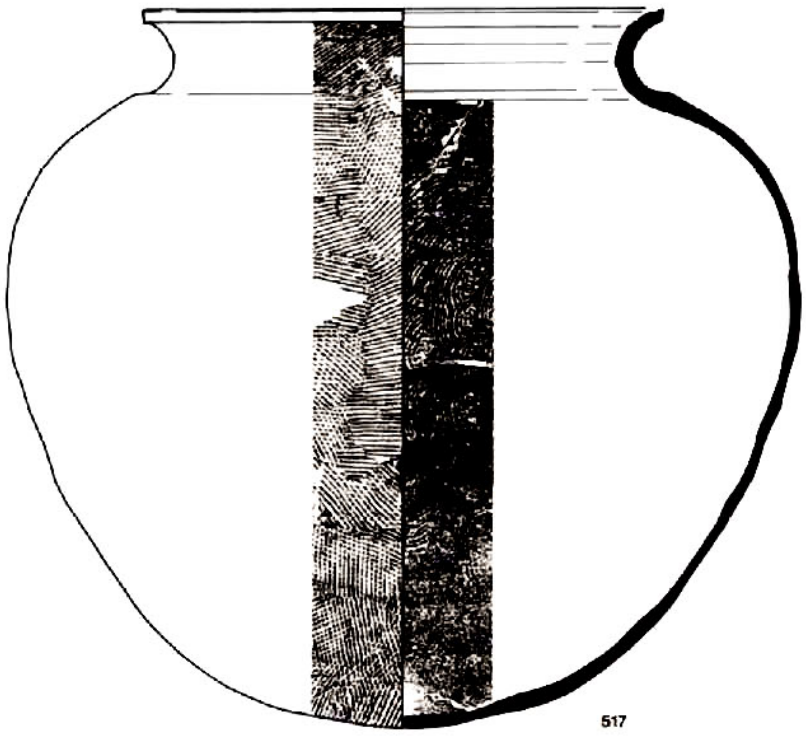




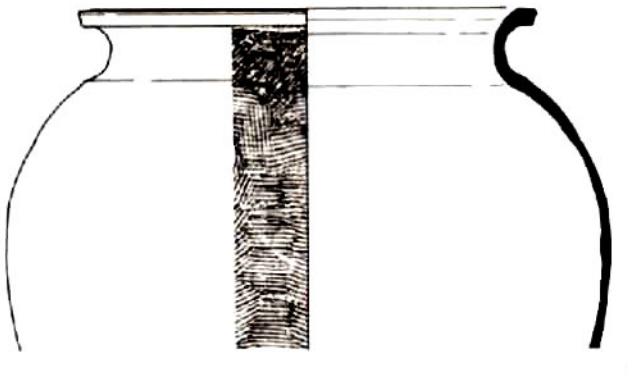
灰原（A・C区）

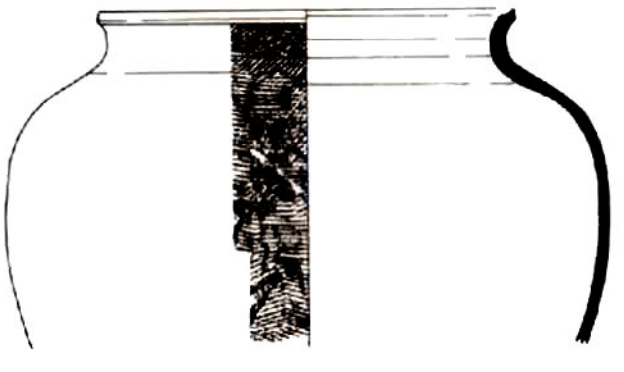
図版五六　遺物実測図（30号）

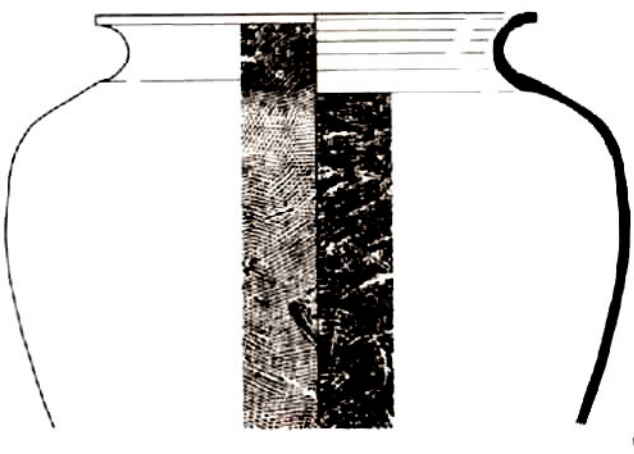




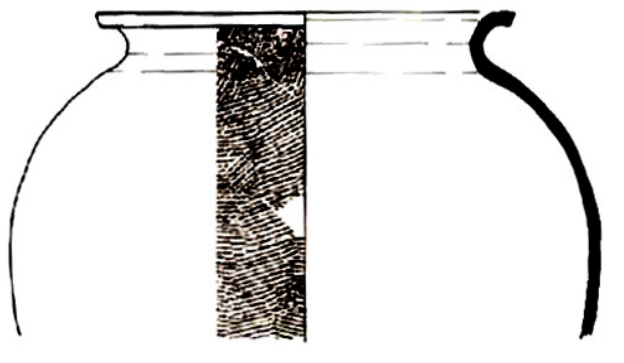
灰原（A・C区）

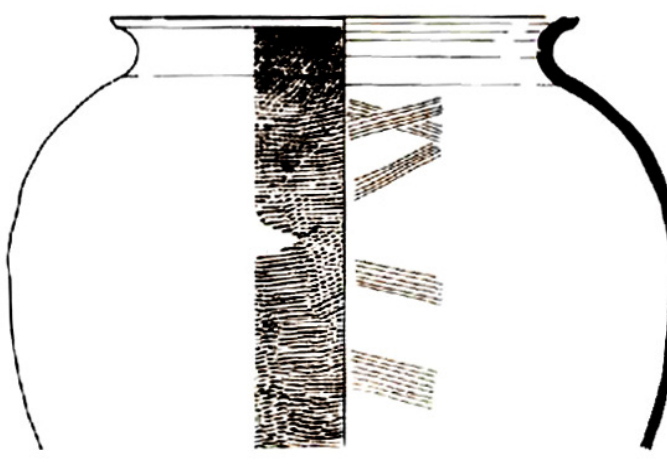






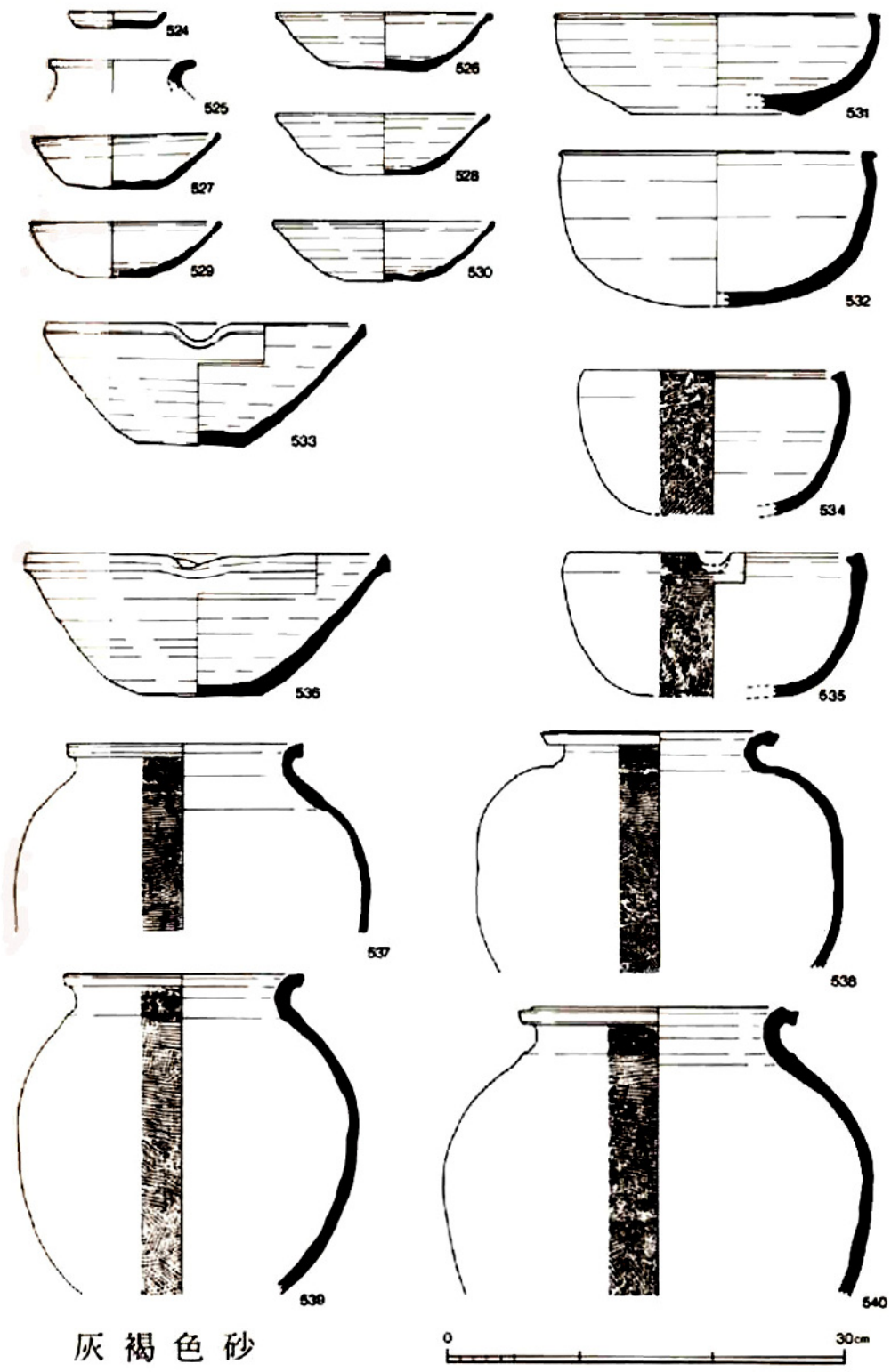
灰原（A・C区）



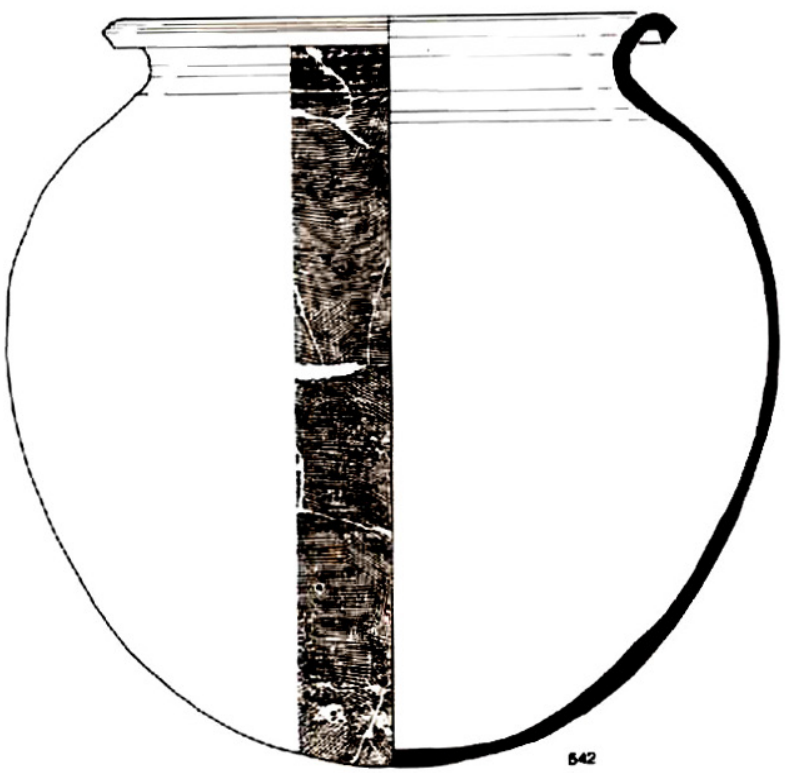


灰原（A・C区）

図版五九　遺物実測図（30号）

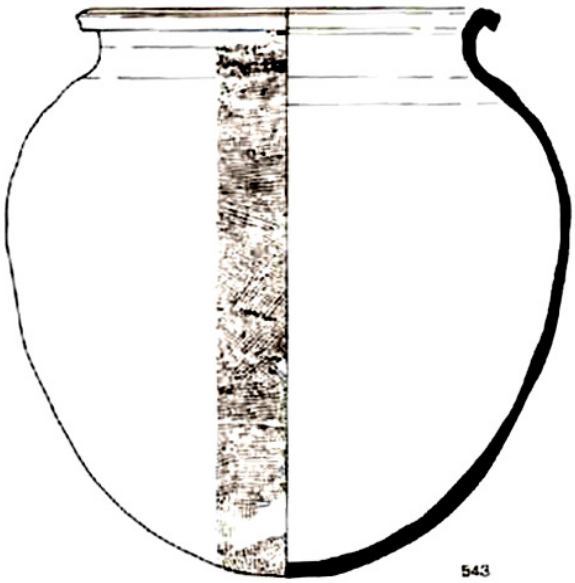


図版六〇　遺物実測図（30号）



灰褐色砂

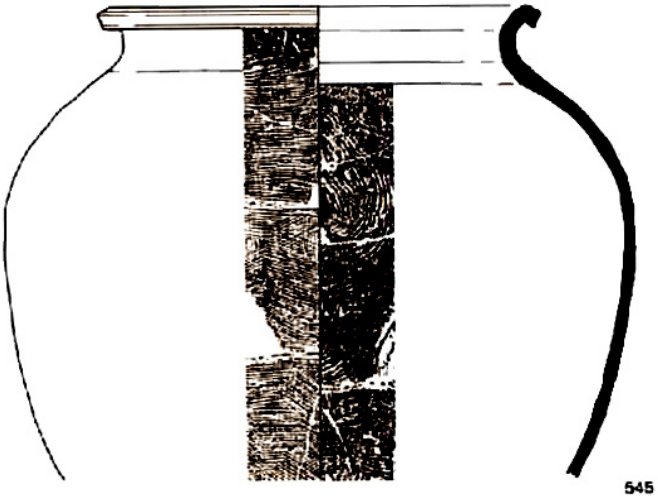
図版六一　遺物実測図（30号）



灰褐色砂

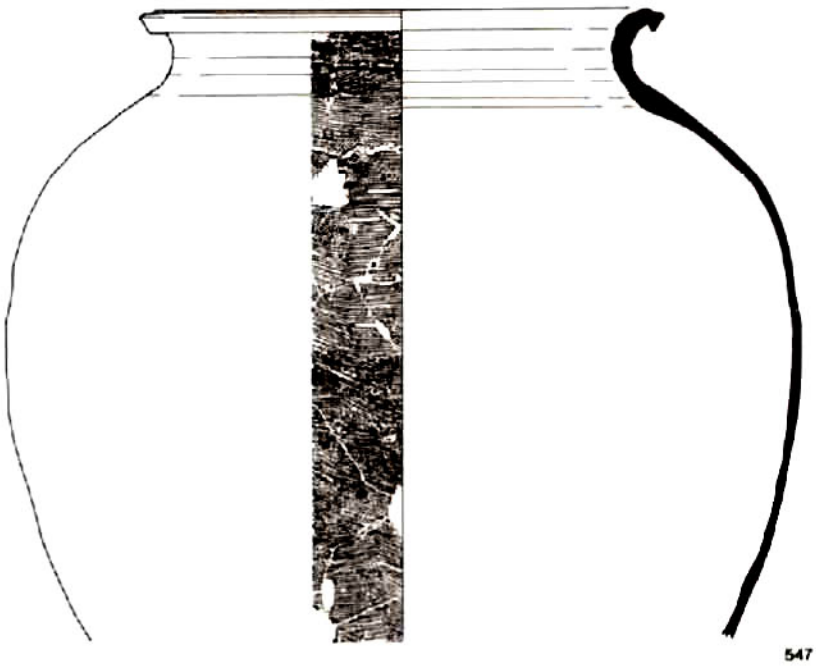
0　30cm

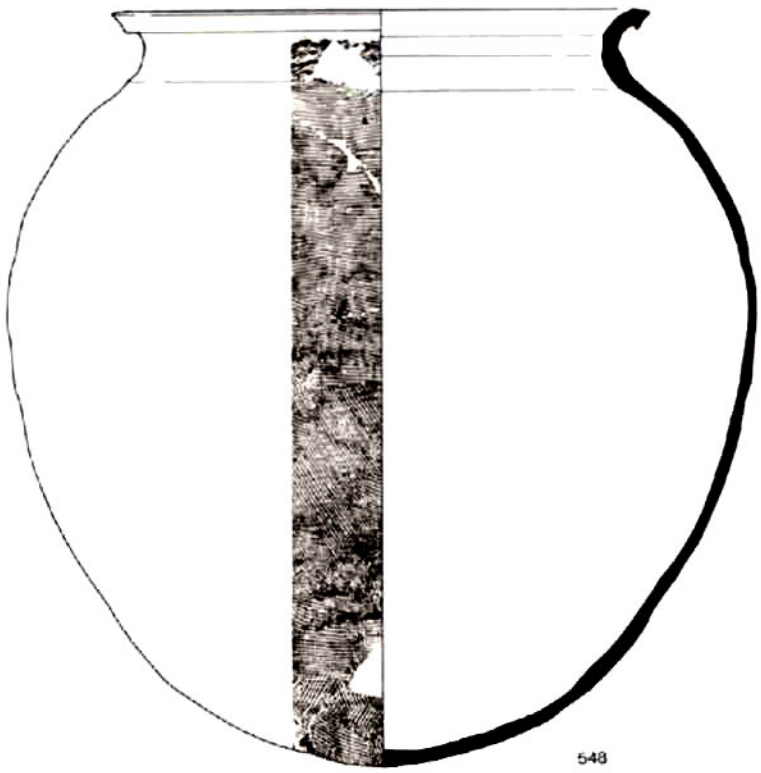
図版六二　遺物実測図（30号）



灰褐色砂

図版六三　遺物実測図（30号）

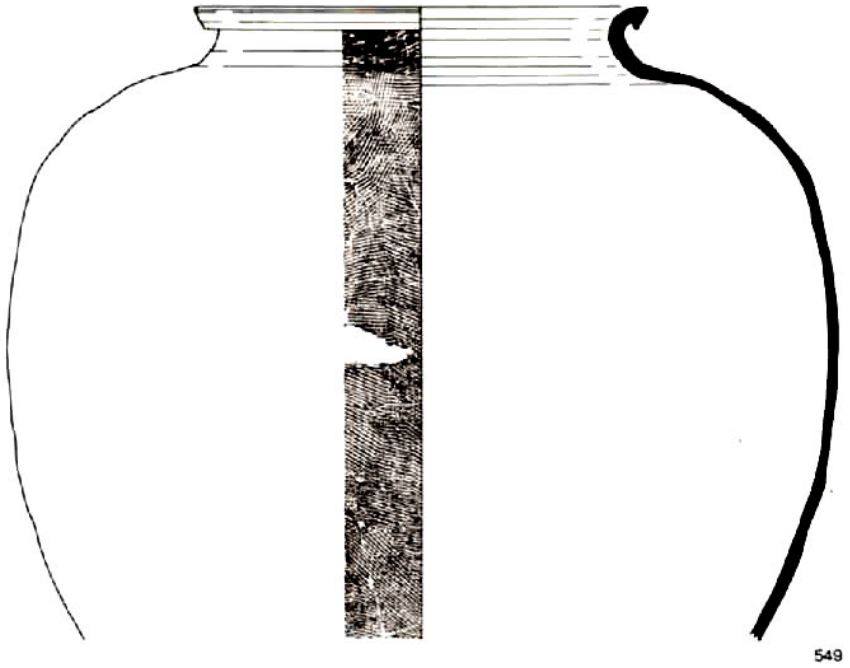


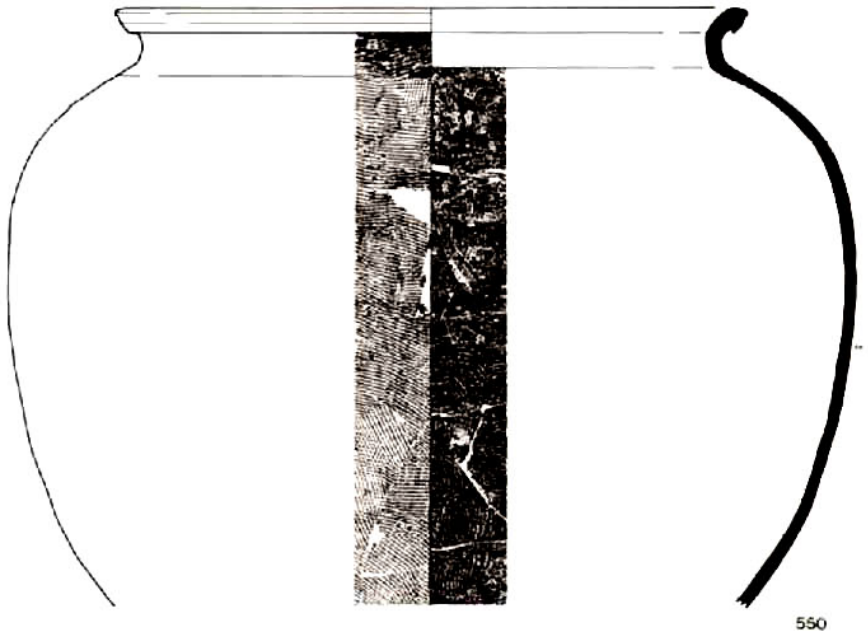


灰褐色砂

0　30cm

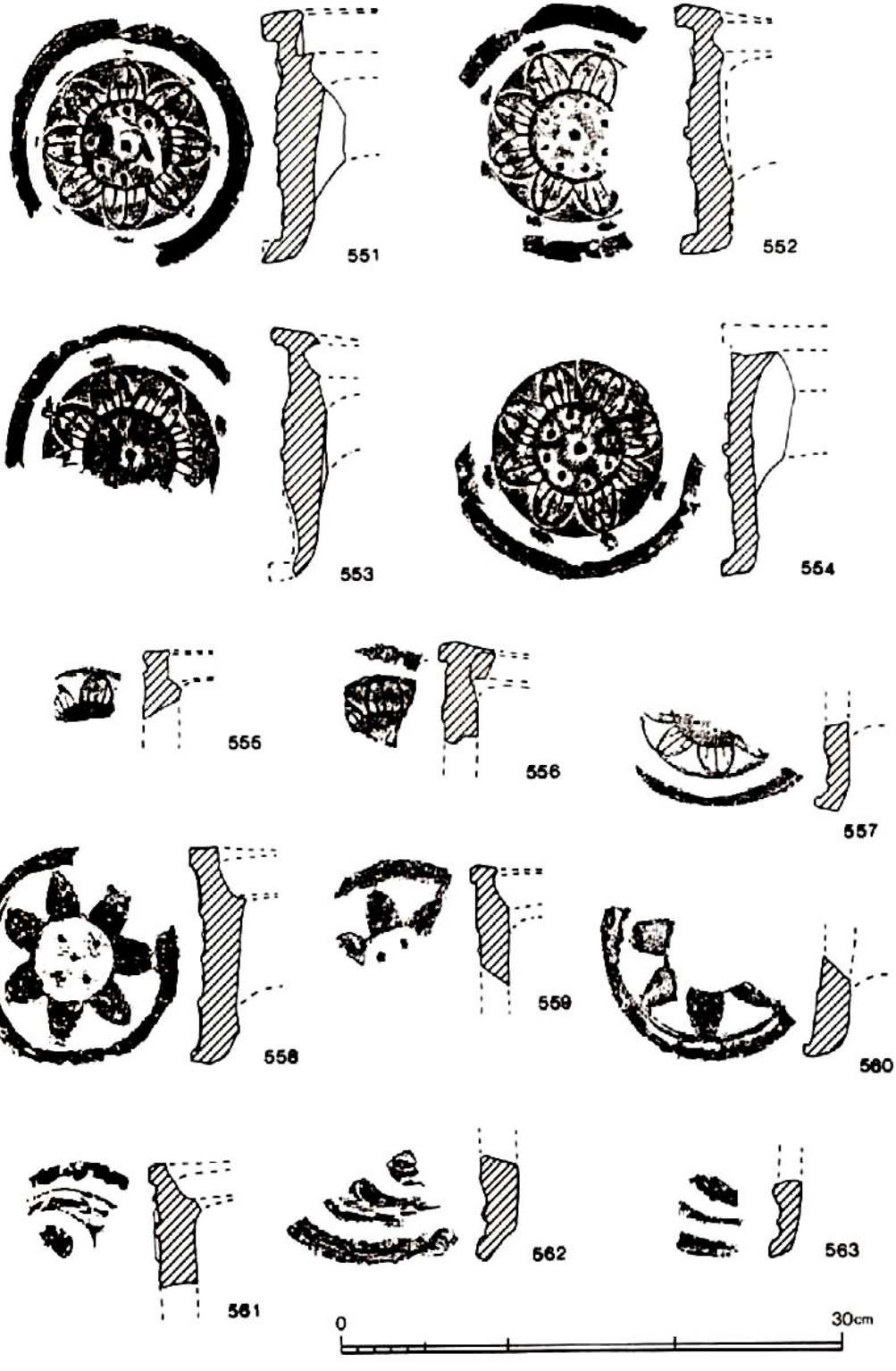
図版六四　遺物実測図（30号）

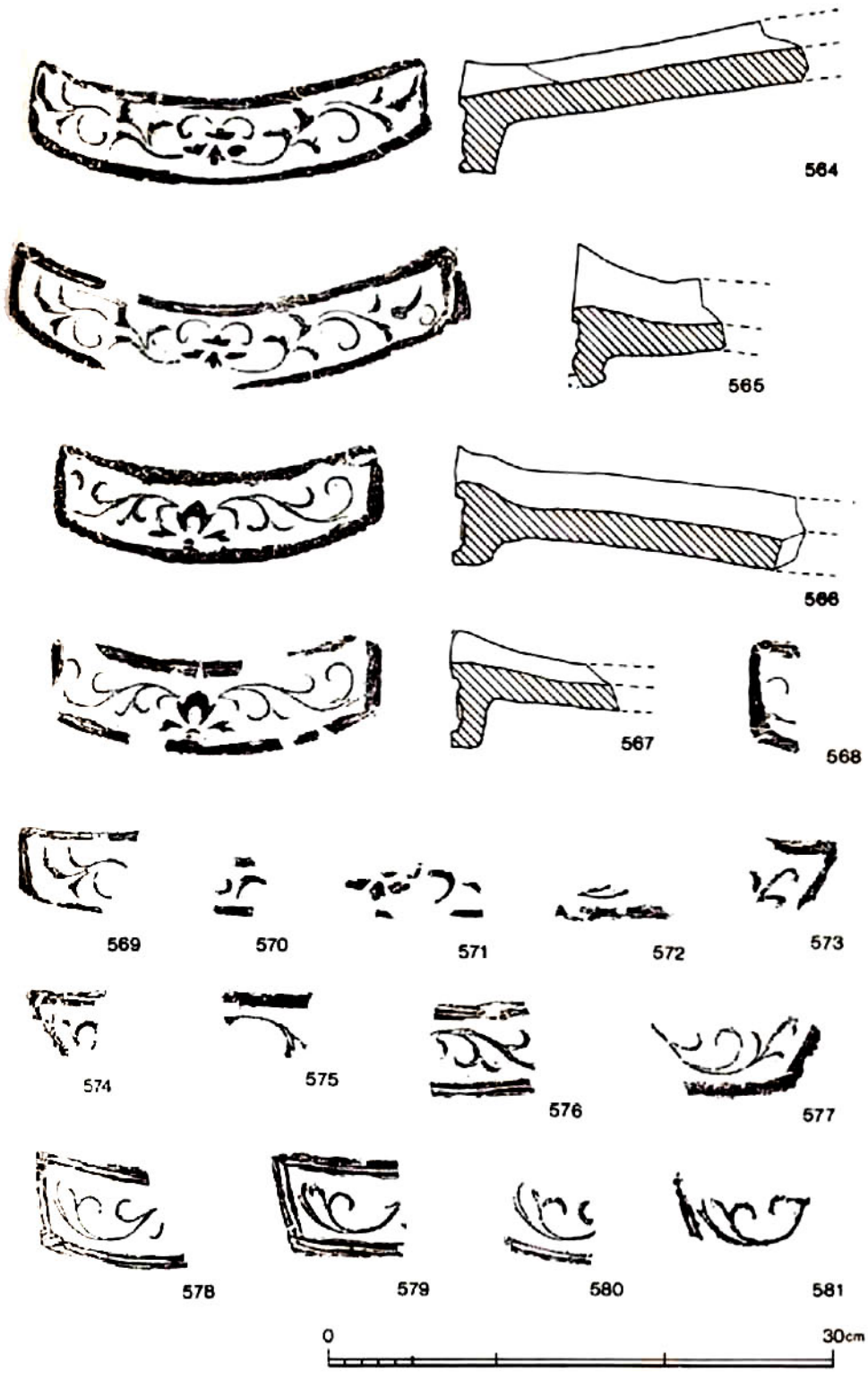


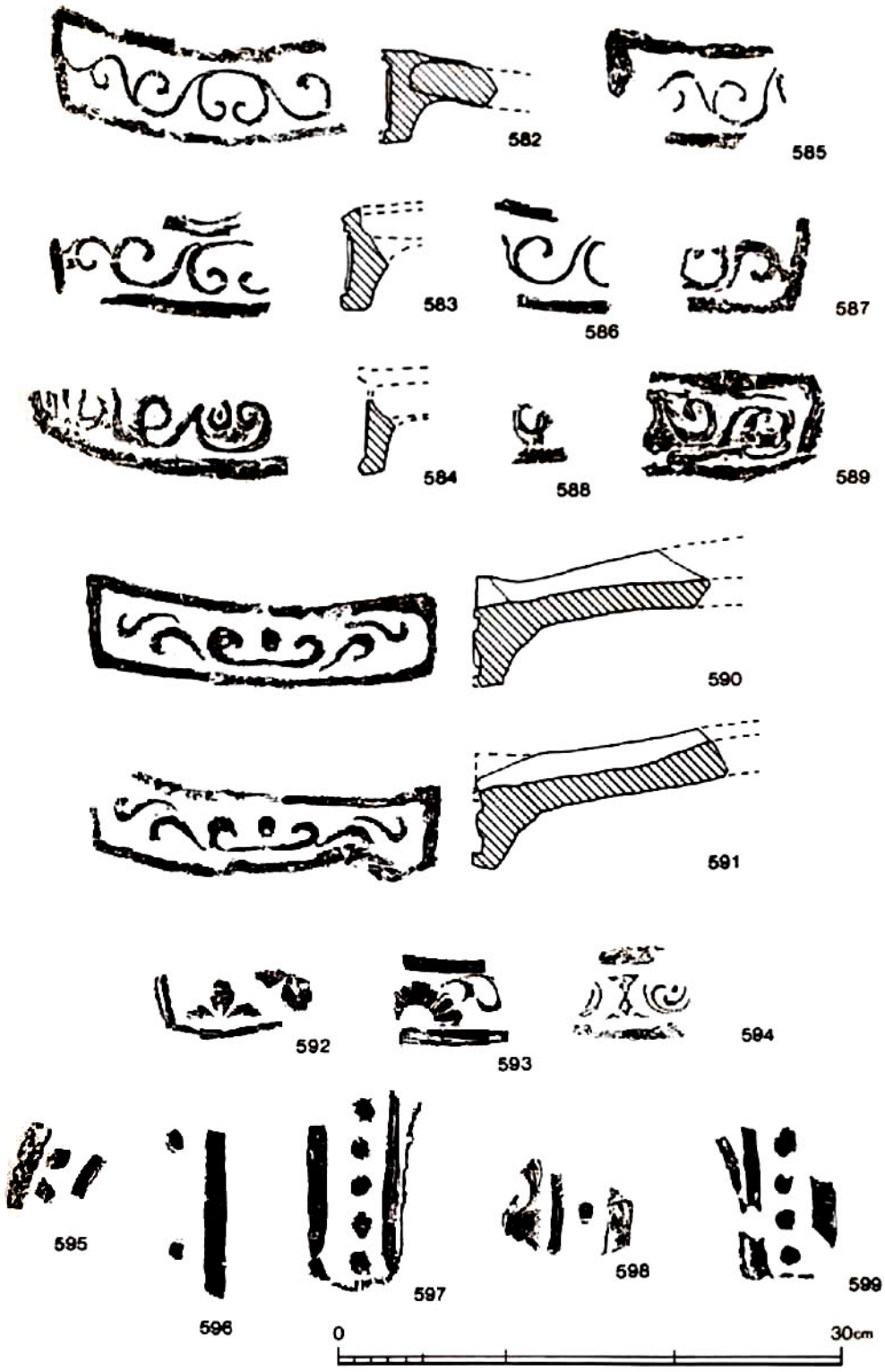


灰褐色砂

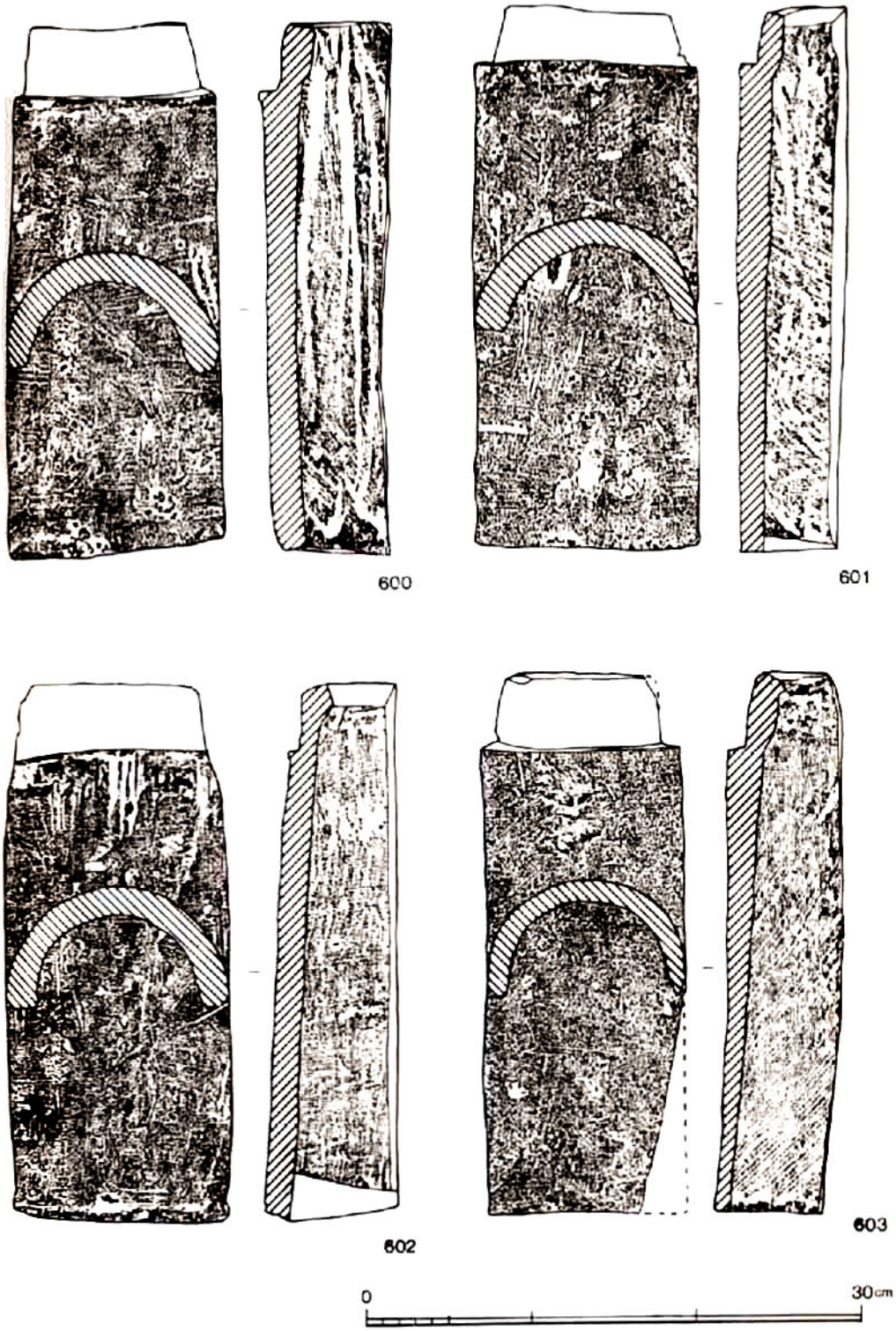
図版六五　遺物実測図（瓦1）



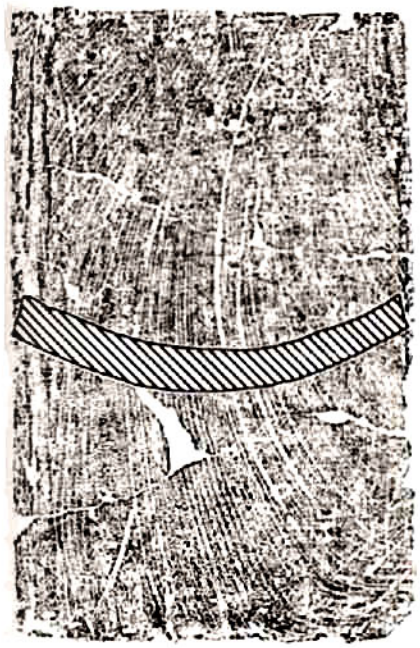

564
565
566
567
568
569
570
571
572
573
574
575
576
577
578
579
580
581
0
30cm


582
585
583
586
587
584
588
589
590
591
592
593
594
595
596
597
598
599
0
30cm

図版六八　遺物実測図（瓦4）

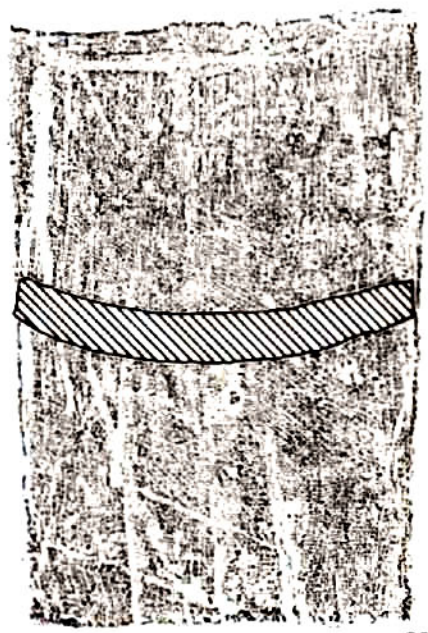


図版六九　遺物実測図（瓦5）



604

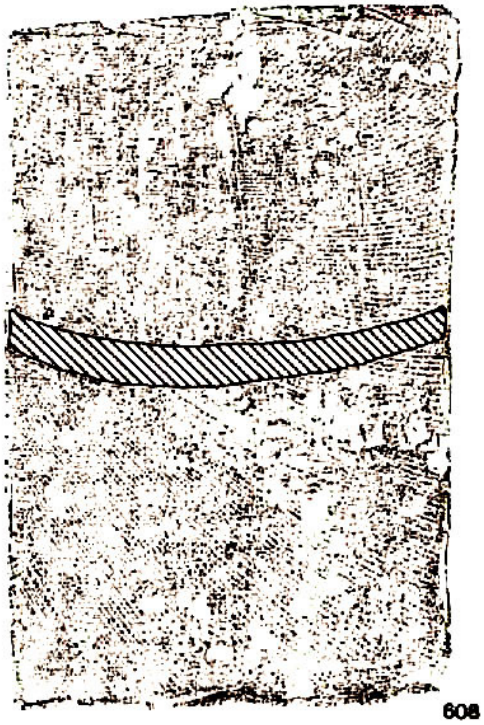
605



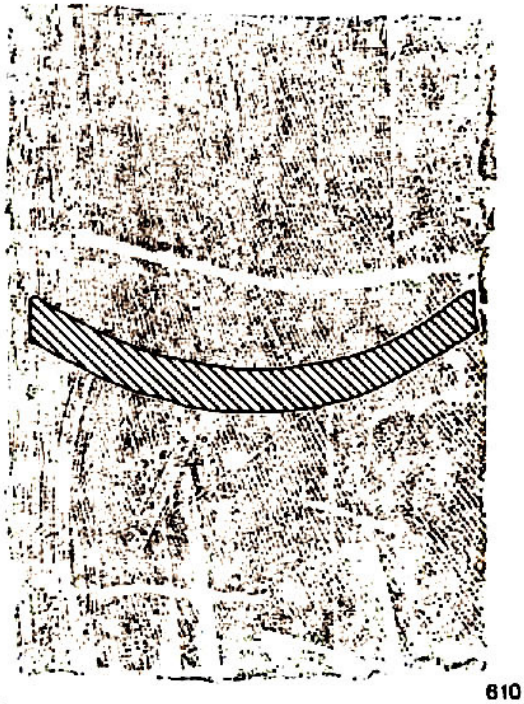
606

図版七〇　遺物実測図（瓦6）

607

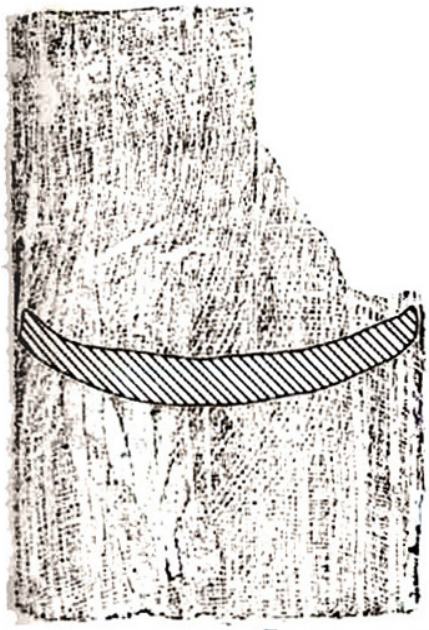

608

609


610

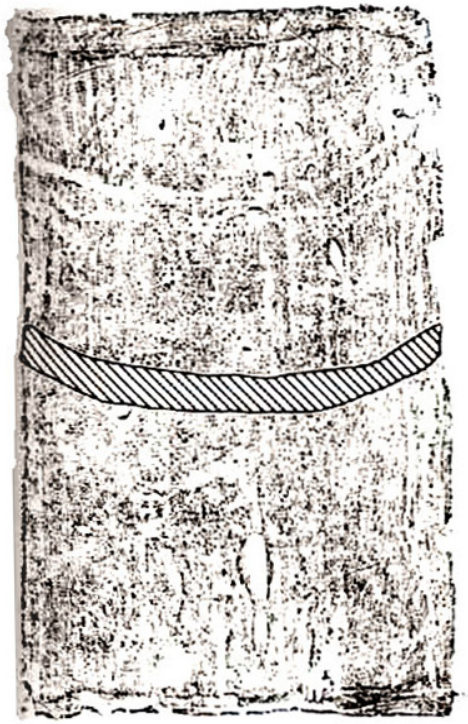
0　30cm

図版七一　遺物実測図（瓦7）

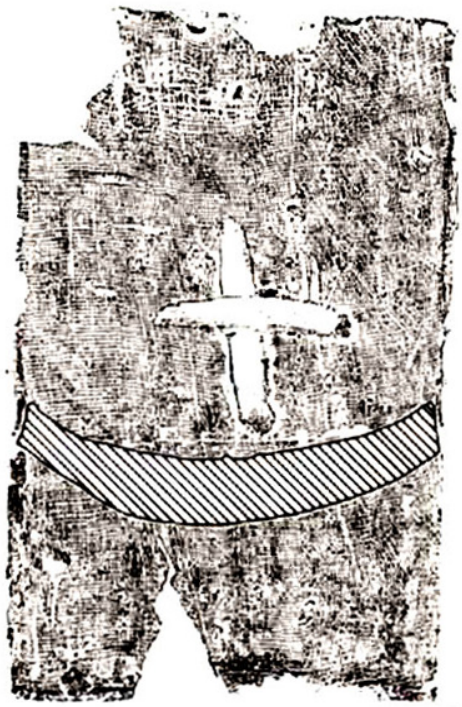


611

612



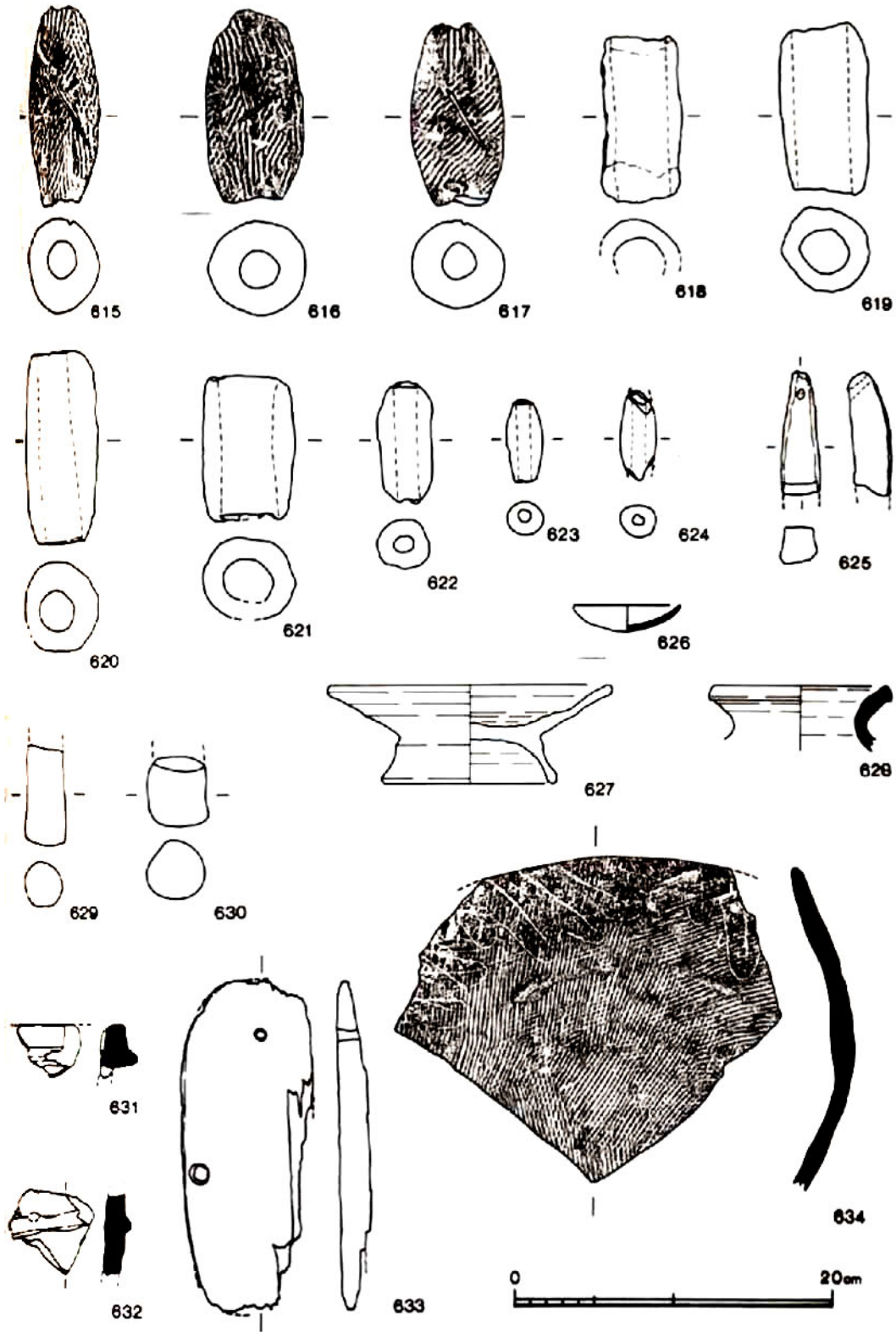
613



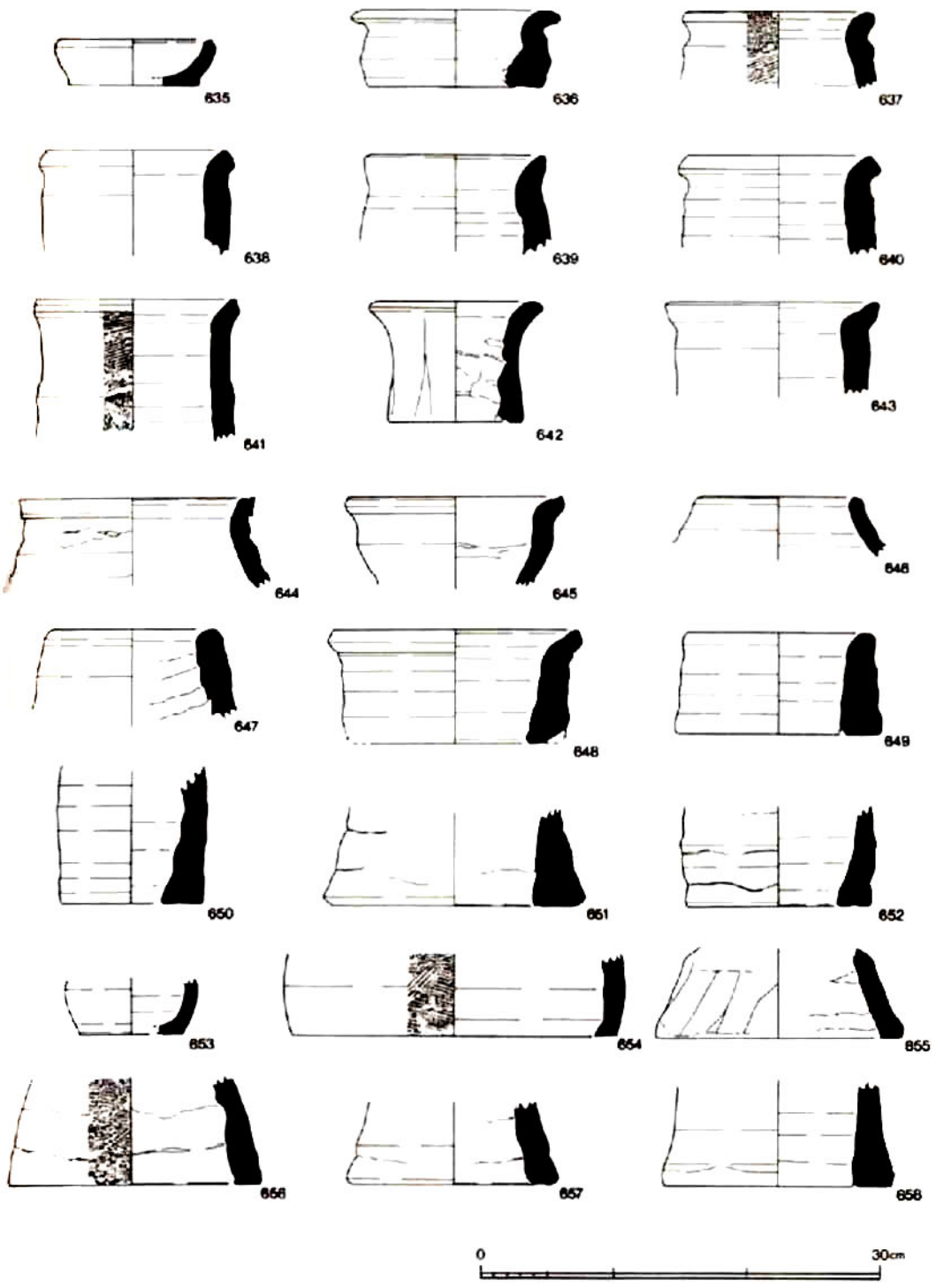
614

0　30cm

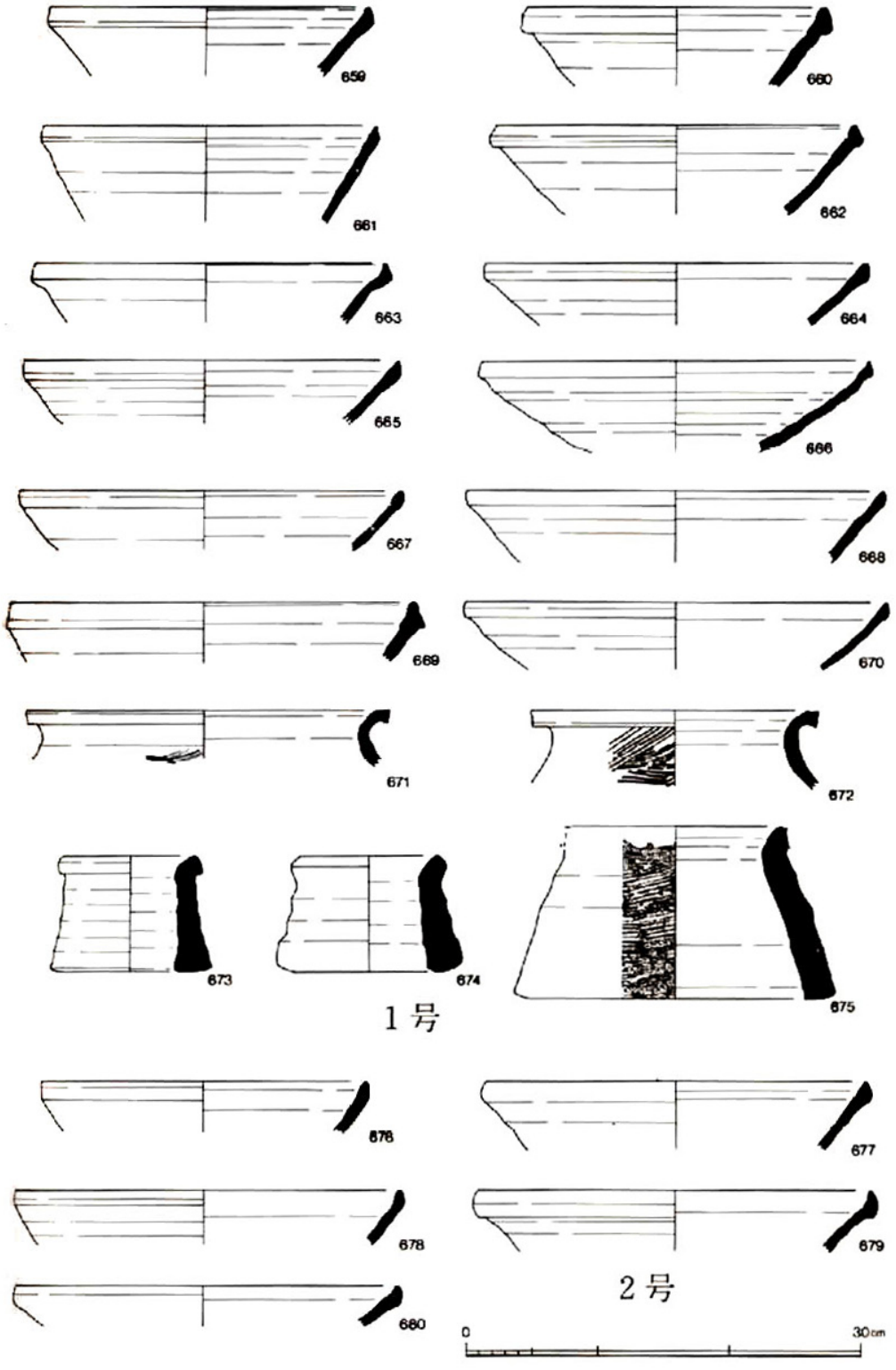
図版七二　遺物実測図（土錘・その他）



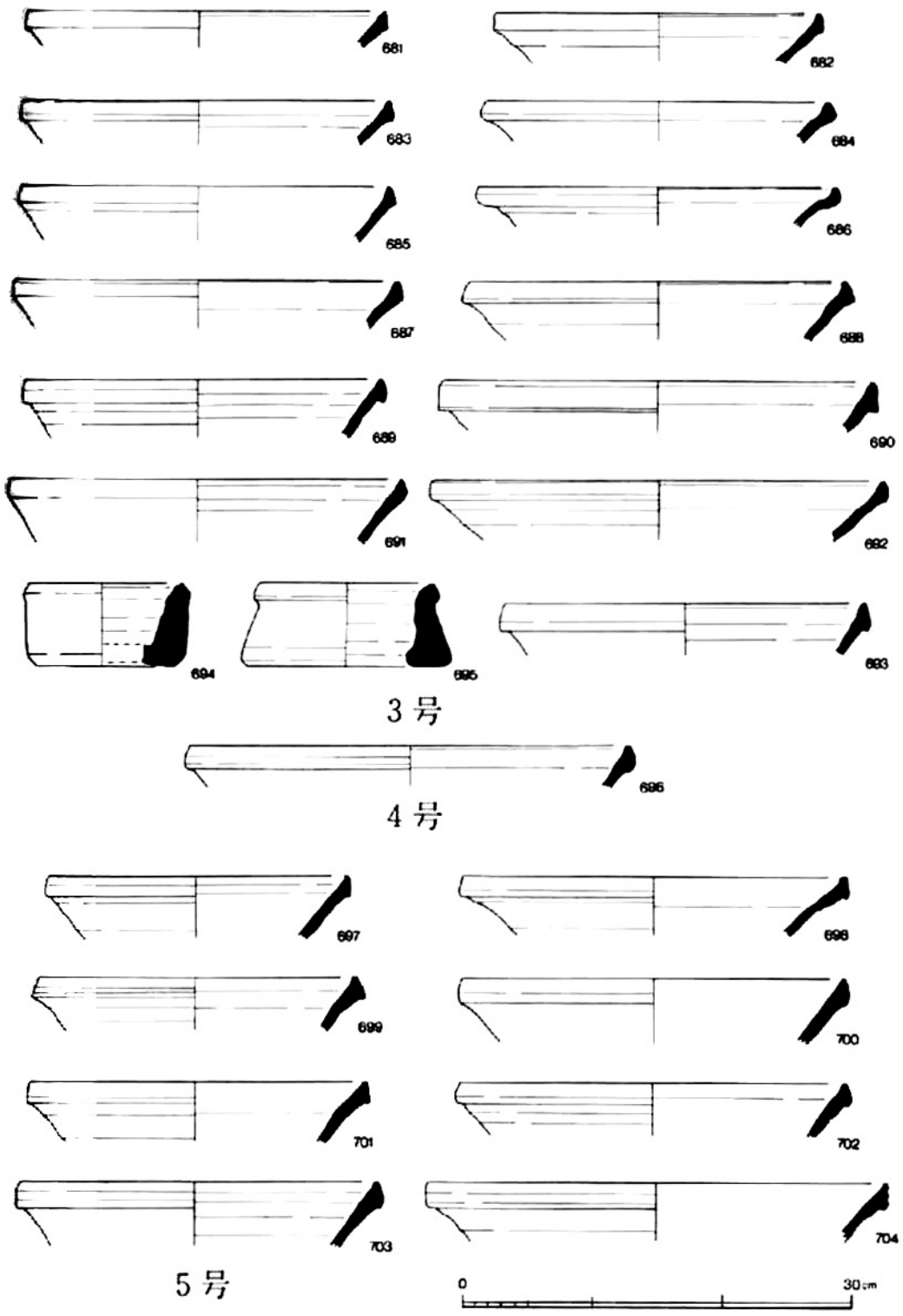
図版七三　遺物実測図（焼き台）



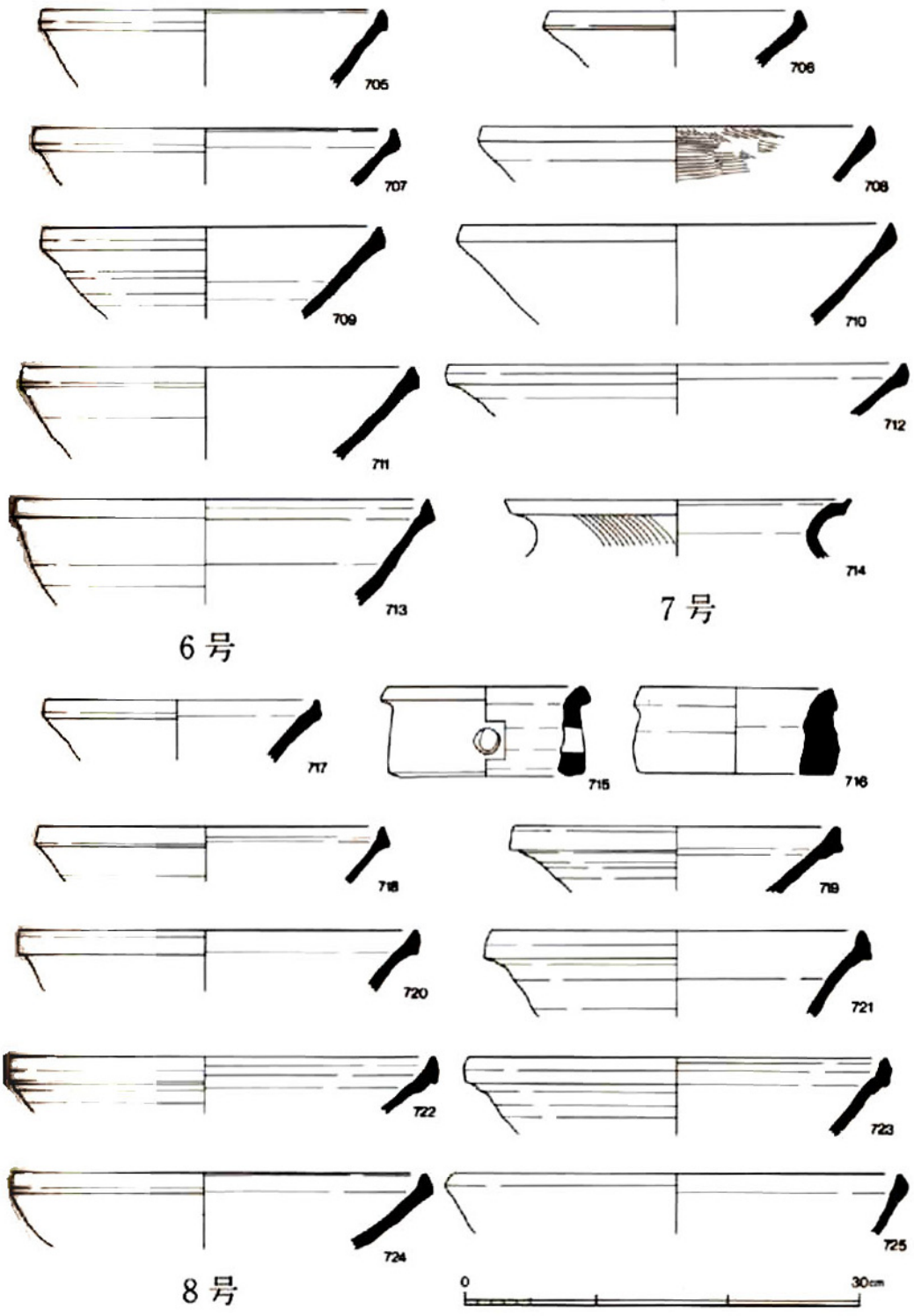
図版七四　遺物実測図（1号・2号）



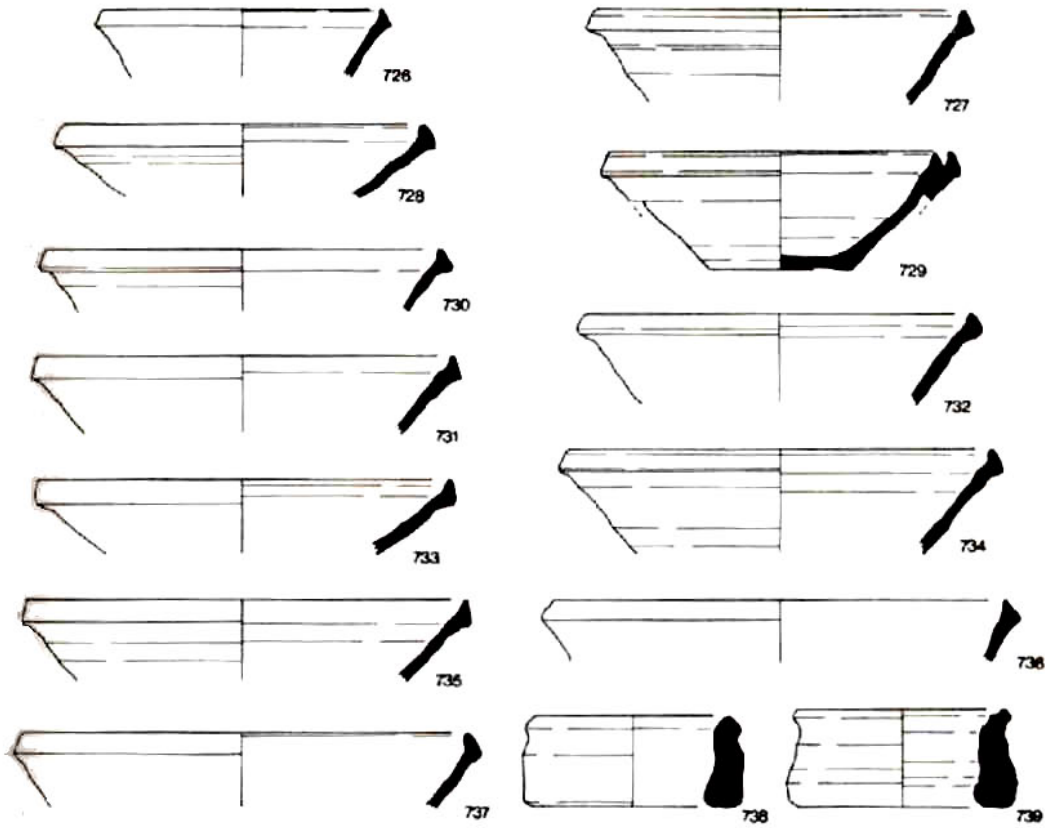
図版七五　遺物実測図（3号・4号・5号）



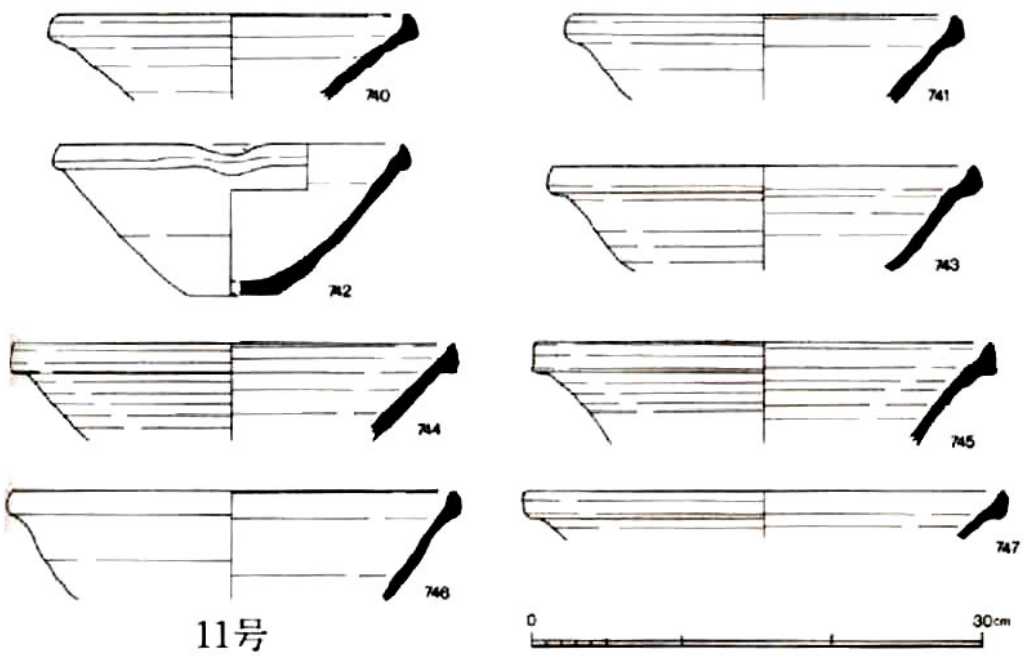
図版七六　遺物実測図（6号・7号・8号）



図版七七　遺物実測図（10号・11号）

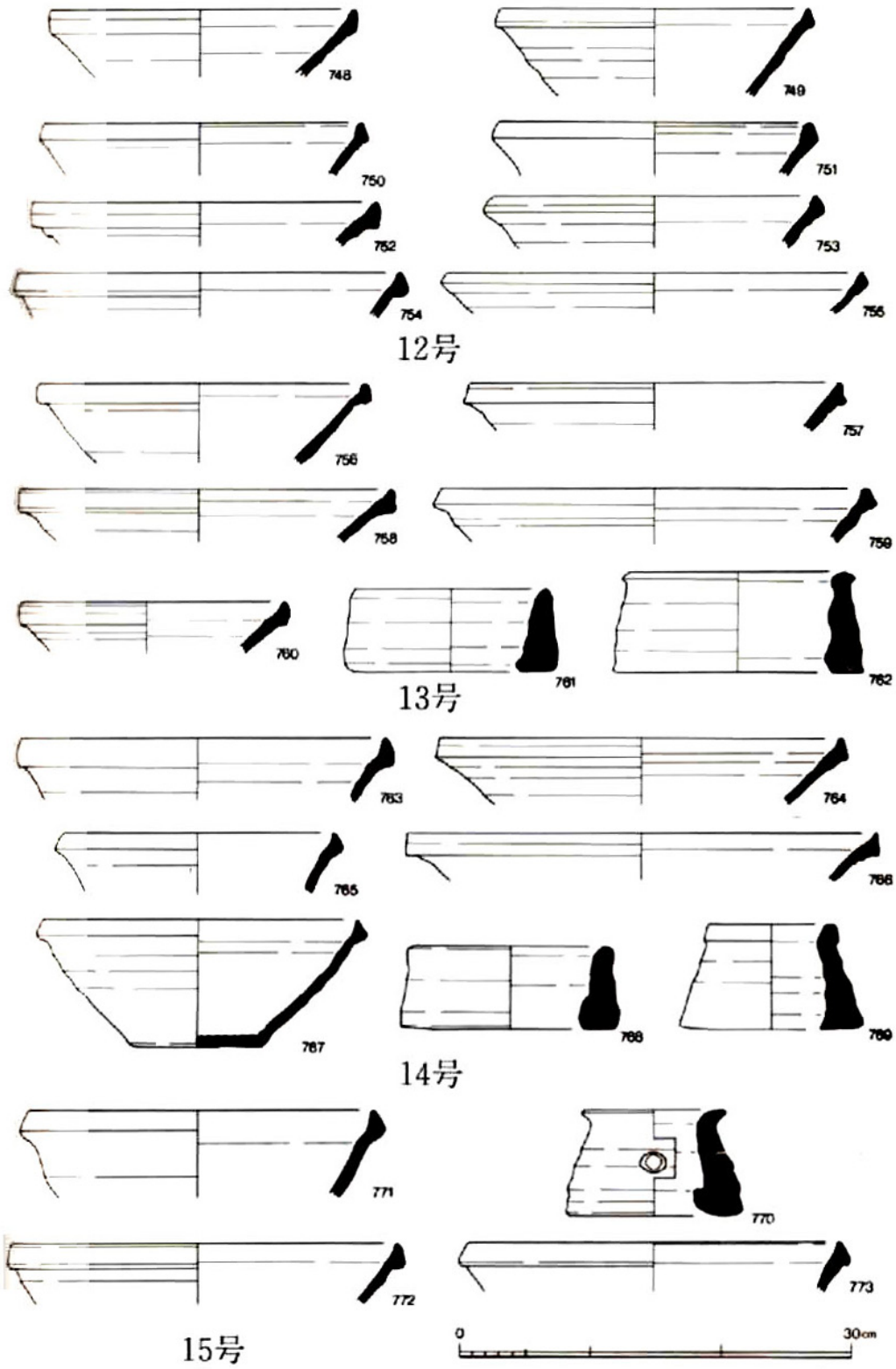


10号

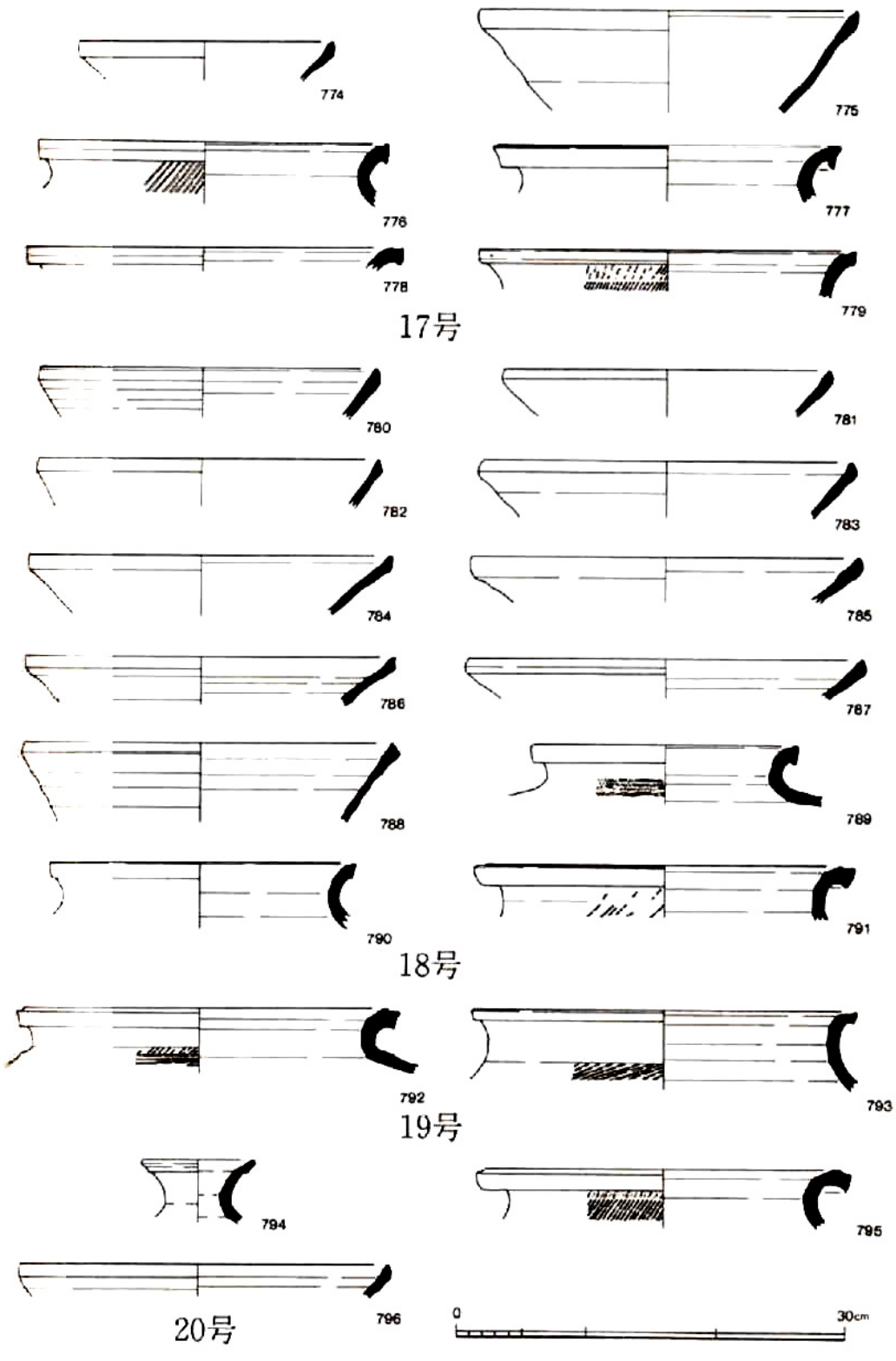


11号

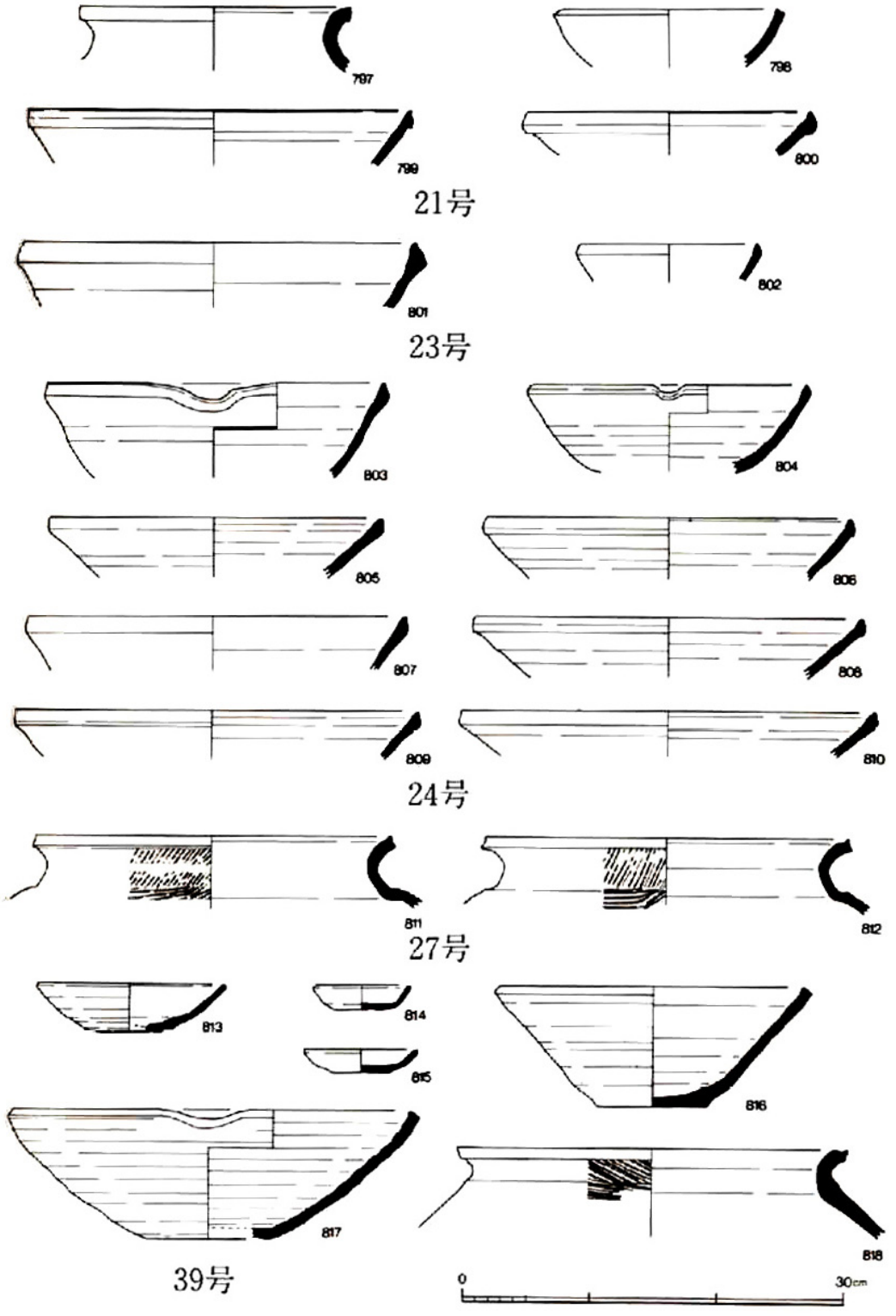
図版七八　遺物実測図（12号・13号・14号・15号）



図版七九　遺物実測図（17号・18号・19号・20号）



図版八〇　遺物実測図（21号・23号・24号・27号・39号）



図版八一

調査区遠景

調査区（皿池から）

調査前西側斜面（東から）

図版八二　調査区遠景

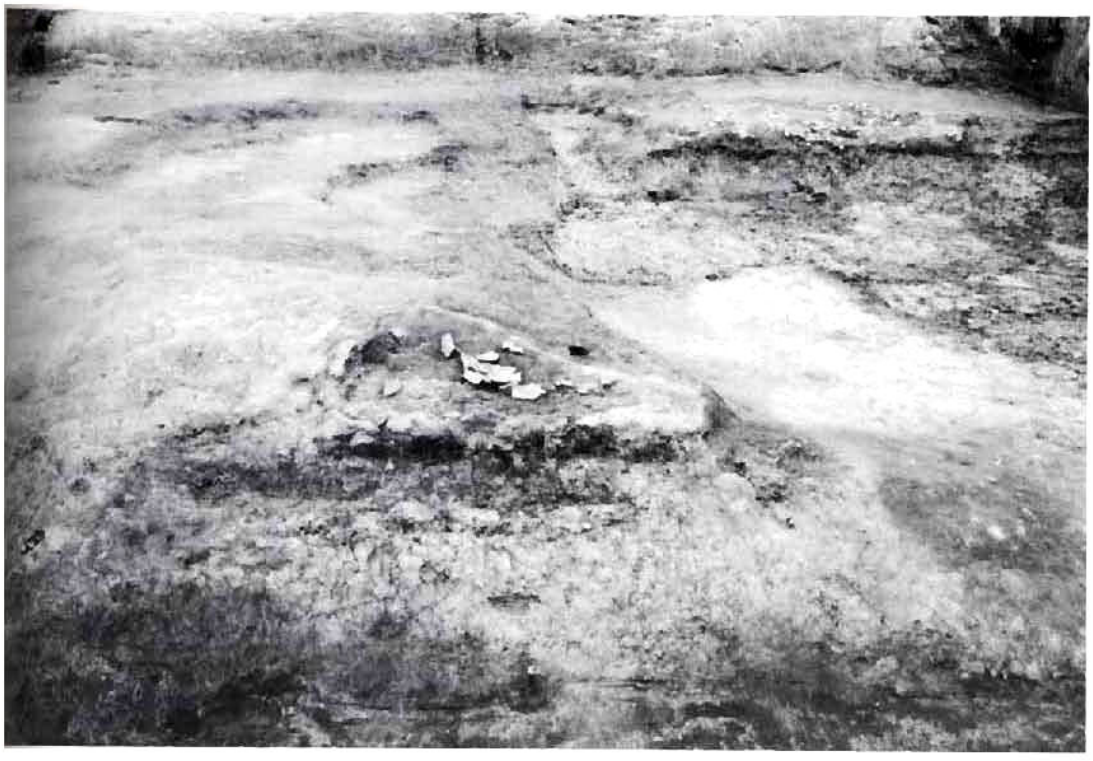
調査前東側斜面（西から）

調査後西側斜面（東から）

図版八三　遺構写真

38・29号窯全景（西から）

29号窯近景（西から）

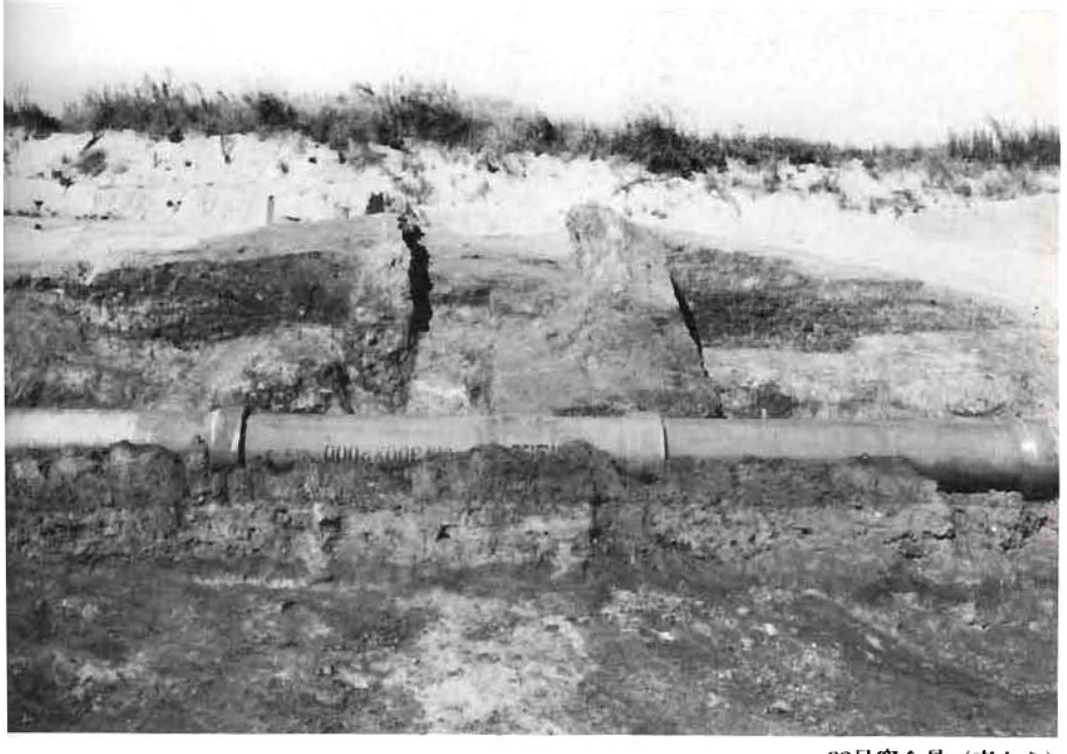


32号窯全景（東から）

33号窯全景（東から）

図版八五　遺構写真

22号窯全景（東から）



22号窯全景（東から）

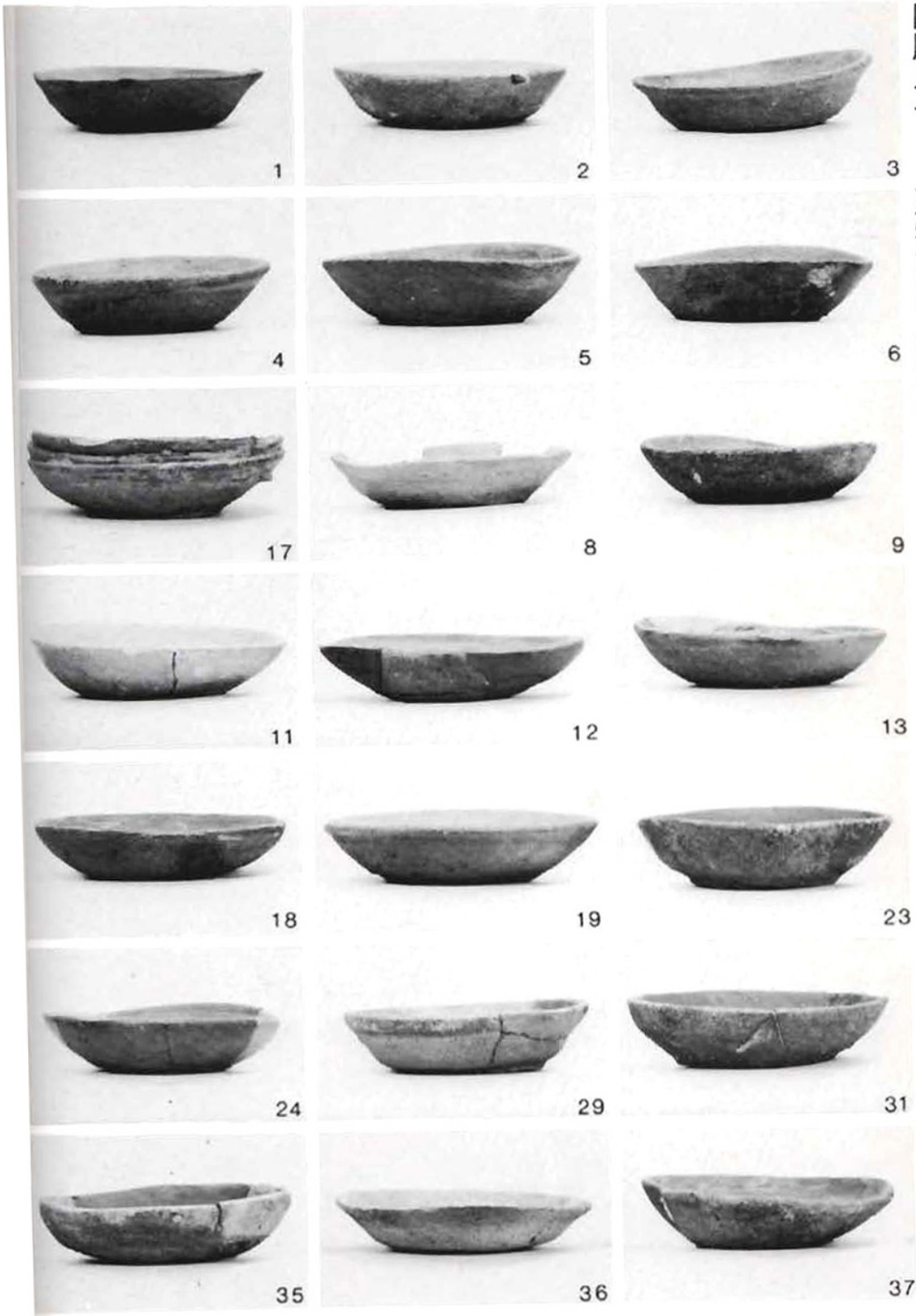
図版八六　遺構写真

30号窯全景（東から）

30号窯近景（東から）

図版八七

遺物写真（38号）



図版八八

遺物写真（38号・29号・33号）

41

47

48

49

16

20

22

26

28

32

33

34

38

39

46

56

58

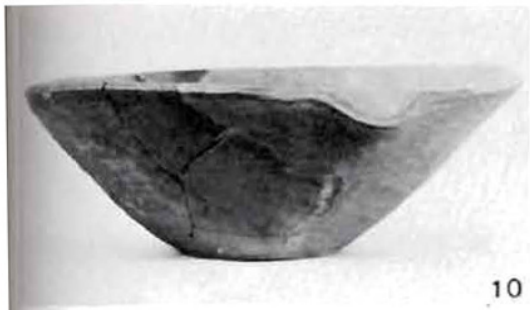
108

119

107

204

図版八九　遺物写真（38号）


10

92

59

62

63

64

65

66

67

68

図版九〇　遺物写真（38号）

69

72

73

76

77

80

79

104

106

103

図版九一　遺物写真（29号）

111

110

115

139

145

141

149

153

147

150

123

125

133

132

127

129

134

135

136

137

159

157

160

174

169

175

168

176

179

178

181

182

152

154

180

155

183

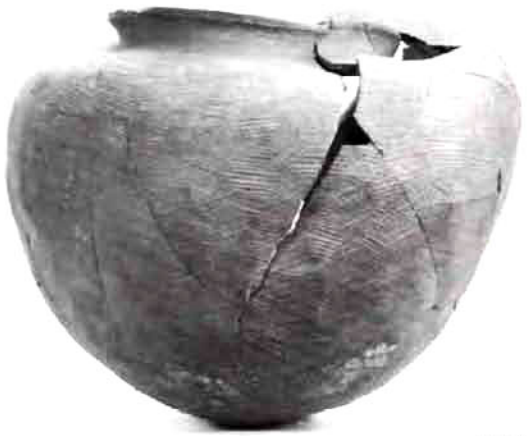
156

161

184

187

191



192

188

189

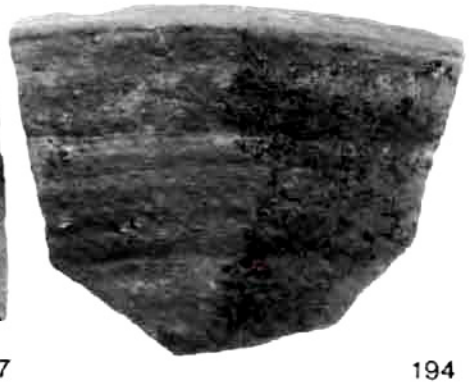
図版九六

遺物写真（32号・33号）

207

208

197



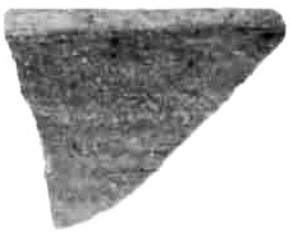
194

195

193

199

198



196

図版九七

遺物写真（32号・33号）

200

201

206

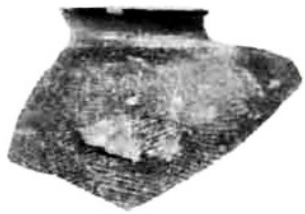
202

203

212　211

205

218



217

219

218

220

229

230

232

231

292

293

294

328

223

221

224

226

237

239

240

241

245

255

250

249

254

243

252

247

244

257

261

262

342

344

335

346

330

331

338

336

329

339

267

268

271

272

274

269

270

273

278

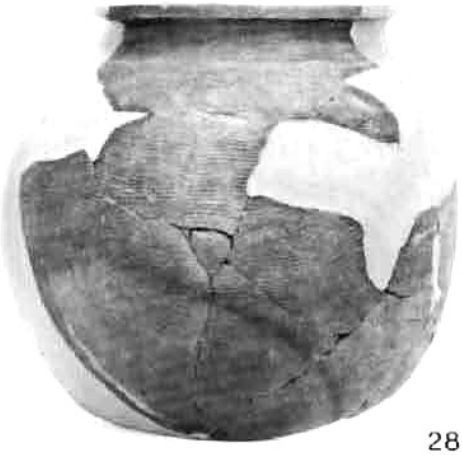
285

286

284

図版一〇四　遺物写真（22号）

275



280

279

277

291

281

276

図版一〇五　遺物写真（22号）

311

318

314

303

363

364

図版一〇六　遺物写真（22号）

349

359

358

367

356

353

370

371

372

375

374

385

382

383

381

384

387

389

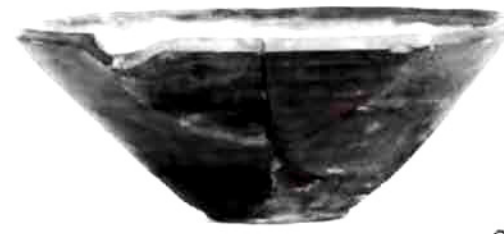
396

388

386

393

397



394

391

405

392

420

402

414

410

429

422

424

425

431

437

442

440

439

446

454

449

451

455

452

458

369

368

378

380

379

376

530

526

528

461

464

465

460

473

470

471

472

466

485

480

479

491

481

497

474

477

492

488

499

500

495

494

496

498

531

532

535

533

536

435

436

434

503

504

505

512

513

515

516

514

517

511

502

508

509

510

506

537

540

541

542

543

544

551

552

553

554

558

582

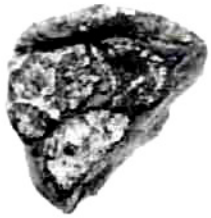
583

584

562

563

560



559

555

556

561

557

578

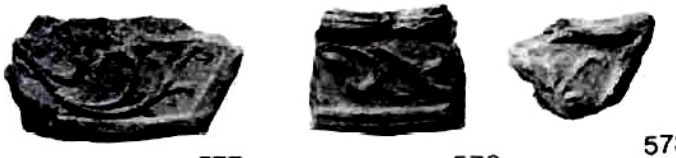
579

581

585　589　593

586　569　571

592　580

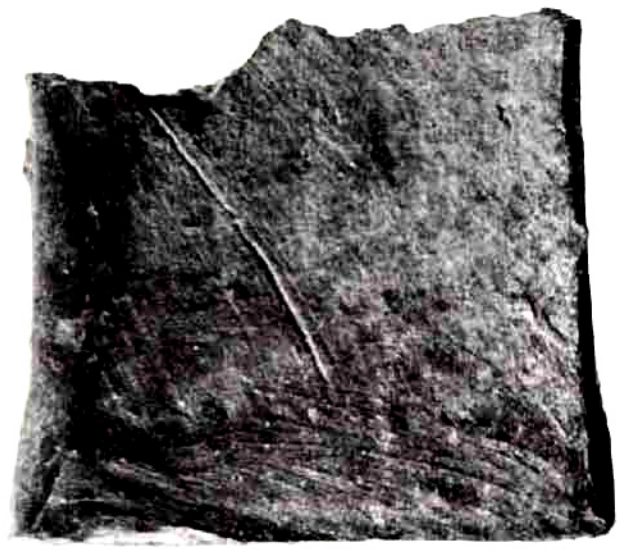


577　576　573

575　594　572

566

590



564

565

595　596　597　598　599

600

601

602

603

604

606

図版一二八　遺物写真（瓦10）

608

607

613

614

図版一三〇　遺物写真（焼き台）

635

636

638

641

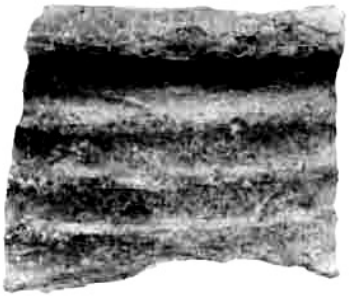
639

654

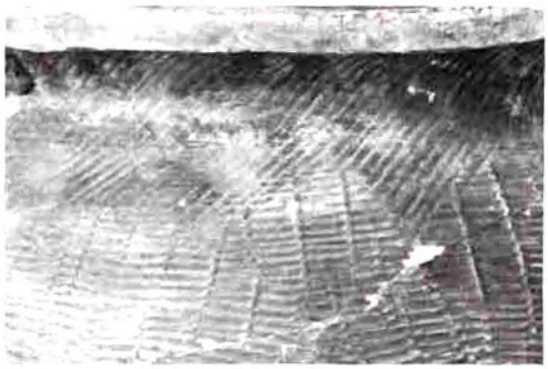
642

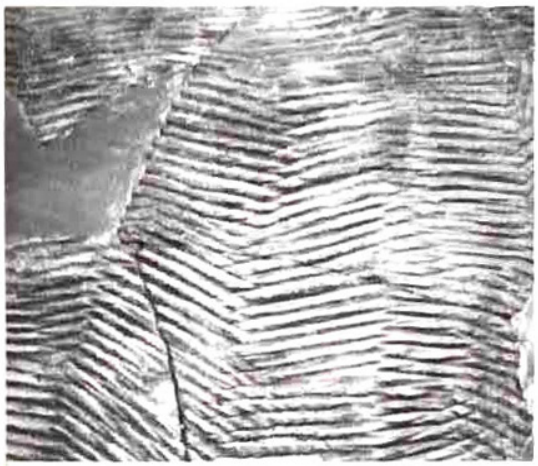
643

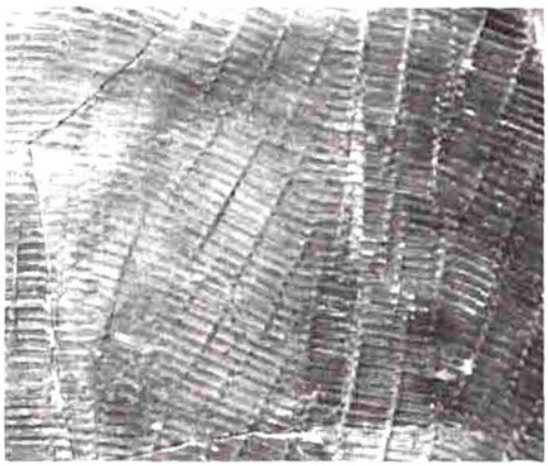
649

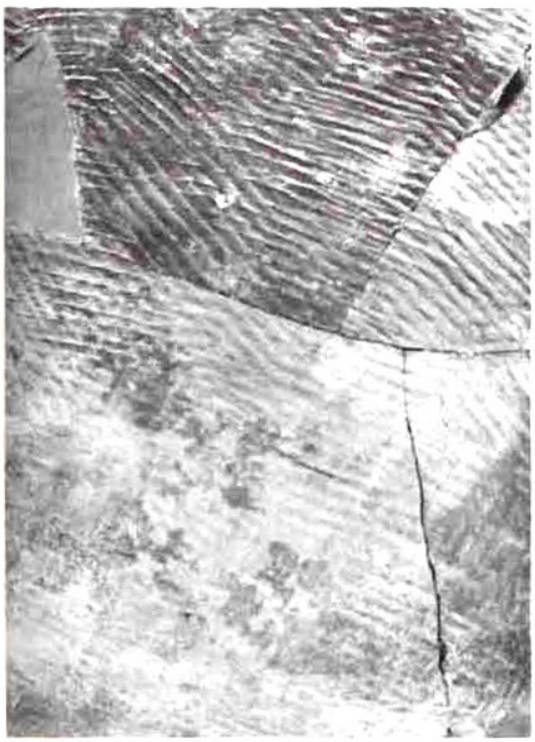


640

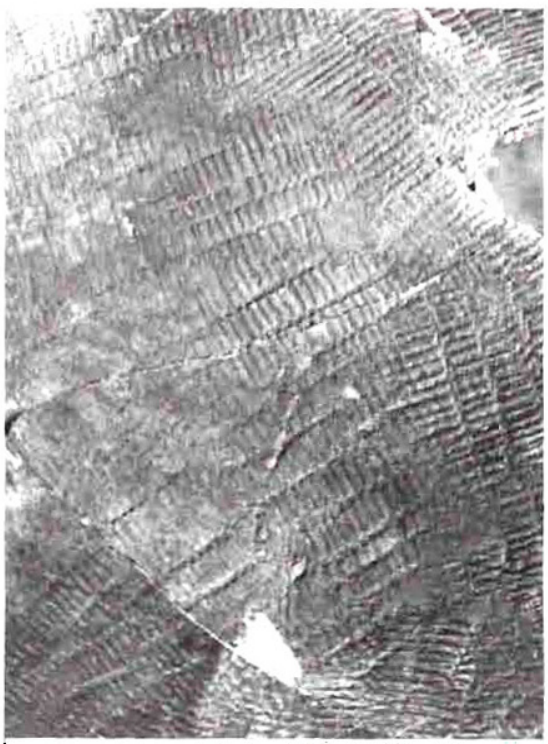




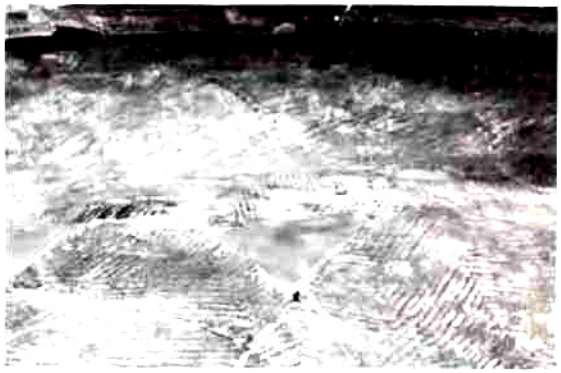


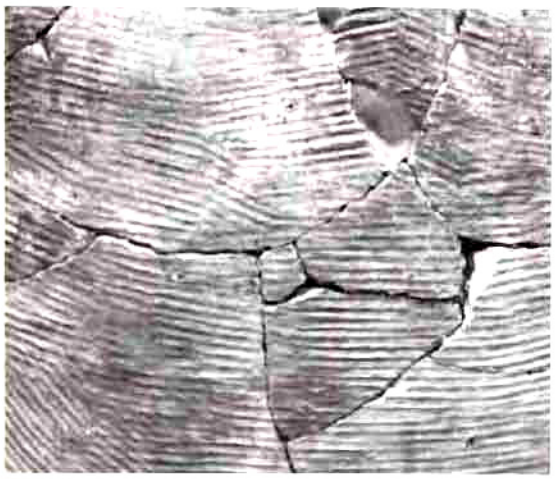


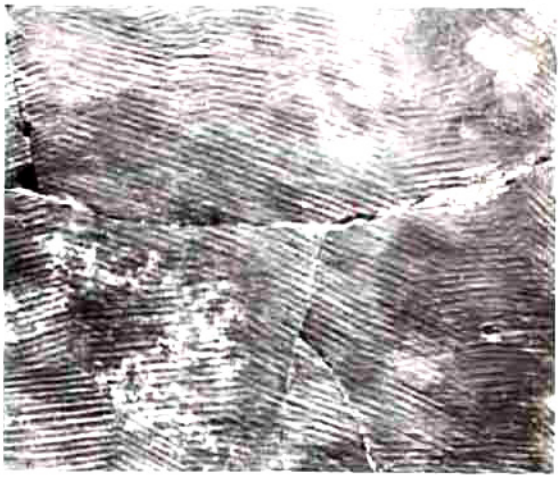
左　358　（上から　頸部・胴部・底部）

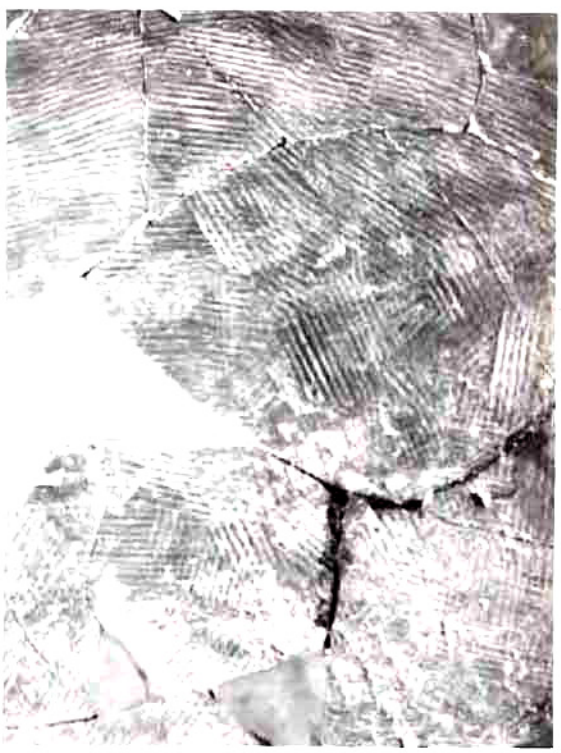


左　514　（上から　頸部・胴部・底部）





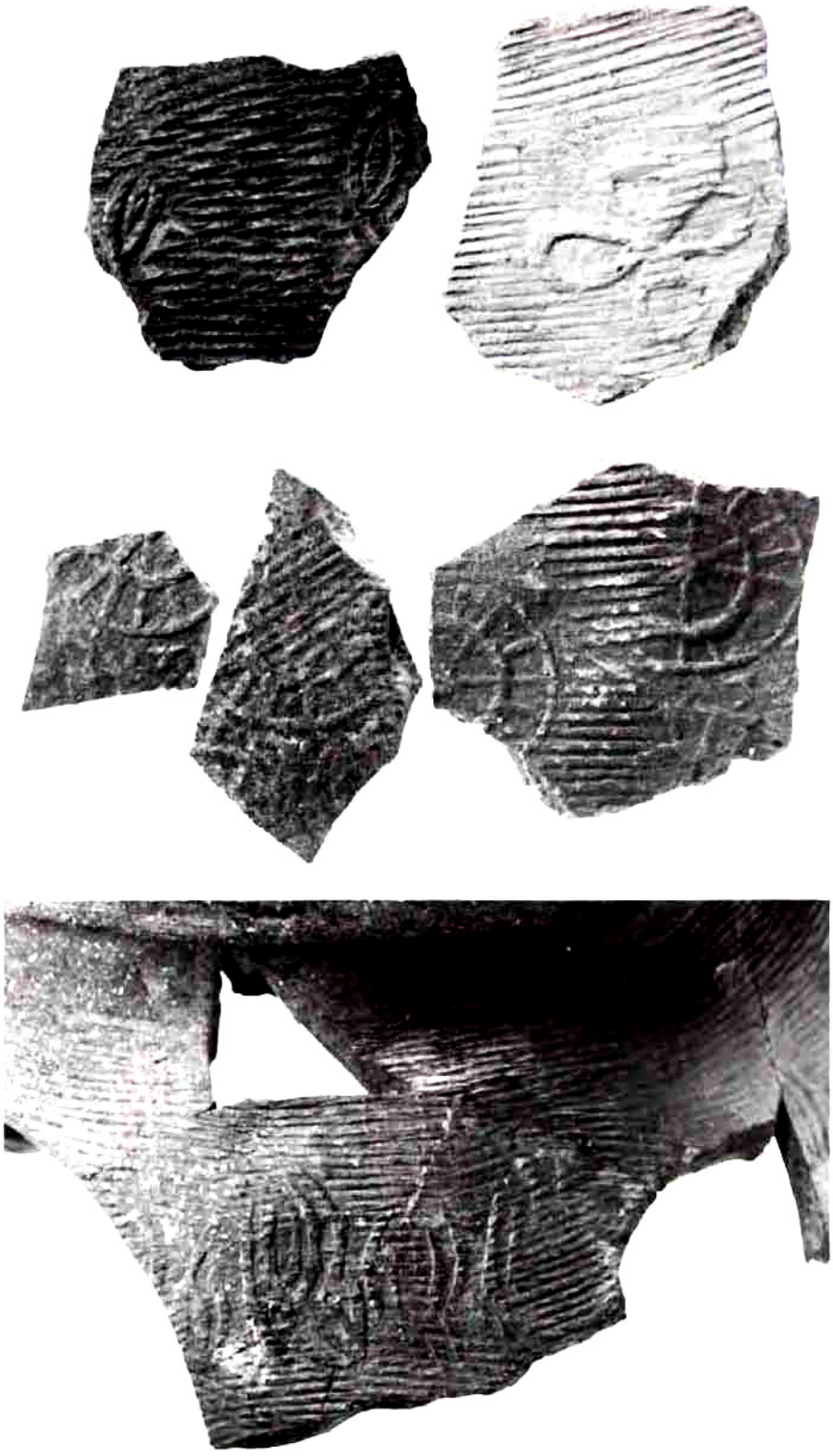




左　274　（上から　頸部・胴部・底部）

右　544　（上から　頸部・胴部・底部）

図版一三三　遺物写真（甕押印文）



図版一三四　遺物写真（甕押印文・土錘）

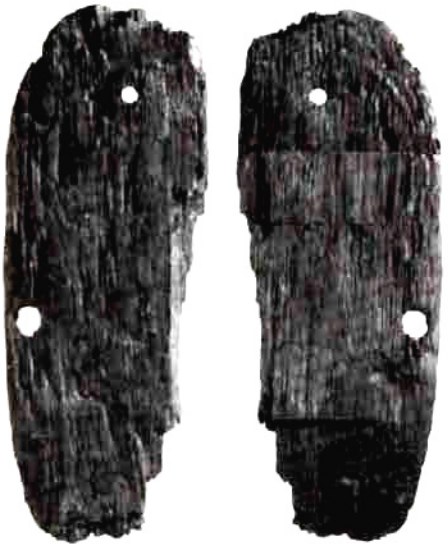
615　616　620　622

図版一三五　遺物写真（特殊遺物・10号・14号）

634

627

631



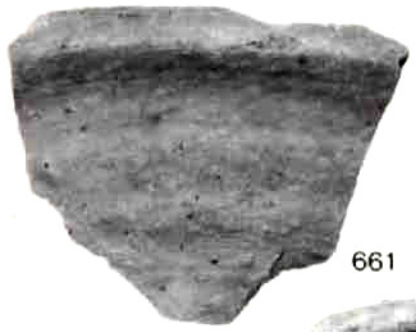
633

625

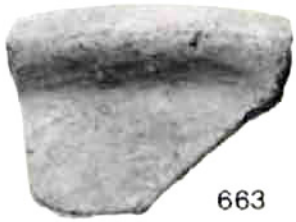
729

767

図版一三六　遺物写真（1号・2号）



661

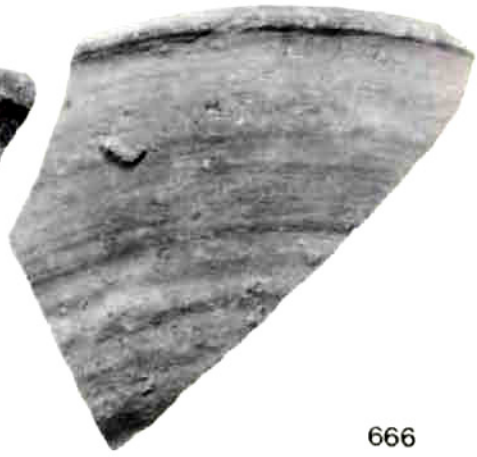


663

669

660

662



666

676

680

679

677

図版一三七　遺物写真（3号・4号・5号）

693

688

696

682

689

686

692

691

687

702

698

700

701

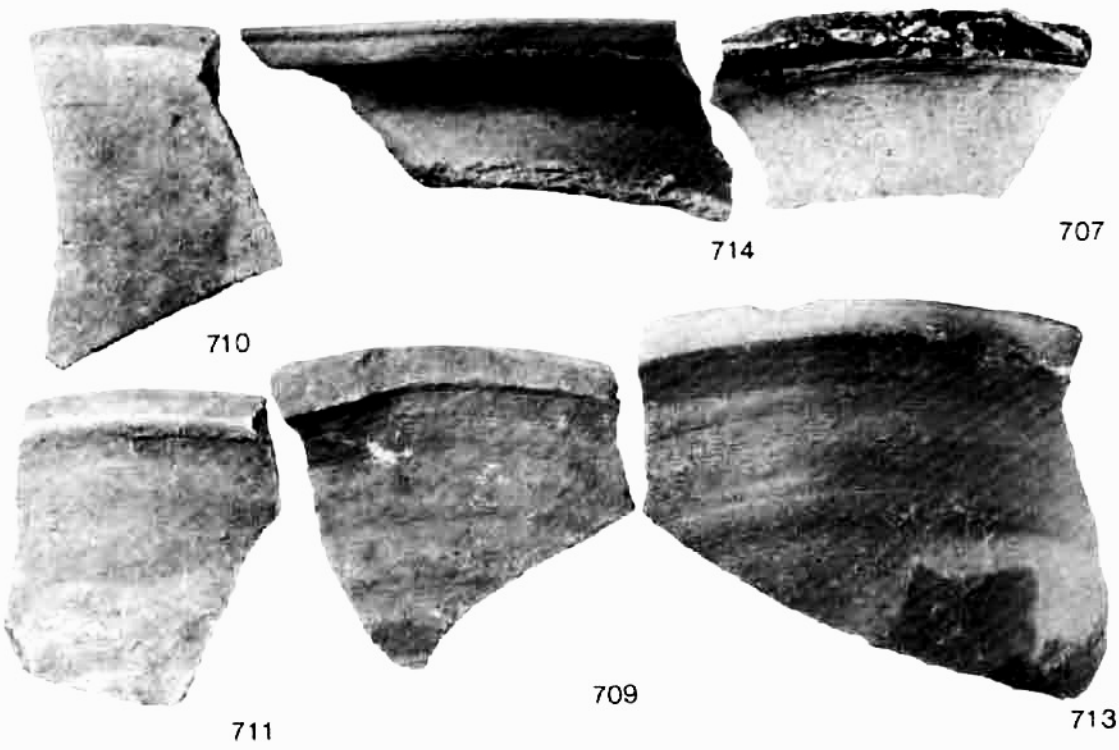
699

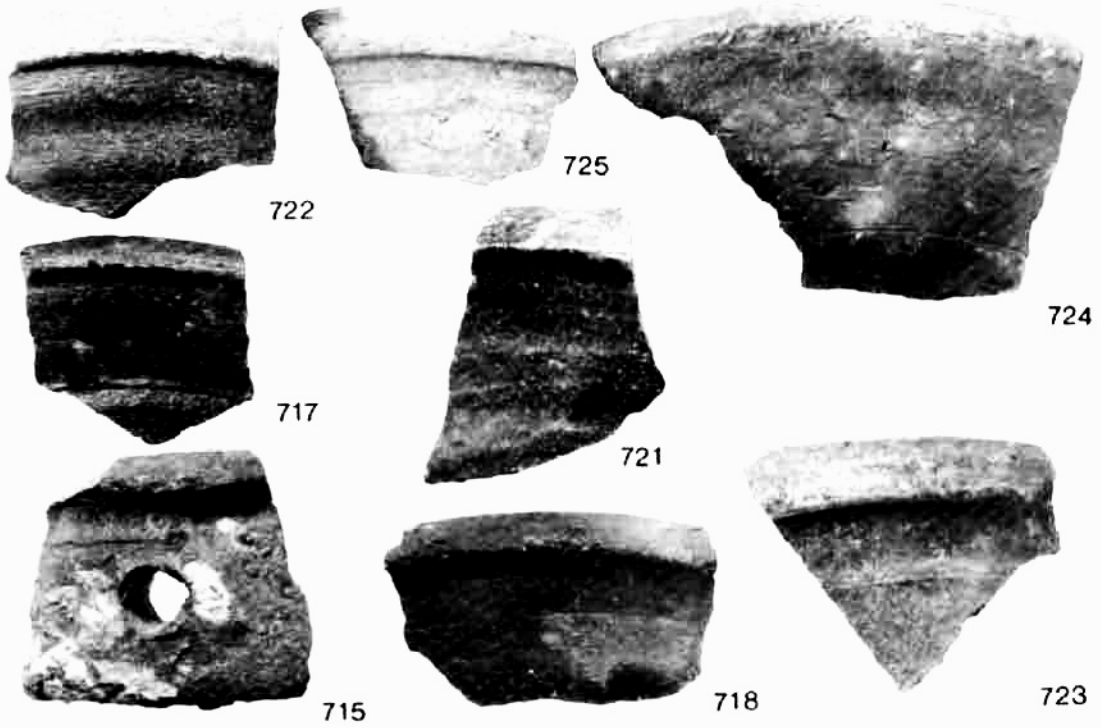
704

697

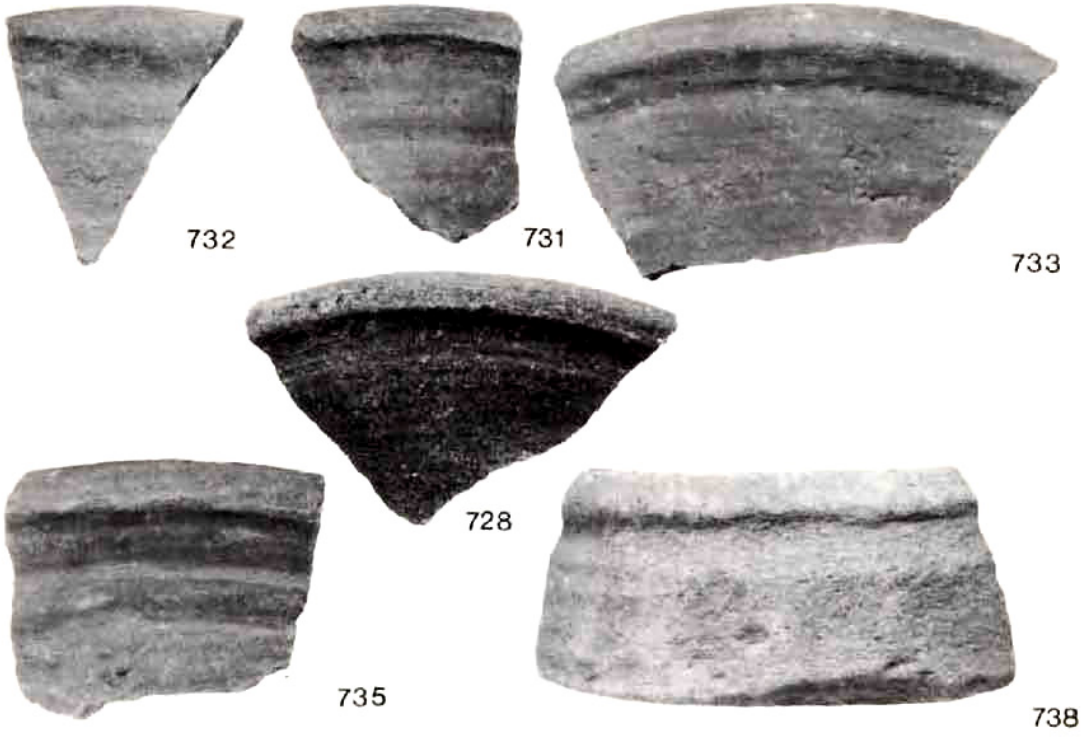
703

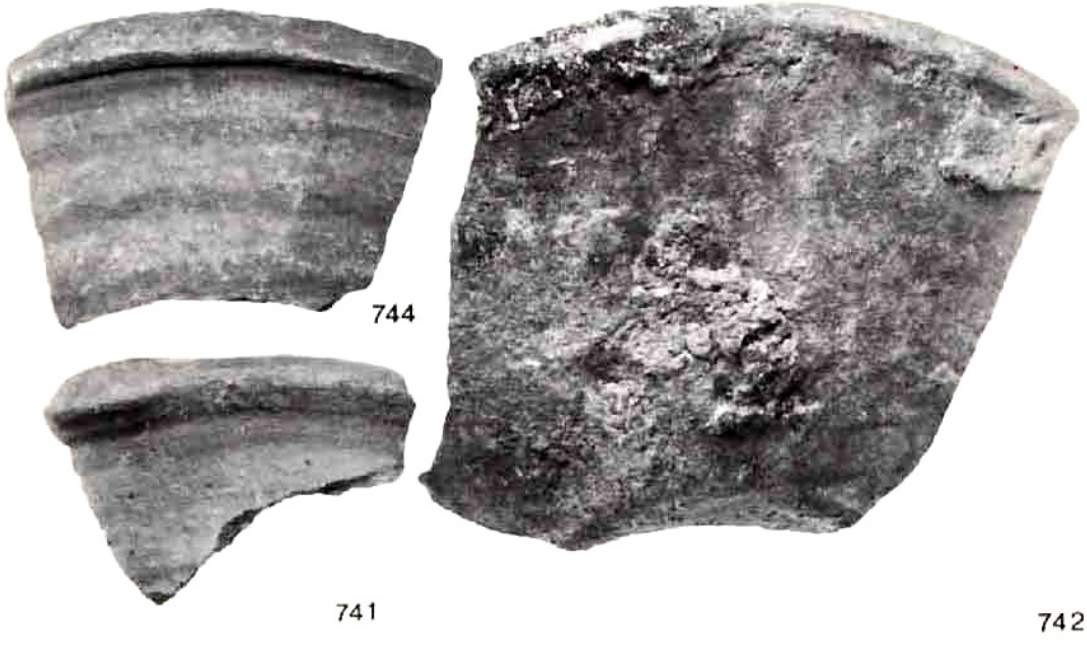
図版一三八　遺物写真（6号・7号・8号）



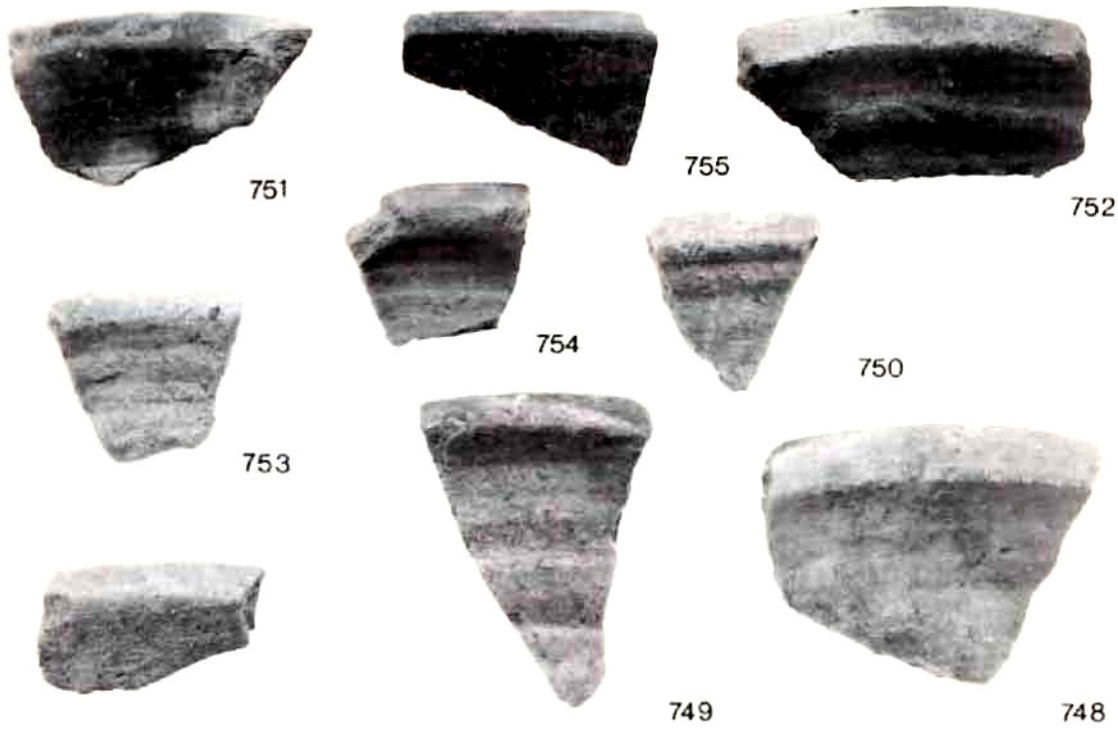


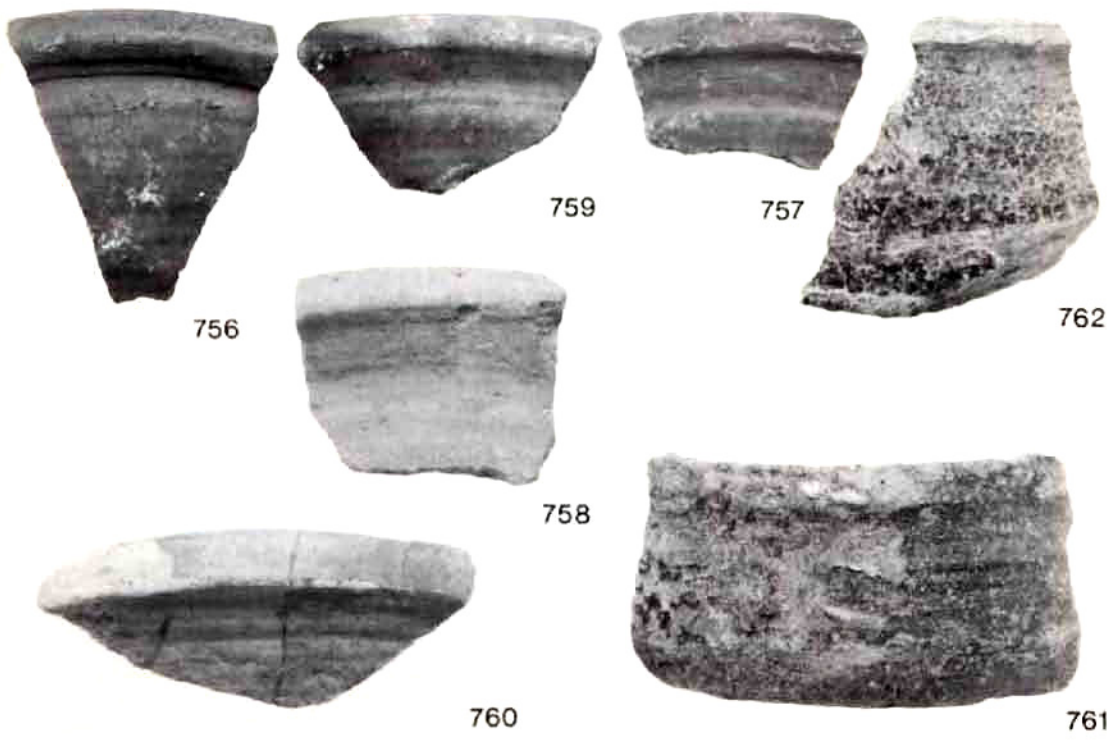
図版一三九　遺物写真（10号・11号）





図版一四〇　遺物写真（12号・13号）



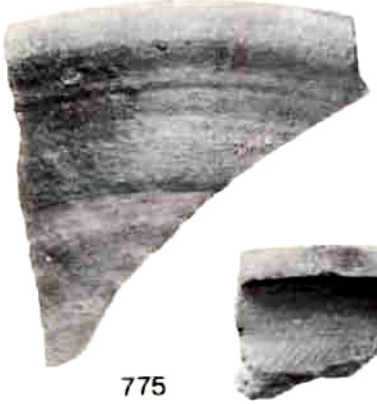


図版一四一　遺物写真（14号・15号・17号）

764

766

769



777

772

775

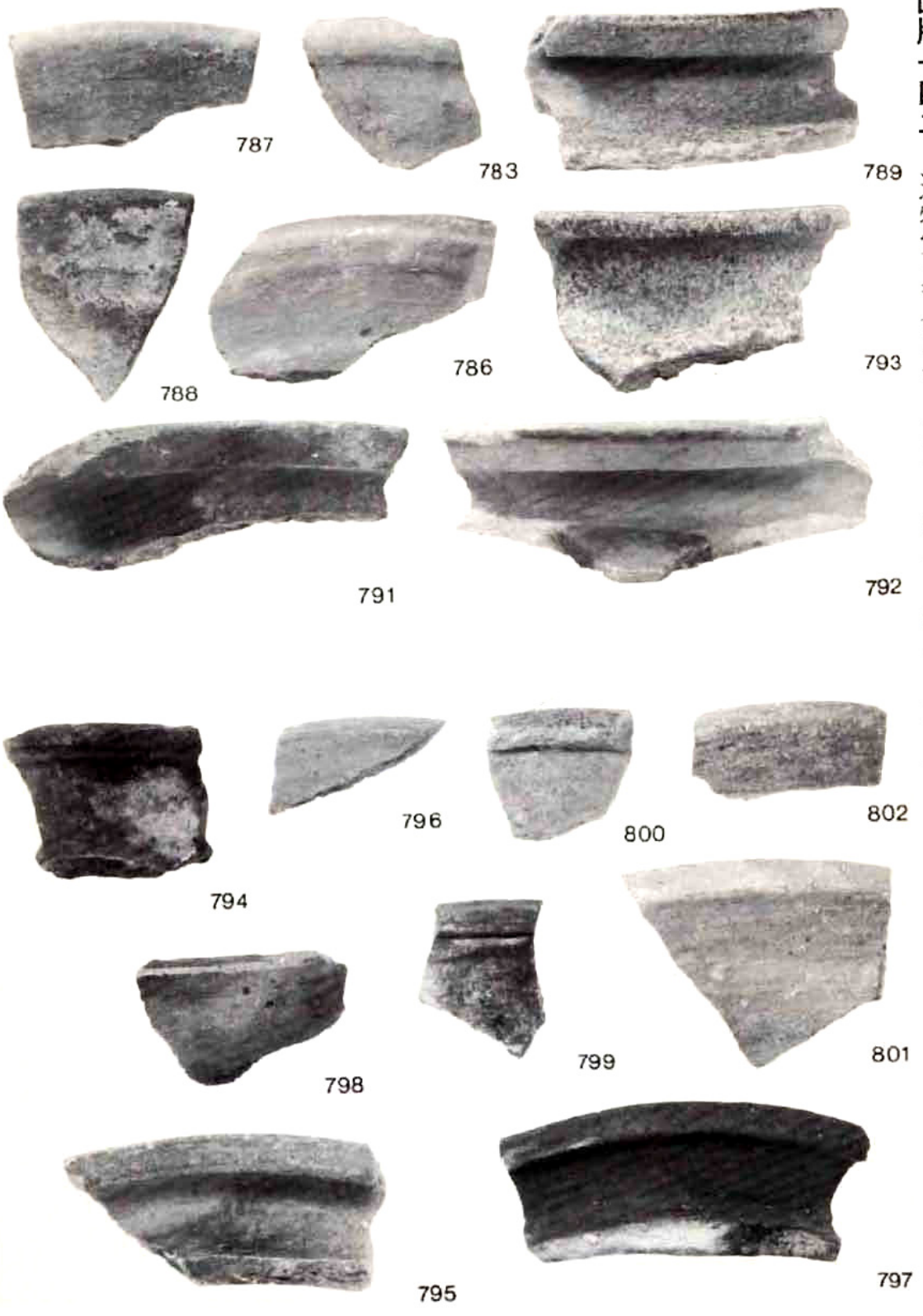
779

773

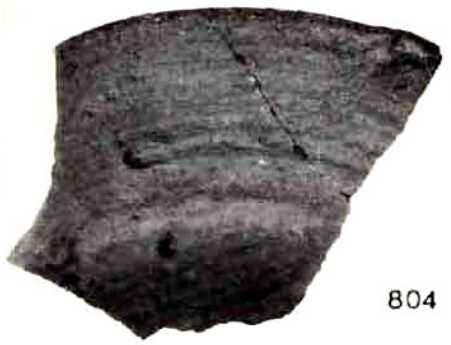
776

771

図版一四二　遺物写真（18号・19号・20号・21号・23号）



図版一四三　遺物写真（24号・27号・39号）



804

812

809

803

806

818

図版一四四　遺物写真（海あがり鉢）

1

4

5

6

7

8

9

10

11

12

13

14

15

16

魚住古窯跡群

（図版編）

昭和58年3月31日発行

編集発行　兵庫県教育委員会
印　　刷　三ッ輪印刷工業株式会社